

369-26
OT

痴呆性高齢者の生活における
既存地域環境資源の活用に関する研究

課題番号：15560529

平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金

(基盤研究(C)) 研究成果報告書

横浜国立大学附属図書館



11758926

研究代表者 小 滝 一 正

横浜国立大学 名誉教授

平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書

痴呆性高齢者の生活における既存地域環境資源の活用に関する研究

課題番号：15560529

はしがき

本報告書は、標記科学研究費による研究によって得られた一連の研究成果をまとめたものである。

研究組織

研究代表者：小滝一正（横浜国立大学 名誉教授）

研究分担者：大原一興（横浜国立大学大学院 工学研究院 教授）

研究分担者：藤岡泰寛（横浜国立大学大学院 工学研究院 講師）

交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成15年度	130万円	0	130万円
平成16年度	130万円	0	130万円
平成17年度	100万円	0	100万円
総計	360万円	0	360万円

研究発表一覧 （本研究課題に関連する主なもの）

口頭発表：いずれも日本建築学会大会学術講演、発表者に○、（）内は発表者の発表時における所属

（1）地域通貨を媒介としたコミュニティづくりと高齢者の地域生活、

○大原一興（横浜国立大大学院）・井上由起子・藤岡泰寛

2003年，日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2分冊，p.159

（2）ケアを媒介としたコミュニティづくりと住宅の外部化

○井上由起子（国立保健医療科学院）・大原一興

2003年，日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2分冊，p.185

- (3) 高齢者と児童の交流からみた公立小学校と高齢者福祉施設の複合化に関する研究
○江部愛美 (横浜国立大大学院)・小滝一正・大原一興・藤岡泰寛
2004年, 日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊, p.281
- (4) 痴呆性高齢者グループホームにおける言葉の概念に関する研究 その1 概念に対応した活動行為と場所の考察
○後藤舞 (横浜国立大大学院)・大原一興・小滝一正・藤岡泰寛・佐藤哲・黄文・合田淳平
2004年, 日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊, p.295
- (5) 痴呆性高齢者グループホームにおける言葉の概念に関する研究 その2 概念に対応した生活の様子
○合田淳平 (横浜国立大大学院)・大原一興・小滝一正・藤岡泰寛・後藤舞・黄文・佐藤哲
2004年, 日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊, p.297
- (6) 利用者のコミュニケーションから見た高齢者デイサービスセンターの建築計画に関する研究
○王維 (山田建設)・小滝一正・大原一興・藤岡泰寛
2004年, 日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊, p.349
- (7) 入居者の買物外出行動に見る特別養護老人ホームと地域との関わり その1 調査の概要と買物外出の時間
○大原一興 (横浜国立大大学院)・佐藤真衣子・小滝一正・藤岡泰寛
2004年, 日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊, p.357
- (8) 入居者の買物外出行動に見る特別養護老人ホームと地域との関わり その2 買物行動のパターン
○佐藤真衣子 (竹中工務店)・大原一興・小滝一正・藤岡泰寛
2004年, 日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊, p.359
- (9) 小規模多機能サービス拠点の動向に関する研究
○山下奈緒 (横浜国立大大学院)・大原一興
2005年, 日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊, p.331

痴呆性高齢者の生活における既存地域環境資源の活用に関する研究

<目次>

第1章 研究の目的と方法	1
1-1 研究の背景と目的	
1-2 研究の方法	
第I部 認知症高齢者と外出・商店街利用行動に関する研究	3
第2章 認知症高齢者グループホーム居住者の外出行動に関する考察	5
2-1 研究の目的と方法	
2-2 外出行動の実態	
2-3 コミュニケーション行為	
2-4 まとめ	
第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察	69
3-1 研究の目的と方法	
3-2 買い物外出行動の概要	
3-3 まとめ	
第II部 認知症高齢者グループホームの地域との関わりに関する研究	109
第4章 東京23区内グループホームの地域との関わりに関する考察	111
4-1 研究の目的と方法	
4-2 調査対象施設の概要	
4-3 外出・地域利用の実態	
4-4 地域とのかかわりについての現在の取り組み	
4-5 グループホームと地域とのかかわりについての意識	
4-6 地域に根ざさない理由に関する考察	
4-7 まとめ	
第5章 グループホーム職員の周辺地域に対する意識構造に関する考察	131
5-1 研究の目的と方法	
5-2 調査対象施設の概要	
5-3 グループホームの外出・地域利用状況	
5-4 地域とのかかわりについての現在の取り組み	
5-5 グループホームと地域とのかかわりについての意識	
5-6 地域に根ざさない理由に関する考察	
5-7 まとめ	

第6章 周辺地域住民のとらえるグループホーム認識に関する考察	168
6-1 研究の目的と方法	
6-2 調査対象者と地域生活の概要	
6-3 地域住民のグループホームの認知度	
6-4 今後のグループホームおよび高齢者施設とのかかわりに対する意識	
6-5 施設のイメージに関する考察	
6-6 調査結果のまとめと5施設の特徴	
第Ⅲ部 認知症高齢者のための居住施設と地域との相互浸透に関する研究	211
第7章 地域密着型小規模多機能施設の動向に関する考察	213
7-1 研究の目的と方法	
7-2 調査対象施設の概要	
7-3 地域密着型小規模多機能施設の概要	
7-4 小規模多機能サービス拠点の空間についての考察	
7-5 まとめ	
第8章 施設外小規模リビングの試みからの考察	278
8-1 研究の目的と方法	
8-2 調査対象施設・環境の概要	
8-3 施設外小規模リビングにおける利用実態からの考察	
8-4 考察とまとめ	
おわりに	298
資料編	
アンケート調査票	

第1章 研究の目的と方法

1-1 研究の背景と目的

1-1-1 研究の背景と目的

認知症高齢者グループホームは、年々増加する認知症の高齢者のための支援策の重要な柱であり、国は平成12年度から5か年計画の高齢者保健福祉施策ゴールドプラン21で、平成16年度までにその数を3200か所とする計画を打ち立てた。短い期間に大量に整備するというこの計画自体も政策的にグループホームが重視されていることを示している。ところが実際には、計画を大きく上回り整備されて、平成18年の3月には7000箇所を超えている。

また、平成14年からは、特別養護老人ホームのユニットケア化の整備に対し補助金が支出されるにともない、小さな単位における認知症高齢者のケア環境は、よりいっそう一般化するものと思われる。このような急激でかつ形式的に大量供給される状況の中で、今一度グループホームの本来の意義に立ち戻って、その効果が発揮されるような整備がなされることが重要である。

認知症高齢者グループホームの特徴のひとつは、家庭的な環境において普通の日常生活を営むことにある。しかしグループホームにおける生活が一般社会の普通の生活に近づくためには、地域社会との自然な交流による地域生活が展開されることが必要である。痴呆性高齢者グループホーム入居者にとって、日常生活はグループホームの建物内で完結するわけではなく、地域生活も重要な生活の一部となる。実際、認知症高齢者グループホームは、普通の住居のように住宅地の一角に設けられるものが多く、地域とは切り離して考えることのできないものである。そこで本研究では、グループホームをはじめとする認知症高齢者のための施設と地域社会との関係のあり方について考察するために、とくに地域環境において、入居者が施設内では味わえない生活としてどのような総合的な経験をしているのか、またそれによってどのような効果を生みだしているのかについて考察しようとしている。

1-1-2 明らかにすべき研究課題

具体的には、以下の点を明らかにすることが本研究の課題である。

1. 日常的に買い物外出などで、商店街など地域資源を活用している場合、そのあり方について考える。周辺地域における商店街での様々な生活行為やその活用のされ方の実態を捉え、今後のさらなる活用の可能性などを考察する。

2. グループホーム居住者・スタッフの地域資源活用状況認知症高齢者グループホームの住人としての居住者およびスタッフが、周辺地域をどのように活用しているのか、地域環境条件や運営方針などの違いにより異なるその実情を明らかにする。

3. 周辺住民の施設に対する意識地域住民の、認知症高齢者およびグループホームに対する認識が施設立地によってどのように影響されているのか、その意識構造を捉える。

4. 大規模施設の地域との相互浸透のあり方について考える。特別養護老人ホームなどの大規模施設と周辺地域との相互の交流や一体となった活動を把握し、それがユニットケアや地域におけるサテライトユニットによることの有効性などについて考察する。

1-2 研究の方法

1-2-1 研究の方法

先に設定した研究課題に対応して、具体的な研究の計画を以下のように設定した。

A. グループホーム居住者・スタッフの地域資源活用状況、とくに買い物外出行動についての考察。これには、具体的な利用者や職員、地域の人々など様々な人たちの実際の人間関係構築の仕組みを会話等の具体的な行動から詳細に捉え、エスノメソドロジカルな分析をおこなった。

B. 周辺住民が施設に対して抱いているイメージの分析・考察。このために、地域の人々や職員等に、そのイメージについて把握するためのアンケート調査やヒアリングを行った。実際の写真を選ぶことによって、そのイメージについての

推察をおこなっている。

C. 新しい動向としての施設と地域との一体化の動きの把握。このため、制度にならない自発的な試みとしての、「宅老所」的な施設の実態をケーススタディし、地域との関係性構築の成立過程を分析した。さらに、具体的に地域に浸透する施設利用者のための独自の空間づくりに関わって、その過程から得られた様々な知見についてまとめている。

1-2-1 本研究の構成

以上のような研究課題とそのための調査等の結果として、本研究では、全体を3つの部で構成した。

すなわち、第Ⅰ部が、主として買い物外出の実際の行動から抽出できる様々な事柄や現象についての考察、第Ⅱ部が、グループホームと地域との関係性について、とくにその施設のイメージの形成についての考察をおこない、さらに第Ⅲ部では新しい動きとして地域と施設とが一体の関係になりつつある動向を捉えている。

本報告所は全部で8つの章から成っており、最初の第1章が全体の概説と目的を述べた序論的な部分として、その他の主要な内容は3つの部とそれに対応した7つの章部分から成り立っている。

各章の内容との関係で再び3つの部を整理してみると、まず、

第Ⅰ部「認知症高齢者と外出・商店街利用行動」に関する研究として、

第2章「認知症高齢者グループホーム居住者の外出行動」に関して考察し、

第3章「特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動」についてそれぞれの考察をおこなう。

次に、

第Ⅱ部「認知症高齢者グループホームの地域との関わりに関する研究」として、

第4章「東京23区内グループホームの地域との関わり」、

第5章「グループホーム職員の周辺地域に対する意識構造」

第6章「周辺地域住民のとらえるグループホームの認識」について、それぞれ述べる。

最後に、

第Ⅲ部「認知症高齢者のための居住施設と地域との相互浸透」に関する研究として、

第7章「地域密着型小規模多機能施設の動向」を概観した上で

第8章「施設外小規模リビングの試み」をとりあげ、最近の動きについての考察を加えている。

第 I 部 認知症高齢者と外出・商店街利用行動に関する研究

第2章 認知症高齢者グループホーム居住者の外出行動に関する考察

2-1 研究の目的と方法

2-1-1 研究の背景と目的

東京都福祉局発行の「認知性高齢者グループホーム開設の手引き」には、認知性高齢者グループホームの理念が記されており、その中には次のような内容がある。

『グループホームには、次のような特徴があります。

- ・地域と繋がりのある生活の場
- ・グループホームは、地域社会に溶け込むことが大事とされています。

入居者が地域社会の一員として生活することは、入居者にとってはこれまでの「普通の生活」を送ることを意味し、また地域社会にとっても今後は避けて通れないであろう高齢化に対する拠点を地域内に確保することになります。

また、運営の面でも地域全体での見守りなどの支援が確保できれば、入居者は今まで以上にホームの外で、自由に生活することも難しくないと考えられます。』

1995年度から推進され始めた認知性高齢者のためのグループホームであるが、東京都は認知性高齢者の支援を都の重点的な課題として位置づけ、認知性高齢者が、地域で尊厳を保ちながら生活できるように支援する政策を掲げている。また平成12年度から5か年計画の高齢者保健福祉施策ゴールドプラン21でも深刻化する認知性高齢者に対処するため、任地性高齢者支援対策を重要な柱の一つとしており、平成10年度には103か所であった認知性高齢者グループホーム数を平成16年度までには3200か所とする計画をうち出している。

超高齢社会へと進んでいる現在、数多くの施策の中では高齢者を地域社会全体で支えることの大切さや意義が話されてきているように思われる。特に認知性高齢者グループホームは普通の住居のように住宅地の一角に設けられるものが多く、地域とは切り離して考えることのできないものであるはずだ。一方でそのようなグループホー

ムに関して今までどのような研究がされてきたのか調べてみると、そのほとんどはグループホームの中で行われている生活行為やケアまたはその計画手法に関する研究であった。

しかし認知性高齢者のためにある幾つかの施設、例えば特別養護老人ホーム、老人保健施設、老人病院、精神病院、と考えた時に認知性高齢者グループホームが他の施設と明らかに異なる点が先に抜粋した理念に掲げられているように“地域社会の一員として生活すること”ではないだろうか。施設の中で生活を完了せざるを得ない場合には体験できないようなことを、グループホームの入居者たちは地域社会の中で“普通に”暮らすことで体験しているはずである。このことは認知症を抱えた高齢者自身にとってももちろんの事であるが、そのグループホームが存在する周りの地域にとっても意味のあることであると思う。

そこで本研究は、実際にグループホームの入居者たちがどのような仕方地域という、グループホーム以外の場所で「生活している」のか、また彼らがそこでどのような経験をしているのかという実態を調査を通して探ることによってグループホームの地域におけるあり方について考察することを目的としている。このため本研究では特に、実際の日常生活における外出行動に着目し、その際に生起する社会的相互作用を分析することにより、グループホーム居住者自身の主体的な行動を抽出することを試みている。

2-1-2 研究の方法

(1) 調査の対象

大都市の中で商店街などの地域資源を活用し、運営やケアのあり方に先駆的な試みを行っている東京都内の3つの認知性高齢者グループホームを対象に調査を行った。その概要を表2-1に示す。

これら3つのグループホームは、ともに入居者が日常的な生活の能力を最大限に引き出すために地域の中で普通に生活するということを積極的に実践しているところであり、入居者がそれぞ

れ自分たちの食べたいものを決め、買い物へ行き、食事の支度をする事で日常の生活を組み立てている。実はKIホームは1999年4月開設時には、他の多くのグループホームのように食事の仕度を職員が主導的に行っていたが、このような考え方をもとにこのグループホームのあり方を変えたのが2001年初め頃であった。それまでの間は入居者が自らの食事の献立を決めることも、そのために付近の商店に買い物へ行くこともほとんどなかった様である。

〈各 GH の地域環境〉

KO ホームでは150m先に何でもそろうスーパーがあり、200m以内には小規模な商店街がある。また周囲には比較的公園が多い地域である。

KI ホームは駅から約600mのところにあるのだがその道のり150mほどにわたって商店街となっている。商店街の中に小さなスーパーがあるがこの店だけで買い物が完結するほどの品物はない小規模なものである。

FU ホームの周囲にはスーパーがなく、FU ホームから約600mの所にあるスーパーも比較的小さなものであり、そこへ行く間には交通量の多い大きな道路を渡る必要がある。周りには墨田区役所、会社や飲食店の入っているビルが立ち並んでいる。また1kmほど行くと浅草で、百貨店や浅草寺がありたくさんの観光客などで賑わっている。

〈各 GH と地域との関わり〉

3つのGHに共通していることとして町内会への加入が挙げられる。町内会へ加入することによって回覧板が回り、地域の様子がわかるとともに地域の活動に参加することも可能になっている。実際、より都会的な環境ではあるがFUホームの入居者達は町内会の行事として地元のお祭りや盆踊りに参加できている。また、毎日の外出行動で頻繁にその前を通ることで交番のお巡りさんに顔を覚えてもらい、顔なじみになっている様子がKOホームとFUホームで見られた。グループホーム開設や改築の際に、地元の住民にグループホームを見学してもらうなどの取り組みを行うことによって得られたものもある。KOホームでは例えば布団が干しっぱなしになっていることを隣近所の人が伝えに来ることや、FUホームでは食

表 2-1 グループホームの概要

	運営主体	開設年	入居者数
KO ホーム	医療法人社団	1999. 3	8名(女性)
KI ホーム	NPO 法人	1999. 4	6名(女性) (1人入院中)
FU ホーム	社会福祉法人	2001. 5	9名(女性)

事の差し入れを持って遊びに来た事もあったようだ。KI ホームでは近所の人がボランティアで週2日の夕食作りに参加している。

〈入居者の身体状況〉

運動機能に関わる身体状況について、KI ホームとFU ホームの入居者に関しては回答が得られた場合にのみ表2-2、表2-3に示す。

表2-2 KI ホームの入居者の身体状況

		身体状況	1度に可能な運動量
2Aさん	入居当時	なし	50-100m 歩行
	現在	なし	1km位
2Bさん	入居当時	なし	2Km以上 (電車移動可)
	現在	なし	2Km以上 (電車移動可)
2Cさん	入居当時	なし	1km位
	現在	2001年末入院 2002年始退院	室内のみ
2Dさん	入居当時	膝痛	1km位
	現在	膝痛	2km位
2Eさん	入居当時	膝痛 腰痛	つかまり歩き 室内歩行(5m位)
	現在	膝痛 腰痛	手引歩行 室内(1m)

表2-3 FU ホームの入居者の身体状況

		身体状況	1度に可能な運動量
3Aさん	入居当時	右側軽度麻痺 杖歩行	FU ホーム周辺 ごく短い距離
	現在	右側軽度麻痺 杖歩行	500m位
3Bさん	入居当時	なし	
	現在	なし	
3Cさん	入居当時	なし	
	現在	なし	
3Dさん	入居当時	なし	
	現在	なし	
3Eさん	入居当時	なし	
	現在	腰痛	
3Fさん	入居当時	なし	
	現在	なし	
3Gさん	入居当時	なし	
	現在	なし	
3Hさん	入居当時	体力の衰えより 杖歩行	FU ホーム周辺、 ごく短い距離
	現在	なし	500m-1.3km
3Iさん	入居当時	膝痛	
	現在	膝痛	

(2) 調査の方法

調査は2001年10月から12月にかけて、各グループホームにつき3~4日間で行った。調査で得られた外出記録数を表2-4に、外出時間とその時の天候を表2-5に示す。

〈事前調査〉

スタッフへのヒアリング調査によりグループホーム周辺の住宅地図を利用しながらそれぞれのグループホームの入居者が利用する商店、公園、施設等をあらかじめピックアップした。それらとグループホームとの位置関係、またそれらを利用する際に入居者が主に通る経路を知り、実際に歩いて交通量や景観をチェックした。

外出行動を制限するような入居者の身体状況を把握した。例えば腰痛や膝など関節の痛みがある場合、外出できるとしても距離や時間などに制限が伴う。

〈追跡調査〉

調査の日は一日入居者とともに時間を過ごし、行動を追跡調査した。基本的には10分おきに入居者の行動を調査シートに記録。グループホームから出るときには地図を利用し、入居者の足跡をたどり、何らかの会話や行動が見られたときにはその位置と内容を記録していった。

外出以外の時間帯でグループホーム内で過ごしている間はグループホームの大まかな様子(食事など)を記録しておき、外出につながるような話や行動が見られた場合にはその内容を詳しく記録し一日の文脈の中で外出行動がどのような位置づけなのかを捉えられるようにした。特に外出にかかわる話が出た時はスタッフ側から出た話なのか入居者が自発的におこなったものなのかなどに注意して記録した。

グループホーム外で過ごしている時は、入居者がどこにいるのか、何をしているのか、誰と何を話しているのか、何に関心を示しているのか等できるだけ詳しく記録。ここでも入居者の話や行動が自発的なものなのかどうか注意して調査した。また外出している時間がどのくらいなのかも把握するようにした。

表2-4 外出記録数

KOホーム (全8回)	1Aさん	1Bさん	1Cさん	1Dさん	1Eさん
	5	5	6	1	5
	1Fさん	1Gさん	1Hさん	—	—
KIホーム (全7回)	2Aさん	2Bさん	2Cさん	2Dさん	2Eさん
	4	1	4	—	—
KOホーム (全6回)	3Aさん	3Bさん	3Cさん	3Dさん	3Eさん
	0	3	2	1	0
	3Fさん	3Gさん	3Hさん	3Iさん	—
	0	0	1	2	—

表2-5 外出時間と天候

KO ホーム (全8回)	日付・天気	2002/11/27 晴(風強め)		
	時間	11:30- 12:40	13:50- 16:30	17:40- 18:10
	日付・天気	2002/12/11 快晴		
	時間	12:00- 13:30	13:30- 13:50	17:50- 18:40
KI ホーム (全7回)	日付・天気	2002/12/12 晴時々曇り		
	時間	12:00- 13:10	14:40- 16:50	—
	日付・天気	2002/11/21 快晴		
	時間	11:50- 13:00	11:50- 13:40	14:30- 15:10
FU ホーム (全6回)	日付・天気	2002/11/25 晴時々曇り		
	時間	14:20- 16:00	—	—
	日付・天気	2002/12/3 晴		
	時間	14:30- 15:30	15:50- 16:30	16:30- 17:10
FU ホーム (全6回)	日付・天気	2002/11/30 曇り時々雨		
	時間	11:40- 12:10	15:30- 16:20	15:50- 16:20
	日付・天気	2002/12/14 快晴(強風)		
	時間	11:30- 12:10	14:00- 15:20	14:00- 15:40

今回はこのような調査を一日中ある特定の入居者だけにしばって追跡するのではなく、グループホームの全体的な流れをつかみその中で外出する行動が見られた時に、その入居者に付き添ったりあるいは距離を置いて見守りながらの追跡調査を行った。なお、このような後方見守りの方法は、調査対象となったグループホーム職員の日常のケアのあり方として定着しており、居住者の自主性と尊厳を最大限尊重しかつ自立能力を引き出す手法となっている。

〈アンケート調査〉

グループホームを開設する際に行った取り組みと開設後の状況に関する簡単なアンケート。アンケート内容は以下に示す項目である。

I. 開設するにあたって行った取り組みを教えてください。

I-1 町内会へ入会していますか。

はい いいえ

I-2 利用しようと決めた商店などへあらかじめ挨拶や説明を行いましたか。

はい いいえ

I-3 上のI-2の質問で、はいの場合具体的な店名を挙げて下さい。

I-4 近所の住民を集めての見学会や説明会を行いましたか。

はい いいえ

I-5 上のI-4の質問で、はいの場合その後の反応はどうですか。

- ア 時々差し入れたその他の理由で
グループホームに来てくれる
- イ 道で会うと声を掛けてくれる
- ウ その他()

II. 開設後の状況

II-1 町内会へ加入して良かった事を教えてください。

II-2 入居者からの要望で利用するようになった商店や施設などはありますか。

はい いいえ

II-3 上のII-2の質問で、はいの場合具体的な店名や名称を教えてください。

2-2 外出行動の実態

2-2-1 外出行動の概要

各ホームで見られた外出行動は表 2-6 の通りだが、大半を占めている買物のための外出としてはスーパー、パン屋、八百屋など食料品の買物が多い。調理のための材料の購入にはあらかじめ計画性が要求され、統合する能力が要求される。他は散歩や見学、食料品以外の買物など、運動を目的としたものや楽しみのための外出行動となり、地元の神社へのお参りや浅草松屋デパート、仲見世への買物など地域の立地条件の特色を生かした外出先となっている。

表 2-6 調査記録一覧表

ホーム名	日付	外出の目的・概要
KO ホーム	11/27	近くのスーパーと商店街のパン屋へ昼食の買物
		隣の病院で行われた防災訓練を見学し、その後公園を散歩
		近くのスーパーへ夕食の買物
	12/11	外出を希望する入居者とコーヒーを飲みに行き、帰りに商店街とスーパーで昼食の買物
		隣の病院の木からクリスマスツリー用の枝をもらいに行く
		近くのスーパーへ夕食の買物、店内はスタッフが離れて見守る
12/12	近くのスーパーとパン屋へ昼食の買物	
	地元の大師へ散歩、お参りとお団子を食べに行く	
KI ホーム	11/21	近くのスーパーと商店街のパン屋へ昼食の買物、帰りに八百屋に立ち寄る
		商店街へ買物、途中薬局と雑貨屋に入り八百屋まで行く
		隣の神社へお参り
	11/25	商店街のスーパーと八百屋へ夕食の買物
	12/3	商店街の肉屋と八百屋、スーパーで夕食の買物
		近所を散歩
散歩に引き続き、商店街の八百屋へ買物		
FU ホーム	11/30	お客さんを見送りに浅草駅へ
		スーパーへ夕食の買物
		入居者同志で近所を散歩
	12/14	散歩を兼ねてスーパーへ昼食の買物
		クリスマスプレゼントを買いに浅草松屋デパートへ
		クリスマスプレゼントを買いに行くと言って浅草仲見世へ行き、お参りと甘味処へ

2-2-2 KOホームにおける外出行動

01-11-27 1Aさん, 1Bさん, 1Cさん, 1Eさん, スタッフ 昼御飯の買い物

外出時間：50分 歩行距離：660m	
11:30	全員にスタッフが午後の予定を言い、二時までにお昼を終える必要があると説明。スタッフがみんなに「お昼、何がよいでしょうね。」と問いかける。
40	スタッフが一人一人に何を食べたいのか聞いて書き留め、買い物に行く準備をする。1Aさん, 1Bさん, 1Cさん, 1Eさんが買い物に行くことになり、スタッフがそれぞれに身支度をしてくるようと言う。
50	GH 出発。 ①スタッフが出てくるまではどっちの方向に進むのかを全員分からないがスタッフが「パン屋はあっちなので」と言うと1Aさんと1Bさんで先頭を進む。 ②角は自然に曲がる。近所の人とすれ違い「こんにちは」と声を掛けられる。
12:00	スーパー到着。顔なじみの店員が親しみを込めて「いらっしやいませ」と笑顔で挨拶。 ③スーパー内で買い物はスタッフと一緒に固まって行う。
10	スタッフが1Bさんに1Eさんとうどんを探してきて欲しいとお願いする。1Bさんはだいたい場所が分かる様子でほとんど迷わずにうどんコーナーへ。1Bさんと1Eさんでどの太さの麺がよいのかどのくらいの量がよいのか相談して決める。
20	スーパー出発 ④クリーニング店内から店員と客が一行を見守っている様子。 ⑤パン屋到着。すでによく分かっている店員が皆の動作に合わせて自動ドアを手動にして迎える。それぞれが自分の食べたいパンを選ぶ。1Bさんと1Cさんはすぐに決まりなかなか決められない1Eさんを待っている。店員が笑顔で対応。
30	パン屋出発 ⑥玄関先にみかんの皮を干している家を見て「何に使うのかしらね…」等 ⑦横断歩道はないがここを渡ればGHまで直進で行けるため1Bさんと1Eさんは渡りたがる。スタッフが「危ないから信号で渡ろう。」と言い、信号まで行く。
40	GH 到着

01-11-27 1Bさん, 1Cさん, スタッフ 防災訓練見学, 散歩

外出時間：1時間40分	
歩行距離：1.1km	
50	近くの病院で行われる防災訓練を見学に行くので、スタッフが全員にコートを着て身支度するよう にと言う。
14:00	折りたたみ椅子を持参して出発。 ①病院前の公園で椅子に座ってはしご車の演出などを見学。公園内にはたくさんの子供が遊びに 来ている（30人くらい）。
10	見学中…近所の人も孫を抱いて見学に。入居者さん達に気付き笑顔で挨拶。
20	見学中…全員夢中になってみている。はしご車が高く上ると歓声。
30	見学中…通行中の女子高生たちが、並んで椅子に座って見学している入居者さんたちを見て笑顔。
40	見学終了。拍手喝采。スタッフが「せっかくだから散歩していきましょう！」とかけ声を掛ける。 ②公園内を全員で歩き始める。その様子を見た小学生くらいの男の子が「わぁ、たくさんだぁ！」 1Cさんが男の子の方を見て嬉しそうに笑顔。
50	③スタッフが1Bさんと1Cさんだけ違うルートに誘う。 ④1Cさんが犬を連れて人に挨拶をする。
15:00	⑤イチョウを拾ったりしながら公園内をゆっくり歩く。寒桜が咲いているのを見てスタッフが「向 こうの団地にも咲いているんですよ。」と言う。1Bさん「ああ、そうですか。…花がちっちゃいん ですねえ。」スタッフが「冬だから縮んじゃったんじゃない？」と言うと1Bさんが「私みたいに ねえ。」と笑う。
10	⑥少し休みながら、1Bさんが「明日も来ますよ。明日はほうきを持って。」
20	
30	⑦押しボタン式横断歩道。スタッフに言われてボタンを押した1Cさんは信号が変わってびっくり した様子。
40	⑧落ち葉、モミジやケヤキの木に感激。
50	⑨1Cさん「ここは子供の遊ぶところ？」と尋ねる。公園には葉が全部落ちてしまった木が多く、1B さんが「もうちょっと早い時期に来たかったねえ。」と言う。
16:00	⑩犬を散歩中の人と1Cさんが「かわいいワンちゃんですね。」「ありがとう」と会話。「夕暮れ になると涙が出てくるよ」と1Cさん。1Bさんが「なぜ？」と聞くと「わかんね。」と笑う。 ⑪スタッフに歌を教える1Bさん。1Bさんが1Cさんに「今度はあなたの話を聞かせてください。」 と言う。1Cさん「何をだよ。」と言い、突然歌い出す。（東京音頭）全員で歌う。
10	歌いながら歩く。 ⑫クリスマスの飾りを付けている家があり、「きれいですねえ」と1Bさん。
20	⑬スタッフがここへ来たら（GHが）分かりますか？」と尋ねる。1Bさん「わかりました。そこが （と指を指し）…名前忘れちゃいました。」スタッフに教えてもらう。 ⑭病院の外來の看護婦さんが通り「こんにちは」と挨拶をしていく。1Bさんはスタッフに「どなた ですか？」と聞いている。他の入居者さんが洗濯物を取り込んでいる様子が見え、手を振る1Bさ んと1Cさん。
30	GH到着。スタッフに言われて家の周りがある花に水をやる1Cさん。

01-11-27 1Aさん, 1Fさん, スタッフ 晩御飯の買い物

外出時間：30分 歩行距離：285m	
17:40	スタッフが1Aさんに買い物をお願いする。1Fさんにも声を掛ける。1Aさん自分から上着を取りに行く。出発 ①向かいの家の方が子供と一緒に外に出ていて「お買い物ですか？」と声を掛ける。ぴよんぴよん飛び跳ねている子供を見て1Aさんが「かわいいねえ。」1Fさんが「元気だね。がんばってね。」と。 スーパー到着
50	②買い物はスタッフとの協力で行い、スタッフが二人にお願いして品物を取ってもらいかごに入れていく。
18:00	1Aさんがレジ担当。 買ったものを袋に詰める作業を二人で協力して行う。
10	スーパー到着 ③1Fさんは自分で曲がるが1Aさんは直進しようとしてスタッフが教える。 GH到着

01-12-11 1Hさん, スタッフ

外出時間：30分 歩行距離：285m	
12:00	1Hさんがスタッフと一緒に外出（本人は頬紅を買ってくると言っていたような、） ①学校から専門学校生がたくさん出てきている様子を見て「これは何？何かあったの？」「聞いてみようか」と言って学校の名前を見、専門学校であることを確認。
10	②「どっち行く？」「こっち（直進方向）行ったことないもん。こっち行くとバス通りでしょ？」 と言いながら直進する。
20	③全体の店を見て「何屋さんだろう。」 ④「どこ行くの？珈琲屋さん？どっかこの辺にあるのよ。ここ（ケーキ屋）は違うもんね。」「あそこは？」と寿司屋を指さす。スタッフが「行ったことがありますよ。」という「行ったことある？」と。 ⑤珈琲屋が閉まっているのを見て「あ～、閉まっているんだあ。」 ⑥スタッフが「電器屋行こうか？」という。
30	⑦電器屋の前で「こんな所入ったことない。」と言いあまり入ろうとしないが「ええい！ここまで来たんだ、せっかくだからちょっと見ていこう。」と。店内で見取り図を探しレジの店員に「どこか休むところありますか？」と聞き休憩スペースを教えてもらう。 休憩スペース（自販と椅子）に行くが「こんな所じゃねえ」と嫌がる。 スタッフが「たまには洒落た所じゃなくて。」と言うと「まあいいか。」と座って休憩。
40	休憩中は自分の地元の話などをする。
50	GHからスタッフに電話があり買い物を頼まれる。 電器屋出発
13:00	⑧「スーパー行こう。スーパー、家の先の。」と指を指す。
10	⑨スタッフがパンを買う必要があることを言うと「パンどこで買うの？」と。スタッフが「パン屋」。1Hさん「専門店があるの。」と。曲がり角で「こっち？あそこ魚屋さんでしょう？あそここっち行くと四つ角に出るんだよね。」など指を指しながら道を確認している。 ⑩呉服店前で「和泉屋さん、、、ここなんかで見たことあるよ。」 ⑪パン屋到着。「いらっしやいませ」と笑顔の店員。1Hさんは自分の三時のおやつを選ぶ。「ここはカツサンドがおいしいのよ」
20	⑫スーパー到着。 スーパーではスタッフからにんじん、キャベツ、ジャガイモを買ってくるように頼まれる。かごの中を見て何をかう必要があるかしきりに確認しながら買い物。レジではどこに並んだら早いのかじっくり観察して並ぶ。レジに並んでいる間肉が足りないのではと気がかりで「焼きそばの肉が足りなければシチューの肉を使っちゃおう。」と言いながら隣に並んでいる人と目が合い、笑顔。レジが終わりカートを運んでいると店員が「ああ、良いんですよ。お使いになりませんか？」と片付ける。軽く会釈をする。店を出る。
30	⑬家のそばで工事中。警備員に「ご苦労さん」という。GH到着

01-12-11 1Cさん, スタッフ

外出時間：20分 歩行距離：200m	
13:30	スタッフが1Cさんを誘って近くへクリスマスリース用の枝を取りに行く
40	①1Cさんにリースに最適なまっすぐの枝を探してもらい切り取る。1Cさん楽しそうに探すがなかなか良い枝が見つからない。
50	②作業中に下校中の中学生7-8人の集団を見かけ1Cさんが「ほら、見てご覧。みんなきれいな格好しているよー。」「あんな頃があったのねえ」とスタッフに話しかける。 枝を取り終わり1Cさん「寒いねえ〜!」と言いながら帰宅。 GH到着

01-12-11 1Aさん, 1Bさん, 1Cさん, 1Eさん, スタッフ 晩御飯の買い物

外出時間：50分 歩行距離：290m	
17:50	夕食のメニューが決まり買う材料をメモしたスタッフが1Aさん, 1Bさん, 1Cさん, 1Eさんを買物に誘う。 出発 ①スタッフが出てくるまでは家の前で, 1Bさんが「八百屋はどちらの方へ行ったらよろしいのでしょうかねえ」と言い, 四人で「どっちかしら。」とキョロキョロする。
18:00	②スタッフ「こっちだよ」と曲がるよう促す。 ③信号を渡ったところで1Bさんがスタッフに「先生!どこまで行くんですか?」と。スタッフが指を指しながら「そこです。」と同時に1Eさんが「くるまやさん(スーパーの名前)でしょう。」と答える。
10	④1Cさんは一人でどんどん先へ進み皆より早く店へ到着して入り口で待っている。 ⑤店内ではスタッフが買い物リストを四人に渡しお願いして離れる。四人はあまり品物を入れずにほぼ店内を一周し、再び野菜コーナーに戻って相談しながらリストにある半分くらいの品物をかごに入れる。
20	スタッフが合流し残りの品物を入れ、漬物コーナーで漬物を選ぶ。店員がスタッフと1Bさんに商品の紹介。四人とも試食をして好きなものを選ぶ。1Eさん「それ辛いんでしょう?私、辛いのだめ。」 1Aさんと1Bさんがレジで会計をする。待っている間1Cさんは店にいる小さな子供を微笑んで見ている。
30	店を出る。 ⑥1Bさんがスタッフに「あっちですか?」と確認。スタッフが「そうです。」と答えるとその後は先頭を歩き角も自分から曲がっていく。
40	GH到着

01-12-12 1Aさん, 1Bさん, 1Cさん, 1Eさん, 1Fさん, 1Hさん, スタッフ 昼御飯の買い物

外出時間：50分 歩行距離：680m	
12:00	全員でりんごを食べながらスタッフが「じゃあ、ちょっと食べながらお昼に何を食べるか考えようか。」と言う。相談、それぞれの食べたいものが決まる。
10	「みんなで買い物に行って、、、その後暖かくなるって言うから日向ぼっこにでも、ね。」 1Hさんが自分のメニューがみんなと違うため買い物について「別れちゃうんでしょう？」とスタッフに聞く。スタッフは「うん。でも途中からね。それまでは一緒ね。」と答え、1Aさんに「1Aさん、一緒に行きますか？」と尋ねる。1Aさん「はい！」
20	買い物に行く人が身支度を始める。1Bさんが1Hさんに「そんな寒い格好じゃだめよ。」 ①先に外に出て待っていた1Cさんが学校から出てきた専門学校生を見て「あらあ、いっぱいねえ」出発。スタッフが「あっちだよ」と皆の進む方向を教える。 ②脇を通る専門学校生が1Hさんに挨拶。1Hさんはスタッフと話し中ながらも目で挨拶。 ③警察の掲示板を見る。“探して下さい”の顔写真を見て1Hさんが皆に「この人を探しているんだって」と言い、どういう理由でいなくなったのかという自分の推測を話す。
30	④角の店が閉まっているのを見て1Bさんが「閉まっちゃったんですね、、、あそこは確か八百屋でしたね。」 ⑤花屋の前を通りシクラメンの花を見て皆口々に「きれいだねえ」
40	⑥パン屋到着。店員が自動ドアを手動に切り換えて迎える。 それぞれが自分の欲しいパンをトレイに乗せてレジに持っていき袋に詰めてもらう。 1Eさんは別々の袋に入れてもらうようお願いする。先にパン屋を出て待っていた1Hさんが、あんパン60円の表示を見て「そんなにするの？高くなったねえ、昔は、、、」と話す。1Eさんは店員に丁寧に「ありがとうございました」と礼を言う。パン屋出発。 ⑦さっきと同じ花屋の前で再び皆「きれいだねえ」と感心する。 ⑧団地内にある木を見ながらゆっくり歩く。1Bさん歌い始めるが歌詞が分からなくなり1Cさんに聞く。1Cさんが歌い、皆歌い出す。
50	スーパー到着 ⑨店内では1Aさんがカートを押し、1Bさんがかごを持つ。1Hさんは品物を入れたり出したり。1Cさんも手伝う。
13:00	1Aさんと1Hさんがレジ担当。待っている間1Cさん、1Eさん1Fさんが赤い帽子をかぶった小さな子供を見て「かわいいねえ」とにこにこ。お母さんが「ありがとうございます」 スーパー出発 ⑩1Bさんと1Hさんが先頭だがスタッフに「こっちでしょう？」「こっちよね？」と確認。
10	⑪八百屋の店頭の果物を見て1Hさん1Bさん1Eさんが感想を言いながら曲がる。GH到着

01-12-12 1Bさん, 1Cさん, 1Eさん, 1Fさん, 1Hさん 散歩

外出時間：1時間20分 歩行距離：1.8km	
14:40	食事をしながらスタッフが午前中から話題に出ていて皆乗り気だった大師行きの話をする。 「食べ終わったらみんなで、大師まで、ねえいいんじゃない？お茶とお団子でも食べてさあ。」
50	1Hさんがお団子の話から地元の浅草の美味しいお団子屋の話や雷おこしの話をし、みんな聞いている。
15:00	全員食べ終わり、1Bさん、1Hさんが洗い物など片付けを始める。スタッフがそのままよいからと1Hさんに「みんなを連れてお団子食べに行ってきた。」とお願いする。 1Hさんはスタッフが行かないことが不安なのか嫌がる。スタッフ「大丈夫よー！」「みんなで、ほらお団子食べてくればいいじゃない！」などと言って盛り上げる。
10	それぞれ自分の身支度を始めるようにスタッフが指示をする。
20	1Bさん、1Cさん、1Eさん、1Fさんの支度はでき、外に出て椅子を出して1Hさんを待っていてもらう。
30	1Hさんは自分が皆を連れて行くことに戸惑っているのか支度に手間取りなかなか部屋から出てこないがようやく支度を済ませて出てくる。決心した様子で自分からスタッフに「何人行くの？何人？」と尋ねる。スタッフは1Hさんにお賽銭のお金などを渡し、「ここ右曲がってまーっすぐ、まーっすぐだから！」と行き方を教えてみんなを送り出す。 ①店先に掛かっている洋服を手にとってみたりする。
40	②先頭は1Hさんと1Fさんで、1Hさんは家二軒分くらい後ろを歩く三人を気遣って振り返りながら歩く。 ③信号待ちで五人そろって歩く。 ④1Hさんが電器屋を指さしながら他の四人に何かを説明しながら歩いている様子。
50	⑤1Hさんが大師の話などしながら歩き、1Bさんが話し相手になっている。 ⑥大師到着 ⑦1Cさん、1Fさん、1Hさんが先頭を歩きお参りをするために先に階段を上っていく。
16:00	⑧後から階段の下まで到着した1Eさんが足が痛いので階段は上れず、1Bさんは気遣って「じゃあ、ここからお参りしましょう。」と一緒に手を合わせる。先に途中まで上っていた1Fさんも気付いて降りてくる。
10	⑨お団子屋に到着。1Hさんが店先でみんなの分（お団子一皿）を注文する。店に入って腰を下ろし、店員が「お団子一皿お持ちしますね。」というとき1Hさんは「二皿ね。」と。店員がお団子を持ってきた時には「お箸はいらないよ。楊枝で食べるから。」と。 1Cさん「珍しくてね、キョロキョロしちゃうね。」と笑う。 店にはほとんど客がいない。お茶を汲みにきた店員が「食べにくくないですか？お箸使って良いんですよ。」と言うが皆大丈夫だというようなことを言う。 お団子を食べている間は比較的静か。1Hさんが話すのをみんなで聞いている。 1Hさんが「歩いてくるのにちょうど良いコースね。・・・ここ来って誰かに言ってきた？言ってきたよな、誰もいなかったもんね？」と言う。みんなあまり気にしていない様子。

20	<p>お茶も終わり 1Hさんが店員に「お会計お願いします。」それを知らずにお茶を再び入れようとした店員に「もう結構です。」と1Hさん。1Hさんが「暗くなる前に戻らなきゃね。」、店員に「ごちそうさまでした。」と言いながら店を出る。店員は「お足もと気を付けて下さいね。」と見送る。 ⑩小さな子供をつれた家族とすれ違い、1Bさん、1Cさん、1Eさんが嬉しそうに見ている。1Cさんが子供に「ばいばーい!」。子供のお母さんもニコニコと嬉しそう。 ⑪トイレへ。</p>
30	<p>⑫大師出発 ⑬1Eさんが「くたびれちゃった。」と言い、1Bさんが「気をしっかりもって!大丈夫!そういう気持ちでいきましょう!」と励ます。</p>
40	<p>⑭信号で1Hさんが後ろを見ておいでの仕草 ⑮角を曲がったところで1Hさんが振り返り、遅れている1Bさんと1Eさんが見えるまで待つ。</p>
50	<p>先頭を一人で歩いていた1HさんがGH到着。 ⑯外に出ている家の人がお帰りなさいと1Cさんに声を掛ける。1Cさん笑顔で対応。1Cさんが過ぎてから遅れて歩いていた1Bさん、1Eさん、1Fさんにも「どこ行ってきたの?」と声を掛ける。1Bさんが受け答え。 ⑰1Bさんが1Eさんを「頑張れ頑張れ、もう一がんばり!」と励ます。 ⑱間違っって通り過ぎてしまった1Fさんにも1Bさんが「ここ!ここ!」と指摘。 GH到着。</p>

2-2-2 KIホームにおける外出行動

01-11-21 2Dさん 昼御飯の買い物

外出時間：1時間10分	
歩行距離：1.3km	
11:50	スタッフが2Cさんと2Dさんにお昼をどうするのか話を持ちかける。2Dさんはパンを食べたいと言 い、スタッフから下の方（商店街）にパンの美味しい店があることを教えてもらいそこに買いに行 くことにする。2Cさんも買い物に行くと言う。2Dさんが先に出発し、2Cさんも少し遅れて出発。
12:00	①2Dさんは一人でどんどん先に進む。
10	②家二軒分くらい先を歩いていた2Dさんが途中振り返りながら2Cさんを待っていたため2Cさん が追いつき、少し話しながら進むが次第に距離はあく。 ③一人で歩く。
20	商店街を歩いている間、他の店を見るような様子は見せずパン屋さんに向かって一直線に進む。 ④商店街を抜けてロータリーに出ると立ち止まって振り返り2Cさんの姿を確認するが来ていない ようなので先に行く。
30	⑤パン屋に到着。いったん入るが入り口で立ち止まり（パンを買うか迷っている？）そのまま出る。 スタッフが声を掛けてもう一度店に入りスタッフと一緒にパンを購入。店を出てからはまた一人で 行動。
40	⑥八百屋の店先のりんごを見て立ち止まる。 店員「いらっしゃい！」りんごが三種類あり、2Dさん「どれが甘いの？」「甘いのが欲しいわ」店 員が「これが酸っぱい、後は甘い」と教えると2Dさんはしばらく止まっている。店員が「どれで も好きなものを取って。」というので2Dさんは自分で取る。会計を済ませお釣りをもらって帰ろうと するが店員が「ちょっと待って、領収書持ってって！」「毎度ありがとうございます！」
50	⑦交差点を曲がる。 ⑧川沿いの桜並木の道。落ちずにまだ残っている紅葉した葉をちらちらと見ながら歩いている。 ⑨帰宅の道をよく分かっているらしく躊躇せずに曲がる。
13:00	GH到着

01-11-21 2Cさん 買い物

外出時間：1時間30分	
歩行距離：1.1km	
11:50	スタッフが2Cさんと2Dさんにお昼をどうするか話を持ちかける。2Cさんは買いたいものがあり「買い物に行かなきゃ」と、2Dさんもパンを買いに行くので一緒に行くことになる。2Dさんが先に出発し、2Cさんも少し遅れて出発。一緒に行くわけではない様子。
12:00	①家の前で掃き掃除をしていたおじさんに声を掛ける。「お世話になります。」おじさんは笑顔で「ああ、どうも」
10	②家二軒分くらい前を歩いていた2Dさんが途中振り返りながら2Cさんを待っていたため2Dさんに追いつき、少し話しながら進むが次第に距離はあく。 ③一人で歩く。 ④前から来たおじいさんに駅に行く道を尋ねる。おじいさんは身振りを交えて説明。2Cさんは「ありがとうございます。パンを買いに行こうと思って、、」と。 ⑤どちらに進むのか立ち止まってキョロキョロし、考える。
20	⑥店先にある水槽内の生き物(商品)をゆっくり見ながら進む。 ⑦薬局に到着。店内の化粧品を主にじっくり見ている。(約10分間)
30	スタッフが薬局で2Cさんに声を掛け一緒に箱ティッシュを買う。薬局出発。
40	⑧道具ショップに入り、スタッフと相談しながら鍋を購入。 ⑨八百屋に到着。 スタッフと一緒に買い物だが、買い物はほとんどスタッフが行い2Cさんは試食のミカンを食べながら野菜や果物を見たり八百屋の店員や客と笑いながら会話をしている。
50	八百屋では慣れている店員が2Cさんに「呆けた真似をしているだけじゃないの？」と。2Cさんは「違うの。本当は呆けているのに頭の良い振りをしているだけなの。」
13:00	八百屋出発。スタッフと帰宅。
10	
20	GH到着。
30	
40	GHにて、ひとりごと「ふう～。ずいぶん歩いたねえ」

01-11-21 2Aさん お参り

外出時間：10分 歩行距離：200m	
14:30	スタッフと2Aさん2Dさんで隣の神社についての話。(スタッフ側から) 「天気が良いからねえ、手を合わせてくるだけでも違うからねえ。」と神社に行くことをすすめている。「そうそう、手を合わせてくるだけでもね。」と2Aさん。
40	2Aさんはスタッフとの会話の後少し居間の椅子に静かに座っているが、自分の部屋へ。
50	
15:00	外に出る支度をして自分の部屋から出てくる。出発 ①神社の柵につかまったり柵の間から神社の方を覗いたり、ゆっくりと進む。 ②石像の下の方に腰を掛けて休む。
10	③境内には枯れ葉を掃いている人が一人いるだけで他に人はいない。 2Aさんは手を合わせ、帰り道も同じ石像の下で休む。 GH到着。スタッフが「お帰りなさい、がんばった？」と声を掛け、2Cさんも「行って来たの？ご苦労さん」

01-11-25 2Aさん 晩御飯の買い物

外出時間：1時間20分 歩行距離：1.1km	
14:20	GHにて。スタッフ側から2Aさんに晩御飯の相談を持ちかける。相談しながらメニューを決定し紙に書く。スタッフが「もう出かけますか？」と尋ねると時計を見て「そうね、まだちょっと早いけど早く行けば後が楽だね。」…「このずっと行った下の方ね？」と店のあるところを確認。
30	自分の部屋へ戻る。(買い物の支度)
40	上着を着て巾着を持って自分の部屋から出てくる。一人で行くのはかなり久しぶりであるため、何度もスタッフに店の場所を確認している。 「こっちから行ってずっとまっすぐね？肉屋やら魚屋、八百屋やら…ね？」GH出発。
50	①交通量も少しあるため立ち止まる。どちらに進もうか考えている様子。 ②直進しようとするがやめて戻り、曲がる。道路の真ん中を歩きタクシーが軽くクラクションをならすが聞こえていない様子。その様子を花に水をやるために外に出ていた角の家の人が見守っていた。 ③低い塀に座っていた若い女性の隣に腰を掛け、話しかける。(その身振りなどから、おそらく道を尋ねている)
15:00	④ベンチで一分弱のひと休み。買い物リストの紙を取り出して確認。 ⑤スーパー到着。レジに直行し店員に買い物リストを見せる。よく知っている店員が対応し買い物を手伝う。店員が「魚はここにあるけど、野菜はないねえ。魚はどれが良い？」と。考えながらも2Aさんはほとんど店員の言うままに決める。そばで会話を聞いていた客が「八百屋ならあっちにあるよ」と2Aさんに話しかける。魚に夢中で返答無し。レジを済ませ、八百屋の位置を店員と客に教えてもらい出発。 「ここをずーっとまっすぐに行った右肩の方だよ」「ああ、そうかい。ずーっと、、ね。」店員も不安なのか歩いていく後ろ姿を見送る。
10	⑥予定外の店の入り口まで進んだところでスタッフが声を掛け、一緒に手をつないで歩く。
20	⑦八百屋の前にあるベンチに腰を掛ける。疲れたのか、買い物はほとんどスタッフが行う。
30	⑧コンビニでトイレを借りる。 ⑨足が痛い様子、さっきも座ったベンチを探している。
40	⑩最初のスーパーの前を通り、外に出ていた店員が「八百屋開いていた？」と声を掛ける。スタッフが対応し、2Aさんはほとんど聞いていない。 店員が「今日は天気もいいし、良いねえ。ご苦労様」と言う。
50	⑪ベンチに座り、10分ほどスタッフと話し込む。
16:00	GH到着。少し疲れた様子でしばらく椅子に座っている。

01-12-03 2Bさん, スタッフ 晩御飯の買い物

外出時間：1時間 歩行距離：1.2km	
14:30	スタッフが夕飯の買い物と諸用事を兼ねて2Bさんを誘う。 2Bさんは急いで自分の部屋に上着を取りに行く。
40	①肉屋で買い物。よく来る店で店員も友好的に話しかけ、買い物がすんでも会話をしている。 ②八百屋で買い物。品物はほとんどスタッフが選ぶ。2Bさんはぶらぶらと品物をながめている。 ③スタッフの用事で銀行(ATM)による。一緒に中に入り、待っている。
50	④スーパー三浦屋到着。 スタッフに言われた品物を店員に尋ねて探したり、一緒に探したり選んだり。 「シーチキンどこですか」と自分から店員を捕まえて尋ねる。
15:00	スタッフから少し離れ、チョコレートの試食コーナーでの試食。店員に説明を受け一袋受け取って 買い物かごに入れる。スタッフに「これいつもよりすごく安くなっているんだって。今日まで！」 と言いながら。
10	スーパー出発 ⑤陶苑(陶器, 雑貨屋)でスタッフが湯飲みを購入。待っている間犬を散歩中の人に自ら話しかける。 「立派な犬ねえ、何犬?」「ゴールデンレトリバーです。」「へえ、すごいわ。」
20	陶苑の店先で見たものについて店員に尋ねる。 「これは何ですか?」「干支の置物ですよ。」「ああ、そうか~」 スタッフの買い物も終わり店を出る。
30	⑥商店街が終わりかけの所で「こういう所は一番良いところだね!商店街!」とスタッフに。 GH到着

01-12-03 2Dさん, 2Eさん(車椅子), スタッフ 散歩

外出時間：30分 歩行距離：550m	
15:50	スタッフが2Eさんをつれて散歩に出かけるための準備をし、2Dさんにも「2Dさんちょっとお散歩に行かない?」と声を掛ける。
16:00	2Dさんはちょっとびっくりした様子で「何か買うものがあるんですか?」と聞き返す。スタッフが 「いや、買うものはないけど、ただぐるっと行って来ない?」 2Dさんは「ただ?!ああ、そう。」と言いつつも「じゃあ、ちょっと上着を着てきますね。」と言 って自分の部屋へ。GH出発
10	①角の新築の家を見て「ああ!こんな立派な家ができていたなんて私全然知らなかったわ。驚い た。ああ、立派ねえ。」交差点なのでスタッフが2Dさんに「2Dさん、どっちに行きたい?」と 尋ねる。2Dさんは「こっちの方は初めてだから分からないですよ…」と言うが行きたい方向を示す。 ②歩きながら目に付く家の大きさや素敵さに感動。しきりに「見てくださいよ、素敵ねえ…」「ほ ら、あんなに立派!」などと感嘆の声をあげる。
20	③池の脇に植えられた木に見える道で「素敵な所ねえ、私初めてだわ。」 ④とにかく目に付くものすべて(家、植物)に感心、感動している様子。よく喋っている。

30	<p>⑤お財布を持ってこなかったことを後悔している。「がまぐちを持ってくれば何か買って帰れたのに…」</p> <p>財布を取って再び買い物に行くことにし、いったんGHに戻る。</p>
----	---

01-12-03 2Dさん, 2Eさん (車椅子), スタッフ 散歩

<p>外出時間：30分</p> <p>歩行距離：550m</p>	
15:50	<p>スタッフが2Eさんをつれて散歩に出かけるための準備をし、2Dさんにも「2Dさんちょっとお散歩に行かない？」と声を掛ける。</p>
16:00	<p>2Dさんはちょっとびっくりした様子で「何か買うものがあるんですか？」と聞き返す。スタッフが「いや、買うものはないけど、ただぐるっと行って来ない？」</p> <p>2Dさんは「ただ?! ああ、そう。」と言いつつも「じゃあ、ちょっと上着を着てきますね。」と言って自分の部屋へ。GH出発</p>
10	<p>①角の新築の家を見て「あらあ！こんな立派な家ができていたなんて私全然知らなかったわ。驚いた。あらあ、立派ねえ。」交差点なのでスタッフが2Dさんに「2Dさん、どちらに行きたい？」と尋ねる。2Dさんは「こっちの方は初めてだから分からないですよ…」と言うが行きたい方向を示す。</p> <p>②歩きながら目に付く家の大きさや素敵さに感動。しきりに「見てくださいよ、素敵ねえ…」「ほら、あんなに立派！」などと感嘆の声をあげる。</p>
20	<p>③池の脇に植えられた木に見える道で「素敵な所ねえ、私初めてだわ。」</p> <p>④とにかく目に付くものすべて(家、植物)に感心、感動している様子。よく喋っている。</p>
30	<p>⑤お財布を持ってこなかったことを後悔している。「がまぐちを持ってくれば何か買って帰れたのに…」</p> <p>財布を取って再び買い物に行くことにし、いったんGHに戻る。</p>

01-12-03 2Dさん, 2Eさん(車椅子), スタッフ 買い物

外出時間：40分 歩行距離：900m	
16:30	散歩に引き続き買い物に行くため財布を取りにGHへ。 再び出発
40	①2Dさんが空き地に一本だけある木を指さして「ここは桜がきれいなんですよ。」 ②比較的交通量の多い道路にさしかかり「ここは車がたくさん通るから危ないのよ。」 ③スタッフが「2Dさん、どっちに行きたい？」と尋ねると「えっ！私はそっちの方は行ったことがないから分かりませんよ。」と言いつつもそっち(右側)に行きたそう。スタッフが「分かるからそっち行ってみる？」2Dさん嬉しそうに「じゃあ、思い切って行ってみましょうか！」 ④散歩の時と同様によく喋っている。「こっちは私初めてだわ。」「あらあ、こっちはこんな風になっていたなんて全然知らなかったわ。」
50	⑤広い空き地の向こう側にいつも利用する商店街の様子が見え、柵があるのだが空き地を通過して商店街の方に行きたいのか、足が向かう。通れないので道路沿いに進む。 ⑥八百屋到着。スタッフと一緒に果物を選ぶ。スタッフに「どれが良い？」と聞かれ、「そうねえ、これで良いんじゃないかしら。」と自分で選ぶ。
17:00	八百屋出発 ⑦一瞬右側に進もうとするがスタッフが「こっちから行こうよ」と言ってまっすぐに進む。
10	⑧スタッフが「どっちに行く？」と尋ねると「ここ曲がっちゃいましょうよ。その方がまっすぐで良い。」 ⑨歩きながら「私こんな素敵な散歩は初めてだわ。また連れてきてくださいね。」と何度も言う。 GH到着

2-2-3 F Uホームにおける外出行動

01-11-30 3Bさん, お客さん 見送り

外出時間：30分 歩行距離：1.3km	
11:40	スタッフが3Bさんに、帰ろうとしていたお客さんを浅草駅まで送ってこないだろうかとお願ひする。 3Bさん快諾。出発。 ①3Bさんが「区役所の中を通っても良いんですけど、どうします?」と尋ねる。 ②区役所内通過。エスカレーターを使用するなど良く通るコースである様子。
50	③「隅田川です。」と指をさす。ちょうど川をシーバスが通過中で「定期便なんですけど、あちこちと通るところがあるんですよ。」とシーバスの説明をする。 ④「これが吾妻橋。こえるともう浅草なんですよ。」 「松屋の地下で…スーパーがあるんだけど同じくらいの距離だから松屋で買い物をするんです。」 買い物の話からGHの食事作りの話へ「何食べたい?と聞いて作ってくださるんです。私達が手伝うのは皮むきでね…」 「松屋は五人くらいでいつも行くんです。お肉にしてもいろいろそろっているでしょう?」
12:00	⑤浅草駅到着。「ここが浅草駅。ここが観音様。こっちからも行けるんですけどね、。」 「こっち(松屋)の地下が食料品。改札口はあっち。」と指をさす。 お客さんを見送る。 ⑥「観音様に毎朝1人でお参りに行くんです。以前は5, 6人いたんですけどね。」「暖かくなると増えると思いますけど。」 ⑦「帰りは下から行きましょう。」 ⑧「近くに大きな公園があるんですけど、青いシートがあつて(浮浪者)なんとなく危ないですからあまり行かないんです。」
10	⑨「あれが区役所。」と指をさして教える。 歩きながらGH内についてのおしゃべり。「ちょっと買い物行ってきましたって言うでしょう?そしたらどこ行くの?って。松屋までって言うと時間がわかるでしょ、そしたら迎えに来てくれるのよ。大変でしょう?」 ⑩「そこにあるラーメン屋は、みんなが“ラーメン!チャーハン!”とか言うところに来るのよ。」 「外へ食べに行ったり、出前を取ったりよくしますよ。三回に一回は食べないと。」 GH到着。ポストを覗いて郵便物の確認。

01-11-30 3Cさん, 3Iさん, スタッフ 晩御飯の買い物

外出時間：30分 歩行距離：1.1km	
15:30	おやつを食べ終わるころスタッフが「食べ終わったら夕飯のお買い物、みんなで行きましょうね。」 と言いながら、買い物リストを作る。 「買い物、たくさんありますからね～！」と言うと皆「ええ～!!」「私行かないよ。」等の反応。
40	買い物に誰が行くのか、という話をする。少し雨が降っているためか皆行きたがらない。 3Cさんと3Iさんがスタッフと行くことになる。
50	GH出発 ①3Iさんが「あっちに行く(指さして)水戸街道だからね。」と、交通量が多い理由を説明する。 ②進行方向の信号が赤なので渡らずに「こっちから行こうよ。」と3Cさん。そのとき信号が青になる。 3Iさんが「青だよ!渡ろう!」と先に横断歩道を渡り始め、3Cさんはついて行く。
16:00	③3Cさんは常に一人で先頭を歩く。 ④3Iさんは小学生を見て「そこね、小学校。確か横川小学校とかいったよ。」と言いつつ学校の名前が書いてある所を確認し「うん、横川小学校だね、やっぱり。」 ⑤スーパー到着。スーパーでは3Cさん、3Iさんがそれぞれかごを持ちそこにスタッフが買う物を入れていく。
10	3Cさんが先にレジに並んでいる。3Iさんとスタッフはまだ買い物中。3Cさんの会計が始まりそうな時、3Iさんが3Cさんの後ろに並んでいた人たちに「すいません、前のこの人(3Cさん)と一緒になので、すいませんね。」と言いながらスタッフと一緒に3Cさんの所に行きレジをすませる。 スーパー出発
20	⑥3Cさんは帰りも一人でどんどん先へ歩く。角を曲がる時は後ろの二人を少し待ち、近付くとまた先に歩き出す。 ⑦新しくできたマンションを見てスタッフが「あ、ここできたんですねえ。」と言うと3Iさんもマンションを見上げ「そうですねえ、工事やりましたからねえ。」 ⑧3Cさんが後ろの二人を見て待っている。二人が追いつく頃信号が青の点滅中。3Iさんは「渡れるかな。」と言うが点滅なのでやめて待つ。 ⑨⑩角を曲がると後ろの二人が見えるまで待っている3Cさん。 GH到着

01-11-30 3Bさん, 3Hさん 散歩

外出時間：30分 歩行距離：850m	
15:50	3Bさんがこの日一度も外に出ていない3Hさんを見て「私がこの人を連れて散歩に行きます。」とスタッフに言う。出発。 ①3Bさんが3Hさんに「いつもはここを(左側を指して)くるっと回って帰るけど今日はたくさん歩くため区役所のあたりまで…」と言う。
16:00	②3Bさん「区役所行く?アサヒビール行く?」と3Hさんに。「どちらでも、近いほうが。」と3Hさん。 ③3Hさん「ここは何?」とコンビニを指す。3Bさん「スーパー。」 ④3Hさん「ここは何?」 3Bさん「アサヒビール。食べたり飲んだりするところ。足が良くなったらね。」
10	⑤角を曲がって行こうとするが道を渡らないと歩道がなく、行けないのに気付く。 ⑥3Bさん「ここまっすぐ行くとお寺よ。」 3Hさん「ああ～、そう…」 ⑦広場にさしかかり 3Bさん「夏にここで盆踊りしたのよ。」 ⑧区役所到着。いつもと違う入り口から入ったらしく、3Hさん「ここが区役所?」と。窓口の前に設置してある椅子で休憩。 3Hさん「ここ、何しにきたの?」 3Bさん「あなたを休めに来たのよ。」 3Hさん「区役所って何するところ?」 働いている人たちを見て「これみんなお勤めしてんの?」と3Bさんに尋ねる。
20	3Bさん「さあ、行きましょう。」と立ち上がる。区役所出発。 ⑨3Hさん「それでどこ行くの?帰れるの?」 ⑩3Hさんは足が痛いのか「家まで遠いの?」と聞く。3Bさん「近いよ。ここ曲がればお寺が見えるから。」と励ます。 ⑪歩道に敷き詰められたレンガを見て3Hさん「きれいだねえ～!」 ⑫3Hさん「あ、お寺の屋根がある!」とGHの隣のお寺の屋根を指す。3Bさん「ここまで来れば迷子にならないね。」というが3Hさんは「わかんない。」と。3Bさん「お寺だよ?」と念を押すが3Hさんは「ああ～…」 GH到着。

01-12-14 3Dさん, スタッフ 買い物

外出時間：40分 歩行距離：1.4km	
11:30	スタッフが朝から散歩に行きたがっていた3Dさんを誘い、買い物を兼ねて外に出る。
40	①スタッフが現像に出していた写真を受け取りにカメラ屋に寄る。 3Dさんは店先で待っている。道行く人を眺めている。 ②洋服店の店頭にかかっているよう服を手に取り見ている。
50	③スタッフが3Dさんに「3Dさん、どっちに行く？」と尋ねる。3Dさん「こっちでいいじゃろ。」と曲がる。 ④新築マンションを見て「きれいやなあ。」スタッフも一緒に見上げ、「ああ、これね、大きいねえ。」 ⑤近くを通った男性の髪型についてスタッフに耳打ち。楽しそうに笑う。
12:00	⑥スーパー到着。スタッフが買い物をし、時々3Dさんに品物を取ってもらう。スタッフがレジの間は待っている。スーパー出発。 ⑦店の前に出ていた同年代のおじいさんがにこにこして見ている。3Dさんもなんとなく笑顔を返す。
10	⑧昼休みで会社員の人達が沢山出てきて賑わっている様子。 ⑨外に出してある植木に近寄って見ている。「関心やなあ。」 ⑩スタッフが家の前の花を指し、「3Dさん、花がきれいだよ。」「うん、うん」とうなずく。 GH到着。

01-12-14 3Bさん, 3Iさん 買い物

外出時間：1時間10分 歩行距離：1.4km	
14:00	リビングにいる3Aさん, 3Bさん, 3Cさん, 3Gさん, 3Hさん, 3Iさんに対してスタッフが用事で松屋に行くからみんなもクリスマスプレゼントを買うなら行かないか、とすすめる。3Aさん, 3Gさん, 3Hさんは行かないと言い、3Iさんが自分が三人の分を買ってくると言う。…結局3Bさんと3Iさんだけが行くことになる。
10	GH出発。 ①3Bさんが3Iさんに「区役所の方から行きたいんでしょう？」と聞く。3Iさんは少し考え、「ああ～、こっちからでも良いよ。」 ②3Bさんは渡ろうとするが少し交通量があるため、3Iさんが「信号渡って行こうよ、危ないよ。」と言って信号に向かう。
20	③紅葉している木を見て3Iさん「もみじが綺麗なこと！」 ④風が強いことについて3Iさんが「ここは川があるからねえ。」
30	⑤松屋到着。 「クリスマスプレゼントだから、、、何階に行く？」と3Bさん。いつもは食料品を買いに地下に行くようだが今日は違うのでどうしようかと相談する。エスカレーターを見て3Bさんが「上に行っちゃう？」と言い、二人で乗る。二階は東武鉄道浅草駅の改札になり松屋への入り口は脇にあって分かりにくく、3Bさん, 3Iさん少し迷う。三階まで階段で上る。 三階服売り場。3Bさんはまっすぐ店員のいる方に進み「クリスマスプレゼントなんですけどどこに売っていますか？」と尋ねる。店員も別の店員に相談し、「一階のエレベーターの前に。」と教えてもらう。そのころ3Iさんはそばを通りかかった店員にエスカレーターの場所を聞き教えてもらう。それぞれが聞いた情報をもとにエスカレーターで一階へ行く。一階エレベーター前には小規模なクリスマスコーナーがありガラス細工や子供用手袋などが売っている。 3Bさんはそれらを見る前に目に付いた案内カウンターに行き「クリスマスプレゼントはどこに売っていますか？」と聞く。聞いている間3Iさんはすでにクリスマスコーナーをのぞいている。聞き終わった3Bさんが3Iさんの所に行き「五階だって。」と言う。3Iさんは「五階？あら、そう。でもこんなのもいいじゃない？私こんなのもらっても良いわよ。」とガラス細工などを見て言う。
40	3Bさんは「まあ、いいけど五階にあるって言っていたわよ。」と。3Iさんは商品を見ながらも「じゃあ行ってみる？」エレベーターに乗りエレベーターガールに「五階お願いします。」と3Bさん。 五階おもちゃ売り場 ぬいぐるみコーナーを見つけ値段を確かめてそれぞれ気に入ったぬいぐるみを選ぶ。 3Bさん「これとこれどっちがかわいいと思う？」 3Iさん「あら、これかわいいじゃない！私こんなの欲しいわ。」3Bさん「やっぱりこれにしよう。これかわいいわ。」 3Iさん「私はこれ！」

50	<p>3Bさんは一度決めたが最後に別のぬいぐるみを見つけ「こっちの方がかわいいわ。私こっちにするわ。」3Iさんは「あ〜、そう。私はこれで良いわ。」決定し、会計をするためにレジに持って行く。3Bさん「これお願いします。」店員「プレゼント用ですか？」3Bさん「ええ。そう。」3Iさんはぬいぐるみを差し出しながら「クリスマスプレゼントだから出来たらリボンをつけて下さいね。」と言うが店員がすぐに返事をしないため心配らしく念を押す。「出来たらで良いからリボンか何か。」店員「こちらとこちらどちらになさいますか。」と二種類のリボンを示す。3Iさん「こっちが良いわね、お願いします。」</p> <p>二人とも会計と包装を終え受け取る。3Iさん「どうもお手数掛けました。」と言いながらおもちゃ売り場を出る。エレベーターを待つ。エレベーターのドアが開き、3Bさんが「下行きますか？」と中にいる人に聞く。「上。」と言われ待つ。次に開いたエレベーター、エレベーターガールが「下へ参ります。」と言い二人は乗る。</p>
15:00	<p>松屋出発。</p> <p>⑥GH方向へ進む3Iさんに3Bさんが「3Iさん！クリーニングとって行くから！」と呼び止める。</p>
10	<p>⑦クリーニング業と服やその他小物を売っている店。3Bさんはクリーニングしたものを受け取るため中まで入っていくが3Iさんは「私ここにいる。」と店先に。店先で商品を見ている。3Bさんは受け取ってから少し服などを手にとって見、「ここ安いよねー。」店を後にしながら3Iさんも「ここ安いから良いわよね。暖かい下着とかね。」と。</p> <p>⑧3Bさんが3Iさんに「こっち行く？こっち行く？」とどっちに行くか尋ねる。</p> <p>3Iさん「こっち行っちゃう！」とより近い方の道を選ぶ。（足が痛い様子）</p> <p>⑨店先の花を見て3Bさん「ずいぶん立派ねえ。」と。3Iさんも「あら、ほんと。」</p>
20	<p>GH到着。</p>

01-12-14 3Cさん, スタッフ 買い物(散歩, お参り)

外出時間：1時間20分 歩行距離：2.4km	
14:00	リビングにいる3Aさん, 3Bさん, 3Cさん, 3Gさん, 3Hさん, 3Iさんに対してスタッフが用事で松屋に行くからみんなもクリスマスプレゼントを買うなら行かないか、とすすめる。3Aさん, 3Gさん, 3Hさんは行かないと言い、3Iさんが自分が三人の分を買ってくると言う。3Bさんと3Iさんは一緒に行くことになる。買い物には3Cさんも行く様子を見せている。
10	3Cさんはスタッフと一緒に歩くことになる。
20	GHの玄関でスタッフが「3Cさん, どこに買いに行きましょうか?松屋?仲見世?」と聞くと3Cさんは「松屋?...松屋も良いねえ~!」と言いながらGH出発。 ①歩きながら「ここ鳥屋さん, ここ魚屋さん。」と説明。
30	②「ここは狭いからあっちから。」と新仲見世を指す。 ③かばん屋の前を通り、「ここにみんなで買い物に来たの。」 ④「ここ仲見世。」...雷おこしはおいしくないという話など。
40	⑤浅草寺にお参りをする。煙をあびながら「これが良いのよ。」ハトがたくさん飛んできて3Cさんにぶつかりそう。...「お正月には着物を着て人がいっぱい来るのよ。」と。
50	⑥「今度慣れたら天ぷらのおいしい所行きましょう。」 ⑦「いつか入ったお店おいしかったね。ご飯包んだの(オムライス)。...ここ入ってすぐだったわよねえ?」 「和泉屋とかいったかねえ?」...和泉屋を見て「せんべい売ってる店は違うわよね。」 ⑧スタッフが「あそこじゃない?」と指すが3Cさんは「そうねえ...。」とよく分からない様子。
15:00	⑨食事処‘あづま’前でスタッフが「3Cさん, お茶します?」と聞いて、店に入る。 3Cさん「この前はこっちの席で食べたのよね。この店これで二回目。」 白玉クリームあんみつ注文 3Cさん「大きくてやっとのことで食べきったのよ。」
10	
20	
30	店を出る。 ⑩スタッフが「どっちから帰る?」と聞くと「まっすぐ帰る。こっち。」と言って松屋の中を通るという近道のコースを選ぶ。 ⑪「ここまで来たら一直線だものね...」とGHまでの道を自分なりに確認。
40	GH到着

2-2-3 外出行動のパターン

KO ホーム、KI ホーム、FU ホームの外出行動を横に時間、縦に距離で軸を取り、外出の動機づけの時間から出発、帰宅までを表したものが以下の図2-1～図2-21である。

【KO ホーム】

図 2-1 01-11-27 1Aさん, 1Bさん, 1Cさん, 1Eさん, スタッフ 昼御飯の買物

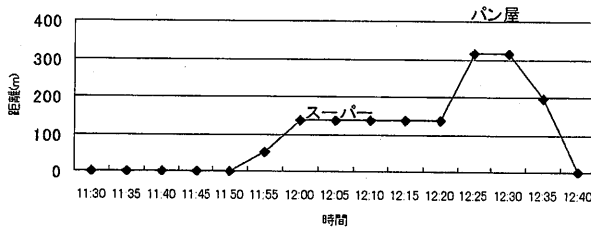


図 2-2 01-11-27 1Bさん, 1Cさん, スタッフ 防災訓練見学、散歩

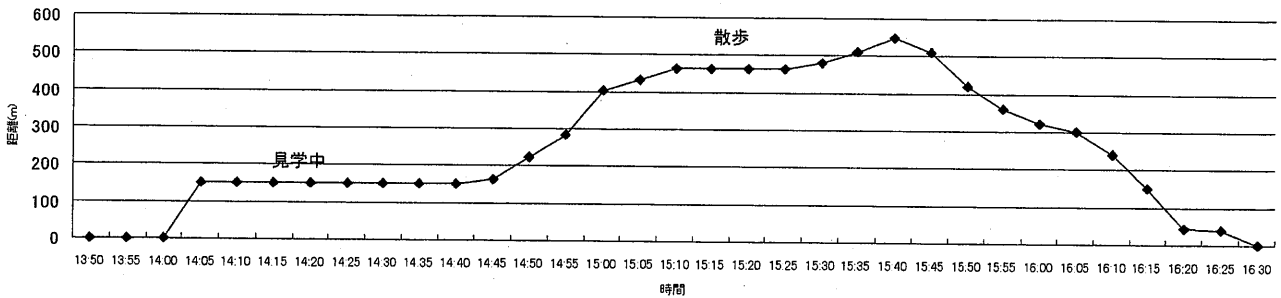


図 2-4 01-12-11 1Hさん, スタッフ 散歩、買物

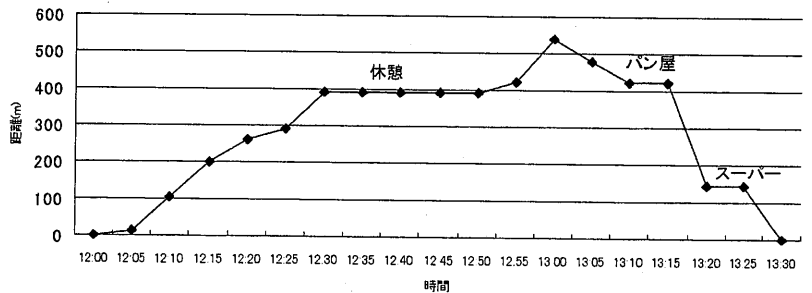


図 2-3 01-11-27 1Aさん, 1Fさん, スタッフ 晩御飯の買物

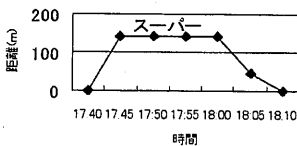


図 2-5 01-12-11 10さん. スタッフ 枝取り

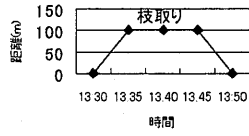


図 2-6 01-12-11 1Aさん. 1Bさん. 1Cさん. 1Eさん. スタッフ 晩御飯の買物

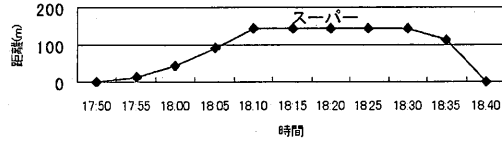


図 2-7 01-12-12 1Aさん. 1Bさん. 1Cさん. 1Eさん. 1Fさん. 1Hさん. スタッフ 昼御飯の買物

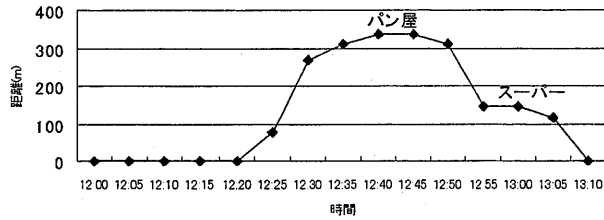
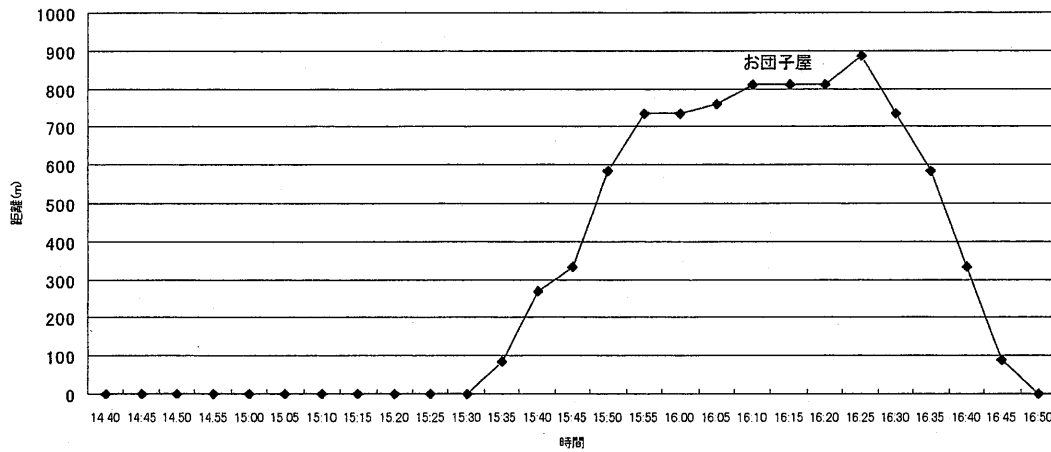


図 2-8 01-12-12 1Bさん. 1Cさん. 1Eさん. 1Fさん. 1Hさん 散歩



【KI ホーム】

図 2-9 01-11-21 2Dさん 昼御飯の買物

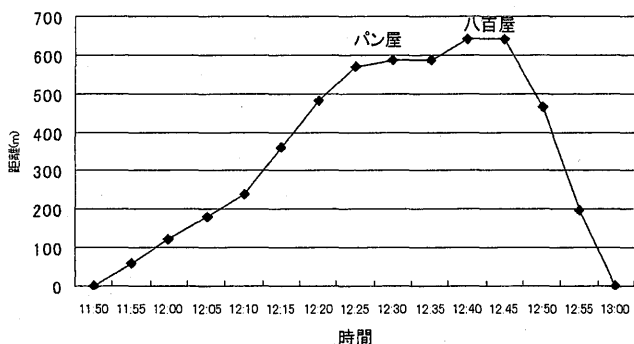


図 2-10 01-11-21 2Cさん 昼御飯の買物

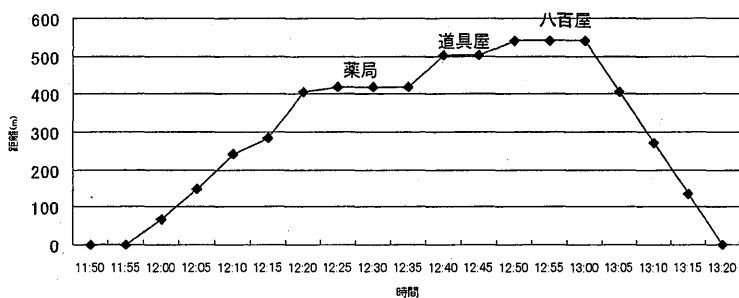


図 2-11 01-11-21 2Aさん お参り

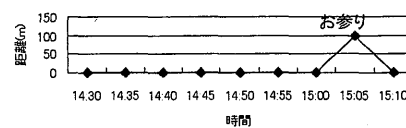


図 2-12 01-11-25 2Aさん 晩御飯の買物

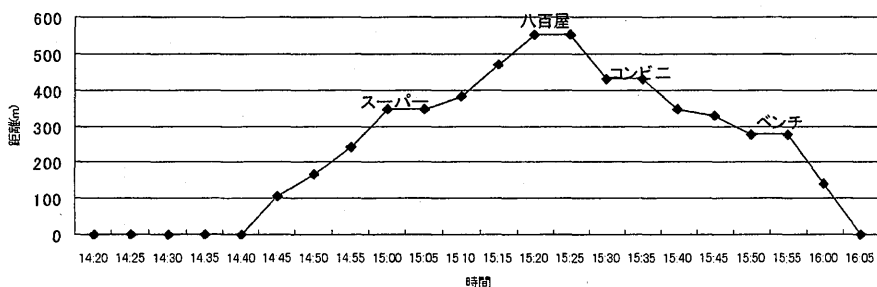


図 2-13 01-12-03 2Bさん.スタッフ 晩御飯の買物

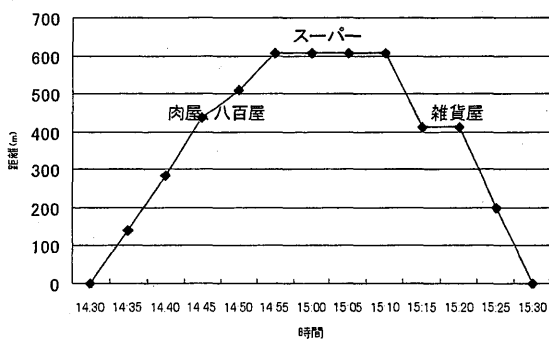


図 2-14 01-12-03
2Dさん. 2Eさん. スタッフ 散歩

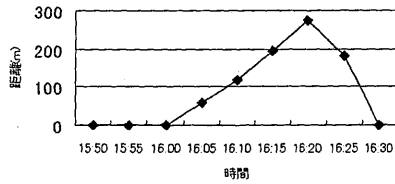
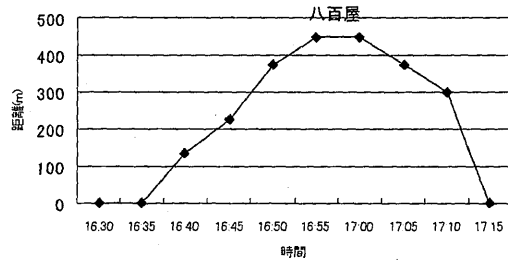


図 2-15 01-12-03 2Dさん. 2Eさん. スタッフ
買物



【FU ホーム】

図 2-16 01-11-30 3Bさん. お客さん
見送り

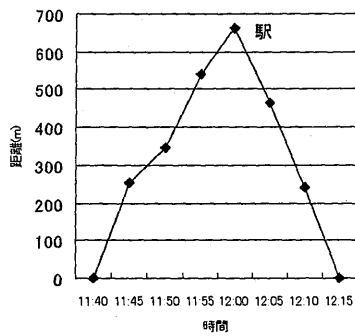


図 2-17 01-11-30 3Cさん. 3Iさん. スタッフ
晩御飯の買物

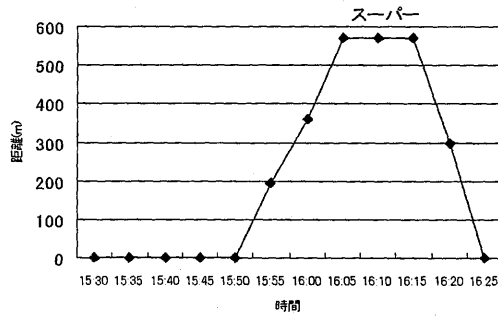


図 2-18 01-11-30
3Bさん. 3Hさん 散歩

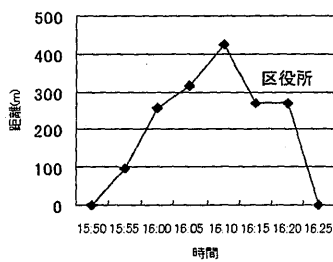


図 2-19 01-12-14 3Dさん. スタッフ
散歩、買物

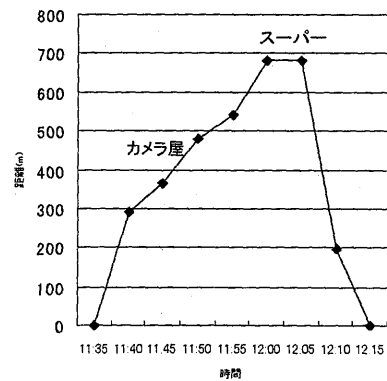


図 2-20 01-12-14 3Bさん. 3Iさん 買物

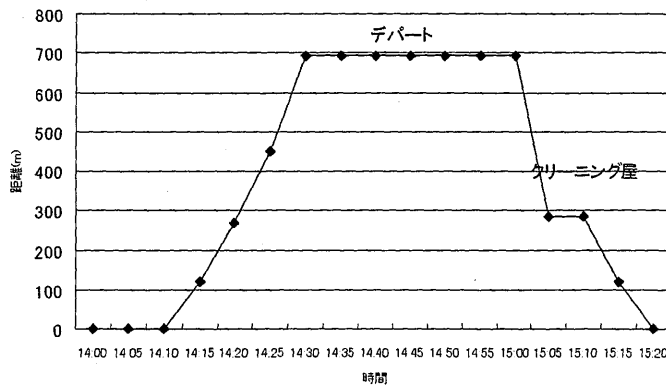
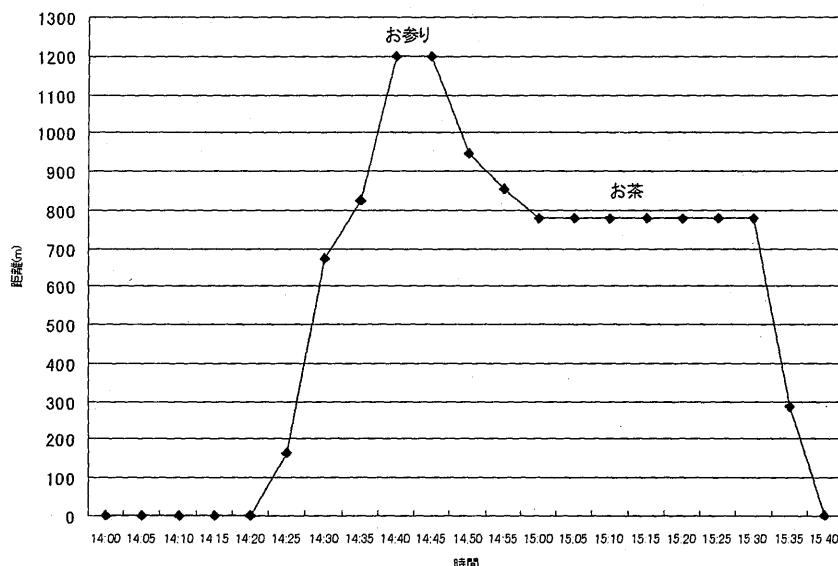


図 2-21 01-12-14 30さん.スタッフ お参り、お茶



最長歩行距離は、図 2-21 の 2.4 km であり、GH に帰ってくるまでの総外出時間は 1 時間 20 分である。外出時に休憩をとっているケースは、図 2-2、2-4、2-8、2-12、2-18、2-21 で、図 2-18 以外は歩行距離が 1 km を超えるものであった。図 2-18 のように 1 km を超えなくても休憩が必要なケースや、1 km を超えながらも休憩を必要としないものもあり、入居者の身体状況に大きく左右されるようである。

外出行動のパターンとして、図 2-1、2-4、2-6、2-8、2-9、2-10、2-14、2-15、2-18、2-19、2-20 に示されているように、目的地まで比較的ゆっくりと進み、帰りはただひたすら GH に向かうものが多い。これは、例えば買い物など目的が明確な場合、行きは散歩のように風景を楽しみ、帰りは品物を買々とホームを目指してひたすら歩くなど、帰りを急ぐ傾向から表れたパターンである。その点、散歩を目的としていたケースの図 2-2 では GH に到着するまで同じペースで歩いている様子が読み取れた。

2-3 コミュニケーション行為

2-3-1 コミュニケーション行為の分類方法

本章では2章で得た調査結果から特に入居者のコミュニケーション行動に着目して分析する。まず、コミュニケーション行動の分類を試みた。分類項目は以下に示すとおりである。

- ・ 外出形態として、スタッフが付いている時か、いない時か。
- ・ 行動の種類は自発的か受動的か、また受動的ならばそれはスタッフの働きかけによるものか地域の人からのものか。
- ・ 言動の対象はスタッフ、入居者、地域の人、調査員の中の誰か、または対象者なしか。

2-3-2 調査結果 (K〇ホーム)

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ					
入居者		・うどんコーナーにて、入居者どうしで、買ううどんの太さや量を相談	・すれ違った近所の人 が「こんにちは」と声を掛ける ・顔なじみのスーパーの店員が親しみを込めて「いらっしゃいませ」 ・入居者たちが通りかかるとクリーニング屋から店員と客が見守っている		
地域の人					
調査員					
対象者なし	・パン屋にて、それぞれが自分の食べたいパンを選ぶ				

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	・クリスマスリースをつけている家を見て「きれいですね。」				
入居者	・「もう少し早い時期に公園に来たかったねえ」 ・「夕暮れになると涙が出てくるよ」		・訓練を見学に来た近所の人が笑顔で挨拶 ・通りがかりの女子高生たちが入居者の様子を見て笑顔 ・公園で遊んでいた男の子が入居者さんたちを見て「わあ!たくさんだあ!」 ・病院の外来の看護婦さんが「こんにちは」と挨拶していく		
地域の人	・犬を散歩中の人に挨拶 ・また犬を散歩している人と会い、「かわいいワンちゃんですね。」		・公園にて、男の子の反応に対して嬉しそうに笑顔		
調査員					
対象者なし	・はしご車の動きに歓声や拍手 ・「明日も(公園に)来ますよ!」	・押しボタンを押し、信号が変わってびっくり ・家の周りの花に水をやる			

第2章 認知症高齢者グループホーム居住者の外出行動に関する考察

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ					
入居者					・外でスタッフを待っているとき 「お買い物ですか？」と尋ねる
地域の人				・声を掛けた人の元気な様子の子供に「かわいいねえ。」「元気だね、がんばってね。」	
調査員					
対象者なし				・スーパーにて、スタッフに頼まれた品物を捜してかごに入れていく	

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	・たくさんの専門学校生を見て「これは何?何かあったの?」「聞いてみよっか」 ・整体屋さんを見て「何屋さんだろう」 ・電器屋にて、「せっかくだからちょっと見ていこう!」				
入居者				・カートを運ぶ入居者に「(片付けなくて)良いですよ。お使いになりますか?」	
地域の人	・電器屋にて、「どこか休むところありますか?」 ・警備員に「ご苦労さん」				
調査員	・パン屋にて、「ここはカツサ				

第2章 認知症高齢者グループホーム居住者の外出行動に関する考察

	ンドがおいしいのよ」				
対象者なし	・パン屋にて、自分の三時のおやつ のパンを選ぶ ・スーパーにて、かごの中身を 確認しながら買い物				

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	・下校中の中学生を見かけ 「みんなきれいな格好を しているよ」「あんな頃が あったのねえ」				
入居者					
地域の人					
調査員					
対象者なし	・「寒いねえ～!!」	・クリスマスリースの枝を 取りに行く ・リース用にまっすぐな枝 を捜す			

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ					
入居者		・スタッフが連れ て行った試食コー ナーで、試食しな がら「私、辛い のねえ」など	・漬物売り場の 店員が試食を差 し出し紹介	・外でスタッフ を待っている間 「八百屋はどっ ちかしらねえ」 と話し合う	
地域の人	・レジを待っ ている間に小さな				

	子供を見かけ微笑む				
調査員					
対象者なし				・スーパーでスタッフが買い物をお願いして離れると、店内をまわって皆で相談しながら品物を選ぶ	

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ					
入居者	<ul style="list-style-type: none"> ・警察署の掲示板を見て話し合う ・花屋の前を通り「きれいね」「立派ね」 ・団地内の木々を見ながらゆっくり歩き、歌を歌う 		<ul style="list-style-type: none"> ・専門学校生が挨拶 ・パン屋の店員が自動ドアを調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・入居者どうしで「そんな寒い格好じゃだめよ」 	
地域の人	<ul style="list-style-type: none"> ・パン屋にて、欲しいパンをレジに持っていき別々の袋に詰めてもらうようにする ・スーパーにて、小さな子供に「かわいいねえ」 		<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をしてきた専門学校生に目で挨拶を返す 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門学校生を見て「あらあ、いっぱいねえ」 	
調査員	<ul style="list-style-type: none"> ・閉まっている店を見て「あそこは確か八百屋でしたね」 ・パン屋にて、「あんぱん、60円もするの!・・・」 				
対象者なし					

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的 地域の人による
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ					
入居者				<ul style="list-style-type: none"> ・通りがかった電器屋を指差し、説明している様子 ・大師が見えてくると大師に関する話をする ・お参りのために階段を上がれない仲間を気遣い「ここ（階段の下）からお参りしましょう」 ・お団子屋さんにて、「歩いてくるのにちょうど良いコースね…ここに来るって誰にも言ってこなかったよねえ?」 ・歩き疲れた仲間を励ます 	<ul style="list-style-type: none"> ・お団子屋さんにて、店員が「食べにくくないですか?お箸使って良いんですよ」 ・「お足元気を付けてくださいね」と見送る店員 ・小さな子供を連れた家族が子供に声を掛けた入居者にニコニコ
地域の人				<ul style="list-style-type: none"> ・お団子屋さんで注文 ・店員に「お箸はいいですよ」 ・小さな子供を見かけ「バイバーイ!」 	
調査員					
対象者なし				<ul style="list-style-type: none"> ・大師に行く道にある洋服屋の店頭に出ている洋服を手にとってながめる ・お参り 	

2-3-3 調査結果 (KIホーム)

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ		<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフに商店街に おいしいパン屋があることを教えてもらい、パンを買いに行くことにする ・何も買わずにパン屋から出てきた入居者にスタッフが声を掛けて一緒にパンを買う 			
入居者				<ul style="list-style-type: none"> ・後ろを振り返り遅れて出発した入居者を待つ ・また離れてしまった入居者を振り返るが姿が見えないので先に行く 	<ul style="list-style-type: none"> ・八百屋の店員が「いらっしゃい！」
地域の人				<ul style="list-style-type: none"> ・八百屋の前で立ち止まりりんごを見、「どれが甘いのか? 甘いのが欲しいわ」店員に甘さを教えてもらい買いうりんごを選ぶ 	
調査員					
対象者なし				<ul style="list-style-type: none"> ・商店街の他の店は全然見る様子はない ・パン屋に入るがすぐ出てくる ・曲がって川沿いの桜並木の通りへ行き、紅葉を見ながら歩く 	

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言 動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフ による	地域の人 による		
スタッフ	・他の入居者とスタッフが商店街へ行く話しをしているのを聞き自分も買い物に行くと言う	・道具屋でスタッフと相談しながら鍋を買う			
入居者			・八百屋にて、店員も冗談を交えて談笑		・声を掛けられた掃除中のおじさんが笑顔で「あぁ、どうも！」 ・道を尋ねられたおじいさんが身振りを交えて道を説明する
地域の人	・八百屋にて、試食のみかんを食べながら店員と談笑			・家の前で掃除中のおじさんに「お世話になります」と声を掛ける ・通行人にパン屋への道を尋ねる	
調査員					
対象者なし				・商店街の店先の商品（生物）をゆっくり見ながら進む ・薬局の化粧品コーナーで10分程見てまわる	

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ		・天気が良いからとスタッフが神社にお参りに行くよう進めると「そうそう、手を合わせてくるだけでも違うからねえ…」と			
入居者					
地域の人					
調査員					
対象者なし				<ul style="list-style-type: none"> ・外に出る支度をしに自分の部屋へ ・神社の柵につかまったり休んだりしながらゆっくり境内までの道を歩く ・お参り ・境内の石造の下に腰を掛けて休む 	・境内を掃除

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・出かける前に何度もスタッフに店の場所を確認する「…ずっとまっすぐね?…?」 ・帰り道、ベンチに腰掛け、スタッフと話し込む 	<ul style="list-style-type: none"> ・買うものが決まり、スタッフが「もう出かけますか?」と尋ねると「そうだね…」と同意 ・予定外の店の入り口でスタッフが声を掛けて一緒に八百屋に行くことになる 			
入居者			<ul style="list-style-type: none"> ・再びスーパーの前を通り店員が「スーパー開いていた?」と聞く 		<ul style="list-style-type: none"> ・タクシーがクラクションを鳴らして通り、その様子を近くの家の人心配そうに見守っている ・スーパーにて、店員が渡された買い物リストを見て買い物を手伝う ・他の買い物客とともに八百屋の位置を教える ・店員が入居者の後姿を見守る
地域の人				<ul style="list-style-type: none"> ・座っていた若い女性の隣に腰掛け、道を尋ねる ・スーパーに入り、店員に買う物が書かれた紙を見せる 	
調査員					
対象者なし	<ul style="list-style-type: none"> ・八百屋の前のベンチに腰掛けて休む 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンビニでトイレを借りる 		<ul style="list-style-type: none"> ・まっすぐ行きかけて立ち止まり、戻って曲が 	

				る ・ベンチに腰掛け、買い物リストの紙を確認	
--	--	--	--	---------------------------	--

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的 地域の人による
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーにて、チョコレートを買ったスタッフに「これ安くなっている!」 ・商店街の良さをスタッフに言う 				
入居者			<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーにて、試食担当の店員が入居者にチョコレートをすすめる 		<ul style="list-style-type: none"> ・友好的な肉屋の店員
地域の人	<ul style="list-style-type: none"> ・肉屋にて、カウンターに肘を掛けて店員と話す ・スーパーで見つからないものを店員に尋ねる ・チョコレートの試食を試し説明を受けて、一袋持ってスタッフの所に行く 			<ul style="list-style-type: none"> ・雑貨屋の前で犬を散歩中の人に「立派な犬ね・・・」 ・雑貨屋の店頭にあるものについて店員に尋ねる 	
調査員					
対象者なし	<ul style="list-style-type: none"> ・八百屋でスタッフが買い物をしている間ぶらぶらと品物を眺めている ・スタッフが用事で入ったATMと一緒にいる 	<ul style="list-style-type: none"> ・買い物に誘われた入居者が急いで自分の部屋に上着を取りに行く ・スーパーでスタッフと一緒に 			

		品物を探す			
--	--	-------	--	--	--

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	・散歩中に見かける家の大きさなどに感動し「立派ねえ…！」 ・池のそばで「素敵なところね」	・散歩に誘われ上着を取りに行く ・スタッフにどっちに行きたいのかと聞かれ、行きたい方向を示す			
入居者					
地域の人					
調査員	・目に付く家や植物などに感嘆の声 ・お財布を持ってこなかったことを後悔「何か買って帰れたのに…」				
対象者なし		・お財布を取りに一度GHに戻る			

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言 動の種類 対象	自発的	受動的		自発 的	受動的 地域の人による
		スタッフによる	地域の人 による		
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・交差点で入居者が好んで通る道に足が向くがスタッフが「こっちから行こうよ」と、別の道から行く ・散歩と買い物が終わりがけの頃「また連れてってくださいね」 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフからどっちに行きたいかと聞かれ、行ったことのない道を選ぶ「思い切って行ってみましょう!」 ・八百屋でスタッフと一緒に欲しい果物を選ぶ ・またスタッフにどっちに行きたいかと聞かれ「ここ曲がっちゃいましょう」 			
入居者					
地域の人					
調査員	<ul style="list-style-type: none"> ・桜の木を指し「桜がきれいなんですよ」 ・交通量の多い通りで「ここは危ない・・・」 				
対象者なし	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもの商店街が見える所で商店街に気づき、行こうとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・散歩の最後にお財布を取りに一度 GH に戻る 			

2-3-4 調査結果（FUホーム）

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ		・スタッフからお客 さんを駅まで送る ようお願いされ、快 諾			
入居者					
地域の人					
調査員・客				・区役所内を通る道にするかど うかと尋ねる ・隅田川とシーバス、浅草の松屋 デパートについて説明する ・浅草駅に着き、いつもお参りに 行くという話をする ・GHでの毎日の生活の様子など を話す	
対象者なし					

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ		<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフから夕飯の買い物に行こうと言われ、行く支度をする ・スタッフが新築マンションを見上げて「できたんですね」と言うと、同じように見上げて同意する 			
入居者	<ul style="list-style-type: none"> ・信号の手前で「こっちから行こうよ」 				
地域の人				<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーのレジで、「すみません」と言いながら前のほうにすでに並んでいた入居者のもとへ行く 	
調査員	<ul style="list-style-type: none"> ・交通量が多い道路で水戸街道が近いと ・小学生を見かけ、近くにある小学校を教える 				
対象者なし					

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	・他の入居者を連れて散歩に行ってくると言う				
入居者				<ul style="list-style-type: none"> ・散歩のコースを相談する ・目に付く建物や店について「何?」と尋ねる ・休憩のため区役所による ・区役所で働いている人たちを見ている 	
地域の人					
調査員				・広場にさしかかり「夏にここで盆踊りをしたのよ」と説明	
対象者なし				・道路に敷き詰められたレンガを見て「きれいだねえ!」	

第2章 認知症高齢者グループホーム居住者の外出行動に関する考察

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・散歩に行きたがる様子を見せる ・マンションを見て「きれいやなあ」 ・近くを通った男性の髪型のことをスタッフと話す ・通りがかりの家の前にある植物を見て感心する 	<ul style="list-style-type: none"> ・どっちに行きたいかと尋ねられ、行きたい方を示す 			
入居者			<ul style="list-style-type: none"> ・通りの店の前にいたおじさんがニコニコと笑顔 		
地域の人	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフがカメラ屋で用事を済ませている間、店の外で道行く人を眺める ・笑顔のおじさんに入居者のほうも笑顔を返す 				
調査員					
対象者なし	<ul style="list-style-type: none"> ・通り沿いにある服屋で服を手にしてみる 		<ul style="list-style-type: none"> ・昼時でたくさんの会社員が出ている 		

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ		・スタッフからクリスマスプレゼントをそれぞれ買いに行くようにと言われ、誰が行くのか話し合う			
入居者				<ul style="list-style-type: none"> ・行く道順を相談 ・デパートにて、何階に行くか相談 ・おもちゃコーナーで、それぞれの感想を言いながらプレゼントを選ぶ「これ、かわいいわ！」 ・スタッフから言われていたクリーニング屋に寄るため呼び止める「クリーニング、取っていくから」 ・クリーニング屋(洋服、小物屋)を後にしながら「ここ安くて良いわね」 	<ul style="list-style-type: none"> ・尋ねられた売り場を2-3人の店員で考えて答える ・案内嬢が入居者の質問に受け答え
地域の人				<ul style="list-style-type: none"> ・デパートにて、店員に売り場やエスカレーター的位置などを尋ねる ・レジにて、プレゼント用に包装をお願いする 	
調査員				<ul style="list-style-type: none"> ・風が強いので「川があるからね」と説明 ・クリーニング屋で売っているものの安さを言う 	
対象者なし				<ul style="list-style-type: none"> ・紅葉している木を見て「もみじがきれい……」 ・クリーニング屋の入っている店の店頭で洋服などを見ながら待っている 	

外出の形態	スタッフ付き			スタッフなし	
行動の主体	入居者			入居者	
言動の種類 対象	自発的	受動的		自発的	受動的
		スタッフによる	地域の人による		
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・雷おこしはおいしくない、などの話 ・前に来た店がおいしかったと言いき、どこか思い出そうとしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフがクリスマスプレゼントの買い物の話をすると、買い物に行く様子を見せる ・スタッフがどこに行くのか候補を挙げて尋ねると「松屋もいいねえ・・・」などと言いながら出発 ・スタッフが「お茶します?」と聞き、食事処に入ることにする ・帰り道のコースを決める 			
入居者					
地域の人					
調査員	<ul style="list-style-type: none"> ・歩きながら目にする店を説明「鳥屋、魚屋・・・」 ・新仲見世にて、言ったことのある店を紹介 ・お茶しながら前に来たときの話など 				
対象者なし			<ul style="list-style-type: none"> ・仲見世や浅草寺にはたくさんの観光客 		

2-3-2 コミュニケーションの分析

入居者の行動の仕方はその人自身の性格や認知症度、身体状況など様々な要素から影響を受けたものであるため、調査結果から一つの結論を導き出せるとは言えない。しかしその行動や会話の内容を注意深く考察すると、その条件によっては共通の傾向が見られることが分かった。以下、共通点として次の5つの点について考察する。

- ①【スタッフへの自発的な会話】
- ②【スタッフの有無による入居者間の会話の違い】
- ③【地域の人との関わり方—スタッフがいる時】
- ④【地域の人との関わり方—スタッフがない時】
- ⑤【対象者なしの場合】

2-3-2-1 【スタッフへの自発的な会話】(表2-7)

入居者からスタッフへの自発的な会話で3つのグループホームに共通し頻発していたものが、入居者が見聞きしたことから感じたことをスタッフに伝える内容の会話である。

KO ホームではほとんどがそれで、入居者はスタッフに「きれいですね。」「これは何?」「何屋さんだろう」「きれいな格好しているよ。」とダイレクトに気持ちを伝えている。KI ホームでは聞いた情報をもとに「これ安くなっている!」とスタッフに品物を持っていく様子や利用した商店街への感想、そしてKO ホームと同様に「りっぱねえ…!」「素敵なところね」といった率直な気持ちをスタッフに伝える内容が見られる。FU ホームでもそれは「きれいやなあ」という言葉や通りがかりの人や植えてある植物への反応に現れている。

このような会話は入居者同士の外出の中で入居者間の会話としてほとんど見られないものであり、この場合入居者は感動や伝えたい情報を受け止めてくれる存在としてのスタッフという相手を特定した会話をしていることが分かる。

表2-7 入居者からスタッフへの自発的な会話

<p>KO ホーム</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クリスマスツリーをつけている家を見て「きれいですね」 ・たくさんの専門学校生を見て「これは何?何かあったの?」「聞いてみよっか」 ・整体屋さんをみて「何屋さんだろう」 ・電気屋にて「せっかくだからちょっと見ていこう」 ・下校中の中学生を見かけ「みんなきれいな格好をしているよ」「あんな頃があったねえ」
<p>KI ホーム</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他の入居者とスタッフが商店街へ行く話しているのを聞き自分も買物に行くと言う ・出かける前に何度もスタッフに店の場所を確認する「・・・ずっとまっすぐね?」 ・帰り道、ベンチに腰掛け、スタッフと話し込む ・スーパーにて、チョコレートスタッフに「これ安くなっている!」 ・商店街の良さをスタッフに言う ・散歩中に見かける家の大きさなどに感動し「立派ねえ・・・!」 ・池のそばで「素敵なところね」 ・交差点で入居者が好んで通る道に足が向くがスタッフが「こっちから行こう」と別の道から行く ・散歩と買物が終わりかけの頃「また連れてって下さいね」
<p>FU ホーム</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他の入居者を連れて散歩に行ってくると言う ・散歩に行きたがる様子を見せる ・マンションを見て「きれいやなあ」 ・近くを通った男性の髪型のことをスタッフと話す ・通りがかりの家の前にある植物を見て感心する ・雷おこしはおいしくない、などの話 ・前に来た店がおいしかったと言い、どこか思い出そうとしている

2-3-2-2【スタッフの有無による入居者間の会話の違い】

では入居者間ではどのような会話がされているのだろうか。次にこのことを、スタッフが傍らに付いている時とそうではない時に分けて考察する。

まず、表 2-8 に示す、スタッフが付いている時の入居者間の会話だが、今回の調査でこの場合の KI ホームの事例はなかった。入居者同士の外出にスタッフが付き添う場面がなかったことがその理由であるが、K0 ホームと FU ホームの結果を見ても入居者間の会話は少ない。

K0 ホームの「もう少し早い時期に公園に来たかったねえ」「夕暮れになると涙が出てくるよ」、FU ホームの「こっちから行こうよ」はスタッフと入居者の両者に対するものであり、花屋の前を「きれいねえ」と口々に言いながら歩く様子もど

ちらかというと独り言に近いものであった。

スタッフが付いていない時の入居者間の会話はこれとまったく対照的である。入居者同士でよく話し、3つのグループホームに共通して見られた傾向として互いを気遣う言動がある。

K0 ホームでは薄着で外出しようとした入居者に「そんな寒い格好じゃだめよ」と言う様子や、膝痛で階段を登ることができない入居者に付き合い、階段の下で一緒にお参りする入居者、またグループホームへの帰り道で「くたびれた」という入居者を常に励ましながらか歩く入居者が見られた。KI ホームでも入居者同士の外出記録が一回しかないが、その中でさえ、遅れて歩く入居者を振り返って待っている様子があり、FU ホームでは多くの距離を歩けない入居者を休ませるために区役所の椅子に立ち寄っている。

外出の形態 GH名	スタッフ付き	
	自発的	受動的 スタッフによる
K0ホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・「もう少し早い時期に公園に来たかったねえ」 ・「夕暮れになると涙が出てくるよ」 ・警察署の掲示板を見て話し合う ・花屋の前を通り「きれいね」「立派ね」 ・団地内の木々を見ながらゆっくり歩き、歌を歌う ・スーパーにて、小さな子供を見て「かわいいわねえ」「ねえ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・うどんコーナーにて、入居者どうしで、買ううどんの太さや量を相談 ・スタッフが連れて行った試食コーナーで、試食しながら「私、辛いのため」など
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・信号の手前で「こっちから行こうよ」 	

表 2-8 スタッフが付いている時の入居者同士の会話

外出の形態	スタッフ付き
自発の種類 GH名	自発的
KOホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・外でスタッフを待っている間「八百屋はどっちかしらねえ」と話し合う ・入居者どうして「そんな寒い格好じゃだめよ」 ・通りがかった電器屋を指差し、説明している様子 ・大師が見えてくると大師に関する話をする ・お参りのために階段を上がれない仲間を気遣い「ここ（階段の下）からお参りしましょう」 ・お団子屋さんにて、「歩いてくるのにちょうど良いコースね…ここに来るって誰にも言っ てこなかったよねえ?」
KIホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・後ろを振り返り遅れて出発した入居者を待つ ・また離れてしまった入居者を振り返るが姿が見えないので先に行く
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・散歩のコースを相談する ・目に付く建物や店について「何?」と尋ねる ・仲間を休させるため区役所による ・区役所で働いている人たちを見ている ・行く道順を相談 ・デパートにて、何階に行くか相談 ・おもちゃコーナーで、それぞれの感想を言いながらプレゼントを選ぶ「これ、かわいいわ!」 ・スタッフから言われていたクリーニング屋に寄るため呼び止める 「クリーニング、取っていくから」 ・クリーニング屋（洋服、小物屋）を後にしながら「ここ安くて良いわね」

表 2-9 スタッフが付いていない時の入居者同士の会話

2-3-2-3 【地域の人との関わり方—スタッフが付いている時】

ここまでは地域の中での入居者の言動を主に考察してきたが、次に地域の人との関わり方を考察する。

スタッフが付いている時で、表 2-10 は言動の主体が入居者のものであり、表 2-11 は言動の主体が地域の人のものである。

まずスタッフが付いている時の入居者から地域の人への言動だが、入居者が自分から積極的に話しかけることは比較的少なかった。分からないことや感想はそばにいるスタッフや入居者に伝え、それ以外で地域の人に話しかけたりする必要が少ないということがその理由であると思う。したがって記録にあるものは好奇心旺盛で積極的な性格の入居者などに限って見られたものであ

った。

地域の人から入居者に対する行為や話しかけでは KO ホームで非常に多かった。これは KO ホームではスタッフと入居者 5-6 人の大勢で連れ立って外出することがほとんどで、その姿が地域の中で浸透しているゆえに地域の人たちがすぐに KO ホームの入居者であることに気づくからである。それで自然とその反応の仕方も、にこやかな笑顔や挨拶のように‘スタッフとグループホームの入居者’へのものになっていたのではないかと思う。これは入居者が外出するようになってから日が浅い KI ホームや開設してまだ半年の FU ホームではほとんど見られなかったことであり、KO ホームの日常的な地域への取り組みの成果と言えるのではないだろうか。

外出の形態	スタッフ付き	
行動の主体	入居者	
言動の種類 G#名	自発的	受動的 地域の人による
	KOホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・犬を散歩中の人に挨拶 ・また犬を散歩している人と会い、「かわいいワンちゃんですね。」 ・電器屋にて、「どこか休むところありますか?」 ・警備員に「ご苦労さん」 ・レジを待っている間に小さな子供を見かけ微笑む
KIホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・八百屋にて、試食のみかんを食べながら店員と談笑 ・肉屋にて、カウンターに肘を掛けて店員と話す ・スーパーで見つからないものを店員に尋ねる 	<ul style="list-style-type: none"> ・チョコレートを試食を試し説明を聞いて一袋もらう
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフがカメラ屋で用事を済ませている間、店の外で道行く人を眺める 	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔のおじさんに入居者のほうも笑顔を返す

表 2-10 スタッフが付いている時の入居者から地域の人への言動

外出の形態	スタッフ付き
行動の主体	地域の人
KOホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・すれ違った近所の人が「こんにちは」と声を掛ける ・顔なじみのスーパーの店員が親しみを込めて「いらっしゃいませ」 ・入居者たちが通りかかるとクリーニング屋から店員と客が見守っている ・訓練を見学に来た近所の人が笑顔で挨拶 ・通りがかりの女子高生たちが入居者の様子を見て笑顔 ・公園で遊んでいた男の子が入居者さんたちを見て「わぁ!たくさんだぁ!」 ・病院の外来の看護婦さんが「こんにちは」と挨拶 ・カートを運ぶ入居者に「(片つけなくて) 良いですよ。お使いになりませんか?」 ・漬物売場の店員が試食を差し出し紹介 ・専門学校生が挨拶 ・パン屋の店員が自動ドアを調整
KIホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・八百屋にて、店員も冗談を交えて談笑 ・再びスーパーの前を通り店員が「スーパー開いていた?」と聞く ・スーパーにて、試食担当の店員が入居者にチョコレートをすすめる
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・通りの店の前にいたおじさんがニコニコと笑顔

表 2-11 スタッフが付いている時の地域の人から入居者への言動

2-3-2-4【地域の人との関わり方—スタッフが付いていない時】

次の考察はスタッフが付いていない時の地域の人との関わり方である。

表 2-12 は言動の主体が入居者で、表 2-13 はそれが地域の人である。

KO ホームはスタッフが付いていない外出の事例が一つしかなくその時も入居者 5 人での外出で地域の人への言動は少なかった。KI ホームとFU ホームの事例はスタッフが付いている時としない時での比較がしやすく、スタッフが付いている時には見られなかった積極的な姿勢があった。どちらの入居者も分からない事や道などはすぐに地域の人に尋ねるといった言動が多く見られた。KI ホームでは通行人や座っていた若い女性、店員に尋ね、スーパーでは店員に買物リストを見せることで買物を手伝ってもらっている。FU ホームでも普段行き慣れているデパートでいつもと違う売り場に行くために 3 回ほど店員に尋ねながら行動していた。

地域の人側はそのような入居者の話し掛けに

答える形の反応が多かった。KO ホームでは子供に声を掛けられた家族がにこにこ嬉しそうに微笑み、KI ホームでは入居者の挨拶に答える姿や買物を手伝う店員、道を教える人が見られた。FU ホームでも同様に入居者の質問に答えるものだった。

スタッフが付いていない時の入居者と地域の人との関係は、スタッフが付いている時とはまったく異なるものであると思われる。地域の方は入居者が認知症を抱えていることには気づかない人も多く、いわゆる普通の人に接するのと同様の態度であるため入居者側もそれに対応して社会性のある言動を示していた。例えば KO ホームの事例でお団子屋での対応の仕方やFU ホームのスーパーやデパートで店員に売り場を尋ねたりレジでプレゼント用に包装してもらった様子などがそうであった。

外出の形態	スタッフなし	
行動の主体	入居者	
GH名 言動の種類	自発的	受動的
		地域の人による
KOホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・声を掛けた人の元気な様子の子供に「かわいいねえ。」「元気だね、がんばってね。」 ・専門学校生を見て「あらあ、いっぱいねえ」 ・お団子屋さんで注文 ・店員に「お箸はいいですよ」 ・小さな子供を見かけ「バイバイ！」 	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶を注ぎに来た店員に「もう結構です」
KIホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・家の前で掃除中のおじさんに「お世話になります」と声を掛ける ・通行人にパン屋への道を尋ねる ・八百屋の前で立ち止まりりんごを見る「どれが甘いのか?甘いのが欲しいわ」 ・座っていた若い女性の隣に腰掛け、道を尋ねる ・スーパーに入り、店員に買う物が書かれた紙を見せる ・雑貨屋の前で犬を散歩中の人に「立派な犬ね・・・」 ・雑貨屋の店頭にあるものについて店員に尋ねる 	<ul style="list-style-type: none"> ・店員に甘さを教えてもらい買ったりんごを選ぶ
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーのレジで、「すみません」と言いながら前のほうにすでに並んでいた入居者のもとへ行く ・デパートにて、店員に売り場やエスカレーター的位置などを尋ねる ・レジにて、プレゼント用に包装をお願いする 	

表 2-12 スタッフが付いていないときの入居者から地域の人への言動

外出の形態	スタッフなし
行動の主体 GH名	地域の人
KOホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・外でスタッフを待っているとき「お買い物ですか?」と尋ねる ・お団子屋さんにて、店員が「食べにくくないですか?お箸使って良いんですよ」 ・「お足元気を付けてくださいね」と見送る店員 ・小さな子供を連れた家族が子供に声を掛けた入居者にニコニコ
KIホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・声を掛けられた掃除中のおじさんが笑顔で「ああ、どうも!」 ・道を尋ねられたおじいさんが身振りを交えて道を説明する ・八百屋の店員が「いらっしゃい!」 ・タクシーがクラクションを鳴らして通り、その様子を近くの家の人心配そうに見守っている ・スーパーにて、店員が渡された買い物リストを見て買い物を手伝う ・他の買い物客とともに八百屋の位置を教える ・店員が入居者の後姿を見守る ・友好的な肉屋の店員
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・尋ねられた売り場を2-3人の店員で考えて答える ・案内嬢が入居者の質問に受け答え

表 2-13 スタッフが付いていないときの入居者から地域の人への会話

2-3-2-5 【対象者なしの場合】

入居者の言動に特定の対象者がいない場合の記録からは入居者がグループホームの外に出ることで実に様々な体験をしていることが読み取れる。表2-14はスタッフが付いている時、表2-15はスタッフが付いていない時である。

施設内では絶対にありえない状況がそのほとんどで、スタッフが付いている時の記録では、K0ホームでははしご車や押しボタン、KIホームでのコンビニ、FUホームでは見かけるたくさんの会社員や観光客などがそうである。またK0ホームの入居者の「寒いねえ〜!」という言葉に表れているように、外出することで入居者は季節を体感している様子がわかる。

スタッフが付いていない時の入居者の行動を見ると、K0ホームでは目的地に行く途中の洋服屋の店頭で服を手にとって眺めていたり、KIホームでは薬局の化粧品コーナーを10分程かけてじっくりと眺めている入居者や桜並木のある川沿いのコースを選んで歩く入居者の姿があり、FUホームでも街路樹の紅葉に関心しながら歩いている。このようにスタッフが付いていない時に入居者はより自分のペースで見たり感じたりすることを素直に表しながら行動している様子が伝わってきた。

外出の形態		スタッフ付き	
GH名	言動の種類	自発的	受動的
			スタッフによる
K0ホーム	<ul style="list-style-type: none"> パン屋にて、それぞれが自分の食べたいパンを選ぶ はしご車の動きに歓声や拍手 「明日も（公園に）来ますよ!」 パン屋にて、自分の三時のおやつパンを選ぶ スーパーにて、かごの中身を確認しながら買い物 「寒いねえ〜!!」 	<ul style="list-style-type: none"> 押しボタンを押し、信号が変わってびっくり 家の周りの花に水をやる クリスマスリースの枝を取りに行く リース用にまっすぐな枝を捜す 	
KIホーム	<ul style="list-style-type: none"> 八百屋の前のベンチに腰掛けて休む 八百屋でスタッフが買い物をしている間ぶらぶらと品物を眺めている スタッフが用事で入ったATMと一緒に入る いつもの商店街が見える所で商店街に気づき、行こうとする 	<ul style="list-style-type: none"> コンビニでトイレを借りる 買い物に誘われた入居者が急いで自分の部屋に上着を取りに行く スーパーでスタッフと一緒に品物を探す 散歩の最後にお財布を取りに一度GHに戻る 	
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> 通り沿いにある服屋で服を手にしてみる 	<ul style="list-style-type: none"> 昼時でたくさんの会社員が出ている 仲見世や浅草寺にはたくさんの観光客 	

表 2-14 スタッフが付いている時で特定の対象者がいない場合の言動

第2章 認知症高齢者グループホーム居住者の外出行動に関する考察

外出の形態		スタッフなし	
GH名	行動の種類	自発的	受動的
			地域の人による
KOホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーにて、スタッフに頼まれた品物を捜してかごに入れていく ・スーパーでスタッフが買い物をお願いして離れると、店内をまわって皆で相談しながら品物を選ぶ ・大師に行く道にある洋服屋の店頭に出ている洋服を手にとってながめる ・お参り 		
KIホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街の店先の商品（生物）をゆっくり見ながら進む ・薬局の化粧品コーナーで10分程見てまわる ・商店街の他の店は全然見る様子はない ・パン屋に入るがすぐ出てくる ・曲がって川沿いの桜並木の通りへ行き、紅葉を見ながら歩く ・外に出る支度をしに自分の部屋へ ・神社の柵につかまったり休んだりしながらゆっくり境内までの道を歩く ・お参り ・境内の石造の下に腰を掛けて休む ・まっすぐ行きかけて立ち止まり、戻って曲がる ・ベンチに腰掛け、買い物リストの紙を確認 		・境内を掃除
FUホーム	<ul style="list-style-type: none"> ・道路に敷き詰められたレンガを見て「きれいだねえ!」 ・紅葉している木を見て「もみじがきれい…」 ・クリーニング屋の入っている店の店頭で洋服などを見ながら待っている ・紅葉している木を見て「もみじがきれい…」 ・クリーニング屋の入っている店の店頭で洋服などを見ながら待っている 		

表 2-15 スタッフが付いていない時で特定の対象者がいない場合の言動

2-4 まとめ

入居者がグループホームの中で過ごしている時、入居者はスタッフが常に近くにいてある程度予想できる範囲内で物事が進んでいくという一種の保護された生活環境の下にいる。しかしグループホーム外ではそれらがなく、入居者にとって刺激となるあらゆる状況が生じ得る。例えば季節や天候を肌で感じる事、見聞きするたくさんものや出来事、そして散歩や買物を通して接する地域の人たちとの関係などがそうである。そのような刺激は入居者にとって環境から加えられる圧力つまり環境圧力 (Environmental Press) となる。

人間の能力と環境圧力に関して図 2-22 のような関係がある。

個人の能力と環境圧力との間に平衡関係がある時、その環境圧力は適応レベルにあると解釈され、個人の活動は身体的にも精神的にも円滑に行われる。環境圧力が強くなる、つまり遂行すべきことが個人にとってやや困難になるなら、環境は個人にとって新たな刺激となり個人は自己の能力を最大限に発揮して最大のパフォーマンスとなる。このように、人は適正な環境圧力のもとでは能力が向上し個人の可能性を広げていく。逆に言えば環境圧力が低すぎると、本人が持っている能力は次第に低下してしまう。

これを認知性高齢者の場合にも当てはめて考えることができるのではないだろうか。もちろん認知症の状態によって適切な環境圧力は大きく異なり、ある人にとっては外出することさえ強すぎる環境圧力でストレスとなってしまうかもしれない。また外出する際でもスタッフが付いている時と付いていない時で入居者が感じる環境圧力は異なってくるだろう。

今回の調査結果を見るならば入居者が外出行動で受けた環境圧力はそれぞれ異なるものの、適切なレベルであっただろうことが入居者の行動から読み取れる。例えばスタッフが付いていない時に入居者同士は互いを気遣う言動を見せている。これは保護された環境ではないときにその能力に応じてケアされる側からケアする側への移行が生じている結果であり、やはりグループホー

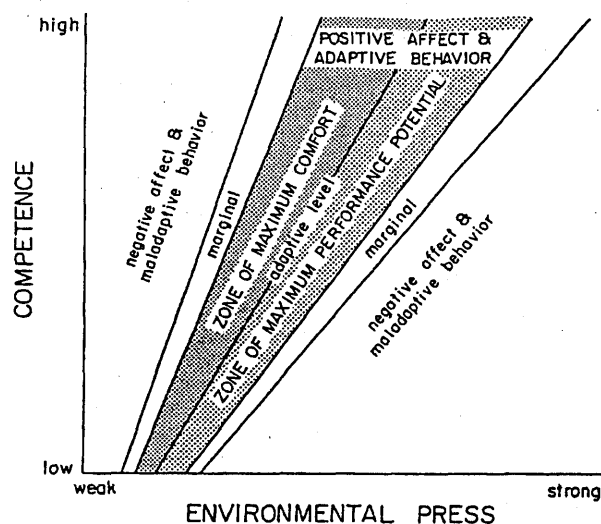


図 2-22 能力と環境圧力の関係
The docility hypothesis
(Lawton & Nahemow, 1973)

ムという守られた空間から外出している時であるゆえに見られるのだろう。また、分からないことや問題が生じたとき周りの人に尋ねて問題を解決しようとする姿勢などからも、入居者が持っている能力を最大限に利用していることがわかる。さらに、より都市的な環境にあるFUホームの入居者は、地元の商店街との結びつきが強いKOホームやKIホームの入居者とはまた異なった環境圧力のもとにあるといえるだろう。FUホームの入居者が外出行動で出会う人は顔なじみではなく、まったく知らない人がほとんどであり、デパートや店でそのような人と接する際にはより匿名の社会的な態度が求められるからだ。この環境圧力が適切なレベルであったことはFUホームの入居者がその状況に合わせた社会的な対応を示していたことから分かる。もちろんこれには様々な要素が関係しており、FUホームの入居者全員がその地元出身で都市的な環境と、そこで行われる他者との付き合い方に慣れていたことも大きいのだろう。

高齢者グループホームのあり方を探っていくことができるのではないだろうか。

このようにして考えてみる時に、認知症高齢者は地域というグループホームの外部環境で、確かに施設の中だけでは味わえない経験をしており、それは確かに彼らの能力を伸ばし可能性を広げるものとなっていると結論できる。認知症高齢者グループホームはその最大の特徴である地域との繋がりを大いに利用すべきである。これはグループホームを運営するスタッフの考え方からも大きく影響されるが、外出しようにもその生活圏内にスーパーや商店街のない地域に設置されたグループホームではその特長を生かすことが難しいように思われる。入居者が地域社会に溶け込んでその一員として生活するためには特にそのような近隣環境を整える必要があるはずだ。環境を整えるということは、グループホームをどのような環境の中に設置するのか、ある程度の基準を設けることも重要になってくるだろう。これは今後設置される認知症高齢者グループホームに言えることであり、現在すでにあるものについてはその周辺環境の特徴ごとに分類し、地域との関わり方を比較することで、地域の中にある認知症高

第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察

3-1 研究の目的と方法

3-1-1 研究の背景と目的

近年、特別養護老人ホームの居住環境に関する見直しは著しく、全国でも小規模生活単位型と呼ばれる全室個室ユニット型の特養が徐々に整備され始めている。また、そうしたハード面の整備に加えて、特養が地域とどのような関係を持つかが現在非常に重要な課題となっており、とりわけ特養入居者が地域の中で培ってきた役割や生活習慣を継続させつつ、一地域住民として暮らせるような居住環境を整えることが不可欠となってきた。というのも、いまだ大多数の特養では集团的、画一的処遇による生活であり、介護度の高い入居者が地域へと外出する機会は非常に少なく、特養入居者は地域との関わりを持たずに施設内での完結された生活を送っているからである。

そこで本研究では、特養入居者と地域との関係を念頭に置きつつ、特に入居者の外出に着目した研究を行なうこととする。とりわけ地域での普通の生活の一部である「買物外出」を入居者がどのように行っているのか、その実態を調査することにより、入居者の地域での買物外出行動の性質や特徴を理解し、彼らが今後どのように地域との関わりを拡大できるのかを探ることを本研究の目的とする。

3-1-2 研究方法

最初に文献や資料をもとに特養の外出に関する全国的状況を捉えた結果、特養の外出は行事として年に数回が一般的で、日常的に地域を利用した外出を行っている実例はほとんどないことが分かった。その中でも、外出に積極的な施設を見つけ出し、その実態を調査することとした。調査方法としては、入居者の様子が観察できる位置で会話や行動の記録を5分間隔で取り、特に買物外出をする入居者には同行し、外出先での様子から施設の自分の居場所へと戻るまでの全過程を具体的に記録した。

3-1-3 調査対象施設の概要

地域と特養入居者の関係性において、本研究が行なう調査は、特養入居者が地域のなかにある店舗へと出掛ける買物外出行動の調査である。

買物外出を年に1度か2度の行事としてではなく、1ヶ月に1度以下という頻度で定期的に行っている特養や実際に入居者の自由な外出を積極的に支援している特養での買物外出調査を行なうこととする。

以下に調査対象施設の概要を記す。

□ 特別養護老人ホーム『HD ホーム』

1983年開設

所在地：東京都西多摩郡

規模：定員200名＋ショートステイ定員19名

立地：HDホームは都心から約50km離れた、人口約1万6000人の自然豊かな町にある特別養護老人ホーム。施設は最寄り駅からは約2km、最寄りのバス停からは約600m、斜面を少し登った所、市街地調整区域内に位置する。

外出：HDホームは本館と新館でそれぞれ月に1度希望者を募り、約3km離れた隣の市にある駅前大型ショッピングセンター東急に買物と外食（昼食）を含めた外出を行なっている。このショッピングセンターは1階に食料品、2階に衣料品、3階に食事処を備えた東急と雑貨や洋服、食事処などの専門店が入っている3階建ての別館ルピアから成る大規模なもので、HDホームが所在する町の住民もよく利用している場所である。

ショッピングセンターへの移動は施設の車を用い、入居者とボランティア、スタッフが乗り込んで行く。店内では入居者とボランティアか入居者とスタッフのペアで自由に行動している。

□ 特別養護老人ホーム『NW苑』

1980年開設

所在地：東京都江戸川区

規模：定員100名＋ショートステイ定員14名

立地：最寄り駅から約1kmに位置し、施設の周

囲は都営団地や戸建住宅など。最寄り駅の周辺はスーパー、ファーストフード店、パチンコ店や銀行などの店舗が立ち並ぶ。

外出：NW 苑では施設の階ごとで月に1度ショッピングデイを計画している。毎月、各階に設置されている黒板にその予定日を掲示し、希望者を募って5名程度の入居者を近くの大型ショッピングセンターまで施設の車で連れて行く。出かけるショッピングセンターは3箇所あり、その中で駅前にある店を利用する場合は徒歩で行く場合が多いようである。利用回数が最も多い店は施設から約2km離れた場所にある大型ショッピングセンターイトーヨーカドーで、ボーリング場も併設された4階建ての大規模な店舗である。1階には食料品売場、洋服、靴、喫茶コーナーがあり、2階は紳士服、婦人服、スポーツ用品、3階は文具、おもちゃ、食事処などがある。

3箇所のショッピングセンターのうち、どこの店舗を利用するかは、入居者の希望や状態などを見て、そのつどスタッフが決定する。店舗へはボランティアとスタッフが同行し、店内では入居者とボランティアか入居者とスタッフのペアで自由に行動している。

また、このようなショッピングデイの他にも入居者が個人的に買物へと出かけたという場合、スタッフの時間がある時に限られるものの、近くのスーパーまで連れて行くようである。

□ 特別養護老人ホーム『KR 苑』

1983年開設

所在地：兵庫県尼崎市

規模：定員50名+ショートステイ定員15名

立地：最寄り駅から約700mに位置し、周囲は住宅と歴史ある中小の町工場から成る。KR 苑から約1kmの位置には戦後の尼崎市復興の先駆けでもある杭瀬市

場があり、生鮮や惣菜、服や小物まで

生活に必要なものはこの市場でほぼ揃う。

外出：周辺の居酒屋や美容室の利用など、KR 苑は20年前の開設当初から入居者の自由な外出を積極的に支援してきており、現在は、外出したい入居者がスタッフに話し、付き添いを頼んだり車で連れて行ってもらう、というようなスタイルが出来上がっている。

また、約10年前から始まった2週間に1度のボランティアによる買物+喫茶店の外出も定着しており、希望する入居者が参加している。これはボランティア数名と入居者数名が車で約1.4km離れた、付近で一番大きな市場へと買物に出掛け、最後に喫茶店(行きつけの店が2店舗)で休憩するというものである。

□ 特別養護老人ホーム『KK 苑』

2001年開設

所在地：兵庫県尼崎市

規模：定員55名+ショートステイ定員15名

立地：最寄り駅から約800mの、住宅と田畑に囲まれた施設。周囲には小さな町工場も点在している。また施設に隣接して入居者が頻繁に利用する公園がある。KK 苑と同じ敷地内には同じ福祉法人の認知症高齢者グループホームがある。

外出：毎週水曜日、施設から約1.4km離れた生協への買物を定期的に行なっている。この買物にはボランティアが同行し、生協では生協組合員がボランティアで手作りケーキによる喫茶コーナーを設けている。毎週行なわれていることから、希望すれば水曜日は買物に行ける、ということが入居者たちの中にしっかり浸透している様子である。

この他、美容室の利用は入居者が希望する店に行くことや、生活ユニット(10名以下)ごとにその家族を含めた旅行や小規模な外出を頻繁に行なっているようである。

□ 認知症高齢者グループホーム『I』

2001年開設

所在地：兵庫県尼崎市
 規模：定員 18名(9名×2ユニット)
 立地：特別養護老人ホーム『KK 苑』と同じ。
 外出：決まった外出の設定はなく、入居者各自が自由に外出を行なっている。(認知症高齢者特有の徘徊を含む。その場合スタッフは入居者がホームに戻るまで、その後ろを見守りながらついて行く。)入居者が決まって行くような外出先は特にはない。

3-1-4 調査の方法

ダイルームや居間など、入居者の様子が観察できる位置で一日の生活の流れを把握しつつ、外出の要因となる会話や出来事などに注意して、5分間隔で会話や行動の記録を取る。買物外出をする入居者には同行し、外出先での様子から施設の自分の居場所へと戻るまでの全過程を具体的に記録する。調査は完全な非参与・参与という形にこだわらず、できるだけ入居者の外出が自然な流れとなるように配慮して行なった。それぞれの調査事例で異なる参与の方法は表 3-1 に具体的に記す。

表 5 は CASE・01-CASE・11 の調査概要である。このうち CASE・01-CASE・09 は調査員が実際に入居者の買物に同行し、詳細な調査記録を取ることができた。(2-3-3 調査記録を参照) ただし CASE・05-CASE・07 は同時刻に行なわれた買物であるため、すべて同一の調査記録となっている。したがって CASE・05 と CASE・06 に関しては入居者の買物時の様子を記した記録はないものの、その前後の様子と食事時の様子の記録、その他詳細は本人やスタッフへのヒアリングなどから得られた情報をもとに資料を作成した。

CASE・10 もまた同様に CASE・09 と同時刻に行なわれた買物である。両者は同じユニット内で生活している入居者であるため、買物前後の様子は両者一緒に把握している。

CASE・10 の買物時の様子や購入品の記録などはスタッフへのヒアリングを参考に作成した。

CASE・11 は KK 苑と同じ敷地内に建つグループホームでの買物外出事例である。

表 3-1

	施設名	名前	性別	入居年数	要介護度	車椅子	行先	移動手段	移動時間(片道)	行先決定者	きっかけ	反応	購入品	飲食	調査者方法
CASE-01	HDホーム	Yさん	女性	3年	4	車椅子	大型ショッピングセンター	車	11分	施設	施設が毎月一度計画している買物+昼食外出	自分で希望	おかし、タッパ、お盆、糰み糰、ラムネ、ボールペン、チーズ、パン、煎餅、フルーツ、きょうりの漬物、ならこ、カステラ、あかん、レモン	寿司	ボランティアとYさんのペアに調査員が同行する。
CASE-02	HDホーム	FKさん	女性	12年	3	車椅子	大型ショッピングセンター	車	11分	施設		自分で希望	ビーズの手作りアクセサリーセット、パン	天丼	ボランティアとFKさんのペアに調査員が同行する。
CASE-03	NW苑	FEさん	男性	1年	3	車椅子	大型ショッピングセンター	車	10分	施設	施設が毎月一度計画している買物外出	自分で希望	ジャケツ、らっきょう、梅干、煎餅、和菓子	なし	調査員がボランティアの役目を担い、FEさんの車椅子を押しながら買物に同行する。
CASE-04	NW苑	YDさん	女性	2年	1	車椅子	大型ショッピングセンター	車	10分	施設	施設が毎月一度計画している買物外出	自分で希望	下着、ノート、コマ豆袋、スティックシュガー、カキの種、アパン、ティッシュ、うがい薬	なし	調査員がボランティアの役目を担い、YDさんの車椅子を押しながら買物に同行する。
CASE-05	KR苑	MSさん	女性	9年	1	なし	市場	車	5分	本人		自分で希望	はんでん、きんぴら、のみ菜、シブ薬、その他?	焼きそば	スタッフとMSさん、YDさん、YGさんに調査員が同行し、市場の中では、MSさんは単独行動で、Kさんの車椅子をスタッフが見守りながら買物を行なった。途中で全員が合流。
CASE-06	KR苑	KZさん	女性	1年	3	車椅子	市場	車	5分	本人	時々利用している馴染みの市場がある	自分で希望	服布の佃煮、その他?	お好み焼き	
CASE-07	KR苑	YGさん	女性	10年	4	車椅子	市場	車	5分	本人		自分で希望	から揚げ、農産物の佃煮、たらこ、佃煮、シラス干し	お好み焼き	
CASE-08	KR苑	SSさん	女性	4ヶ月	2	外出先のみ車椅子	市場	車	15分	施設	施設が週間に一度計画している買物外出	誘われて希望	リップクリーム、氷砂糖、シラス干し、りんご	コーヒー	調査員がボランティアの役目を担い、SSさんの車椅子を押しながら買物に同行する。
CASE-09	KK苑	MKさん	男性	6ヶ月	2	車椅子	生協	車	7分	施設	施設が毎週水曜日に計画している買物+生協のボランティアが用意する安茶への外出	誘われて希望	かつばえびせん、ポテトチップス、じゃがりこ、ポッキー	ケーキ、コーヒー	スタッフとMKさんのペアに調査員が同行する。
CASE-10	KK苑	NMさん	男性	2年7ヶ月	4	車椅子	生協	車	7分	施設		自分で希望	アクエリアス	ケーキ、コーヒー	ボランティアとNMさんのペアで行なわれた買物、NMさんの買物前後の様子を把握。
CASE-11	Iホーム	TSさん	男性	2年4ヶ月	2	なし	コンビニ	徒歩	7分	本人		自分で希望	和菓子、煎餅、おかし、ビスケット、クラッカー、チョコレート	なし	TSさんに調査員が同行する

3-2 買い物外出行動の概要

次項より CASE・01－CASE・11 の調査記録を示す。

入居者の買い物外出行動を「入居者の居場所」「入居者の様子」「会話」「入居者の周りの様子」「その他」という項目に分けて記入した。

「入居者の周りの様子」とは、入居者の視界内で起こる出来事や状況であり、「その他」には、入居者の視界外で生じた買い物外出に関係性のある出来事や状況について、調査員が気付いた点を記入した。

調査記録の中で出てくる「ボ」はボランティア、「S」と「G」は調査員のことである。

第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察

表 3-3

CASE-02	調査日 2022/11/26	天候 晴	施設名 Hホーム	入居者名 Fさん	性別 女	入居年数 12年	要介護度 3	その他 車椅子
---------	-------------------	---------	-------------	-------------	---------	-------------	-----------	------------

時刻	居場所	入居者の様子	会話	入居者の思いの様子	その他
10:00	玄関前	買い物に行く他の入居者と話しながらホームの玄関前で待機	Fさん「(ルビアの) 両手や天井を食べよう。ピーズを買いたい。」 Fさん「持っている時間が長いんです。」 Fさん「昨日から準備してはいるんですけど。(買物の)時間が長くてね。」	買い物に行く2,3人が玄関に行くためにEVC前に集まり始める 玄関前には買物に出かける入居者で自力で動く人が多く2,3人集まっている	
35	玄関前	待機	Fさん「孫さんはEVC」	玄関前の椅子席で、買い物に行く入居者が入居者同士やスタッフ、ボランティアと話ながら出発を待っている	
40	玄関前	待機		玄関前の自販機でスタッフとボランティアが注意事項などを話し合い中	
45	玄関前	スタッフやボランティアも戻って会話しながら待機	Fさん「先定買出しに行ってます。」 スタッフ「両手の前に並ばないようね。切られてしまうからね。」 Fさん「あははは！」 Fさん「兼食でも良いんですけどね。みんな兼食に行きましょうって。」 Fさん「悪い時はあまりしゃべりなかつたんです。でもここへ来て兼食しゃべるようになって。」		
50	車	昇降機で車椅子のままホームの車に乗車		入居者がホームのバスに乗車始める	
55	車	入居者を乗せ込むのを待つ		玄関前でスタッフが手を離して見送る 「旦那が頑張る」はボランティアの声を聞き、窓の外を眺める	
11:00	車	車が出発する			
6	車			スタッフがマイクを使って集合時間などの連絡をする	
10	車	店員が到着 昇降機を使って車椅子のまま車から降りる	Fさん「(店員)売場前を通り(車椅子)乗る」 Fさん「？」 Fさん「誰か来たかな？」 Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」	車から降りた際にそれぞれの方向へ向かう	
15	解 脱	トイレ	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
20	解 脱	トイレ	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
25	解 脱	定食屋に入り 荷を食べるが快い	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
30	解 脱	ボランティアやGと話ながら天井を持つ	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
35	解 脱	ボランティアやGと話ながら天井を持つ	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
40	解 脱	話しながら食事する	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
45	解 脱	話しながら食事する	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
50	解 脱	話しながら食事する	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
55	解 脱	話しながら食事する	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」		
12:00	解 脱	レジでの清算をボランティアにしてもらう	Fさん「ピーズ作ったんだけど、みんな欲がるのよ。」		
13	解 脱	トイレ			
14	解 脱	トイレ			
15	解 脱	トイレ			
20	手袋	手袋屋に入り、手作りできるピーズアクセサリの商品を見て回る	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「このアクセサリはいいですね。」 Fさん「？」 Fさん「？」		
30	手袋		Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
35	手袋	アクセサリを試しに掛け、ボランティアと話しながら選んでいる	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
40	手袋		Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
45	手袋		Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
50	手袋		Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
55	手袋	買ったものを決めてレジで清算する お金が足りず、バックから抱えつつお財布を取り出す	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
13:00	資料品売場	パン屋に入る	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
5	資料品売場	ボランティアにお金を渡し清算してもらう 集合場所へ向かう 別のボランティアに出会い挨拶をする 集合場所に集く	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」	店舗出入口に買物を入れた他の入居者がすでに集まっている	
10	店舗出入口	車が着くのを待つ	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」	それぞれが入居者同士やスタッフと話しながら車を持つ	
15	車	昇降機で車椅子のままホームの車に乗車	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
20	車				
25	車				スタッフがマイクを使って挨拶 「まもなくホームに到着です。みなさん今日はお疲れ様でした。」
30	玄関	昇降機を使って車から降りる	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
35	EVC(1Fから2F)	EVCに向かう途中にホームのスタッフと会って話をする	Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		
40	居室		Fさん「(店員)売場前を通り(お荷物)お預かりして」 Fさん「？」 Fさん「？」		

第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察

表3-4

CASE-03		調査日	天候	施設名	入居者名	性別	入居年数	要介護度	その他
		2022/1/25	雨、強風	NW第	Fさん	男性	1年	3	要介護
時刻	居場所	入居者の様子	会話	入居者の思いの様子	その他				
13:00	居室	ベッドの脇で車椅子に座ってテレビを見ている	スタッフ「今日の買物に先生さんが行って行きたいんだけど、一緒に行っていい？」 Fさん「うん、まあ、上着を買おうと思ってはいるんだけど、今日はその予定をキャンセルだから買物いってません。はい、いいけどな。」 スタッフ「いい、2時になったら買物いっていいよ。」	着ていく上着とマフラーがハンガーに掛けて出ている					
35	居室	テレビ							
40	居室	テレビ							
45	居室	テレビ							
50	居室	テレビ							
55	居室	テレビ							
14:00	居室	ジャンパーを着、マフラーをつけ、首に財布を掛けて、靴子をかぶる	Fさん「(店員さん)「もう行く時間だね」そのジャンパーを脱いで下さい」 Mさん「(店員さん)「Fさん、ジャンパーを脱いでください。着ておいて下さいよ。」 Fさん「(店員さん)「そんなにならぬ。着るものはいいんだけどな。」	居室でジャンパーに袖掛ける人にスタッフが上着を着せて準備をしている Fさんの準備する様子を見ながらMさんが部屋の入り口からエスコと眺めている					
6	玄関前	待機		玄関前に同行するボランティアと買物へ行く入居者2名が待っている					
10	玄関前	待機		買物に行く入居者が玄関前に全員集合する					
15	玄関前	昇降機で車椅子のままNW第の車に乗車始める		入居者とボランティアにそれぞれバスが割り当てられて、乗り込み始める					
20	車	乗車中		他の入居者も乗車中					
25	車	Fさんの乗った車が出発する	Aさん「今日はどこに行くんですか？」 ボ「(Fさん)「スーパー」 Aさん「どのくらいかかります？」 ボ「15分くらいかな」 Aさん「10分くらいかな」						
30	車	車中	スタッフ「Fさん、前回は雨でしたね」 Fさん「(車中で)「雨でしたね」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
35	店舗出入口	ジャンパーに到着							
40	店舗出入口	他の入居者が車から降りて集まるまで待機 紳士服売り場へ移動	スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」 Fさん「(車中で)「雨でしたね」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」	スタッフが5時40分に同じ場所に乗車するように促して待つ					
45	紳士服売り場	ジャケットが売っている場所を探す	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
50	紳士服売り場	ジャケットが売られている場所を探る	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
55	紳士服売り場	ジャケットの袖紐や袖口を確かめる	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
15:00	紳士服売り場	ジャケットの袖紐や袖口を確かめる	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
5	紳士服売り場	店員が試着用のジャケットを渡す	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
10	紳士服売り場	店員が試着用のジャケットを渡す	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
15	EV(2Fから1F)	食料品売り場へ向かう	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
20	食料品売り場	1Fに降りて食料品売り場を探す	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
25	食料品売り場	らっきょう、漬物、煎餅を選ぶ	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
30	和菓子屋	レジで清算する 和菓子屋さんへ寄り、煎餅を買う	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
35	店舗出入口	出入口に到着 別の天気の様子を見ている	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
40	店舗出入口	待機	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
45	店舗出入口	待機	Fさん「(店員さん)「ジャケットはここにあります」 スタッフ「Fさん、今日はいい天気ですね」						
50	車	昇降機で車椅子のままNW第の車に乗車							
55	車								
16:00	NW第玄関前	昇降機							
10	居室	買ったものをベッドの上に置く 上着を脱いで着替える							
15	トイレ								
20	居室	お茶を飲み、購入した煎餅を食べ始める							

第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察

表3-5

CASE-04	調査日 2018/11/29	施設 養から前	施設名 BMW	入居者名 YDSM	性別 女	入居年数 2年	要介護度 1	その他 黒崎子
---------	-------------------	------------	------------	--------------	---------	------------	-----------	------------

時間	居場所	入居者の様子	会話	入居者の動きの様子	その他
13:40	トイレ	トイレに向かうYDSMにスタッフが話している	スタッフ「YDSMがゴマ豆腐をみたんだって。」 YDSM「ゴマ豆腐。」 スタッフ「食べてく？」 YDSM「うん、食べてくれた方がよいわ。」 スタッフ「良いのよ。」 YDSM「一つで良いの？」 スタッフ「はい、おまはほで良いよわ。」		
14:15	トイレ 居室	トイレで外出の身支度(上着・帽子・鞋履)をする	YDSM「靴紐を履いて見ただよわ？」(Sに話して)「今日は履いてくるから。」	YDSMがトイレに入っている間にスタッフがYDSMにゴマ豆腐の数量を確認する	
14:20	EV(2Fから1F)	一度エレベーターで乗るが乗車を忘れて居間に靴履きをする	YDSM「靴履きして着ていたから、もう行きましょ。」「もう靴履きを忘れて来たから靴履きするわ。」		黒崎子に付添った黒崎子(黒崎子)の到着がYDSMほど遅れるとスタッフが連絡が入る
14:25	玄関前	お茶を淹れながら黒崎子を見ている	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
14:30	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
14:35	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
14:40	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
14:45	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
14:50	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
14:55	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:00	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:05	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:10	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:15	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:20	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:25	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:30	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:35	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:40	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:45	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:50	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
15:55	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:00	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:05	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:10	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:15	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:20	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:25	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:30	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:35	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:40	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:45	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:50	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
16:55	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:00	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:05	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:10	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:15	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:20	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:25	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:30	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:35	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:40	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:45	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:50	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
17:55	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:00	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:05	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:10	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:15	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:20	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:25	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:30	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:35	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:40	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:45	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:50	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
18:55	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:00	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:05	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:10	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:15	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:20	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:25	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:30	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:35	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:40	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:45	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:50	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
19:55	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		
20:00	玄関前	黒崎子に挨拶をする	YDSM「今日はゴマ豆腐が美味いよ。」		

第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察

表 3-7

CASE-08		調査日 2009/2/10	天候 晴時々曇り	施設名	入居者名 SRさん	性別 女	入居年数 4ヶ月	要介護度 2	その他 要介護者
時刻	居場所	入居者の様子			会話	入居者の周りの様子			その他
13:00	食堂	昼食後、食堂で座っている							
9	居室	買い物に出掛ける準備			スタッフ「どれ選んでいます？」「今日はとっても寒いからな。」 SRさん「カーン〜」「シャバ〜」 スタッフ「これでいいですか？」「靴は？」「靴はどこにあります？」「買います？」「これ選んでいます？」				
10	居室								
15	EV2Fから1F	車椅子に乗りEVを持っている間、周りにいるスタッフと話をする			スタッフ「SRさん、何〜5つくるの？」 SRさん「お砂糖かな。あと、白につける菓かな。」 スタッフ「白に？あぁ！砂糖するからな、少しピンク色付いたのにしたら？」 SRさん「色？色は付いてないのが入る。」	買物に行く他の入居者も準備をしてEV前に集まってくる			
20	車	車椅子を降りて車に乗り込む			SRさん「来た人いな。」				
25	車								
30	車								
35	市場到着	市場に着き、市場内を探し回るSRさんは入居者MSさんとボランティアのペアと一緒に行動することになる			某店員「おはあちゃん、どんな物してるの？」 SRさん「お肉の、お肉の、お肉の。」 某店員「これなんかが普通で良いと思ひどな。」 SRさん「じゃあこれ、な。」	市場は通路両脇に様々な店が立ち並んでいる。通路は広くて5m程度、狭い所では1m程度で店先には品物ひしめきあっている			某店員「レジ担当のSRさんがリップクリームを探している様子を見て、売場担当店員を呼ぶ
40	市場	...							
45	市場	某店に入りリップクリームを探し購入する			SRさん「お砂糖を〜」 店員「お砂糖さんにあると思ひんやけどな。」 店員「お砂糖さん〜！こっちにあるよ！あ、ちょっと待って〜。」(袋を二つ持ってきて「ほらこれ、どっちが入るの？」 SRさん「お砂糖さん、こっちを〜二つな。」 店員「二つな。」				
50	市場	...							
55	市場	MSさんが買ったお菓子を覗き込む			SRさん「これなんやの？」 SRさん「お砂糖さん〜！」 SRさん「お砂糖さん〜！」				
14:00	市場								
5	市場								
10	市場								
15	市場								
20	市場	遠いところの店員にあるシラスを見せ、購入する ... 某物屋でみかんを見て止まり、隣にあったりんごを購入する			SRさん「シラスを見て「ちよと、これ」 店員「こちらで？」 SRさん「大丈夫のつもりです？」 店員「いや、こちらの方が良いわ、やわらかいから。」 SRさん「りんご、季節柄に持って行く〜」				
25	市場	ボランティアの横について行く			SRさん「ご存じの方 ボランティア「お砂糖さん、いつも行っているところだよ。」				
30	喫茶店	喫茶店に入る							
35	喫茶店	スタッフに聞かれてコーヒーを注文する			SRさん「私はお水で入らよ。」 スタッフ「みんながコーヒー頼んで、SRさんもコーヒーにしたら？」 SRさん「ん、うん。」				
40	喫茶店	コーヒーを飲みながらスタッフ、ボランティア、入居者同士で話をする			SRさん「前日かほこ〜」 スタッフ「あ、松山のね〜」 SRさん「いらいらなどこ来て入らよ。」	スタッフ、ボランティア、入居者同士でそれぞれ話している 店で見つけたお菓子の話や買ったものの話など			
45	喫茶店	店で見つけたお菓子の話や買ったものの話など							
50	喫茶店								
55	喫茶店	喫茶店を出る				スタッフ「レジで清算する			
15:00	車	店にきた車を見つめる			SRさん「あ、ちよと車が来たな。」				
5	車	車椅子を降りて車に乗る			SRさん「私はね、乗り物で強い、船に乗っても酔ったことがないから。」				
10	車								
15	車				SRさん「(外を見て)「はい、帰った〜、寒いな。」」「着きました。」				
20	EV1Fから2F 居室								
25	居室	買ったものをベッドの上に置き、自分のものと分け合っている				MSさんがスタッフと一緒に、買って来たてんぷらを食べている			
30	EV2Fから1F	1Fの手荷物ごみごとお砂糖を廊下に行く EVで戻る途中でスタッフと会い、そのまゝお風呂へ行く			SRさん「みなさんで食べて〜。」				

第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察

表3-8

CASE-09_10	調査日 2020/12/17	年代 高齢者世帯	施設名 KK院	入居者名 MKさん、MK2さん	性別 男性	入居年数 6ヶ月2週7日	要介護度 2-4	その他 要祐子
------------	-------------------	-------------	------------	--------------------	----------	-----------------	-------------	------------

日時	居場所	入居者の様子	会話	入居者の周りの様子	その他
12:00	勤務所前	MK2さん 勤務所の中の様子をつかっている	MK2さん「おーい！」	勤務所にスタッフはいない	
20	勤務所前	MK2さん 買い物に行く時間を聞くためにスタッフを探している	MK2さん「おーい！」「まだか？ 行こう！」 スタッフ「行くのは9時30分くらいだよ。」 MK2さん「何時間や？」 スタッフ「12:30分、あと1時間あるよ。」 MK2さん「そうかー」	勤務所に一人スタッフがやってくる	
40	居間、勤務所前	MK2さんは居間と勤務所前を行ったり来たりしている MK2さんは携帯電話を捜している	スタッフ2名(居間に居たMK2さんに)「MK2さんー！ まだだよー」		
45	勤務所前	MK2さんは勤務所のそばで立った人に、早く行こうと声を掛けている	MK2さん(5名)「早く行こう！」		
50	勤務所前				
55	居間、勤務所前	MK2さんは居間と勤務所前を行ったり来たりしている MK2さんは居間	MK2さん(5名)「行こうか！」 S「今日は何を買おうですか？」 MK2さん「あれだ、ーええと、チョコレートな！」		
13:00	勤務所前				
5	勤務所前				
10	勤務所前				
15	勤務所前	MK2さんとMK22さんは勤務所前(EV前)で出発するのを待っている	MK2さん(5名)「早く行こう！ 行こう！」		
20	勤務所前				
25	勤務所前				
40	EV(3F-1F)	スタッフがMK2さんに声を掛ける。MK2さんは居間の上層を覗きに行く MK2さんがスタッフと一緒にEVで玄関に行く	スタッフ「MK2さん、ジャンパー着るよか？」	玄関前には入居者を乗せる足踏の車が停まっている	
35	EV(3F-1F)	MK2さんがEVで待っている MK2さんが乗車券のままで乗り込む MK2さん「エレ」に行く MK2さん「エレ」に行く	MK2さん(車に乗り込みながら)「さーしいね！」 MK2さん「エレ」に行ったMK2さんを待っているMK2さん(居間)「行こう！」 スタッフ「さ、MK2さんも乗るから、もうちょっと待ってね。」	乗物に人が乗る時間に来るまで、車を止めておいて、入居者が乗るまで待つ	
40	車	MK2さんが乗車券のままで乗り込む 出発			
45	車				
50	店舗出入口	店舗到着 MK2さん、MK2さん、車から降りる MK2さんは行き先のポスタリアと店に入っていく MK2さんは行き先のスタッフと生協のゆいにある店舗に向かう	MK2さん「生協はここだよ。」		店舗の正面入口側通路は入居者を降ろすための十分なスペースがないため、裏側ある店舗側通路側の出入口に駐車して入居者を降ろしている
55	酒屋	MK2さん 酒屋でビールを購入	酒屋「いらっしゃいませー！」 MK2さん「ビールをー」 酒屋「ビールは、350の大きさで良いですか？」「6缶にします？」 MK2さん「行きたいですか？」 酒屋「行かれますよ。」	小さな酒屋で夫婦で営んでいる様子 他の客はいない	
14:00	生協	信号を渡り生協に入る お菓子売場	MK2さん「ここ(酒屋の前)に信号があれはな。」 ... スタッフ「MK2さん、何買いますか？」 MK2さん「スナック」	酒屋と生協の間の通路は交通量が多め	
5	生協	お菓子を選ぶ	MK2さん「ポッキーもー」 スタッフ「ポッキー、どこにあるやろー」 スタッフ「お菓子の売場、あそこ。」MK2さん「お菓子の売場、どこにあるよー」 MK2さん「こっちは、これかえわ。」 ... スタッフ「お菓子売場、どこですか？」 MK2さん「(お菓子売場)」	店内で他の入居者たちも買物しているのが見える	
10	生協	スタッフがレジで清算する MK2さんはレジの脇に立つから付いた喫茶コーナーへ行く MK2さんと付いたレジのスタッフが喫茶コーナーへ来る	スタッフ「MK2さん、そろそろお茶に召はれませんか？」 MK2さん「(お茶)」		
15	喫茶コーナー	MK2さん コーヒーと紅茶のセットを注文する MK2さん 紅茶とコーヒのセットを注文する	喫茶店員「コーヒーと紅茶どちらにしますか？」 MK2さん「コーヒ」 喫茶店員「100円です。今日はお茶の季節ですー」 スタッフ「MK2さん、事務所のお茶があるから出さなくても大丈夫だよ。」 ... ポ「MK2さん、コーヒと紅茶どっちにする？」 MK2さん「紅茶」 ポ「紅茶？ MK2さんはコーヒも飲いた？」 ... MK2さん(Sに)「(喫茶コーナーの場所)いつもはこの場所と違う様な気がするよー」 三浦「同じ場所だよー、お茶を飲まれるんや。」	すでに買物を終えた入居者が喫茶コーナーで休憩している 一部の買物客も利用しており、MK2さんのそばには親子連れが居る。	喫茶コーナーには同じ福祉法人のK院からの利用者もいる
20	喫茶コーナー				
25	喫茶コーナー				
30	喫茶コーナー				
35	喫茶コーナー				
40	喫茶コーナー				
45	喫茶コーナー	MK2さん、MK2さん 生協を出る	MK2さん「帰って来たな。」		
50	車	MK2さん、MK2さん 乗車券のままで乗る			
55	車				
15:00	EV(1F-3F)	MK2さんはそのまま居間でお茶を飲む MK2さんは居間に入り買って来たお菓子をスタッフに手渡してもらう			
5	居間、居間				
10	居間、居間	MK2さんは居間でテレビを見る MK2さんは居間で上層を覗くのモスタッフに手渡してもらい、その後、居間に戻る			
15	居間、居間	MK2さん テレビを見ている MK2さん 食卓でゴーストしている MK2さん、MK2さんそれぞれ居間に戻る			

第3章 特別養護老人ホーム居住者の買い物外出行動に関する考察

表 3-9

CASE-11	調査日 2023/12/19	天候 晴	施設名 Pホーム	入居者名 Tさん	性別 男性	入居年数 2年4ヶ月	認知機能 ?	その他
---------	-------------------	---------	-------------	-------------	----------	---------------	-----------	-----

時刻	居場所	入居者の様子	会話	入居者の他の様子	その他
13:25	玄関	スーツを着た知らないの上着を着たTさんが、自分の居室から出て玄関の方へ行く。上着を着るためにスタッフと一緒に居室へ戻る。	Tさん「スタッフに「じゃあ」と出かけていいですか？ 買物に行きますわ。」 スタッフ「Tさん、そのちゃんちゃんこみたいなのはじゃあと来ないかなあ？」 Tさん「うん？ そうか？」 スタッフ「お返行ってなんか持てみようか。」	居間では23人の入居者がテレビを見てくつろいでいる。	Tさんは風呂のため、お菓子の量を削減されている。
30	居室	着替え中			
35	居室	着替え中			
40	居室	上着を着たTさんが部屋から出てくる。スタッフは店の場所を尋ねている。	Tさん「店まで遠くはないか？ 引けん。」 スタッフ「Tさんの前せんてたこの近くに新しいコンビニができていたから、そこに行きたら？」 Tさん「ああ、そうか。前の家の近くか？」 スタッフ「うん、後援区役のすぐ前に新しいのできてたわ。」 Tさん「後援区役の一そうかい。」		
45	EVDF-1F 玄関	スタッフが何層も店の場所を確認する。Tさんが降り、Pホームの玄関で靴に履き替える。	Tさん「材料師の予定は、いくのか？」 スタッフ「そうそう、材料師のとこ過ぎたら、お薬があるからその脇を過ぎて行くのと後援区役があって、その前にコンビニができてたわ。」 Tさん「コンビニ？」 スタッフ「うん、全館どこにもあるお店だよ。」 Tさん「知らんなあ。」		
50	通路	タクシーが来たのか、車を停めている。歩道の脇や、高い塀、植込みの隙間などで待機しながら歩く。	Tさん「(口)「来た、ですな。」「(車)「店まで行けるかどうか。」」 Tさん「車が来たか。」「Pホームの車が来たから乗せてもらいたいんやけどな。」「来たな。」		
55	通路 コンビニ	歩道の脇や、高い塀、植込みの隙間などで待機しながら歩く。車の来たのか確認して、通路を渡る。コンビニ到着。	Tさん「(後援区役の前で)「着はこれの後援区役によく来たんですよ。」」 Tさん「(口)「こまで来たんだ、これからどうするか。」」 S「(指差して)「あれが新しくできたお店じゃないですか？」」 T「あれですか？ こんな近くに。ああそうですか。」	コンビニの手前の通路は交通量が少い。	
14:00	コンビニ	折りたたみ椅子に寄り、机を運ぶ。	Tさん「こんな近く(商品があるんやたら)「今日はいくら持ってきたかな。」」	Sがコンビニの店員に、Tさんが置けるような折りたたみ椅子を出してもらう。	
5	コンビニ	椅子を移動させながら、和菓子、煎餅、おかし、ビスケット、クッキー、チョコレートを選ぶ。	Tさん「(商品を手につつ)「これと同じようなものはもうどこに入っていますか？」」 S「(CO)「うん、入ってますよ。」」		
10	コンビニ	机を机に入れていく。			
15	コンビニ	椅子を机にしている様子。	Tさん「(口)「この中を見て「これいくらくらいになるやろか？」」		
20	コンビニ		Tさん「(口)「こなら近いから、また来ますわ。」」「(口)「一回くらい。」」		
25	コンビニ	お菓子を運ませ、店を出る。			
30	通路				
40	通路	通路の隅で椅子をどきどきつづめる。	Tさん「どうも、体が、僕さんどおけんよになっちゃって。」 Tさん「(口)「この辺は、誰が小さい時は建てたよき遊びに来たもんですわ。」」		
45	通路				
50	Pホーム玄関 (EVDF-2F)	Pホームの1F玄関に到着。靴を履き替えてEVDFへ行く。			
55	居室	居室に入る。			
16:00	居室				

3-2-1 買物外出行動に要した時間の分析

図3-1は買物外出行動において示された行動を、【前後(準備・着替え)】【玄関前・EV前】【車】【店舗出入口】【買物】【食事・喫茶】という6項目に分類し、入居者がそれらにどのぐらいの時間を使ったのかを調査記録から割り出してグラフにしたものである。

また、図3-2から図3-11に事例ごとで時間配分をパーセント表示したレーダーグラフを表す。(CASE・11に関しては行動内容が3通りのみであるため、CASE・01-CASE・10と同様の軸でレーダー表示することはできなかった。)

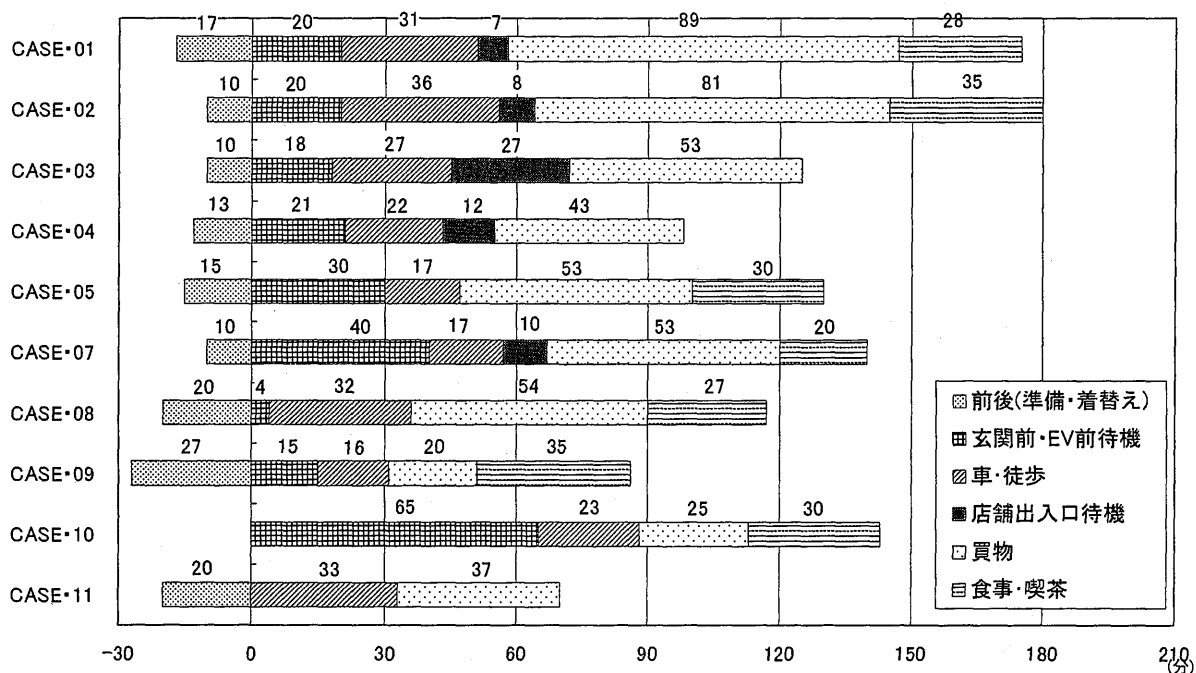


図3-1 買物外出行動の時間配分

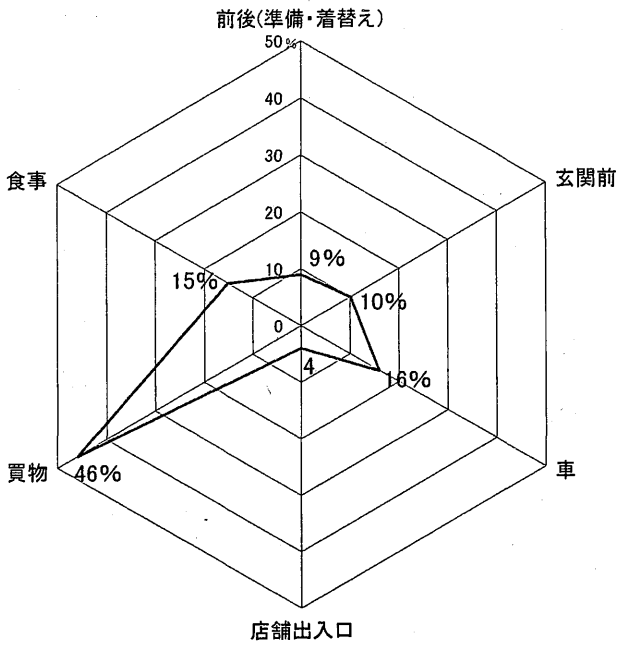


図 3-2 : CASE-01 HD ホーム Yさん

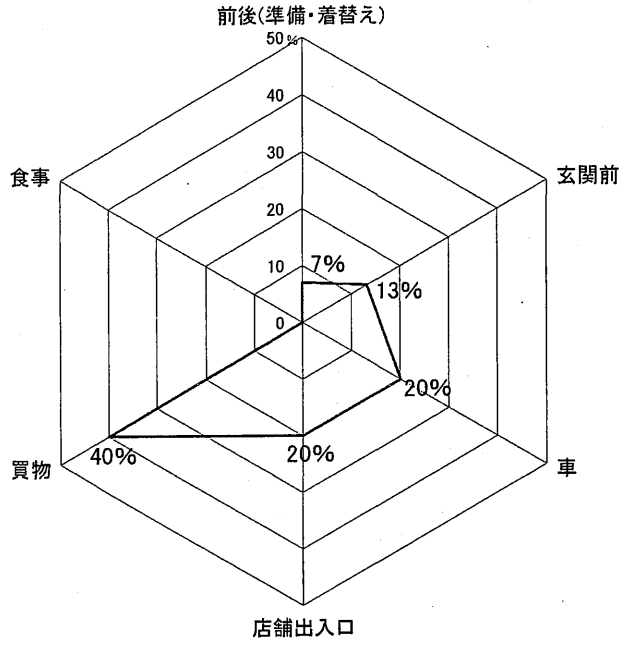


図 3-4 : CASE-03 NW 苑 Fさん

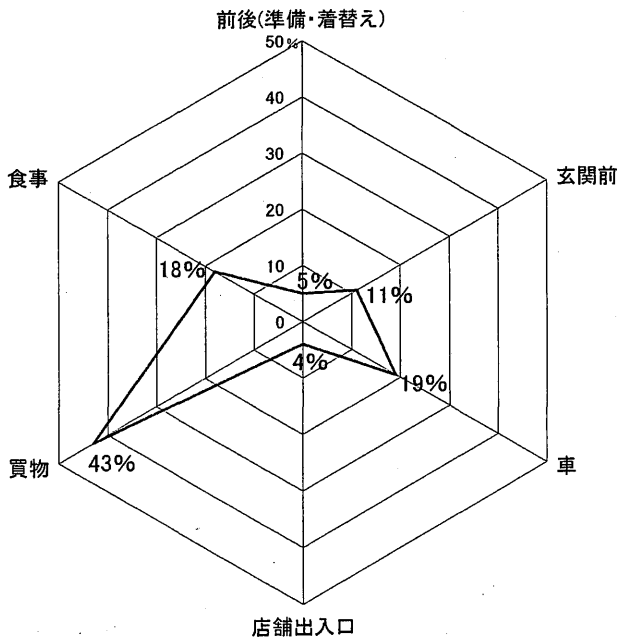


図 3-3 : CASE-02 HD ホーム FKさん

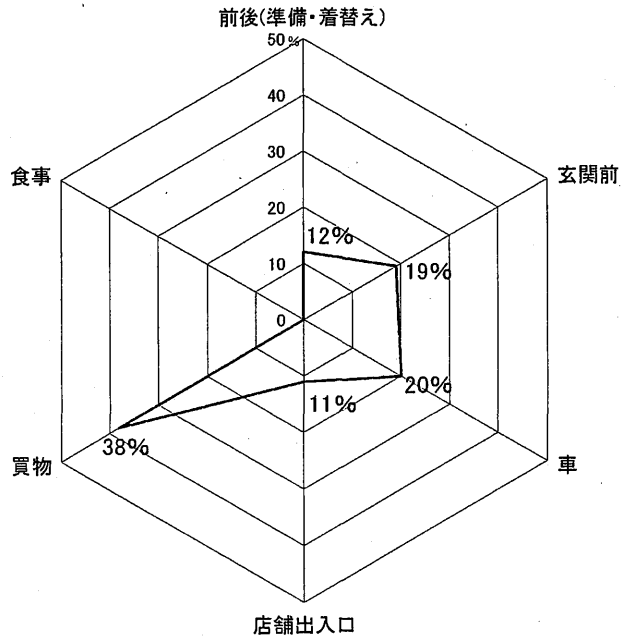


図 3-5 : CASE-04 NW 苑 YDさん

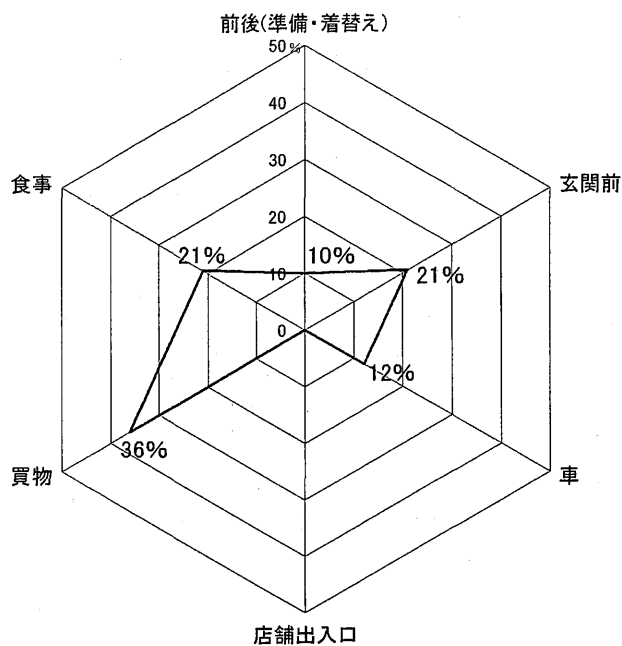


図3-6: CASE-05 KR 苑Mさん

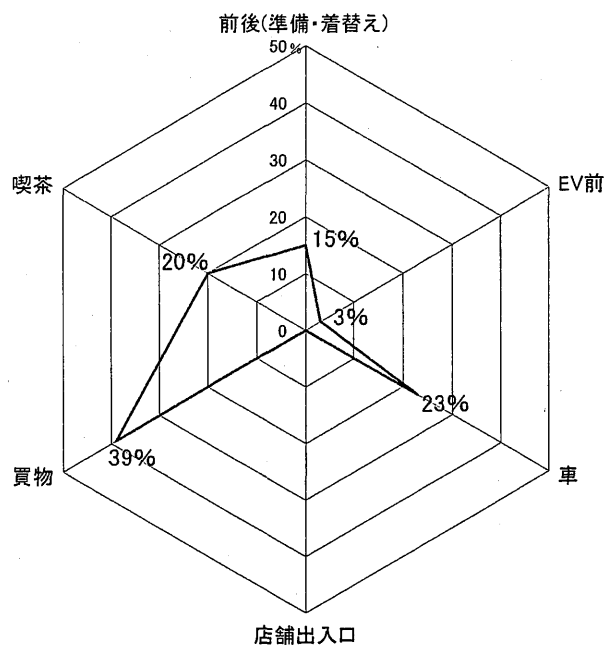


図3-8: CASE-08 KR 苑Sさん

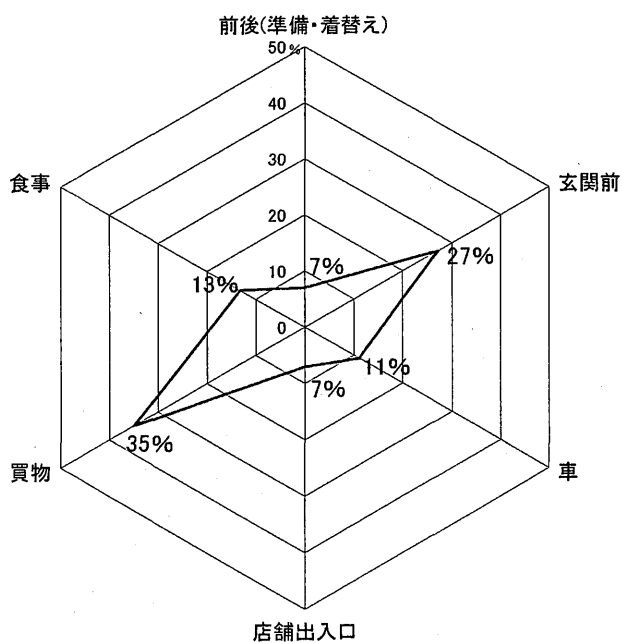


図3-7: CASE-07 KR 苑YGさん

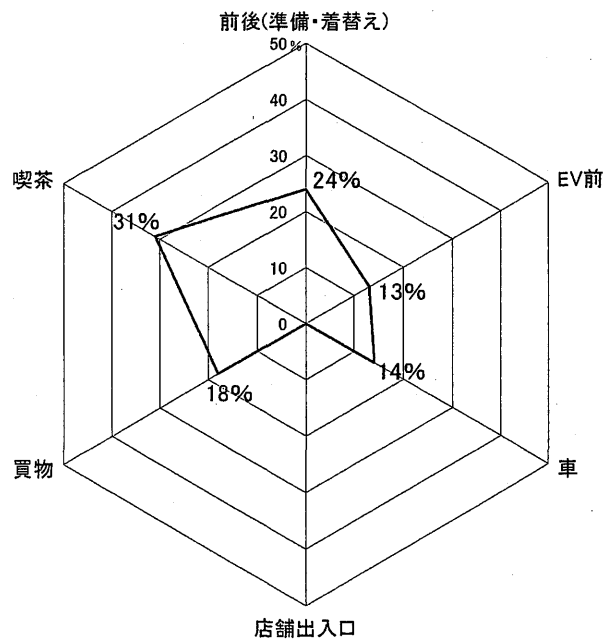


図3-9: CASE-09 KR 苑MKさん

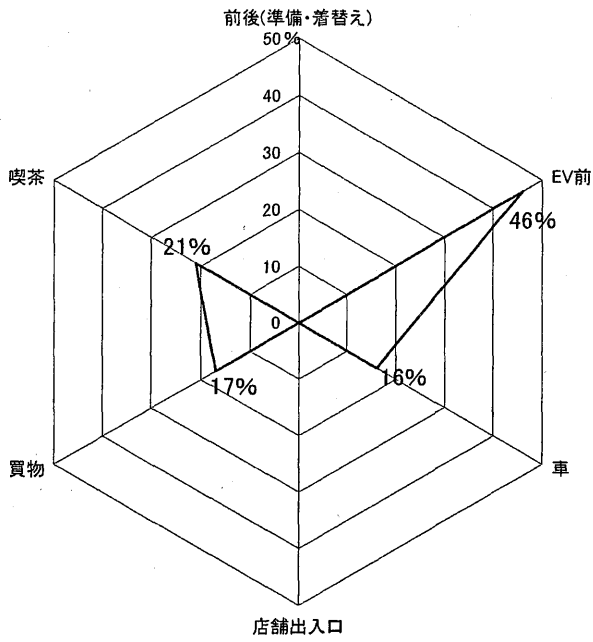


図3-10 : CASE・10 KR 苑 NM さん

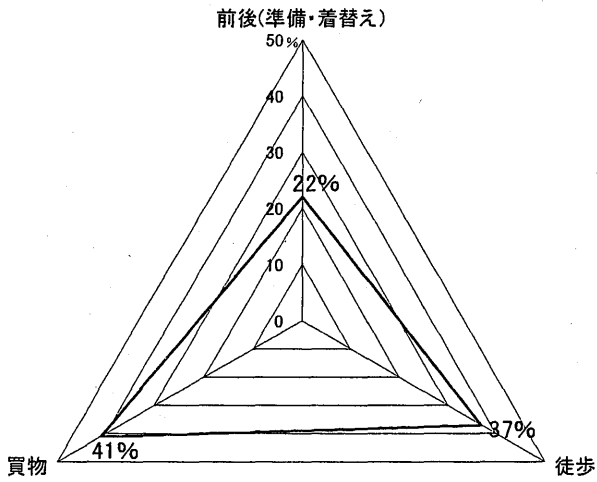


図3-11 : CASE・11 I ホーム T さん

<前後(準備・着替え)>

入居者が外出するための準備や着替えにかかった時間と外出から戻った後の着替えや購入品の整理などにかかった時間を合計したもの。

CASE・09 と CASE・10 を除いた他のすべての事例は、前後(準備・着替え)に全体で5-15%を占める 10-20 分の時間を使っており、これは特養入居者に限らずに、買物外出行動における平均的な値であると思われる。

CASE・09 の場合は 27 分で全体の約 1/4 にあたる 24% もの時間を費やしているが、これは、玄関で車に乗り込む所まで来た KK 苑の MK さんが再びホーム内に戻り、トイレを利用したために時間がかかったという理由である。

CASE・10 は KK 苑の NM さんの事例であるが、買物へ行くための着替えなどはなく、また、帰宅後そのまま居間でくつろいでおり、この項目に当てはまるような行動は特に見られなかった。

<玄関前・EV 前>

買物準備のできた入居者が、出発まで施設の玄関、または、玄関に下りるための EV 前で待機している時間。

CASE・01-CASE・04 は、ほぼ同じ値で、18 分から 20 分の間となっている。これらの入居者には、スタッフから出発時間があらかじめ伝えられており、4 人ともその時刻に合わせて自ら玄関に集合していた。

午前中から買物に行くことを楽しみにしていた CASE・10 の NM さんは、事務所前にある EV の前と居間との間を行き来しつつ、出発までに 65 分間待機していた。これは全体の 46% を占めている。

CASE・05 と CASE・07 は入居者自身が計画し、出発する時間も入居者の希望によって決まっていた外出であるが、それぞれ 30 分と 40 分という長い時間玄関で待機している。これは、付き添うスタッフへの急な来客によってスタッフがその時間に間に合わず、入居者を待たせてしまうことになったためである。

CASE・11 は I ホームの T さんの事例で、調査事例の中で唯一、徒歩での移動である。スタ

ッフを伴わない一人での外出で、あらかじめ設定された出発時間も存在しない外出であるため、玄関や EV 前で待機する必要は全くなかった。

<車・徒歩>

車は、往路と復路で、入居者が車に乗り込んでから降りるまでの時間の合計。徒歩は CASE・11 のみの記録となる。

行先はすべて 1~3km 圏内にあり、移動にかかる時間は買物行動全体の中で 10-20% を占めている。

表 3-10 は乗車時間と実際の移動時間を表したものである。

CASE・01 と CASE・02、CASE・03 と CASE・04、CASE・09 と CASE・10 は同じ行先だが、車には順番に乗り込んでいくため、それぞれの入居者で乗車時間が異なっている。

乗車時間と移動時間との比較では CASE・02 が最大で、14 分もの差が生じている。このような差も、乗り込んだ順によって生じるものである。

	行先	往復乗車時間 (分)	往復移動時間 (分)	差
CASE・01	東急	31	22	9
CASE・02		36	22	14
CASE・03	イトー ヨーカ ドー	27	20	7
CASE・04		22	20	2
CASE・05	杭瀬市場	17	10	7
CASE・07		17	10	7
CASE・08	三和市場	32	30	2
CASE・09	生協	16	14	2
CASE・10		23	14	9

表 3-10 乗車時間と移動時間

<店舗出入口>

一緒に出かけた他の入居者を待つ、あるいは、車が店舗出入口に到着するのを待つ時間。これが見られる事例は CASE・01-CASE・04、CASE・07 だけである。

CASE・01-CASE・03、CASE・07 は 7-12 分の間でおさまっているが、CASE・04 は 27 分と最も長く、買い物外出行動の 11% を占めていた。これは、買い物終了後、雨が激しく風も強かったために、車を店舗入り口の脇に寄せることになり、その時間がかかったという理由がある。

<買物>

買い物外出行動の中で、実際に買物に当てている時間。

それぞれの事例で時間は異なり、最小で CASE・09 の 20 分、最大で CASE・01 の 89 分と差は大きい。また、買物時間の占める割合も最小で 17%、最大で 46% と差が生じていた。買物時間が全体の 50% を超えるような外出は見られなかった。

買物時間は、施設が設定した出発時間と帰宅時間の影響を強く受けるため、CASE・01 と CASE・02 や CASE・09 と CASE・10 のように同じ買物外出である場合は、その差が出にくい。また、施設が設定した時間というものが特にはなかった買物外出の CASE・05 と CASE・07 は、気の合う友達が一緒のものであるため、設定をしていなくても同じような時間になったと考えられる。

個人個人で異なる買物時間内の具体的な行動の仕方は、「3-2 買い物外出事例の特徴と行動パターン」で示こととする。

<食事・喫茶>

食事・喫茶にかかった時間。

CASE・03、CASE・04 は、食事・喫茶を含まない外出事例。CASE・01、CASE・02、CASE・05、CASE・07 は昼食をはさむ外出、CASE・08-CASE・10 は喫茶を含む外出であった。

食事と喫茶でかかった時間にそれ程の差は見られず、すべて 20 分から 35 分の中におさまっている。全体に占める割合としては最小で CASE・07 の 13%、最大で CASE・09 の 31% で

あった。

【待機時間】

特養入居者の買い物外出行動での特徴的な時間として、<玄関前・EV 前><店舗出入口>での時間がある。これは唯一グループホームの事例であった CASE・11 の T さんの場合には出てきていない項目である。

これらの存在は、特養での買い物外出が一定の集団で行われがちであることを示している。集団で行動する場合には、その行動全体はある程度、組織立てて行う必要が出てくる。行動を組織立てるためには、様々な時間を設定する必要が生じる。そうした時に、<玄関前・EV 前>や<店舗出入口>で待機しなければならない入居者が出てきてしまうのである。

また、特養入居者は日常的に車椅子を利用している人が非常に多く、彼らが数名一緒に外出する場合、車の乗降に十分な時間が必要となってくる。車椅子利用者が車で外出する場合、車椅子に乗ったまま、リフトを使って乗降をするということが多く、その場合どうしても一人当たりの乗降時間がかかってしまう。そうすると、車に先に乗った入居者も、後から乗る入居者も、他の人の乗降中は待機していなければならないという結果が生じてくるのである。

今回の調査事例でも、8 名が日常的に車椅子を利用している入居者で、1 名は外出時のみの利用者であった。その 8 名のうち 2 名は、車へ乗り込む際に車椅子を降り、介助されて乗降していた。他 6 名は専用のリフトを使っての乗降であった。

図 3-12 は、買い物外出行動全体のなかで占める待機時間を抽出してグラフにしたものである。待機時間としては、<玄関前・EV 前><店舗出入口>と<車>で示した乗車時間と移動時間の差を合計した。

【買物時間の配分】

集団で行われる特養の買い物外出は、その時間配分などに関し、施設の管理によってコントロールされてしまう部分も少なくない。その枠の中での時間を十分に楽しむ入居者も多いが、CASE・04 の NW 苑 YD さんの場合は、「もう時

間がないわねえ…」「今日は時間なかったわね。」

「クシも見なかったけど、これは上だから今日はやめておくわ。」ということを何度も述べてお(分)²⁰⁰り、彼女にとっては、施設が設定した買物時間が短すぎた、ということが理解できる。

さらに、今回の調査では、CASE・09とCASE・10の男性が買物時間に全体の20%弱である20分と25分しか費やしておらず、その後の喫茶での時間の方が多く時間を取っていた。彼らは、この買物外出に出かけた他の女性の入居者達よりも早くに買物を終わらせたために、後から来た他の入居者全員が喫茶コーナーで休憩を終えるまで待っており、それだけ長く喫茶コーナーにいたのである。これは施設が設定した買物時間が彼らにとって長すぎた例である。

一般的に男女間で買物時間の差は大きいと言われているが、施設全体として買物外出という一つの括りで行動してしまうと、個人の行動が制限されてしまい、個人の差はどこかで埋めなければならなくなってしまうということなのであろう。

図3-13はそのCASE・09とCASE・10のケースを重ねたもの、図3-14は買物そのものに多くの時間を使った例をまとめたものだが、そのほとんどは施設によって設定された時間に沿ったものだった。

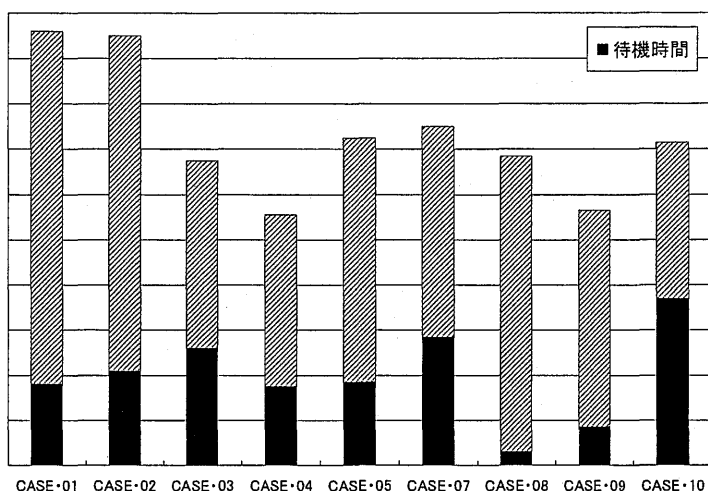


図3-12 買物外出に占める待機時間

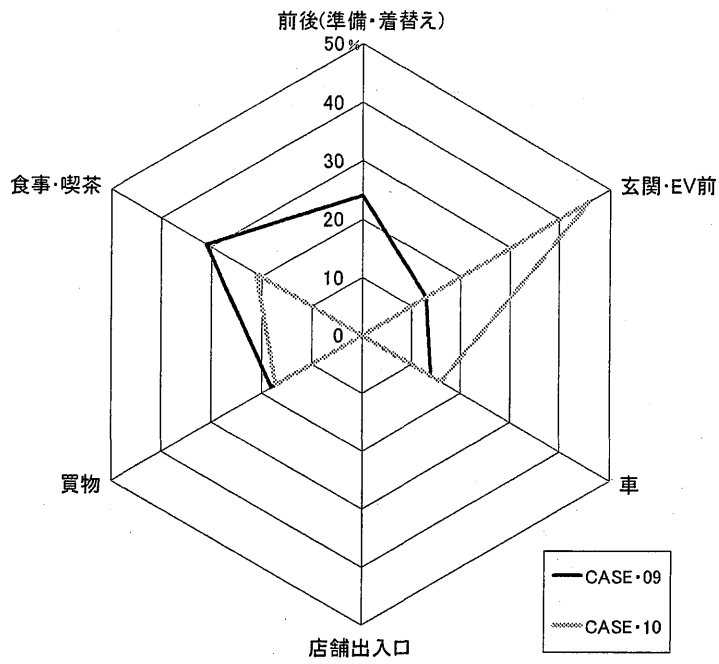


図 3-13 CASE-09、CASE-10 の重ね合わせ図

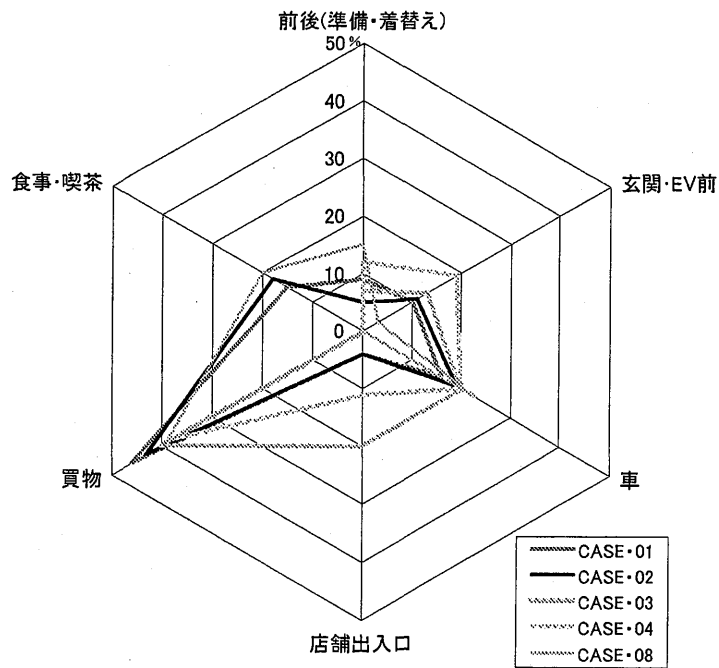


図 3-14 CASE-01—CASE-04、CASE-08 の重ね合わせ図

3-2-2-1 買い物外出事例の特徴

事例ごとに買物外出行動で見られた出来事や背景をまとめ、さらに入居者の居場所と時間で図を作成してその行動パターンを表わす。

図中で用いている記号は右図 3-12 が示す通りで、品物を購入した時とその購入数、食事や喫茶に用いた時間、買物の目的物以外のものを目に留まった品物を手に取ったり購入したりする行動が見られた場合、などを表わす。

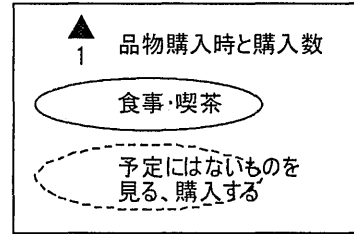


図 3-12

【CASE・01】・・・HD ホーム Y さん

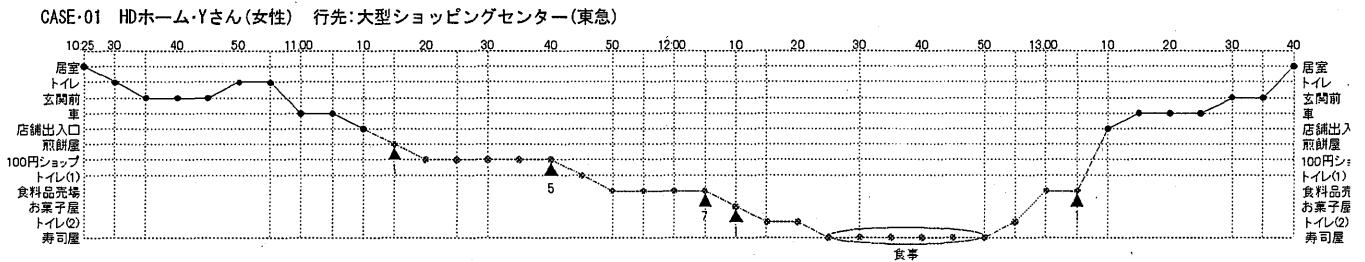


図 3-13 CASE・01 の買物行動

Y さんは HD ホームの買物+昼食外出の常連。隣の部屋の友人と共にほぼ毎回参加しており、行先のショッピングセンターのどこにどのような店が入っているのかしっかりと把握している様子。買物の数日前から買物リストを準備しており、何をどこで買うのか詳細に記されてあった。出発する 30 分前には、身支度を整えて居室でテレビを見ながらの待機していた。

付添い(車椅子を押すため)のボランティアをスタッフが事前に決定し、買物はそのボランティアとペアで行動する。Y さんのボランティアは HD ホームの買物ボランティアとして何度も参加しており、Y さんとも顔見知りの関係。Y さんはバスに乗るとすぐにボランティアに買物リストを手渡し、買物の順序や時間配分はボランティアの先導に任せていた。店舗に到着してからは、煎餅屋→百円ショップ→食料品売場→お菓子屋とコンスタントに目的の品物を購入していった。

HD ホームスタッフへのヒアリングによるとホーム内でも Y さんの購入数は毎回多い方であるようだ。そのため、買物前に Y さんの予算を聞いていたボランティアが心配して、購入数を減らすことを Y さんに提案する場面が何度か見られた。

買物と同じか、またはそれ以上に Y さんが楽しみにしていることが回転寿司屋での昼食であった。その回転寿司屋は Y さんが買物の度に利用していた店で、お気に入りの男性店員がおり、そのために Y さんは買物前日に友人と共にホームに常設されている美容室へ行き、髪の毛のセットを済ませていた。その男性店員が職場移動になったことを知った Y さんは非常に残念がり、食事を終えた後からホームの居室に戻るまでしきりにそれについて述べていた。

【CASE・02】・・・HD ホーム FK さん

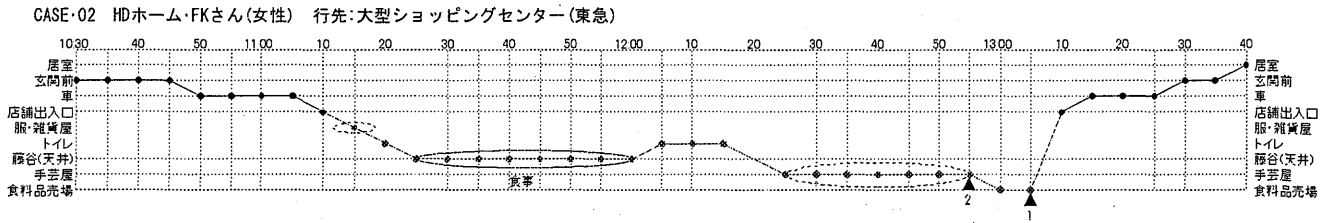


図 3-14 CASE・02 の買物行動

CASE・01 と同日同時刻に行なわれた買物+昼食外出。FK さんは出発の 30 分前には買物リストを持参して玄関前で待機していた。CASE・01 の Y さんと同様に FK さんも、この外出の常連で、出発前からどこで昼食を取るか決めており、「藤谷で天井食べよう。」と、具体的な店名を挙げていた。FK さん付添いのボランティアは、FK さんとペアになるのが 2 回目という 20 代の女性であった。

店舗到着後、服・雑貨店で小物を見、その後すぐに予定していた店舗で昼食を取っていた。そして昼食後の買物時間では、FK さんはほとんどの時間を、手芸屋でビーズの手作りアクセサリを見ることに費やしていた。このビーズの手作りアクセサリとは、指輪やブレスレットなど作るのに必要となるビーズ数種類をセットにして販売しているものである。FK さんは以前に何度もこれらを購入しており、買物時も自分で作った指輪をはめていた。それは FK さんにとって、手作りの楽しみとアクセサリとして身に付ける喜びの両方を満たすものであるようだ。約 30 分もの時間をかけて、店頭にある見本の指輪を試しにはめるなどして、じっくりと選んでいた。また、手芸屋店内を見ているうちに、出来上がっているビーズのアクセサリも販売していると分かり、それらも購入することになっていた。

このような、自分の趣味のための買物事例は少なく、他は CASE・01 の Y さんが編み棒を購入した事例のみであった。また、調査の全 10 事例のうち 7 事例が女性だったが、アクセサリ類を購入する例はこの FK さんの事例のみであった。逆

に、他の事例で入居者の購入品目に多かった食料品を FK さんはほとんど購入しておらず、パンを買っただけであり、その際は、ビーズの手作りアクセサリセットを購入した時には自ら財布を出して支払いをしていたのとは対照的に、支払いをボランティアに任せきりであった。

【CASE・03】・・・NW 苑 F さん

CASE・03 NW苑・Fさん(男性) 行先:大型ショッピングセンター(イトーヨーカドー)

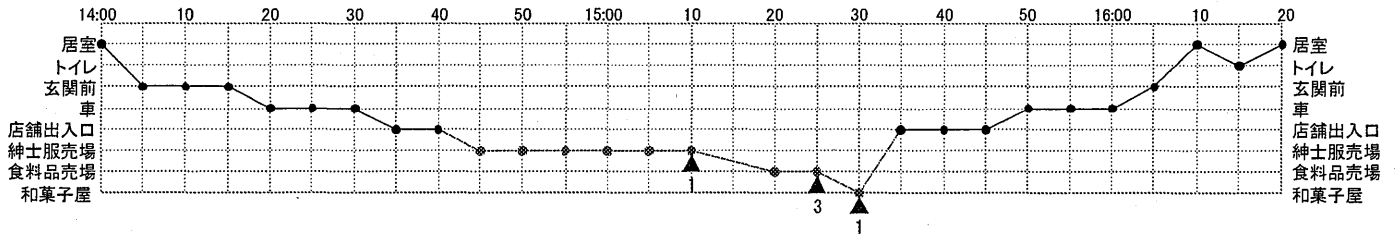


図 3-15 CASE・03 の買物行動

F さんは入居して 1 年の男性で、NW 苑での買物外出にはこれまでに何度か参加している方である。今回の目的は直接的には「替えの上着を見たい」というものであったが、本人へのヒアリングによると、居宅への復帰という強い願いをできるだけ早く実現させるためにも、こうした買物外出などには積極的に参加するようにしている、とのことであった。

行先のイトーヨーカドーはこれまでに幾度か利用している様子であったが、店舗内のどこにどのようなものが売っているのかは把握していなかった。

目的の紳士服売場では、上着を数点試着して店員のアドバイスを受けながら、自分の体型にあったものを鏡を見てチェックしながらじっくりと選んでいた。店頭にはなかなか気に入ったものが見つからず、諦めかけていた F さんであったが、店員が店の奥から出してきた商品が大変気に入り、購入することにした。また購入品をそのまま着ていくことを希望し、最初に着ていた自分の上着を袋に包んでもらっていた。

食料品売場での買物はすばやく、いつも決まったものを購入している様子で、商品名も記憶していた。

買物を終えて NW 苑の居室に戻り一息ついてから、早速、最後の和菓子屋で購入したどら焼きとお茶で休憩をしていた。

【CASE・04】…NW苑 YDさん

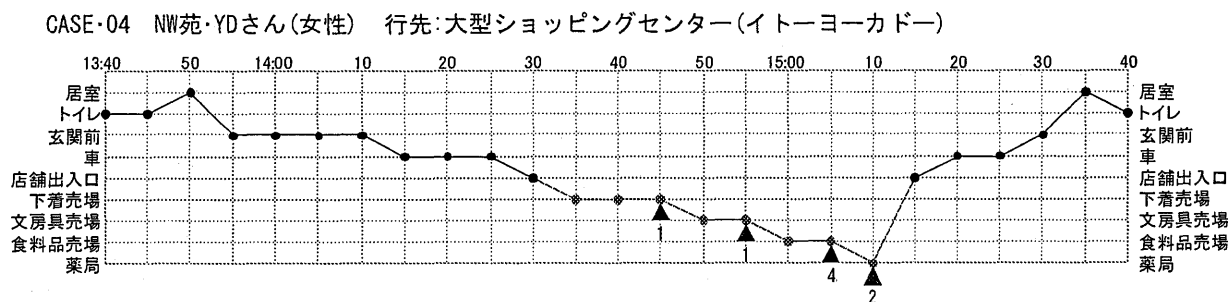


図3-16 CASE・04の買物行動

CASE・03と同じNW苑の事例。買物外出日は異なる。

YDさんは数日前から買物リストを準備しており、ホームの玄関で出発を待機している間にも改めてリストを取り出して、足りないものを付け加えるなどしていた。行先のイトーヨーカドーはこれまでも何度か利用している様子であったが、CASE・03のFさんと同様に店舗内のどこにどのような品物があるのかは把握していなかった。

買物順序はリストを確認しながら決定しており、予定していたものを買物時間内にすべて購入することができないと分かった時には、優先順位を決めて行動していた。リストの中には、次の日に妹のお見舞いに行く際に持っていきたいというアンパンや、出発前に他の入居者が買って来て欲しいとスタッフを通して頼んだものも含まれていた。

YDさんの話によると、いつもは集合時間内に買物が終わり、余った時間は喫茶コーナーで待つ時間がある、ということであった。今回はそのような時間がなかったことを残念がっていた。また、買物途中で食事処のそばを通った時には、たまにはこういう所にも来たいのだけど…と述べていた。

買物中は購入予定の品物以外を見る、といった行動なかったが、すれ違ったベビーカーの赤ちゃんに手を差し出してかわいがるといった様子や、EVで一緒になった赤ちゃんに微笑みかけ、その母親に「かわいいですね」と自分から声をかける、などの行為はYDさんの事例だけで見られたものだった。

【CASE・05】【CASE・06】【CASE・07】・・・KR 苑 M さん、K さん、YG さん

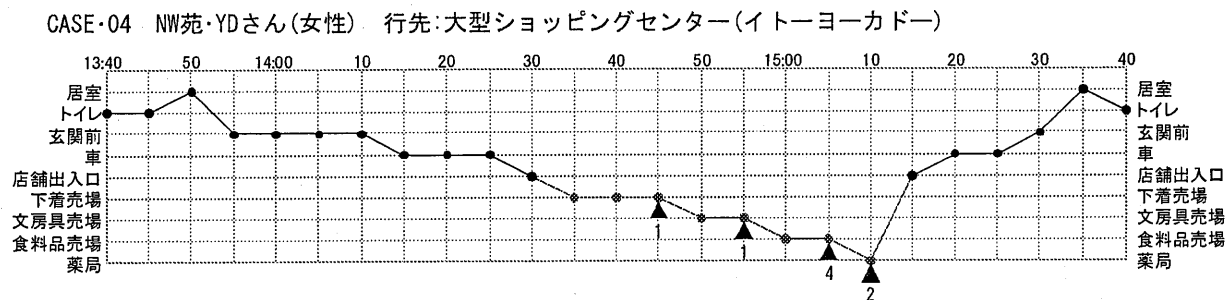


図 3-17 CASE・07 の買物行動

仲の良い入居者 3 人が、特養の近くにある杭瀬市場まで買物に出かけた事例。この市場は、戦後の復興時にできた歴史ある市場であり、3 人が古くから慣れ親しんできた場所であるようだ。アーケードで覆われた杭瀬市場内は幅 2-3m の通路両脇に生鮮などの食料品店や生活用品店が立ち並び、多くの買物客で賑わっている。

M さんは買物に行く数日前からお金を用意するなどの準備をしていた。

市場では 3 人はそれぞれ行動を別にし、その後合流して昼食を一緒に取っていた。上図は YG さんの買物行動を追ったものである。

M さんは、買物は一人ではっぱとするのが好きだと事前に話していた通り、到着するとすぐに一人で市場の奥の方に向かって歩いていった。

YG さんは、特に順序を決めて買物をするのではなく、市場のメインの通りを往復する間で、目に留まる品物などを見、手に取ったり、店員に進められて試食をしたりしながら買物をしていた。買物が一通り終わった時にお好み焼屋の前を通りがかり、その店内ですでに昼食を注文していた M さんと K さんに呼び止められて YG さんも店内に入った。

買物が終わりホームに戻ると K さん、YG さんはすぐに居室に入ったが、M さんは喫煙コーナーで一服しながら、自分が買ってきたものを周りにいるスタッフに見せたり、はんでんを着せて見せたりしていた。また、M さんは隣の入居者のために、「きんぴら」を購入していた。「(売って)ないかと思っていたけど、ちょうどあったから」買ってきた、ということだった。

【CASE・08】・・・KR 苑 S さん

CASE・08 KR 苑・S さん(女性) 行先:三和市場

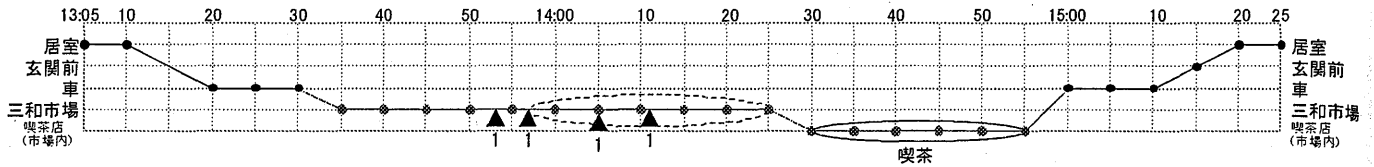


図 3-18 CASE・08 の買物行動

S さんの買物外出は、買物の数時間前にスタッフから誘われ、行くことを決めた、というものである。必ずしも買わなければならないものがあつた様子ではなかったが、出発の前にはスタッフに何をかうつもりなのかを話しており、ある程度の目的を持って参加していた。

行先の三和市場は、アーケードに覆われた、活気のある規模の大きな市場であり、尼崎市でも有名な場所である。S さんは以前に一度行ったことがあるだけで、どこに何があるのか全く分からないということだった。買物は、ボランティアと他の入居者(A さん)とのペアの後についていきながら、自分が欲しいものを売っている店をボランティアに教えてもらって、そこで購入していた。

S さんは、自分が予定していたものを購入するまでは、その他の品物を見るといった行動は全く見られなかったが、それらを購入し終わった後は、A さんが立寄った店の商品をのぞき込んだり、目に留まった品物がある場所で立ち止まったりしていた。その中で、“しらす”と“りんご”を購入しており、それらはお世話になっているスタッフへのお土産にするということであり、ホームに戻り、上着を脱いでトイレに行った後にはすぐに購入したお土産を持ってスタッフの事務所を訪れていた。

買物後の喫茶店では入居者・ボランティア・スタッフで、市場で見た食べ物の話や郷土の話などをしていた。

【CASE・09】【CASE・10】・・・KK苑 MKさん、NMさん

CASE・09 KK苑・MKさん(男性) 行先: 酒屋、生協

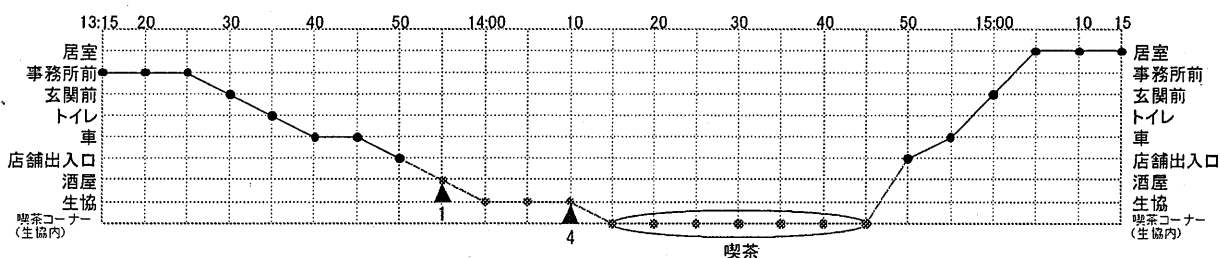


図 3-19 CASE・09 の買物行動

MKさんの買物は、出発の数時間前にスタッフから誘われて参加を決めたものであった。KK苑の買物外出は毎週水曜日に定期的に行なわれており、入居者間によく知れ渡っている。

NMさんは買物当日の朝から「行こう」という発言を繰り返しており、この買物外出を大変楽しみにしていた。MKさんは「今日は行けないと思っていた」ようだが、スタッフから誘われると、お酒とお菓子を買いたいと喜んで参加の意思を示していた。上図の記録はMKさんの買物行動である。

行先の生協は、マンションの1階部分で売場面積 2700 m²の平均的な広さの店舗である。MKさんとNMさんは二人ともこれまでに何度か利用しているようであった。生協に酒を置いてないことを知っているMKさんは、生協に入る前に、道路をはさんで隣接している酒屋に行くことを希望していた。酒屋での買物が終わるとすぐに生協に向かい、お菓子コーナーで商品を比べながら選んでいた。

レジの脇にある喫茶コーナーでは、買物を終えた入居者達が次々にやってきてケーキと飲物を注文していた。MKさんとNMさんは入居者の中でも買物が比較的早く済み、皆より先に休憩し始めていた。

ホームに戻り、上着を脱いで、購入したお菓子を片付けたMKさんは、ビール1缶を片手に居間に出て近くにいたスタッフに夕飯のメニューを尋ねていた。メニューの中に肉があると聞くと、ビールのつまみに丁度良いと言い、机の上にビールを置いて夕飯までの時間を楽しみに待っている様子であった。

CASE・11】・・・IホームTさん

CASE・11 Iホーム・Tさん(男性) 行先:コンビニエンスストア

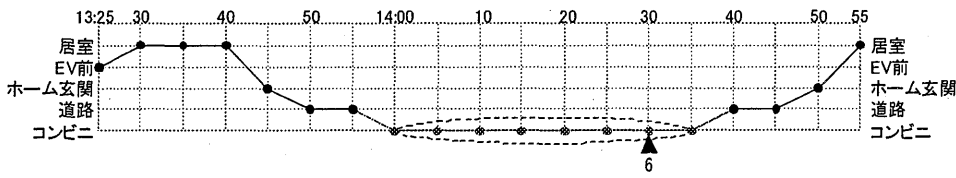


図 3-20 CASE・11 の買物行動

Tさんがお菓子を買に行く目的で行った買物外出。

Tさんは入居以前からIホームの近くに住んでおり、以前から利用していた店舗に行けば良いと考えていたようだが、スタッフからもっと近くに新しく店ができたという話を聞き、そこに行くということで出かける前に道順を何度もスタッフに確かめていた。

片道約400mの距離をTさんは5回ほどの小休憩を取りながら歩いていた。

コンビニエンスストアは初めてというTさんは、その品数の多さに驚き、自分の財布の中身を気にしつつも、店員に借りた折りたたみ椅子に座って移動しながら次々とお菓子を選んでいった。欲しい品物が数多くあったようで、1週間に一度くらい来て少しずつ買いたいと述べていた。

スタッフへのヒアリングによると、Tさんは病気のために甘いものをかなり制限されており、購入したお菓子類もほとんど食べることはできないようである。しかしながら、買うことが本人にとってストレスを解消する方法にもなるので、買物時には好きなものを好きなだけ買うようにしてもらっている、ということであった。

3-2-2-2 買物外出行動パターンによる違い

表 3-15 において、買物外出に対する入居者本人の係わり方や外出先と本人との関係性、買物外出への目的など、12 の項目で当てはまる部分を示す。

また、次頁より、入居者の買物外出行動を、「買物」部分だけ取り出して、その行動パターンを分析することとする。

	主体性						定期性			目的		
	行先を自分で決めた	参加を自分からすすんで決めた	自分から出かける準備を始めた	買物の順序を自分で決めた	買物の時間配分を自分で決めた	買物の支払い行為をすべて自分で行った	行先にはこれまで2回以上行ったことがある	行先にはどこに何があるかよく分かっている	行先にはなじみの店がある	数日前から予定していた購入品があった	予定していた品物のみを購入した	外で食べたものがあった
CASE・01												
CASE・02												
CASE・03												
CASE・04												
CASE・05												
CASE・06												
CASE・07												
CASE・08												
CASE・09												
CASE・10												
CASE・11												

表 3-15 買物外出に対する入居者の係り方

【目的達成タイプの買物行動パターン】

CASE・01、CASE・03、CASE・04、CASE・09

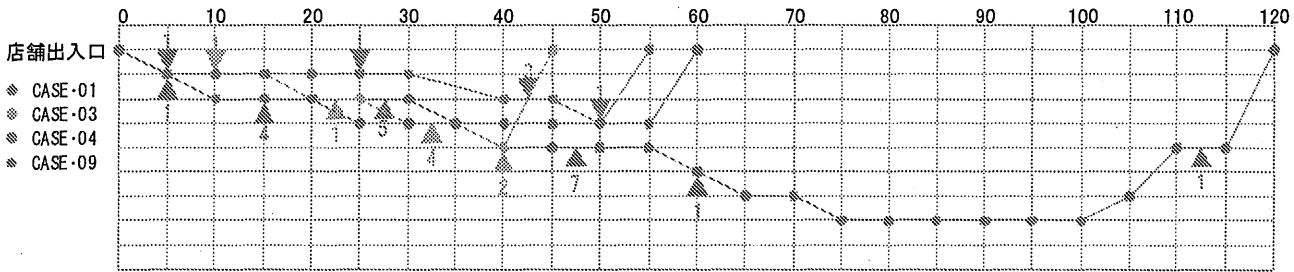


図 3-21 目的達成タイプの買物行動

表 3-16

	主体性					定期性			目的			
	行先を自分で決めた	参加を自分からすすんで決めた	自分から出かける準備を始めた	買物の順序を自分で決めた	買物の時間配分を自分で決めた	買物の支払い行為をすべて自分で行った	行先にはこれまで2回以上行ったことがある	行先にはどこに何があるかよく分かっている	行先にはなじみの店がある	数日前から予定していた購入品があった	予定していた品物のみを購入した	外で食べたものがあった
CASE・01												
CASE・03												
CASE・04												
CASE・09												

CASE・01、CASE・03、CASE・04、CASE・09の買物外出行動パターンは目的達成タイプとしてまとめることができる(図 3-22 参照)。このタイプの入居者はあらかじめ自分が決めていた品物がある場所へ行き、その場では目的の物のみを購入するという方法で買物を進めている。

表 3-16 を見ると、これらの事例は、購入予定のものがあるという明確な目的を持って買物への参加を自ら決め、出かける準備を自分から始めるという点で買物に対する意欲が十分にある事例であると分かる。しかしながら、その行先は施設が定めた場所であり、また、CASE・01 と CASE・09 は店内のどこにどのような店があるのか把握していない事例であることからして、目的の物をどこで購入するかということは、それほど重要視されていないと考えられる。

つまり、このタイプの入居者にとって、買物する場に求めている事柄は、目的物を購入することなのである。それゆえに、目的物以外のものを目に留めて立ち止まるという行動や、店舗から店舗へ移動する場合にも予定以外の店へ立ち寄りといった行動も全く見られず、もちろん、予定以外の品物を購入する事例もなかった。

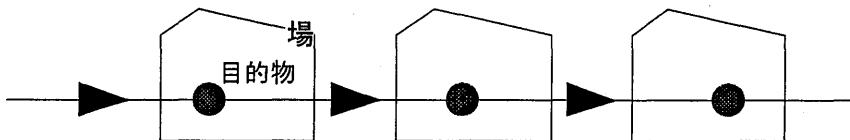


図 3-22 モデル図

【環境享受タイプの買物行動パターン】

CASE・02、CASE・07、CASE・11

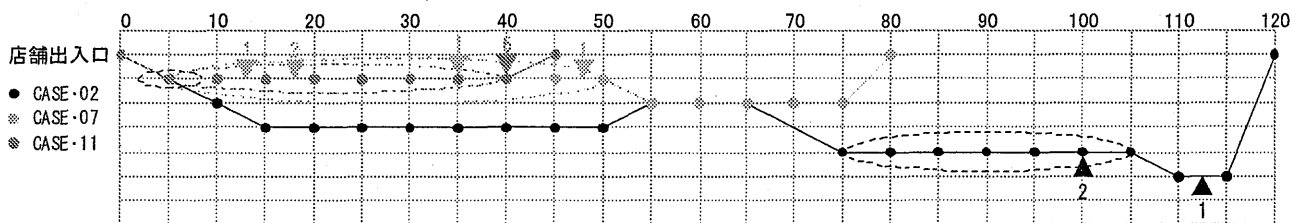


図 3-23 環境享受タイプの買物行動

表 3-17

	主体性					定期性			目的			
	行先を自分で決めた	参加も自分からすすんで決めた	自分から出かける準備を始めた	買物の順序を自分で決めた	買物の時間配分を自分で決めた	買物の支払い行為をすべて自分で行った	行先にはこれまで2回以上行ったことがある	行先にはどこに何があるかよく分かっている	行先にはなじみの店がある	数日前から予定していた購入品があった	予定していた品物のみを購入した	外で食べたものがあった
CASE・02												
CASE・07												
CASE・11												

CASE・02、CASE・07、CASE・11の買物外出行動パターンは環境享受タイプとしてまとめることができる(図3-24参照)。このタイプは、予定していた目的物はあるが、それらを購入するにあたって、自分の目に入る他の物も見ながら買物を進めていき、目的物以外の物も購入している事例である。

CASE・02は、自分で決めた手芸屋で手作りのビーズセットを見ているうちに、その近くにあったビーズのアクセサリーに気付き、それらも購入することにした、というケース。CASE・07は市場のメイン通りを往復しながら自分の目的物と目に留まったものを購入していくケース。CASE・11はコンビニエンスストアに初めて行ったTさんが、目的物だったお菓子だけでなく、目に留まったパンなどを購入したケースである。

それぞれで行先に対する認知度は異なるが、その場(環境)からの影響を享受し、新たな発見や選択を得ることができた買物行動のパターンであると言える。

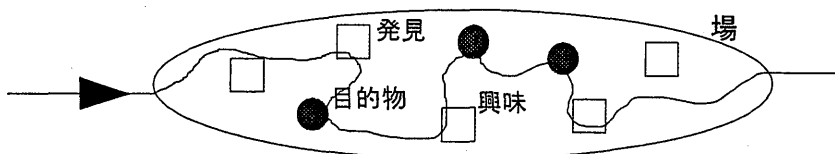


図 3-24 モデル図

【目的達成+環境享受タイプの買物行動パターン】

CASE-08

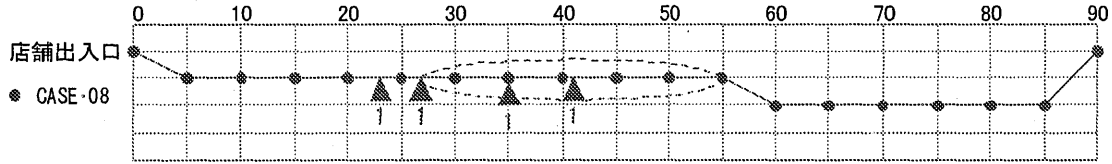


図 3-25 目的達成+環境享受タイプの買物行動

表 3-18

	主体性					定期性			目的			
	行先を自分で決めた	参加を自分からすすんで決めた	自分から出かける準備を始めた	買物の順序を自分で決めた	買物の時間配分を自分で決めた	買物の支払い行為をすべて自分で行った	行先にはこれまで2回以上行ったことがある	行先にはどこに何があるかよく分かっている	行先にはなじみの店がある	数日前から予定していた購入品があった	予定していた品物のみを購入した	外で食べたものがあった
CASE-08												

【目的達成タイプ】で行動した後、【環境享受タイプ】としての買物行動パターンを示した混合タイプのケースである。

この場合、CASE-08のSさんが予定していた品物を購入するまでは、周囲にある様々な店や品物、情報は全く意味を持たないものであり、特にどこにどのような店があるのか全く分からないSさんにとって大規模な市場はごちゃごちゃした分かりにくい場所です。

しかし、目的を達成した後のSさんは、興味を持ったものの前で立ち止まり、感想を述べたりし始め、気に入った物を見つけたときには購入するといった行動も見られ、周囲の環境を享受する仕方での買物行動パターンへと移行していた。この段階では、初めごちゃごちゃした分かりにくい場であった市場が、今度は様々な刺激をSさんに与えるのに最適な場となっていたと言える。

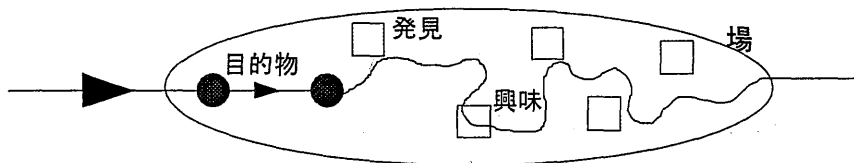
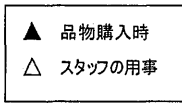
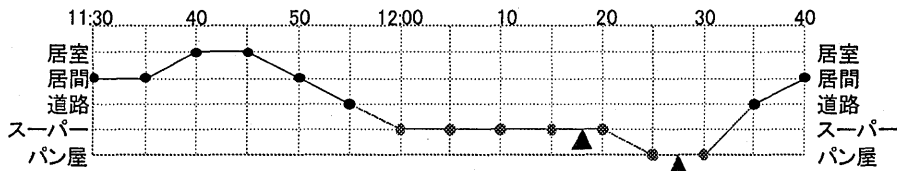


図 3-26 モデル図

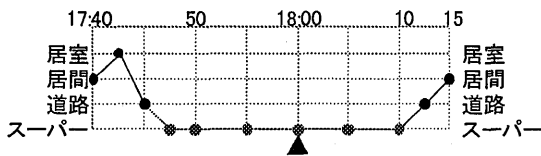
3-2-2-3 グループホームにおける買い物外出行動パターン



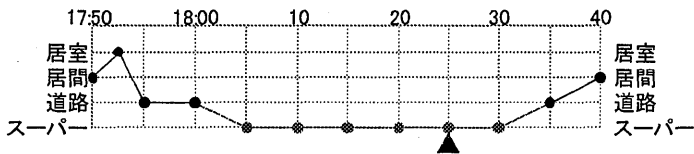
CASE・gh01 K0ホーム 行先:スーパー、パン屋(昼御飯の買物)



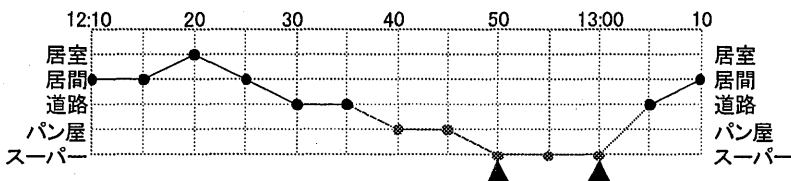
CASE・gh02 K0ホーム 行先:スーパー(晩御飯の買物)



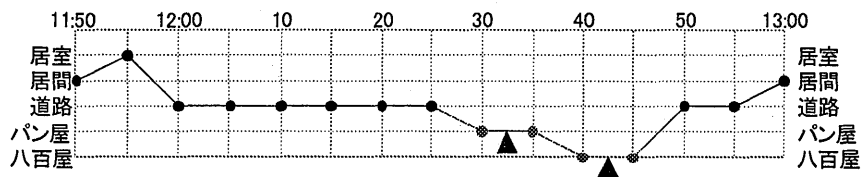
CASE・gh03 K0ホーム 行先:スーパー(晩御飯の買物)



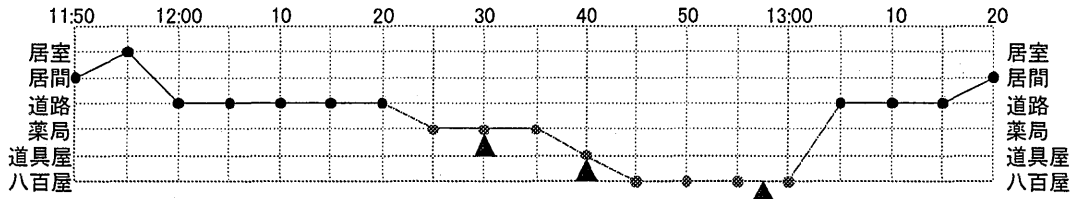
CASE・gh04 K0ホーム 行先:パン屋、スーパー(昼御飯の買物)



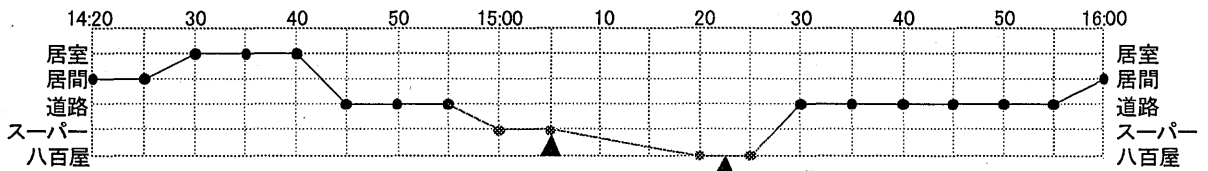
CASE・gh05 K1ホーム 行先:パン屋、八百屋(昼御飯の買物)



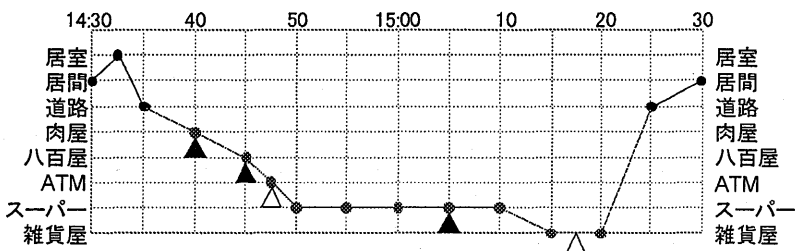
CASE・gh06 KIホーム 行先:パン屋、薬局、道具屋、八百屋(昼御飯の買物)



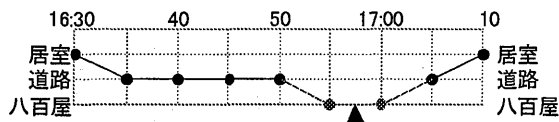
CASE・gh07 KIホーム 行先:スーパー、八百屋(晩御飯の買物)



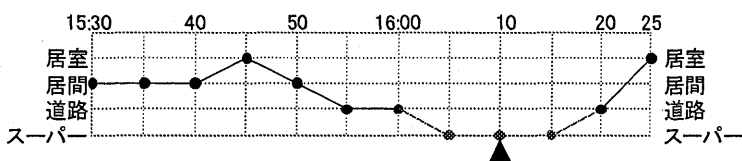
CASE・gh08 KIホーム 行先:肉屋、八百屋、ATM、スーパー、雑貨屋



CASE・gh09 KIホーム 行先:八百屋(散歩の延長)



CASE・gh10 FUホーム 行先:スーパー(晩御飯の買物)



3-2-3 購入品目の分析

3-2-2-2、表 3-15 によると、多くの事例で入居者たちは事前にどのような物を購入するかを決めた上で買物外出に参加しているようである。それらを忘れないようにしっかりと買物リストにして持参したり、昼食はどこで取るかといったことも最初に決めているケースが多い。

さらに実際に買物に出掛けると、予定以外のものを購入することも多々あるようだ。

では、特養の入居者が“欲しいもの”とはいったいどのようなものなのであろうか。特養では毎日の食事が提供されており、その他、日常生活に必要なものは家族が用意したり、施設で一括して注文したりすることが多いため、入居者の買物の必要性は比較的少ないはずである。

そこで CASE・01～CASE・11 で入居者が購入した品物を列挙し、分類することにより、特養入居者が買物に求める事柄を分析することとする(表 3-19 参照)。

(表 3-15 より抜粋)

	目的		
	数日前から予定していた購入品があった	予定していた品物のみを購入した	外で食べたかったものがあった
CASE・01			
CASE・02			
CASE・03			
CASE・04			
CASE・05			
CASE・06			
CASE・07			
CASE・08			
CASE・09			
CASE・10			
CASE・11			

表 3-19 入居者の購入品目

	購入品	飲食
CASE・01	おかき、タッパ、お盆、編み棒、ラムネ、ボールペン、チーズ、パン、煎餅、ブルー、きゅうりの漬物、たらこ、カステラ、みかん、レモン	寿司
CASE・02	ビーズの手作りアクセサリセット、パン	天井
CASE・03	ジャケット、らっきょう、梅干、煎餅、和菓子	なし
CASE・04	下着、ノート、ゴマ豆腐、スティックシュガー、カキの種、アンパン、ティッシュ、うがい薬	なし
CASE・05	はんでん、きんぴら、のみ菓、シップ菓、その他?	焼きそば
CASE・06	昆布の佃煮、その他?	お好み焼き
CASE・07	から揚げ、昆布の佃煮、たらこ、佃煮、シラス干し	お好み焼き
CASE・08	リップクリーム、氷砂糖、シラス干し、りんご	コーヒー
CASE・09	かっぱえびせん、ポテトチップス、じゃがりこ、ポッキー	ケーキ、コーヒー
CASE・10	アクエリアス	ケーキ、コーヒー
CASE・11	和菓子、煎餅、おかき、ビスケット、クラッカー、チョコレート	なし

表 3-20 は購入品目を、その種類ごとに「食品」「生活関連用品」「薬」「服」「趣味」という5種類に大別し、さらに各項目ごとに小さく分類したものである。

また、図 3-27 は縦軸に購入品の延べ数をとリ、グラフで示したものである。

これらによると、入居者が購入する主なものは「食料品」であるというはっきりとした傾向が表れており、延べ個数は42個、これは全体の72.4%をも占めている。「食料品」以外の項目間には大きな差がみられず、「生活関連用品」は全体の8.6%、「薬品」「服・装飾品」はそれぞれ6.9%、「趣味」は5.2%となっている。

表 3-20 購入品目の分類

大分類	小分類	購入品目	個数
食料品	生鮮	みかん・りんご・レモン	3
	パン	パン・パン・アンパン	3
	乳製品	チーズ	1
	惣菜	ゴマ豆腐・きんぴら・から揚げ	3
	副惣菜	らっきょう・梅干・たらこ・昆布の佃煮・たらこ・佃煮・シラス干し・シラス干し・昆布の佃煮、きゅうりの漬物	10
	お菓子	煎餅・和菓子・おかき・ラムネ・煎餅・ブルーネ・カステラ・カキの種・かつばえびせん・ポテトチップス・ジャガリコ・ポッキー・和菓子・煎餅・おかき・ビスケット・クラッカー・チョコレート	18
	砂糖	スティックシュガー・氷砂糖	2
	飲料	アクエリアス・ビール	2
小計			42
生活関連用品	用具	タッパー・お盆	2
	文房具	ボールペン・ノート	2
	生活用品	ティッシュ	1
小計			5
薬品	薬品	うがい薬・飲み薬・シブ薬・リップクリーム	4
服・装飾品	服・装飾品	ジャケット・下着・はんでん・ビーズの指輪	4
趣味	趣味	編み棒・ビーズのアクセサリセット	3
合計			58

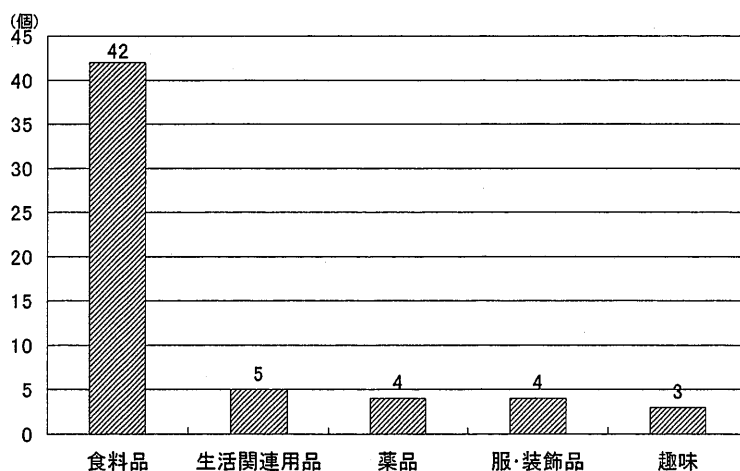


図 3-27 購入品目数

図3-28は「食料品」の内訳であるが、この中で42.9%を占めているのが「お菓子」であり、次いで“たらこ・佃煮…”といった「副惣菜」が23.8%となっている。その他の項目が全体に占める割合は小さく、それぞれ2.4%～7.1%の範囲におさまっている。

ここで、分類したそれぞれの品目ごとの購入人数を表3-21に示す。

図3-28中で「お菓子」の延べ個数だけに着目すると18個で、これは全体の約1/3の数にも達するものの、表18によると実際に購入しているのは5人だけである。したがって「お菓子」は購入者一人当たりの購入数が多いと考えることができるだろう。

図3-28中で「お菓子」の次に購入数が多い「副惣菜」に関して見てみると、これらを購入している入居者は5人となっており、内容的に「副惣菜」とかなり近い「惣菜」の購入者は3人、これらを合計すると11事例ある調査全体のうち8事例が「副惣菜」または「惣菜」を購入していることになる。

「副惣菜」を購入していた入居者たちは“食事の時にこういうものがあるだけで全然違う”というように話をしている方が多く見られた。また、「惣菜」を購入したCASE・05のMさんが、買い物前にスタッフと交わした会話の中で「今日は何買うの?」「何買う言うてもなあ、ほとんどおかずやな。(小声で)食事がまずい!なんにも味がせんもん。」という内容があるように、「副惣菜」や「惣菜」を購入する入居者の多くは、特養での食事に関して、自分の好みに合わない味付けのメニューに副惣菜を加えることでカバーしているようである。

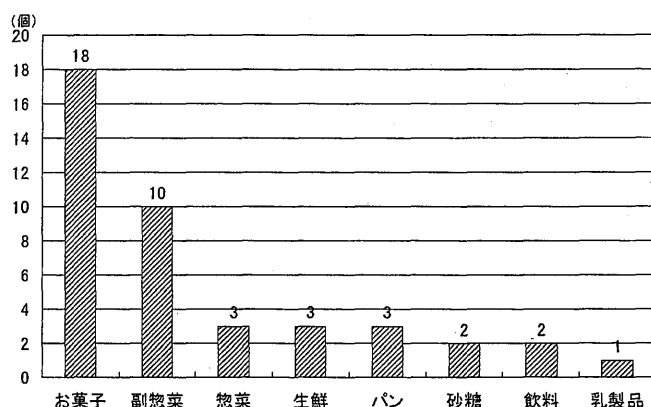


図3-28 食料品の内訳

表3-21 小分類ごとの購入人数

品目	生鮮	パン	乳製品	惣菜	副惣菜	お菓子	砂糖	飲料	用具	文房具	生活用品	薬品	服・装飾品	趣味
人数	2	3	1	3	5	5	2	2	1	2	1	3	4	2

養入居者の買物外出理由を考察すると、自分の好きな食料品を購入した、「副惣菜」を購入する際には賞味期限や消費期限をしっかりと確かめるといった行動がよく見られ、次回の買物まで、できるだけ長く持つようにといった様子が見えられた。これらの行動は、特養内での生活においては自分が必要な時や好きな時に買物に出ることができない、ということが根底にあることを示しているのかもしれない。

以上のように、入居者の購入品目から、特とするという目的で行なわれる買物外出が比較的多いようである。しかしながら、こうした購入品目には買物の必然性が見出せず、特養入居者にとって買物が日常化するための目的は彼らの生活の中には存在していないとすることができる。

さらに、こうした入居者の要求を満たすために、施設のスタッフが入居者の注文を受けて買物に行ったり、入居者が好むような食品を定期的に業者に注文したり、施設内で販売するなどの機会を設ける、という方法を選択している特養がよく見られる。このような方法は確かに入居者の要求に直接応えることであり、また、絶対に施設外へ出ることができないような身体状況の入居者たちにとっては必要な機会とも言える。

しかしながら、適切な介助のもとでは外出も可能な入居者にとっては、彼らの外出の意欲をさえ奪うものともなりかねず、さらには、買物外出行動に伴って生じる様々な要素を入居者から奪うことになってしまうだろう。

特養と地域との関わりがますます重要なものとなっている現在、スーパーや市場といった、地域にもともとある資源を有効に活用していくことが、特養入居者と地域との関係を築いていく最も自然な方法なのではないだろうか。

3-2-4 買物外出行動に起因する事柄

買物外出行動全体は入居者の感情や生活にどのような影響を与えているのだろうか。買物外出の最中だけでなく、その前後での入居者の行動を含めて、買物外出が起因となって生じた言動や状況を調査記録から取り出し、それらを買物活動

と直接関係して生じる事柄と、直接は関係しないものの、買物外出行動に伴って生じる事柄とに分類し、表 3-22 にまとめ、そこから考察を得ることとする。

表 22

	買物前	買物中	買物後
買物活動と 施設関係	数日前に買物リストを作成	目的としていた品物を購入	お茶と購入した「どら焼き」で休憩
	買物で使うお金の準備	「きんぴら」を見つけ、隣の部屋の入居者のお土産とする	購入した品物をスタッフに見せる
買物活動と 無関係	昼食で利用する店舗を決定	店員にすすめられて試食をして、購入品を選ぶ	「はんでん」を試着して見せる
		偶然に寄った店舗で、セールになっている「はんでん」を購入	事務所にいるスタッフへ購入したお土産を持参
		手作りアクセサリーセットを見ているうちに、完成品も販売していることに気づき、購入	夕飯メニューを確認し、夕飯時に、購入したビールを飲むことを楽しみに待つ
買物活動と 無関係	外出に備えて美容室で髪型のセット	購入した「ジャケット」を、その場から着用していく	お宿に入りの店員と会えなかったことを残念がり、スタッフに話す
		知人(母親と子供)に偶然会い、会話	
		以前近所に住んでいた知人と会い、会話	

【買物前】

買物リストを作成することや、買物で使うお金を数日前から準備することなど、買物外出に対して入居者の期待感が高まっている様子が伺える。

また、以前に利用した店舗を頭に思い描き、その同じ場所で昼食を取ることを楽しみにするなど、買物外出の頻度は少なくとも、なじみの店舗ができて入居者もいるようだ。

【買物中】

目的のものを見つけるだけではなく、周辺にある店舗や様々な品物によって、新しく欲しい物を発見し購入していた例が4つのケースで見られた。それらのうち2ケースでは買物に参加していない（できない）他の入居者や「いつも世話になっている」スタッフへのお土産を購入するといった行為へと発展していた。それはあらかじめ予定されていた行為ではなく、たくさんの品物を見ているうちに入居者にそうした考えが浮かんできたために生じた行為であり、自分が買物で楽しんでいる状況を他の人にも分け与えたいという感情から生じたものなのかもしれない。

また、店員と会話をし、試食をするなどして、たくさんある品物から自分が欲しいものを選ぶことなどは、普通のことでありながらも、施設の中で生活している入居者には体験できにくいことであり、買物外出はそうした能力を発揮できる良い機会ともなっている。

時間が足りなく、欲しかったものを見ることを諦めたケースでは、それを次の機会に買うことを決めていた。このことは、その店舗をまた訪れることのできる地域の場合として入居者が認識していることを意味している。

また、知人と偶然出会うといった状況は、その場所が地域の住民にとって生活の場であることを示しており、特養入居者にとって、買物外出がより生活に密着した日常的なものになるならばこうした機会も増加し、買物先が地域と特養入居者を結びつける上で重要な役割を果たすものもなるだろう。

【買物後】

買物で購入したお菓子をすぐにおやつとして食べることや、購入したお土産を隣のスタッフに渡しに行くなど、買物での行動が、施設に戻ってからの次の行動を生み出すものとなっていた。

また、買物で購入したビールを夕飯で飲みたいと考えた入居者は、スタッフに夕飯のメニューを尋ね、それがビールのつまみになるかどうか、などと考えをめぐらせて、自分の思いの中で楽しい時間を過ごしていた。

購入したものを試着してスタッフに見せていた入居者は、買い物中の思いつきで入った店で偶然セールになっていた品物を見つけたので購入することにした、という話をしながら披露しており、これは入居者の嬉しい感情が率直に表れた行動であろう。

このように、買物外出行動は、購入行為そのものが入居者の生活や感情に影響を与えるだけではなく、買物外出行動全体が、その前後の行動の起因ともなることを示している。また、その場合、地域の中にある店舗を利用することで、そうした一連の行為は買物行動が生活と切り放された次元での出来事ではなく、地域とのつながりをも生じさせるものとなっていることが理解できる。

3-3 まとめ

特養入居者の買い物外出は、地域に住む普通の人々が日常的に行なっている買い物外出とは少し異なる性質を持つものであるようだ。

その理由を探るために、まず、外出行動における時間配分を分析した結果、特養入居者の買い物外出での特徴的な時間の使われ方として《待機時間》というものが存在することが明らかになった。これは、集団行動を組織立てるための時間設定に合わせた行動が求められるときに必然的に生じてくるものであるのだが、とりわけ、車椅子利用者や入念な介助が必要な特養入居者が同じ時間に集合して車に乗降するような場合では、一人一人が車の乗降などに十分な時間を必要とし、一人が乗降している時間は他の人にとっての待機時間となってしまうのである。

また、買い物時間の設定が施設の管理によってコントロールされてしまっている部分も多く、入居者によっては、設定された買い物時間が短すぎたり、あるいは、長すぎたりするといった状況も観察された。

次いで、入居者がどのような品物を購入したかを分類することで、買い物外出の目的を考察することとした。すると、調査事例全般に渡って広く購入されていた品物が「惣菜」や「副惣菜」といった、食事のおかずにするような品物であるという結果が得られた。特養入居者は特養での食事にこれらを加えることで自分なりの食事を楽しんでいるようである。しかしながら、こうした購入品目には買物の必然性が見出せず、特養に入居し、毎日の食事を施設が提供している状況では、買物が日常化するための目的が彼らの生活の中に存在していないということが言うことができる。

このように、特養入居者の買い物外出は、地域での普通の買い物外出とは異なる性質を持つもの、ある程度の制限が課されてしまうものであるものの、入居者達は、その枠の中での時間を自分なりの買物の仕方を楽しんでいるようであった。そうした買物行動は、目的物を購入する仕方や順序、周囲の環境に対する反応などで、①目的達成型、②環境享受型、③目的達成+環境享受の混合、と

いう3つの買物行動パターンでまとめることができる。その中でも、環境享受型の買物行動パターンを示す入居者達は、予定していた目的物を購入するにあたって、それと同時に自分の目に留まる他の物も見ながら買物を進めており、そのように、自分の周囲にある多くの店舗や品物からの影響によって新たな発見や選択を得、それらが目的物以外の物の購入へと結びついたものであった。

買物最中だけではなく、その前後をも含めて、買物外出行動に起因して生じた入居者の行動や状況からは、買物外出が一連の流れを持って入居者の行動や生活に多くの影響を与えていることを読みとることができた。そのような影響は、彼らの生活を地域住民としてのより普通な状態へと近づけるものとなっていたと言える。

また、このような買物外出が、生活と切り放された一過性のイベント事ではなく、入居者が主体的に取り組めるものとなっているのは、それらが特養の周辺地域にある店舗を利用したものであることと関係が深いのだろう。地域住民の生活の場を特養入居者も同じように利用することにより、偶然、知人に遭遇して会話を交わしたり、気に入った場所を見つけてそこに何度も行ったりすることができ、入居者の生活により密着したものとなるからである。

特養の現状では、入居者が自分の好きなときに、こうした場所を訪れるようになるためにはまだ多くの課題が残っているものの、こうした地域の資源を十分に活用していくことが特養と地域との関係を自然に深めていくことにつながるのである。また、今後、特養におけるユニットケアが今以上に浸透し、特養入居者個人の生活がより尊重される個別ケアのもとでの生活へと移行していく過程には、こうした、地域への買い物外出行動の必要性や有効性をさらに議論することは不可欠なことであろう。

第Ⅱ部 認知症高齢者グループホームの地域との関わりに関する研究

第4章 東京都23区内グループホームの地域との関わりに関する考察

4-1 研究の目的と方法

4-1-1 目的と方法

本研究の目的は、地域の住民がグループホームをどの様に認識しているかを探り、現状を把握することを柱としている。しかしながら、グループホームの立地環境やホームの運営方針などさまざまな要因により、住民の認識はそれぞれ異なると思われる。

そこで、本研究ではまず、東京都23区のグループホームに経過年数やユニット数、外出の様子、グループホームがとらえる地域住民とのかかわりについてのアンケートを行い、グループホームの整備が進んでいる地域での現状を把握する。

アンケートの構成は以下の通り。

- ①グループホームの基本属性(経過年数、ユニット数、入居者の属性等)
- ②入居者の外出・地域資源の利用と、地域とのかかわりの現状
- ③これからの地域とのかかわりと、地域に対して望むこと

4-1-2 調査の概要

- (1) 調査実施期間 平成16年12月3日(金)～12月15日(水)
- (2) 調査対象 東京都23区認知症対応型共同生活介護
(認知症性高齢者グループホーム)-
介護保険対象-
(東京都介護サービス情報ホームページによる検索) 80事業所
- (3) 調査方法 郵送によって依頼をし、記入後、折り返し郵送していただき回収した。
- (4) 回収率 29事業所 (回収率…36.2%)

4-2 調査対象施設の概要

4-2-1 施設の概要

■ 区別の回収件数

図4-1より、足立区からの回答件数が6件

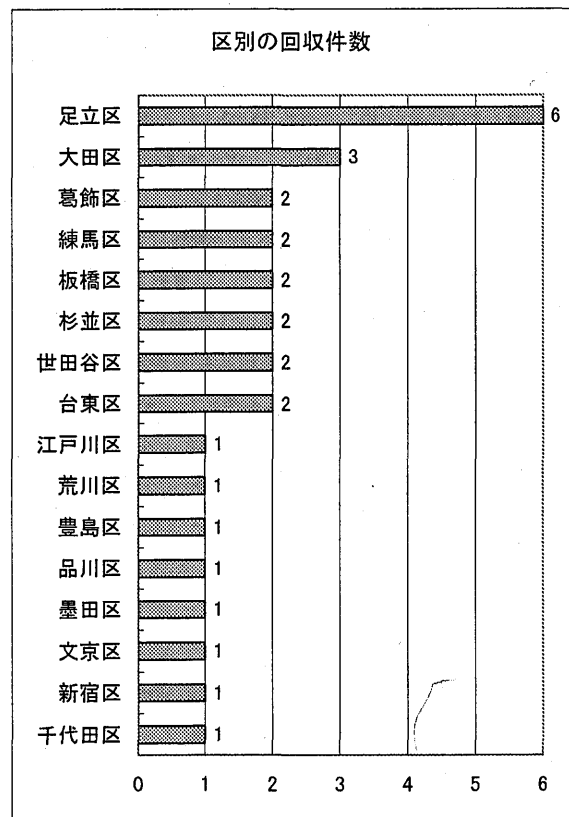


図4-1 23区別の回収件数 (単位:件)

と最も多くなっている。次いで大田区の3件と
なっているが、それ以外の区からは、2件以下と
少なかった。図4-2では23区別の事業者数(東京
都ホームページより)を表わしているが、この表
でも足立区が16件と、他の区より群を抜いて最
も多くなっている。

区ごとの回収件数は区ごとの事業者数が多いほ
ど多い事が分かる。

■グループホームの経過年数

図4-3より、開設から1年に満たないホームが
12件と最も多くなっている。次いで多いのは経
過1～5年のホームであるが、以後の分析をより
詳しいものにするため、年数の設定をもっと細か
くして質問すればよかった。

■グループホームのユニット数

図4-4よりユニット数も1ユニットが15件と
小規模なホームが多かった。また、半年以下の
ホームも6件みられた。

経過年数とユニット数をクロス集計にかけた
みると(図4-5参照)、経過半年以内、半年～1年
以内、1～5年、5年以上のどの種のホームでも1
ユニットで運営しているところが最も多くの割
合を占め、ホームが小規模化し、より家庭に近い
環境を根ざしているのだとかがえる。

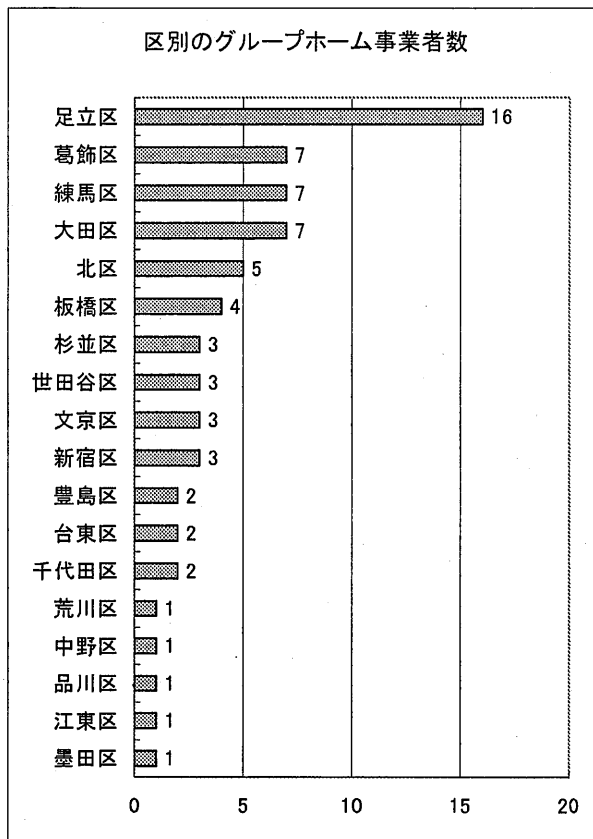


図4-2 23区別の事業者数 (単位:件)

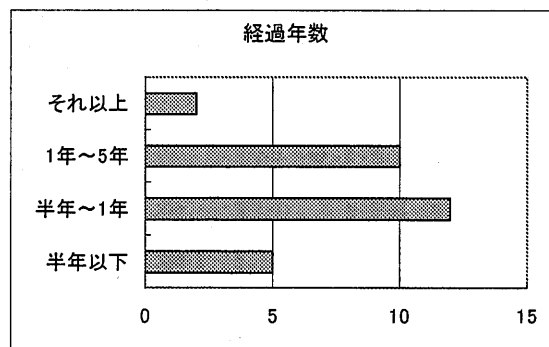


図4-3 開設からの経過年数 (単位:件)

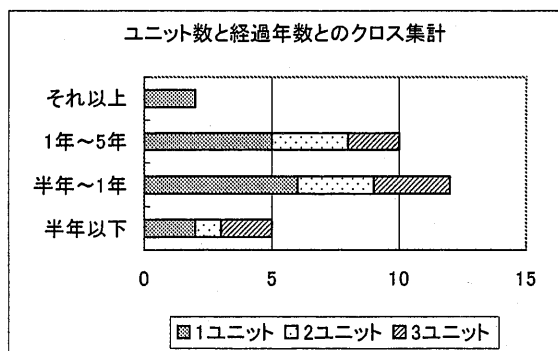


図4-5 ユニット数と経過年数とのクロス集計 (単位:件)

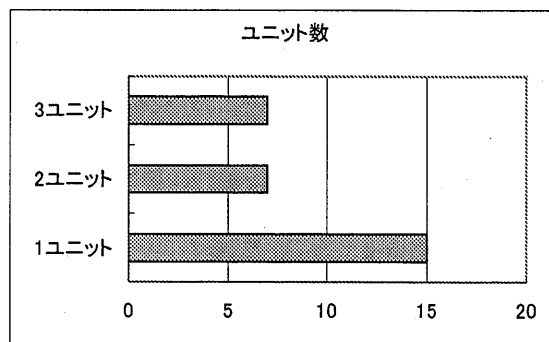


図4-4 ユニット数 (単位:件)

■入居者のホーム入居前の住まい

アンケートでは「1. グループホームのある地区内」「2. グループホームのある区内」「3. 東京都内」「4. 東京都外」のそれぞれ4つの項目別の人数を答えてもらう方式をとったが、ホームごとに入居者数が違うので、その人数の割合で再度集計をし直した(元データについては、補足を参照)。上記項目の「1. グループホームのある地区内」「2. グループホームのある区内」をそれぞれ「地域内」とし、「3. 東京都内」「4. 東京都外」を「地域外」と改めた。ホームごとにそれぞれの割合で多かったものを図4-6に示した。「地域内」と「地域外」がちょうど半分ずつになったものは「半々」という項目にした。

図1.1-6より、ホーム入居前に地域内に住んでいた入居者が多いホームが18件と圧倒的に多く、地域外、半々は5件以下と少なかった。元データ参照すると、「地域内」の18件の内訳は「1. グループホームのある地区内」の割合が多かったホームが6件、「2. グループホームのある区内」の割合が多かったホームは12件であった。同様に「地域外」4件の内訳は「3. 東京都内」2件、「4. 東京都外」1件、「3」と「4」同数が1件であった。

■スタッフの自宅

入居者と同様、ホームのスタッフについても、自宅を4つに分類した。分類の方法については、入居者のホーム入居前の住まいと同じ。

図4-7より、入居者とは違って「地域内」、「地域外」、「半々」の件数に差はほとんど見られなかった。若干、地域外が多いホームが1件多かった。さらにそれぞれの割合を元データより見てみると、「地域内」8件中では「1. グループホームのある地区内」の人数が多かったホームが1件、「2. グループホームのある区内」の人数が多かったホームが4件、「1」と「2」同人数が2件だった。「地域外」9件中では「3. 東京都内」が多かったホーム4件、「4. 東京都外」が多かったホーム3件、「3」と「4」同人数だったホームが2件であった。

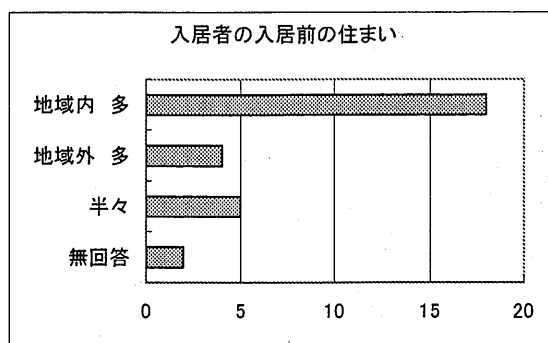


図4-6 入居者のホーム入居前の住まい (単位:件)

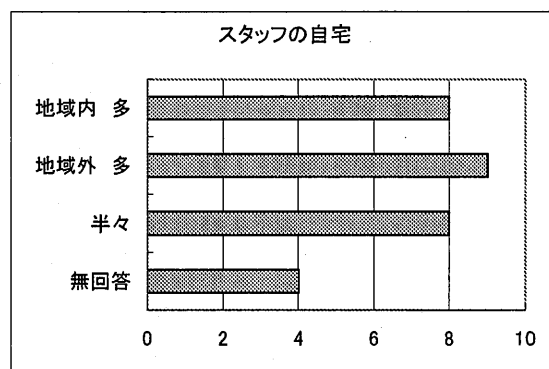


図4-7 スタッフの自宅の分類 (単位:件)

■町内会への入会

図4-8より、町内会に入会しているホームが20件と、全体の3分の2以上を占めていた。現在入会していないホームでも「近日入会する予定」というホームもみられた。

■行事等

グループホームで、行事的な交流(項目の中には行事ではないものもあるが、ここでは行事的な交流と名づける)について、ホームで取り組んでいる事があれば、その頻度を答えてもらった。図4-9より、最も多いのが地域の祭りに参加していることで、20件以上のホームが答えている。その頻度は年数回(祭りがあるたび)、不定期(時期は定まっていない)、3ヶ月に1回程度と続く。日本では春夏秋冬があるので、3ヶ月に1回という答えも、季節ごとの行事と捉えられる。

子供との交流では、ホームに子供を招いて交流すると答えたホームは1件にとどまり、小学校等に自分たちが出かけて交流すると答えたホームが多かった。

地域の住民を呼んでの交流の頻度は年に数回が最も多く、次いで週1回、3ヶ月に1回と続く。この点においては、日常的と非日常的に行っているホームの差が現れるところである。

「その他」の内容については、

- ・ 本人たちのやりたいことをその都度
- ・ 地域のボランティア
- ・ お誕生日会、お花見、ひな祭り、お節句、紅葉狩り、クリスマス会等の季節の行事
- ・ 他グループホーム、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター等との交流
- ・ 町会の防災訓練、グリーン作戦、地域の公共施設で行われる行事への参加

などの内容が多かった。

4-2-2 アンケート回答者の基本属性

■年齢、性別 図4-10、アンケート回答者の年齢、性別を示す。年齢については、30才代、40才代、50才代が同数で8人となっている。それ以上では60才代の回答者が1名であった。男女比は、男性10人、女性19人で1:2の割合となっている。

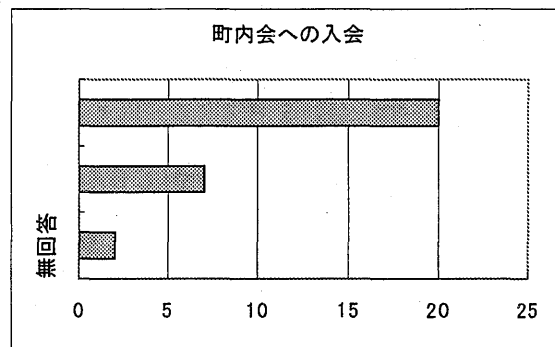


図4-8 町内会への入会 (単位:件)

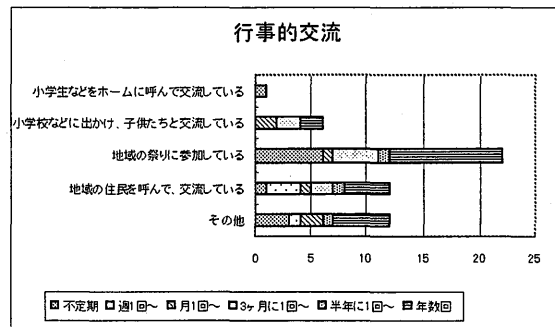


図4-9 行事的な交流とその頻度 (単位:件)

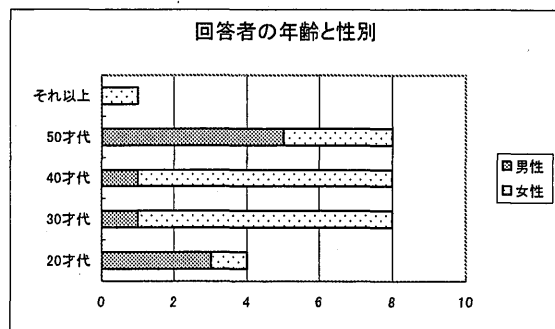


図4-10 アンケート回答者の年齢 (単位:件)

■勤務年数

図4-11に、回答者のホームでの勤務年数を示す。「図4-3 開設からの経過年数」とほぼ比例した結果となっている。

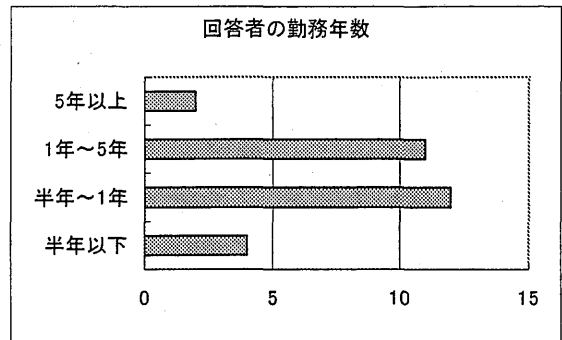


図4-11 アンケート回答者のホームでの勤務年数 (単位:件)

4-3 外出・地域利用の実態

4-3-1 ホームでの外出の概要

(1) 外出頻度と人数の割合

図4-12に、各ホームの、入居者の1週間の外出の様子を示す。グラフの見方は、無回答1件を除く28件のグループホーム中、それぞれのグループホームで外出の頻度が「ほとんど出かけない」「週1回」「週2~3回」「週4~5回」「ほぼ毎日」のそれぞれの人数の割合がどれくらいかを示している。

グラフより、ほとんど出かけない人の割合は、全くないホームが18件、2割以下が7件、4割以下が3件とあまり出かけない人は少ないことが分かる。

逆に、ほぼ毎日出かける人の割合については、28件中7件のホームで全員が出かけると答えており、次いで2割~4割の人が毎日出出すると答えたホームが8件と続く。毎日出かける人が8割以上、6割から8割の入居者の件数も多くなっており、それぞれ3件ずつである。

右下の「図4-13 入居者の1週間の外出頻度別割合(全ホーム)」は、ホームごとの枠を取り、入居者を上記の「ほとんど出かけない」「週1回」「週2~3回」「週4~5回」「ほぼ毎日(出かける)」別に分け、それぞれの割合を示したものである。この図によれば、全体の半数の入居者が毎日出かけている。次いで週2~3回出かける人が全体の20%、週4~5回出かける人が15%となっている。

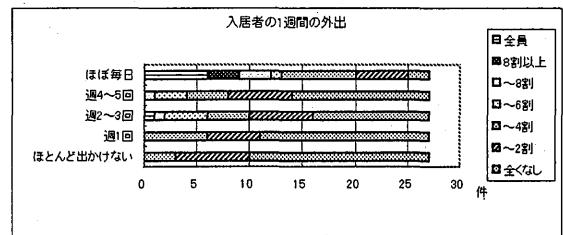


図4-12 入居者の1週間の外出 (単位:件)

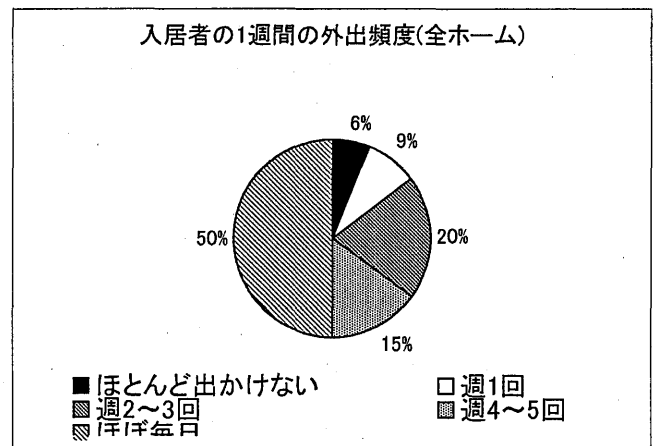


図4-13 入居者の1週間の外出頻度別割合(全ホーム) (単位:件)

4-3-2 買い物

(1) 買い物頻度、平均所要時間

図4-14と図4-15に、一週間の買い物頻度、買物の平均所要時間をそれぞれ示す。

図4-14より、ほぼ毎日買い物に出かけると答えたホームが18件と最も多く、全体の6割以上を占めている。週1~2回というホームはなく、週3~4日、週5~6日が同数の4件だった。平均所要時間は30分~1時間以内と答えたホームが19件で最も多かった。

(2) 買い物時の人数

図4-16に、1回の買い物における、入居者、スタッフの平均的な人数を示した。

入居者は一度に3~4人で外出するホームが11件で最も多く、次いで1~2人となっている。スタッフが1~2人で一緒に買い物をすると考えれば、スタッフが1度に見ることのできる入居者は3~4人が限界とうかがえる。

ホームの中には、1日に数回買い物に出かけるというホームも多く、前項目の外出頻度と照らし合わせると、ホーム内全ての入居者が出かける場合は、数人のグループが1日何度かに分けて外出している形をとっていることが分かる。

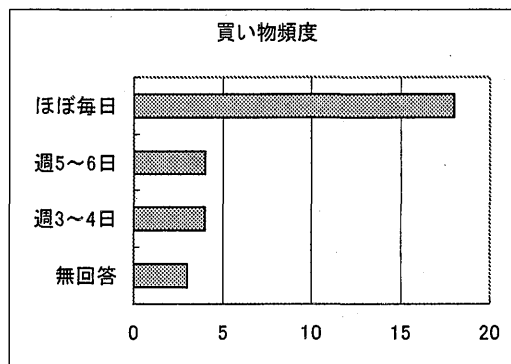


図4-14 1週間の買い物頻度 (単位:件)

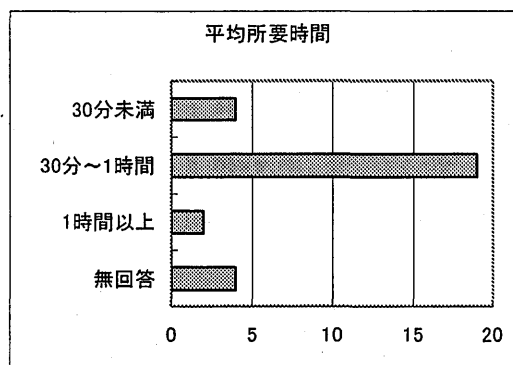


図4-15 買い物の平均所要時間 (単位:件)

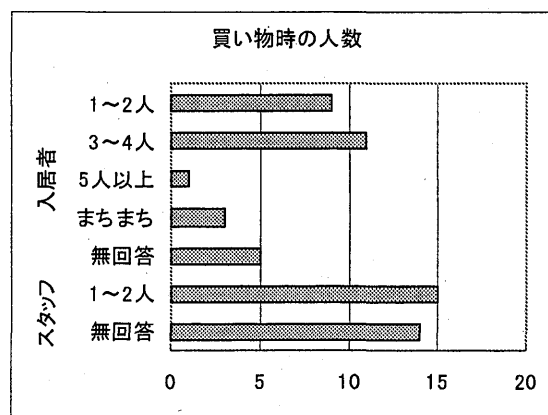


図4-16 買い物時の人数 (単位:件)

4-3-3 散歩

(1) 散歩頻度、平均所要時間

買い物と同様、散歩についても、頻度、所要時間を見てみると、図4-17より、ほぼ毎日誰かしら散歩に出かけるグループホームが13件と最も多くなっている。次いで多いのが週5日～6日で8件、週1～2日が4件となっている。所要時間については、買い物と同様、30分～1時間が最も多い16件である。やはり1時間以上というホームは少なく1件となっている。

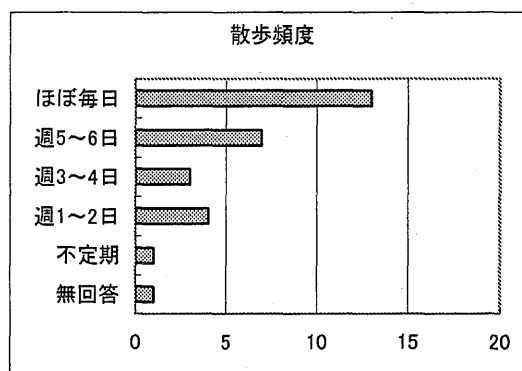


図4-17 1週間の散歩頻度 (単位:件)

(2) 散歩時の人数

散歩時の人数については、入居者が3～4人、スタッフが1～2人の形をとるホームが買い物同様最も多い。買い物と違うのは、入居者、スタッフ共に少し多い人数で行動していることがあげられる。買い物はお金が絡んだりスタッフが色々と気を配らなければならない反面、散歩は入居者のみならず、スタッフも気軽に出かけられる外出ということだろうか。

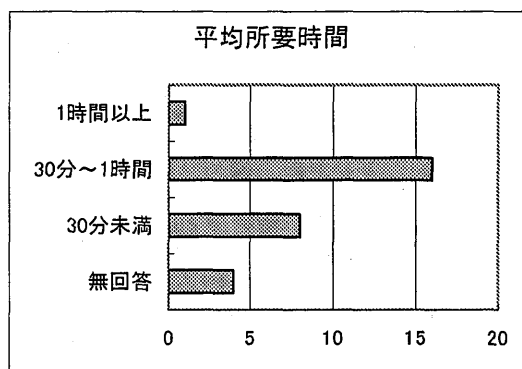


図4-18 散歩の平均所要時間 (単位:件)

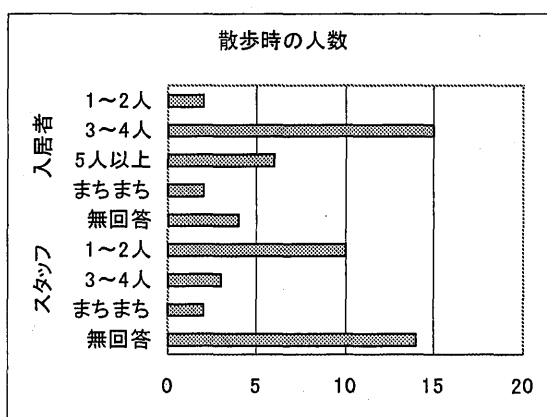


図4-19 買い物時の人数 (単位:件)

4-3-4 その他の(日常的)外出

(1) その他の外出一覧(複数回答)

表4-1に、その他の外出項目(内容)、頻度、人数、所要時間を示す。

表4-1 その他の外出一覧

項目(内容)	頻度	人数		所要時間
		入居者	スタッフ	
喫茶店(歩いて喫茶店へ。カウンターで飲み物、おやつを注文。のんびりする)	月1回	2人	1人	
受診(近所の病院へ受診)	週1回	1~3人		30分
買い物(文房具、オムツ、衛生材料、洗剤購入)	週1回	2人	1人	90分
ボランティア(近くの同経営の宅老所にレクリエーションの手伝いに行く)	週2回	1人		180分
行事(区踊演会、コンサート、近隣学校行事)	週1回	まちまち	まちまち	180分
遠出	週0.5回	4人	0	90~120
自由外出	週5回	1人		60分
外出(少し遠くの公園)	週1回	2人		60分
車で買い物	週4回	2人		60分
外食	週1回	3人	1人	60分
自宅へ行く(ホームの近くに自宅のある入居者が、荷物を取りに行ったり、空気の入れ替えをしに行く)	週1回	1人	0	90分
参拝(西新井大師に参拝。近くの大鷲神社にお参り)	週1回	2人		120~160分
外食(お誕生日会でカラオケボックス、居酒屋に行く。ファミリーレストラン、弁当持参で公園など。)	月2~3回	1~9人		180分
図書館	週1回	5人		40分
散歩(図書館で本を貸借する)	週1回	3人	1人	90分
相談(区役所へグループホームがうるさい、なぜ帰れないのか、財産はどうなっているのかを訴えに行く)	週1回	1人		30~60分
その他(郵便局、銀行、眼科、近所の友人宅、墓参りなど)	週7回	1~2		60分
散歩(浅草寺、隅田公園、お参り等をする)	週7回	3人	1人	90分
非日常(遊園地、演芸、演奏会など)	月1~2回	1~9		半日
美容院(近隣の美容室にカットやパーマ、毛染めに行く。職員は送り迎えの時付き添う)	月1回			

(2) その他の日常的外出項目

買い物、散歩以外にも、日常的な外出について回答してもらった(図4-20参照)。頻度から考え、中には日常といえない項目もあるが、参考までに載せておく。

最も多い項目が施設の利用で、その内容は図書館等文化的施設から、区役所、郵便局、美容室なども含まれている。次いで遠出の散歩が5件と多くなっている。

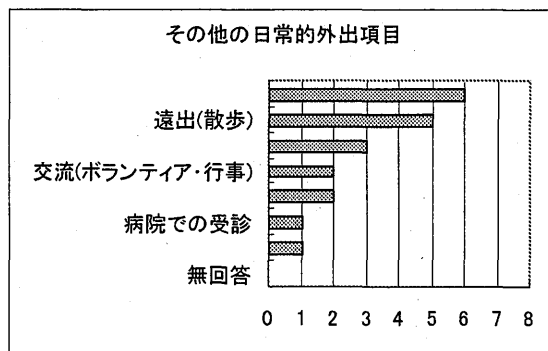


図4-20 その他の日常的外出項目 (単位:件)

(3) その他の日常的外出頻度、平均所要時間

図4-21から、週1~2回程度の外出が多く、他の頻度はまちまちである。(0.5回は1回と数えた)平均所要時間は図4-22に示したが、30分~1時間のものが最も多く、買い物、散歩とほぼ同じくらいの時間となり、日常的な外出としてはこのくらいの時間が一般的だと考えられる。

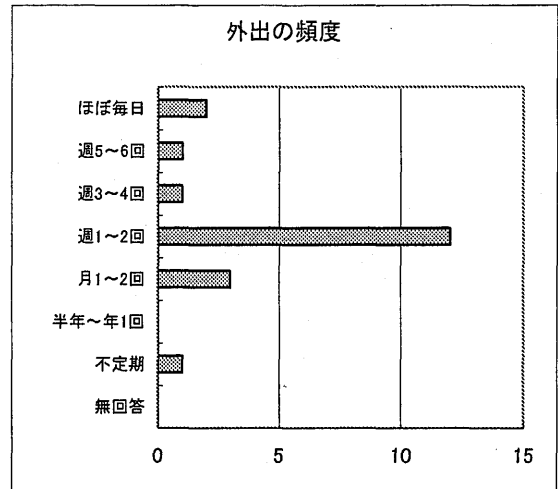


図4-21 その他の外出頻度 (単位:件)

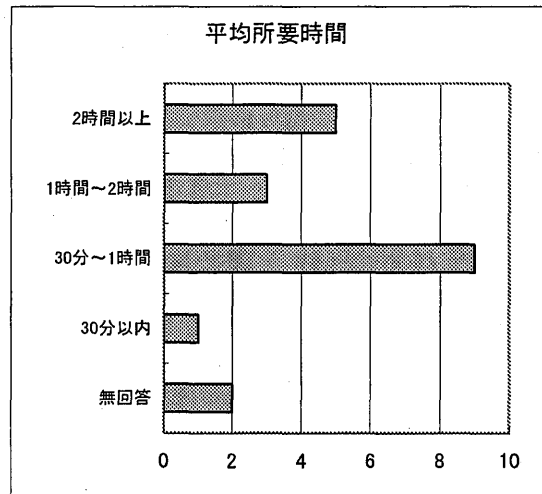


図4-22 その他の外出平均所要時間 (単位:件)

(4) その他の日常的外出時の人数

図4-23に、その他の日常的外出時の入居者、スタッフそれぞれの人数を示す。表1.1-1と対応しているが、1~3人とばらつきが少ない場合は3人と最も多い人数を採用し、1~9人とばらつきが大きい場合にはその人数をまちまちとした。

グラフより、入居者の人数が1~2人で出かける場合が最も多く、続いて3~4人で出かける場合が多い。スタッフも無回答を除けば1~2人で出かける場合が最も多くなっており、買い物や散歩と似た形の外出となっている。

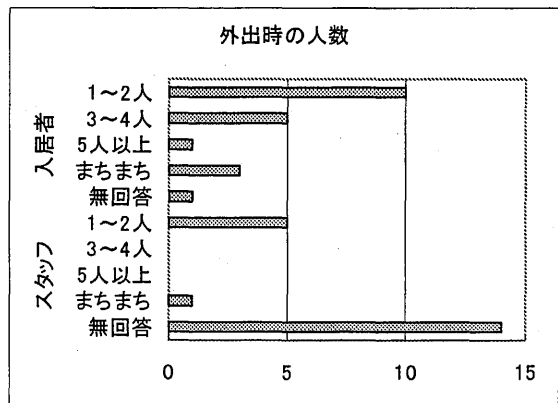


図4-23 その他の日常的外出時の人数 (単位:件)

(5) よく利用する外出手段

図4-24には、外出時によく利用する外出手段を示す(複数回答)。徒歩が圧倒的に多く、全てのグループホームで歩いて外出していた。その他を除けば公共用のバス、電車、ホーム用のバスと続く。その他の内容としては、法人車、タクシー、レンタカー、都電、自家用車等があげられた。

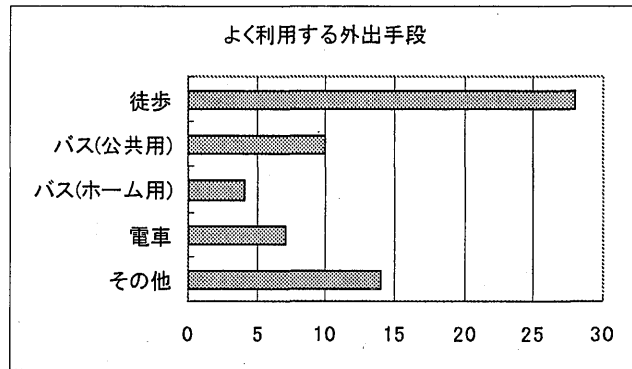


図4-24 よく利用する外出手段 (単位:件)

4-4 地域とのかかわりについての現在の取り組み

4-4-1 地域に根ざしたホームかどうか

図4-25に、グループホームが地域に根ざしていると思うかどうかの結果を示す。

地域に根ざしたホームだと答えたホームが15件、地域に根ざしたホームだとは思わないと答えたホームが11件で、若干、地域に根ざしていると考えているホームが多かった。また、どちらともいえないというホームも2件あった。

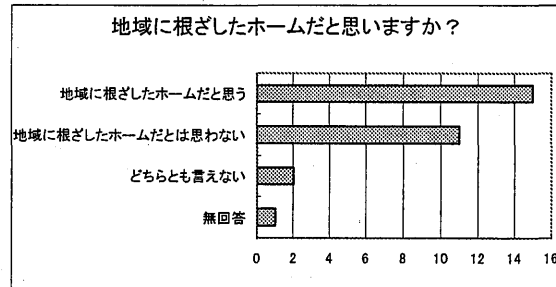


図4-25 地域に根ざしたホームかどうか (単位:件)

■ 地域に根ざしたホームだと思う理由

図4-26に、地域に根ざしたホームだと思う理由を示す。最も多い回答が、あいさつや会話等の日常的な地域の方との交流があることであった。続いて地域の商店街や公園等の資源を使い、その中で地域の人々との交流を図っているためという理由と、行事等への参加によって地域の交流を図っているためという理由が同数の5件であった。

また、「グループホームでの生活は在宅での生活と同じ」という理由では、グループホームが家庭的な環境の下で生活しているという理念に沿って運営しており、グループホームに入居して生活していること自体が、すでに地域に根ざして当然だと考えるホームがあった。

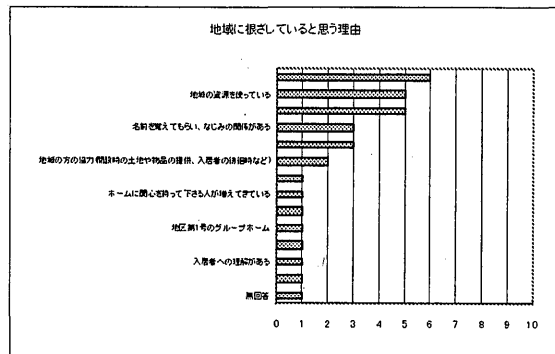


図4-26 地域に根ざしたホームだと思う理由(複数) (単位:件)

■地域に根ざしたホームではないと思う理由

同様に、地域に根ざしたホームではないと思う理由を、図 4-27 に示す。地域に根ざしたホームを目指しているが、まだその準備段階だと答えたホームが最も多く、次いで日常的なかわりがないため、開所から間もないためと答えたホームが続く。地域に根ざしていないと答えたホームの中で、日常的な交流がある程度あっても、「認知症高齢者に対する地域の正しい理解を得るといふ、グループホームの役目」を果たしていないので、地域に根ざしてはいないと答えたホームもあった。また、入居者の側に問題があり、地域とかわりがないため、地域に根ざしていないと答えているホームもみられた。

前項であいさつや会話などの日常的な交流があるため、地域に根ざしているというホームが多かった事も含めて考えると、「地域に根ざす」ということの意味がホームによってあいまいな事が分かる。

■どちらともいえない理由

どちらともいえないと答えたホームが 2 件あり、表 4-2 に、その理由を示す。どちらかといえれば根ざしていないという部類に含まれる。

■経過年数とのクロス集計

図 4-28 より、開設から半年～1年のホームで地域に根ざしていると答えたホームが最も多く、逆に、地域に根ざしていないと答えたホームは半年～1年、1年～5年で同数となっている。経過年数で判断するのではなく、やはり、ホームのスタッフそれぞれの意識の違いにより、ホームが地域に根ざしているかどうかの違いが出てくるのだと思われる。昨年の全国認知症高齢者グループホーム協会の事業による、全国の事業所のとらえる「地域に根ざした」という概念で、全国のグループホームのほとんどが、日常的な交流ではなく行事的な活動を通して地域の人々と交流をしている様子を地域に根ざしたととらえていた事と照らし合わせると、グループホームの整備の進んでいる東京都の職員の意識は、身近に目を向け、ホームと地域がもっと日常的にかかわりを持つことで関係を築いていくべきだといふ、より進んだ段階にあることが分かる。

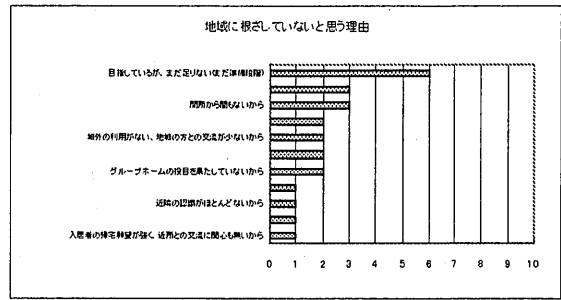


図 4-27 地域に根ざしたホームではないと思う理由(複数) (単位:件)

表 4-2 どちらともいえないと思う理由

どちらともいえないと思う理由	
地域に根ざしたホームを目指すが、まだ足りない、買い物などで地域に出ているが、まだ根ざしたとまではいえない。無 防災訓練等では地域の人と出会うが、その後には続かない。開所から間もないこともある	1
法人の敷地内の特養の6階であるため、法人内を地域と考えた時は法人内の活動では積極的に参加しているが根ざしていると思えず、区内、または町内に根ざしていくよう努める必要があると思う。	1

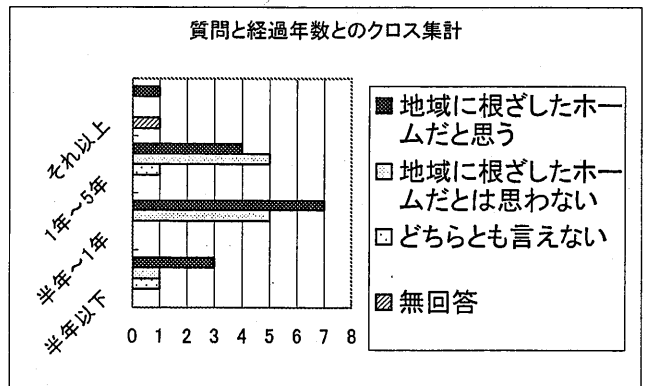


図 4-28 質問とホームの経過年数とのクロス集計 (単位:件)

4-4-2 どのくらい地域に認識されていると思うか

次に、ホームがどれくらい地域に認識されていると思うかを、以下の4つのうち最も当てはまると思うもの1つに○をつけてもらう質問をした。

1 ホーム周辺の住民をはじめ、交流のある人が多いので、良く認識されていると思う

2 交流などは少ないが、名前くらいは知っている人が多いと思う。

3 知っている人は知っていると思うが、地域全体にまでは知られていないと思う

4 ほとんど知られていないと思う

図4-29より、知っている人は知っていると思うが、地域全体にまでは知られていないと思うと答えたホームが14件で、全体の48%を占めていた。4のほとんど知られていないと思うと答えたホームはなく、グループホームがあること、グループホームの入居者のことは、地域のいくらかの人は認識していると、ホーム側でも感じているようである。

この質問に「ホームの認識」について具体的には聞いていないが、前質問の結果をふまえると、スタッフは地域にし、「ホーム自体の存在は地域のいくらかの人に知られているが、入居者や認知症高齢者グループホームに対する地域住民の認識はまだほとんどない」と思っているところが多いということが読み取れる。

4-4-3 ホームの立地環境について

グループホームの立地環境はいいと思うか、そうでないと思うかを、理由と共に回答してもらった。

図4-30より、ホームの立地環境はいいと答えたホームが18件で、全体の63パーセントを占めていた。逆に、立地環境は良くないと答えたホームは7件で24パーセント、どちらともいえないが3件で7パーセントを占める結果となった。

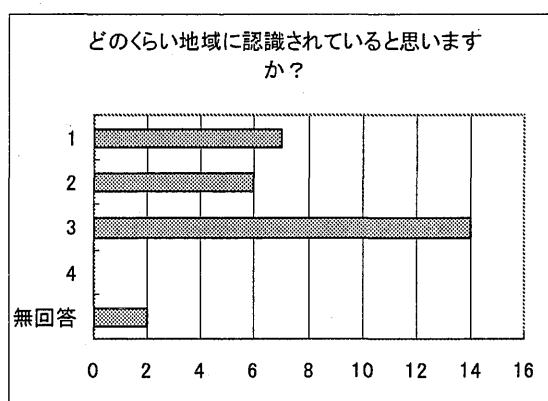


図4-29 どのくらい地域に認識されていると思うか (単位:件)

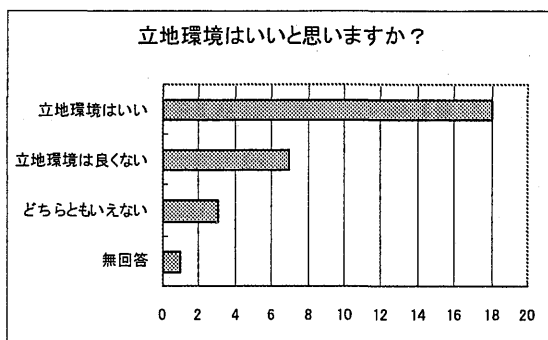


図4-30 ホームの立地環境はいいと思うか (単位:件)

■立地環境がいいと思う理由

図4-31に、ホームの立地環境がいいと思う理由を示す。

生活とかかわる商店街や公園、緑などが周囲にあることを上げたホームが多く、一般的な人が考える、住まいにとっていい立地環境と同じような理由となっている。商店街などの地域資源が「程よい距離」としているのは、「介護するスタッフにとっての立地環境」ではなく、「入居者にとっての立地環境」を第一に、皆が考えており、「スーパーまでの距離が少し離れているので利用者さんの道りがほど良い運動になると思うので」というような回答がいくつか見られた。

■立地環境が良くないと思う理由

同様に、立地環境について良くないという理由を見ると(図4-32参照)、ホーム周辺の交通量の多さ・騒音をあげるホームが多く、車が多い事が入居者の外出に危険だと考えている。つづいて、生活に必要なものを購入する店等がないことを挙げたホームが多かった。「周辺が住宅地らしくない」というのは、住宅地というよりオフィス街に近いという意味である。

■どちらともいえない理由

表4-3より、どちらともいえない理由は、さまざまであった。

4-4-4 これまでの地域とのかかわり

グループホームの職員として、これまでどう地域にかかわってきたか、普段特に気をつけていることや、地域とのかかわりの中でのエピソードなどを自由回答してもらった。

■これまでの地域とのかかわりと現状

図4-33に、これまでの地域とのかかわりと現状についてまとめたものを示す。

最も多かったものは、商店での買い物を通して、ホームの入居者と、店の店員、客が顔見知りになり、交流を図るというものだった。次いで、やはり買い物時などにおいて、店の店員が入居者(認知症高齢者)のことをきちんと理解し、対応してくれたおと答えたホームと、が8件だった。具体的には、「(店の人が)入居者の顔を覚えてくださって、それで〇×ホームの人たちだと判断してく

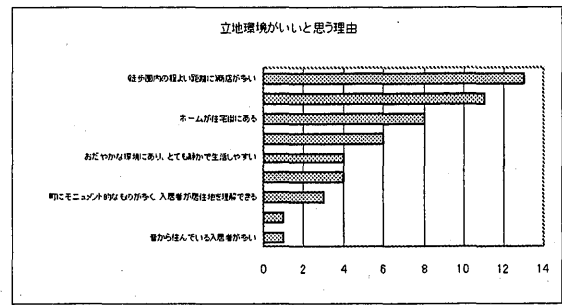


図4-31 ホームの立地環境がいいと思う理由(複数)(単位:件)

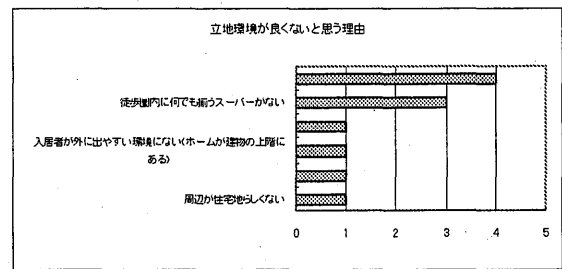


図4-32 ホームの立地環境が良くないと思う理由(複数)(単位:件)

表4-3 どちらともいえない理由

どちらともいえない理由
都会を「好い」と考えるなら、好い環境、そうでないなら「好まない」住環境、どちらの面もあると思います。どこに住もうと。
商店街やスーパーが徒歩圏内にないので不便なこともあるが、身体レベルの高い人には良いこともある。公園や緑が多く、散歩するにはとても良い環境だと思う。
どちらともいえない。入居者がいろいろ行動するには、決まった場所になってしまいがち。買い物等行くが、同じ場所になってしまいがち。

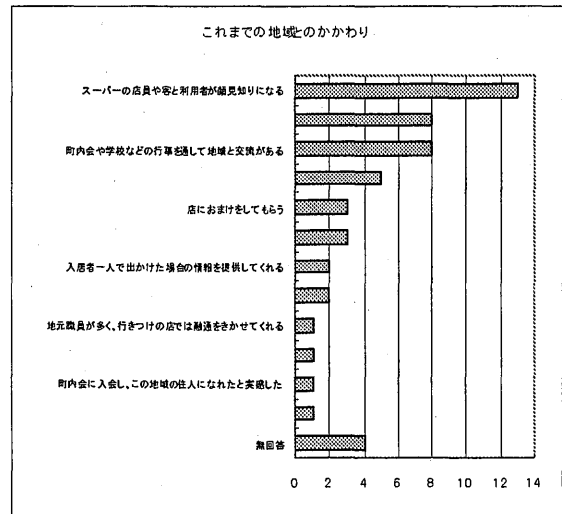


図4-33 これまでの地域とのかかわりと現状 (単位:件)

れた」とか、「買い物に行くと、入居者のことをよく理解して下さり、『何人で来たの?』『何袋に分けるわね』と荷物のことを考慮して下さったり、支払い時に『あと〇〇円よ』『それよ』と支援して下さる」といった内容が多かった。また、町内会や学校などとの行事を通して地域との交流をすると答えたホームも同数の8件であった。次の「散歩や買い物等の外出を通して、地域の方々の交流がある」と答えたホームは5件で、グループホームの日常生活の中で、ホームの周辺の人とかかわる場面としては、「買い物の際、店員と」「地域の行事で周辺住民と」「買い物や散歩等の外出時、周辺住民と」という順序で多くなっているようである。

■ 普段気をつけていること

図4-34に、普段とくに気をつけていることについてのまとめたものを示す。

グループホームのスタッフとしてという意識だけではないだろうが、最も多かったのは、いつもあいさつや声がけをするように心がけているという答えで7件であった。続いて、町会や近隣の学校などの行事に積極的に参加するという内容が6件となっている。私たちが周辺の住民に対して行うこととほとんど同じように、あいさつ、行事等への参加など身近なところから関係を築こうとしている様子が分かる。それ以外の回答としては、平均的に店を使う、ホームの1ヶ月の状況をまとめた冊子などを配っているとなっており、ホームから積極的に地域に働きかけ、関係を築いていっている。

参考までに、ホームのスタッフが普段気をつけていることと、これまでの地域とのかかわりでのエピソードそれぞれの要因に関連があるかを見ていることにする。

図4-35はこれまでの地域とのかかわりと、普段とくに気をつけていることのクロス集計をかけたものである。町会や近隣の学校などの行事に積極的に参加しているというホームの中には、その結果として町内会や学校などの行事を通して地域との交流が多くあるという結果となっており、普段気をつけていることが結果として実をむすんでいる。

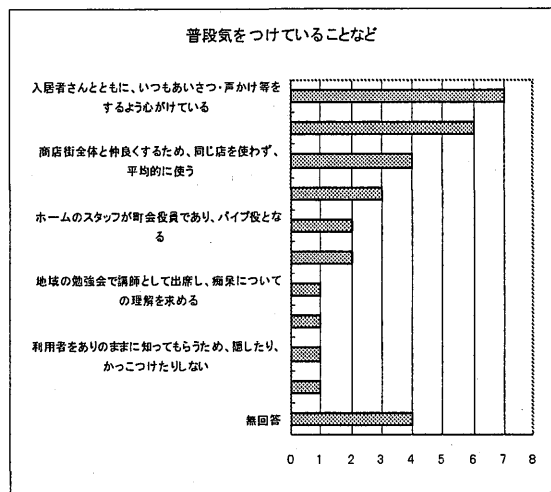


図4-34 普段とくに気をつけていること (単位:件)

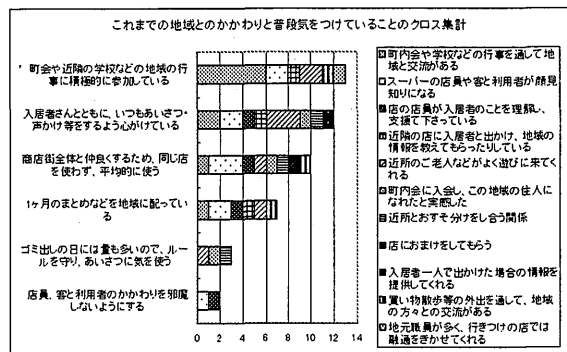


図4-35 これまでの地域とのかかわりと普段とくに気をつけていることのクロス集計 (単位:件)

スーパーの店員や客と利用者が顔見知りになるという結果に対しては、同じ店を使わず、平均的に使うというホームがわずかに、店員や客とホームの入居者が顔見知りになる件数が多かった。それ以外の項目同士は、アンケート記入者が記入しなかったなどの要因も含めて、あまり関連は見られなさそうである。

4-5 グループホームと地域とのかかわりについての意識

4-5-1 グループホームと地域とのかかわりについて

■グループホームと地域とのかかわりの必要性

図4-36に、グループホームと地域との関わりは必要だと思うかについての質問の結果を示す。必要だと思うと答えたホームが28件で全体の94%を占めていた。また、どちらともいえないと答えたホームが1件あった。

■グループホームと地域とのかかわりが必要だと思う理由・必要だとは思わない理由

まず、図4-37に、地域とのかかわりが必要だと思う理由を示す。

最も多かった理由が、人としてかかわりを持つことが「当然」「あたりまえ」のことという理由が8件で、次いで認知症高齢者を正しく理解、受容してもらい、地域全体で支えてもらうホームを目指すため、助け合って安心して暮らすためという理由が6件ずつであった。全体としても、地域とのかかわりがあってこそ、ホームが成り立っていると言う内容の理由が多かった。それ以外の理由としては、「地域にもあたりまえの福祉を見て理解してもらうため」、「入居者の生活圏を広げ、豊かな生活を送るため」のようなお互いにかかわることで、入居者、地域双方にとってプラスになることを述べている理由も3件ずつあった。「職員の緊張感が程よく保たれる」と答えたホームもあり、圧倒的にかかわりが欠かせないと考えているホームがほとんどである。

逆に、「どちらともいえない」と答えたホームは、「利用者の状況により必要性は変わってくるのでどちらとも言えない。強いて選ぶとすると、必

要とは思わない」と答えている。半ば強制的に、入居者と地域とのかかわりを持たせることはしないようにという、本当に入居者本人を考えての回答だった。ちなみに、このホームでは1.2-3の質問では立地環境はよく、地域との交流状況として4-4-4の質問に「3ヶ月に1度ほど、他のホーム・デイと一緒に園芸ボランティアを利用し、園芸会を開いている。また、幼稚園との交流は年に何回か行っている。公園では近所の方と話をしたりしている。」と答えている。

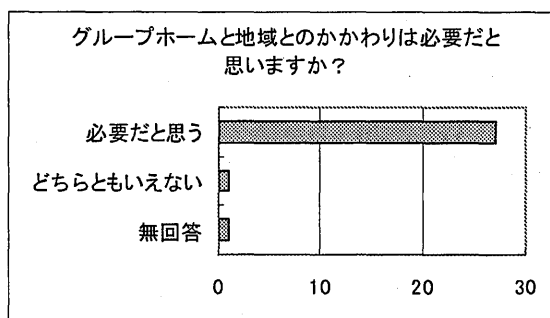


図4-36 グループホームと地域とのかかわりは必要か (単位:件)

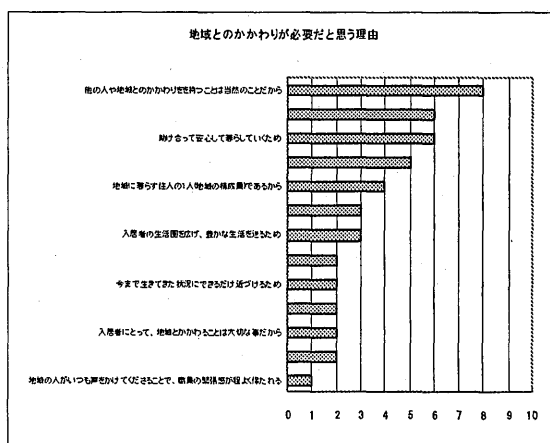


図4-37 地域とのかかわりが必要だと思う理由 (単位:件)

4-5-2 これから地域とどうかかわっていききたいか

「グループホームおよび地域全体をよくするために、これから地域とどうかかわっていききたいと思いませんか」という、自由回答の質問に対する答えについてまとめたものを、図4-38に示す。

図4-38より、最も多かったのは「入居者、地域の方の負担にならない程度にかかわりたい」と「地域に認知症高齢者のさまざまな面を知り、理解してもらおう」という答えが6件ずつであった。続く回答も、「自然体」「普通」というキーワードが出ており、ホーム側、地域側にとっても無理のないように、少しずつ関係を築いていこうと考えているホームが多い。多くのホームが、地域の人に認知症高齢者を理解し、受け入れて欲しいと願っている。

全体的には、もっとホームの側から地域に発信し、関係を築いていこうとしているホームが多かった。

参考までに、4-5-1で地域とのかかわりについて「どちらともいえない」と答えたホームのコメントは、「当面は必要以上の関心を持たれないことが良いと思います。都会で近隣とかかわりを持つことが今以上に求められているとは思いません。」という内容だった。

4-5-3 地域に対して望むこと

■地域に対して望むことはあるか

「グループホームおよび地域全体を良くするために、ホーム周辺の住民や商店の方に対して望むことはありますか？」という質問と、あるというホームにはその内容を回答してもらった。結果を図4-39に示す。

図より、「望むことがある」と答えたホームが16件、「特に望むことはない」と答えたホームが4件、「どちらともいえない」と答えたホームが2件であった。

「特に望むことはない」と答えたホームの中で、その理由として「普通の暮らしの中で少しずつ理解してもらえば、一番自然と思っているので特にない」と答えたホームが1件あり、それ以外は理由等未記入であった。

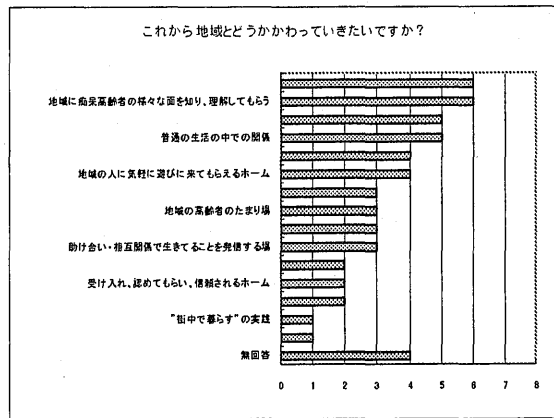


図4-38 これから地域とどうかかわっていききたいか (単位:件)

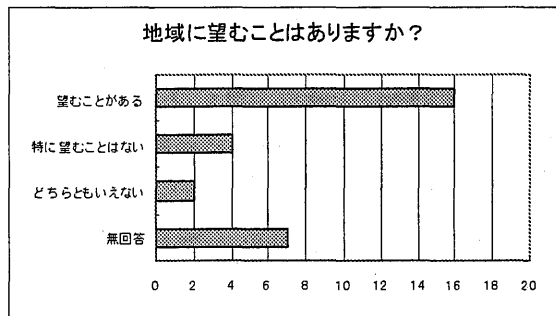


図4-39 ホーム周辺の住民や商店の方に対して望むことはあるか (単位:件)

また、「どちらともいえない」と答えたホーム2件の理由は「どちらともいえない。ご理解を頂くのは、こちら側の接し方にもかかわっている。人として、不自由さをもつ方への配慮は望まれることと思う」「今のところ、判断しかねます」というものであった。

■地域に対してどんな事を望むか

図4-40より、「認知症の理解と受容(あたりまえのこととして)」をあげるホームが最も多く8件であり、これまでの質問からも、地域に認知症の理解をしてもらうことがホームの課題と受け止めているホームが多いようである。続いて、「地域住民と入居者の自然なあいさつ、気軽な会話」が4件、「入居者行方不明時の捜索、一人での外出時の協力」が2件と続き、普段は入居者を影ながら見守り、もしもの場合に協力をして欲しいと思っている。

どのホームでも、特別何かしてほしいというより、普段我々が近所の人や地域の方々とかかわるように「普通」に接してもらうことを望んでいる。

4-6 地域に根ざさない理由に関する考察

4-6-1 東京23区グループホームの基本属性

表4-4に、第1章で取り扱った東京都23区のグループホームの調査対象の属性をまとめておく。それぞれ、区、用途地域、経過年数、買い物頻度、散歩頻度別に示してある。

用途地域は「東京都都市整備局の都市計画情報インターネット提供サービス」より調査した。

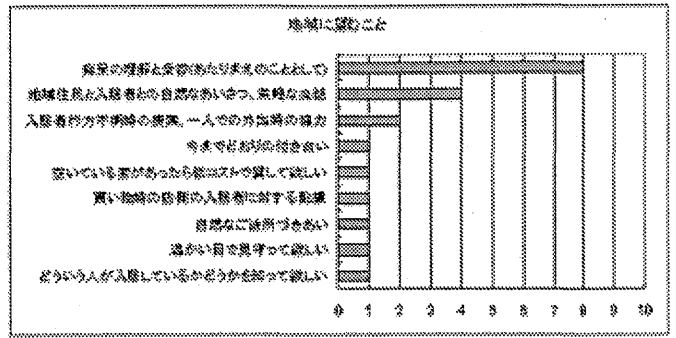


図4-40 ホーム周辺の住民や商店の方に対してどんなことを望むか (単位:件)

表4-4 東京都23区調査対象
グループホームの基本属性のまとめ

区	
千代田区	1
台東区	2
新宿区	1
世田谷区	2
文京区	1
杉並区	2
墨田区	1
板橋区	2
品川区	1
練馬区	2
豊島区	1
葛飾区	2
荒川区	1
大田区	3
江戸川区	1
足立区	6
用途地域	
第1種住居地域	9
第1種中高層住居専用地域	7
第1種低層住居専用地域	6
商業地域	2
近隣商業地域	3
工業地域	1
準工業地域	1
経過年数	
半年以下	5
半年～1年	12
1年～5年	10
それ以上	2
買い物頻度	
ほぼ毎日	13
週5～6日	7
週3～4日	3
週1～2日	4
無回答	1
散歩頻度	
ほぼ毎日	13
週5～6日	7
週3～4日	3
週1～2日	4
無回答	1

4-6-2 基本属性×地域に根ざしているかどうか (+地域に根ざしていないと答えたホームの理由)

第1章で行った東京都23区グループホームへのアンケートで、地域に根ざしているかどうかと、根ざしていないと答えたホームの理由を、基本属性とクロス集計した結果を、表4.2-2に示す。

表より、地域に根ざしているかどうかを用途地域で比較しても、それほど大きい差は見られない。また、経過年数で比較すると、経過半年～1年と1年～5年にサンプルが集中しているが、地域に根ざしていると答えたホームがやや多い。また、半年以下、5年以上のホームでも、地域に根ざしていると答えるホームが多くなっている。第1章でもクロス集計で見たように、経過年数で判断するのではなく、やはり、ホームのスタッフそれぞれの意識の違いにより、ホームが地域に根ざしているかどうかの違いが出ている。

買い物や散歩の頻度と、ホームが地域に根ざしているかを比較すると、買い物はほぼ毎日行っているホームの方が地域に根ざしていると答える人が多いが、散歩は毎日行っているにも地域に根ざしているとは思えないと答える人が多い。→(結果として)地域に根ざしていると答える人は、買い物は散歩よりも頻繁に行っている。買い物は必ず店の人とかかわるため、外出の中では散歩よりも地域の人と交流の場も多く、より地域とのかかわりが持てる場なのだろう。

グラフ右の方は、地域に根ざしていないと答えたホームの理由と属性をクロス集計した部分である。左側は時間的な要因、右側はホームの目標が未達成という要因に分けてみた。最も多い理由は「目指しているがまだ足りない」と答えるホームで、散歩や外出をほぼ毎日、積極的に行っているが、まだ経過半年～1年のホームに多く見られる。続いて「開所から間もないから」「地域行事以外の日常のかかわりがないから」の理由が同数で多く、「開所から間もないから」の理由の属性は、やはり買い物や散歩はほぼ毎日行っているが、経過年数はまだ半年～1年ほどのホームが多い。「地域行事以外の日常のかかわりがないから」と答えたホームは「域外の利用がない、地域の方と

の交流が少ない」も含めて開設から1～5年を経過しているところと意外であった。経過からある程度の時間が経っても、まだ住民と交流が持てていないホームもまだあるようだ。「グループホームの役目をまだ果たしていない」と積極的な理由を答えているホームは、経過半年～1年、買い物、散歩ともに毎日積極的に行っているホームである。

4-6-3 基本属性×今後、地域とどうかかわって いきたいか

表4.2-3に、東京都23区調査対象グループホームの基本属性と、今後、地域とどうかかわっていきたいかについてのクロス集計を示す。

表の左側は、どちらかといえば、今までの関係をベースにし、普通の生活の中で時間をかけてゆっくり関係を築いていこうとする「自然な形での地域とのかかわり」とし、右側は単に地域と交流するだけではなく、ホームや認知症高齢者を認知、受け入れ、理解してもらおうという目標を持って交流しようという「認知症の理解・ホームの受け入れ」を目指すグループとした。

表4.2-3より、用途地域別では大きな差は見られなかった。左側の「普通の生活の中での普通の関係」を目標にしているところは、経過年数が半年以下～5年くらいの間にあるホームで、買い物をほぼ毎日、散歩は週3～4回、ほぼ毎日の属性にみられる。毎日買い物や散歩をするこれまでの生活の中で、普通の関係を築いていこうという考えのようだ。また、同じような傾向は「自然体の、持ちつ持たれつの関係」「入居者、地域の方の負担にならない程度にかかわりたい」にも見られる。反対に右側の「地域に認知症高齢者のさまざまな面を知り、理解してもらおう」「受け入れ、認めてもらい、信頼されるホーム」にも、やはり経過半年～5年の間、買い物ほぼ毎日、散歩も週5～6回、毎日の傾向があるようだ。経過年数5年以上を経過しているホームは、この質問葉無回答であった。

全体的に、買い物や散歩など積極的に外出を行っているホームは「毎日の生活で地域の資源を有効に使い、地域住民と積極的に交流する(買い物、

散歩頻繁に)」→「このまま無理のない(入居者、地域住民双方の負担にならない程度の)関係の中で」→「地域住民に認知症高齢者やグループホームを理解し、受け入れ、認めてもらう」という流れができているようだ。

ちなみに、散歩の頻度が少ないホームのサンプル数はあまり多くないが、頻度が週1~2回程度の属性の回答としては「無理ではなく、ゆっくりと」「自然体の、持ちつ持たれつの関係」「行事・イベントへの積極的な参加」「ボランティアの方々と交流、受け入れ」等の回答が見られ、積極的な外出を行いたいにしても、入居者の身体状況等の関係もあり、あまり外出できていないということ踏まえれば、「まず、入居者を第一に考え、無理をせず」→「日常的に地域との交流はまだ難しいが」→「行事等での地域との交流やボランティアとの交流から」→「地域に認知症高齢者のさまざまな面を知り、理解してもらおう」という流れができている。

4-6-4 地域に根ざしていない理由×今後、地域とどうかかわっていきたいか

表4.2-4には、地域に根ざしていないと答えるホームの理由と、今後、地域とどのようにかかわっていきたいかのクロス集計を示す。

全体的には3つの傾向に分けられる。

「グループホームの役目を果たしていない」と目標を持っているホームは「積極的にホームを地域の高齢者のたまり場となるように、また、ボランティアなどを受け入れ、ボランティアや地域の人気が軽に遊びに来てもらえるようにし」→「地域の人も気軽に遊びに来てもらえるホームとなるようにして」→「地域に認知症高齢者のさまざまな面を理解してもらおう」という流れで取り組んでいこうとしている。

「目指しているがまだ足りない」「開所から間もない」という理由のホームは「まず、普通の生活の中の、自然体で」→「入居者、地域双方に無理のないように少しずつ関係を築き」→「地域の高齢者のたまり場として地域の人に気軽に遊びに来てもらえるホームを目指し」→「最終的には地域に認知症高齢者を理解してもらおう」という流

れができている。

入居者に理由があつてなかなか関係の築けない「入居者に帰宅願望が強く、近所との交流に関心がない」「入居者にとってホームが住まいという認識がない」という理由のホームは「とりあえず、無理にではなくゆっくりと」→「自然体の、持ちつ持たれつ関係を築く」ということを目標としており、認知症高齢者の理解やホームを受け入れてもらうところまでは考えていないようである。

4-7 まとめ

- 回答して下さった29のホームの入居者のうち、全体の約半分の入居者が一週間で、ほぼ毎日外出をしていることが分かった。
- 買い物、散歩ともに6割のホームが、1週間にほぼ毎日出かけていた。所要時間は買い物、散歩とも30分~1時間くらいが最も多かった。
- 地域に根ざしたホームだと答えたホームは全29件中、15件で51%、地域に根ざしたホームだとは思わないと答えたホームが11件で38%だった。根ざしている理由として「あいさつや会話等の日常的な地域の方との交流があること」が最も多く、逆に、地域に根ざしていない理由としては、「地域に根ざしたホームを目指しているが、まだその準備段階」だと答えたホームが最も多かった。全体的には「地域に根ざす」ということの意味がホームによって異なっており、はっきりした基準は見られなかった。
- 昨年の全国に行ったアンケートと比較すると、「地域に根ざしたホーム」という概念は、全国のグループホームのほとんどが、日常的な交流ではなく行事的な活動を通して地域の人々と交流をしている様子を抱いていたのに対し、東京都の職員の意識は、身近に目を向け、ホームと地域がもっと日常的にかかわりを持つことで築かれる関係を地域に根ざしているのとらえていた。
- ホームの立地環境はいいと答えたホームが18件で、全体の63パーセント、立地環境は良くないと答えたホームは7件で24パーセント、

どちらともいえないが3件で7パーセントを占める結果となった。立地環境がいい理由は、生活とかかわる商店街や公園・緑などが周囲にあることをあげたホームが最も多く、立地環境が良くない理由の第1位は交通量の多さ、騒音についてだった。

■グループホームと地域との関わりは必要だと思うかについての質問では、必要だと思うと答えたホームが28件で全体の94%を占めていた。その理由は、人としてかかわりを持つことが「当然」「あたりまえ」のことという理由や認知症高齢者を正しく理解・受容してもらうためといった理由が多かった。ごく少数ながら、「どちらかといえば地域との関わりは必要だと思わない」と考えるホームもあり、「必要以上の関心を持たれないことが良い」という意見だった。

■これから同地域とかかわっていききたいと思うかという質問では、「入居者、地域の方の負担にならない程度にかかわりたい」と「地域に認知症高齢者のさまざまな面を知り、理解してもらう」という答えが最も多く、地域の人々との自然なかかわりの中で、もっとホームの側から地域に発信し、関係を築いていこうと考えているホームが多かった。

■地域に対して望むこととして、「認知症の理解と受容(あたりまえのこととして)」という答えが一番多く、続いて、「地域住民と入居者の自然なあいさつ、気軽な会話」、「入居者行方不明時の捜索、一人での外出時の協力」と続き、地域の人に普段は入居者を影ながら見守り、もしもの場合に協力をして欲しいと思っているホームがほとんどであった。

第5章 グループホームスタッフの周辺地域に対する認識

5-1 研究の目的と方法

5-1-1 研究の目的

ここでは、立地条件、経過年数等がある程度異なる東京都の4つのホーム以外に、神奈川県川崎市にあるホームを1つ加え、計5箇所のグループホームを対象に、そこで働くスタッフ、にアンケートを行い、具体的に周辺地域との関係をどのようにとらえているかを把握することを目的としている。

5-1-2 調査の方法

ホームのスタッフへのアンケートは、23区のグループホームへ行ったアンケートをもとに、以下のような構成でさらに少し掘り下げた質問を行った。

- ①グループホームスタッフの基本属性(年齢、性別、勤続年数等)
- ②入居者の外出・地域資源の利用と、地域とのかかわりの現状
- ③これからの地域とのかかわりと、地域に対して望むこと

グループホーム周辺の住民に対するアンケートの構成は以下の通り。

- ①グループホーム周辺の地域住民の基本属性と買い物について
- ②地域住民のグループホームに対する認識調査
- ③高齢社会に対する意識
- ④グループホームとのこれからのかかわりについて

5-1-3 調査対象施設の概要

■調査対象

東京都 23区認知症対応型共同生活介護(認知症高齢者グループホーム)

(東京都介護サービス情報ホームページによる検索) 80事業所のうち、代表の4ホーム(Aホーム～Dホーム)と神奈川県川崎市にある1ホームで働くスタッフ

■回答数

- Aホーム…5件(100%)
- Bホーム…11件(64.7%)
- Cホーム…13件(不明)
- Dホーム…9件(64.3%)
- Eホーム…3件(50%)
- 計41件

5-2 調査対象5 ホームの基礎データ

5-2-1 調査対象5 施設の概要

■5つのホームの概観・所在地・開設年月・ユニット数・用途地域・ホームの状況

外観					
所在地	東京都練馬区	東京都足立区	東京都台東区	東京都板橋区	神奈川県川崎市
開設年月	平成12年入居開始	平成16年6月入居開始	平成16年4月入居開始	平成13年6月入居開始	平成15年9月入居開始
ユニット数(定員)	定員6名	2ユニット(18名)	3ユニット(27名)	2ユニット(18名)	入居者8名
用途地域	第1種低層住居専用地域	第1種住居地域	商業地域	第1種中高層住居 専用地域	第2種住居地域
周辺の用途地域	第1種中高層住居専用地域 近隣商業地域	近隣商業地域 第2種中高層住居専用地域	第1種住居地域 近隣商業地域	第1種住居地域 第1種低層住居専用地域	第2種住居地域
ホームの状況	民家改修型のグループホームであり、宅老所からスタート。住宅地に溶けこむように、ごく自然に建っている。すぐ近くに商店街・駅があり、生活に便利。	ホームは工場の跡地で、周辺は住宅地。荒川の土手沿いに面しており、ホームの近くには大きな商店街が2つある。周りは高齢者の多い地域。	周りはマンションや事務所が多く、コンビニ、商店街等は離れたところにある。地上6階建ての建物の、2,3,4階がグループホーム。1階はホームヘルプステーション、5,6階はデイサービスセンター。	周りはマンションや住宅地が多い。併設施設として、クリニック(通所リハビリテーション施設)がある。また、現在隣に特別養護老人ホームを建設中。	民家改修型のグループホームで、周りも一軒家の住宅地が多くなっている。すぐ近くには、個人経営の八百屋と肉屋、雑貨屋などがある。

■A ホームの概要

- ・平成11年4月から任意団体として活動
- ・平成11年10月NPO法人格取得
- ・平成12年9月介護保険指定事業者となる
- ・のんびりゆったりとした生活。食事もスタッフが作っていた→いいところだが退屈
今は入居者にも台所に立ち、できることをやってもら(焼くことは出来ないが煮ることはできるなど)
- ・近所付き合いについては、掃除のときによく話す
- ・商店街とは、自然にお得意さんになった
- ・大きい外泊の外出は年1回位行い、これまでは富士山、横浜方面など。次はディズニーシーを予定している
- ・面会は週に1回～月1回くらい
- ・3ヶ月に1回、家族会を行う
- ・ホーム周辺の様子



ホームは閑静な住宅街に立つ。グループホームも民家改修型なので、自然に溶け込んでいる(うっかりすると見つけにくい(笑))



毎日の生活に必要な買い物は、ほとんどこの商店(民家)街でそろそろ。入居者のほとんどはホームまでの道を覚えている。買い物時は商店街の方々に見守られているようである。

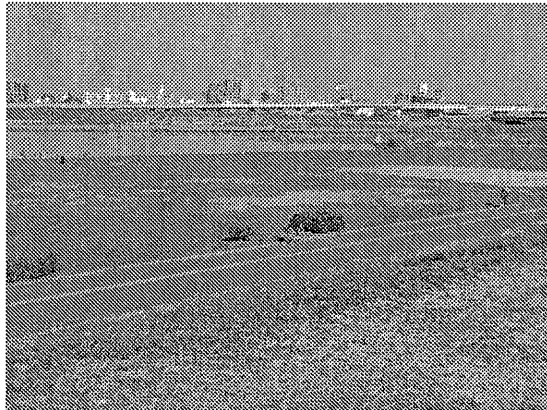
■B ホームの概要

- ・平成15年の春から計画開始。8月申請。12月に工事を開始し、3月にできた。
- 1ユニット3千万円の補助金(区からではなく、東京都から)平成16年6月開設。もともとは工場の跡地で、何を造るか話し合われた結果、高齢者の多いこの地域にグループホームを設立することになった
- 町内会をはじめは反対。「もともと高齢者の多いところにお年寄りを集めるより、若い人が入れるアパートでも造って、街を活性化したほうがいい」など。しかし、ホーム側の努力により開設の祝賀会の時には、快く受け入れてくれた。開設式には、地域の人にも見に来てもらう。商店街もホーム長が1件1件まわってあいさつ。
- ・隣の工場にも、初めは敬遠されていたが、今は工場働く人が部屋にいる入居者と手を振りあいさつを交わす仲にまでなっている。
- ・設計の素案は、建築士ではなく、介護に携わる職員がこれまでの経験を元に行った→役所に反対もされたが、納得してもらい、現在その設計でホームが建てられている
- ・スタッフ達は街を覚えるために、自ら歩いてホーム周辺の地図を作成した。
- ・入居開始から、入居者が買い物や散歩など外出する姿を見て、地域の住民や商店街の人たちも普通の人だと受け入れる。
- ・月に1度、ホームの「1ヶ月のまとめ」を30部ほど地域に配っている



ホーム近くの商店街。顔なじみの店が並ぶ。品物をホームまで配達してくれる店も。途中で出会う人とも、あいさつを交わす。

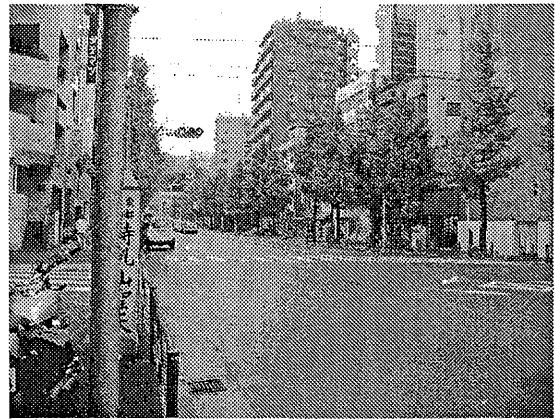
ホームの前は交通が激しい道路だが、坂を登れば荒



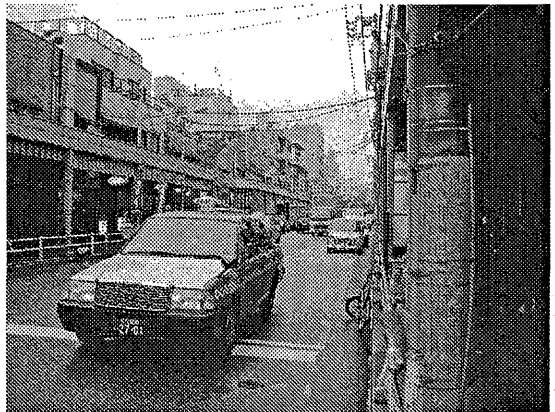
川が流れ、ここで散歩や釣りをする人も多く見られる。夏はホームの中から花火が見える。

■C ホームの概要

- ・平成16年4月1日オープン。グループホームは3ユニットあり、3階が一番元気な人、2階がちょっと元気な人、4階はADLが最も低い人たちが入居。
- ・デイサービスセンターを複合しており、一緒にご飯を食べてダンスをしたりなど、デイとの交流もある。
- ・ホームができる前は、この周辺にあいさつをして回った。また、A4のちらしを通り浴いや、よく使いそうだと思う商店に配布。近くの三角地域には、全てあいさつと説明をする。その際、「老人ホームなんか入らないよ、いらぬ」と勧誘と勘違いされ、断られたこともあり。グループホームは何なのかを分かっている。
- ・商店からの反応
→快く引き受けてくれた。もしかしたら入居者が商品を持って帰ってしまうかもしれないなど、その対応も含め、説明をした。
- ・今は、八百屋さんなどの配達がある。
- ・デイでも買い物に行っている。買う→作る→食べる
- ・行事は、誕生会、オカリナ演奏会(デイとの交流)、3ヶ月に1度の家族との交流など
- ・6階に多目的スペースがあり、地域に無料開放している
- ・3階の入居者は、水上バスに乗ってお台場や、電車に乗って国技館に行ったことも。



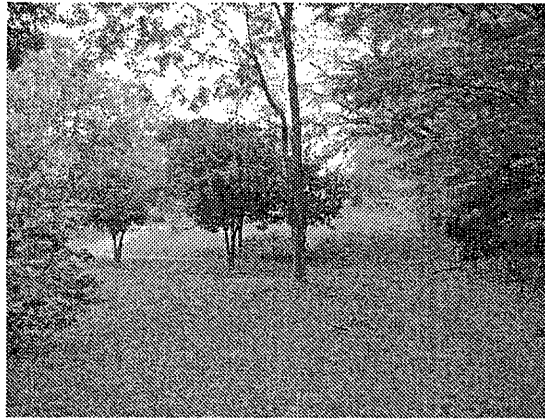
ホームの目の前は交通量が多く、結構危ない。



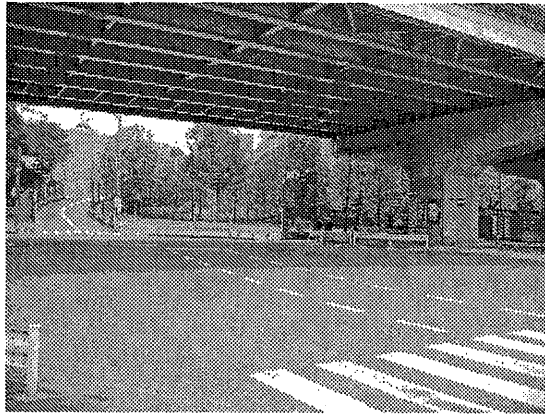
ホームのまわりに商店はほとんどなく、この商店街まで来るのにも、横断歩道をいくつも渡ったり。でも、入居者にとっては良い運動??

■D ホームの概要

- ・平成13年6月1日開設。
- ・鉄筋コンクリート造り、地上4階建てのうち、3階および4階部分がグループホーム。
- ・2階にはクリニック(内科/外科他)が併設されている。
- ・開設にあたり、地域から特に反対の声はなかった。クリニックを併設しているので、グループホームといっても、周辺には病院と思われている(多分今も)。
- ・立地環境としては、坂が多く、店に行くにも大変。車椅子の人はいないが、シルバーカー利用の人がいる。また、周囲には何もなく、店まで遠く、近隣との付き合いが難しい。公園や緑は近くにあっというと思う。
- ・外出に関しては、ホーム開設時と比べ、足腰が弱くなっている感じがする。認知症は抑えられている感じ。
- ・よく行くパン屋さん、商店街の人には「D ホームの人」という認識がある(オープンの時もあいさつに行った)。
- ・グループホームのことを周囲に知らせることについては、特に何もしていないが、入居者の家族に対しては、4ヶ月に1度、新聞を発行し、配布している。



ホームから商店街に行くまでには、こんな大きな道路を渡らなくてはならない。



ホームの周辺には公園や緑が多い。散歩などするにはとてもいい環境。

■E ホームの概要

- ・平成15年9月オープン。現在入居者は8人だが、入れ替わりあり(平成16年12月現在)
- ・民家改修型のホームであり、一軒家だったところに夫婦と、息子さん、娘さん2人が住んでいたが、奥さんと息子さんが亡くなり、娘さん2人も嫁に行ってしまう、旦那さんが一人暮らしをしていた。その後、旦那さんは施設に入り、この家も2年半空いていた。そこへ、この法人の会長が、グループホームを作ろうと立ち上がる。
- ・平成15年7月～8月で改修を行った。庭の草は伸び、家の中はガタガタ、道具も置きっぱなしの状態からのスタートだった。ホームがオープンしてから、使える物は利用し、壇飾りのお雛様や、節句の兜などもある。
- ・現在、食事主に会社の配色センターから支給され、足りないものをホームで調理している。
- ・初めは、周囲は老人ホームのような施設で反対しており、認知症に対する理解はなかった。そんな中、入居者が外に出て買い物、散歩をしたり、ホームの見学会を行ったりし、次第に理解されるようになった。
- ・見学や利用希望者は結構いる。入居者の姿を見てもらったり、懇談会などを開催することで、地域に変化があり、認知症高齢者への理解が伝わったのだと感じる。



ホーム周辺は住宅地となっており、静かで生活しやすい。



すぐ近くの八百屋には犬がいて、91歳の入居者のおばあさんがよく会いに行く。

■入居者の入居前の住まいとスタッフの自宅

図5-1に、5つのホームの、入居者の入居前の住まいとスタッフの自宅の図を示す。

Bホームでは、11人の入居者がホームのある地域内出身で、最も多くなっている。Cホームの入居者は全員(※ここでの人数は、最も要介護度の低いユニットでの人数)が県内のホームのある区外出身である。Eホームは、5ホームのうち、最も都・県外の出身者が多い。

スタッフについて見ると、全体的には都・県内が自宅にある人が多く、又、どのホームにも都・県外から通っている人が数人いる。

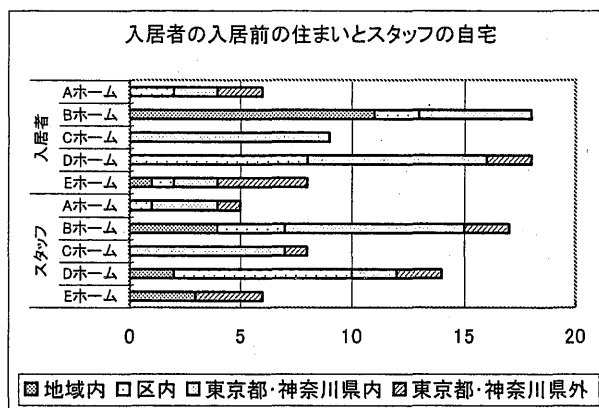


図 5-1 入居者の入居前の住まいとスタッフの自宅 (単位:人)

5-2-2 アンケート回答者の基本属性

■年齢

図5-2より、A～Dホームでは20才代の人が約半分を占めており、比較的若い人が多い。続いて多いのは30歳代である。50才代、60才代の人若干見られる。

■性別

図5-3より、どのホームも6割以上が女性を占めていることが分かる。逆に、どのホームも3割は男性という結果であるので、男性も介護に携わる人が増えてきている。

なお、これはあくまでもアンケート記入者の属性であるから、ホームのスタッフの、性別構成の実態を示したものではない。

■年齢と性別のクロス集計

図5-4より、全体的に最も多い属性として20才代の女性があげられる。AホームとEホームでは1里ずつだが、B、C、Dのホームで3人ずついる。また、20才代の男性の数も全体的に多い。

BホームとCホームでは、30才代と40才代の女性が他のホームに比べて多くいる。

■勤務年数

図5-5に、各グループホームのスタッフの勤務年数を示す。BホームとCホームはまだ開設後1年未満であることを踏まえ、それ以外の3つのホームを見してみる。Dホームで3年以上長く勤めているスタッフが全ホームの中で最も多い。また、Aホームはグループホームとしての開設から4年以上が経過しているが、3年以上勤務している人が2人、比較的新しいスタッフも数人いる。

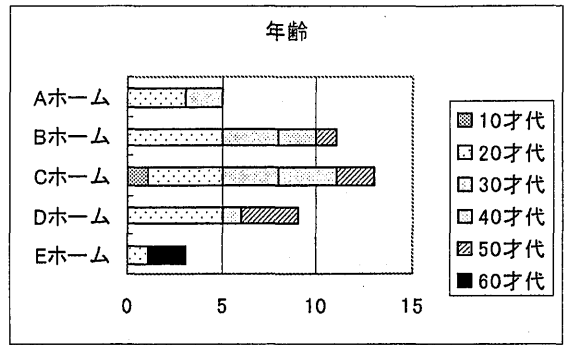


図5-2 アンケート記入者の年齢 (単位;人)

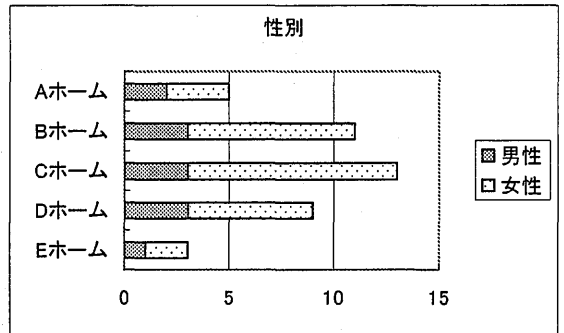


図5-3 アンケート記入者の性別 (単位;人)

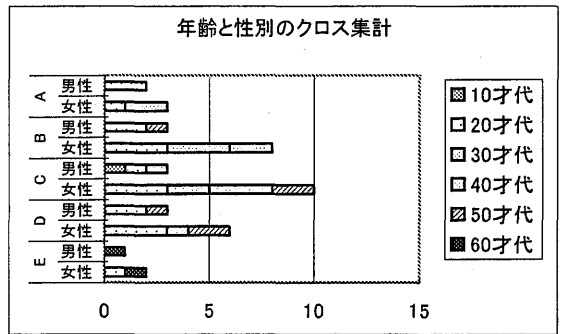


図5-4 アンケート記入者の年齢と性別のクロス集計 (単位;人)

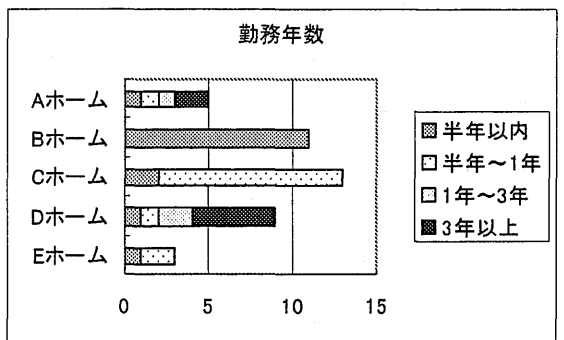


図5-5 アンケート記入者のホーム勤務年数 (単位;人)

■職業経験

図5-6より、グループホームスタッフとしての仕事に就いて半年以内の人は、AホームとCホームで1人、Bホームで5人となっている。Cホームでは半年～1年経過したスタッフが10名で最も多く、Dホームでは1年以上経過しているスタッフが8人と約9割を占めている。

■通勤時間

図5-7に、スタッフの通勤時間を示す。全体的には自宅からホームまで30分以内の人が多く、54%を占めている。続いて、30分～1時間の人が34%と続く。1時間以上かかる人は、Bホームに2人とEホームに1人見られる

参考までに、通勤手段は近い人では徒歩、自転車、原付遠い人では電車+徒歩や電車+自転車+徒歩、電車+バス+徒歩というような組み合わせがあった。手段の種類が多い人では、「東京モノレール+山手線+常磐線+自転車」という組み合わせでの通勤をする人も見られた。

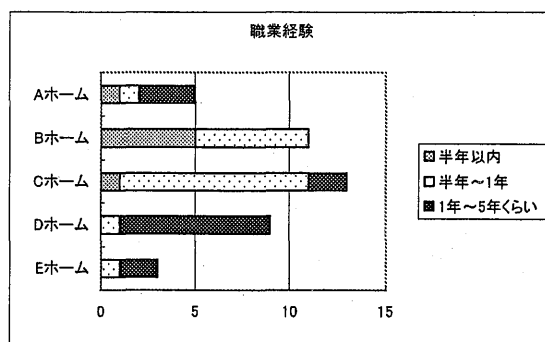


図5-6 アンケート記入者の職業経験年数 (単位:人)

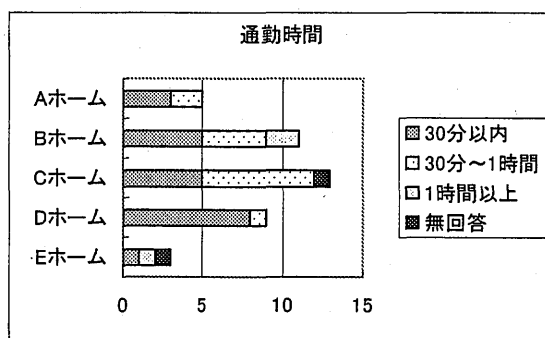


図5-7 アンケート記入者の通勤時間 (単位:人)

■グループホームでの介護の仕事に就こうと思った理由

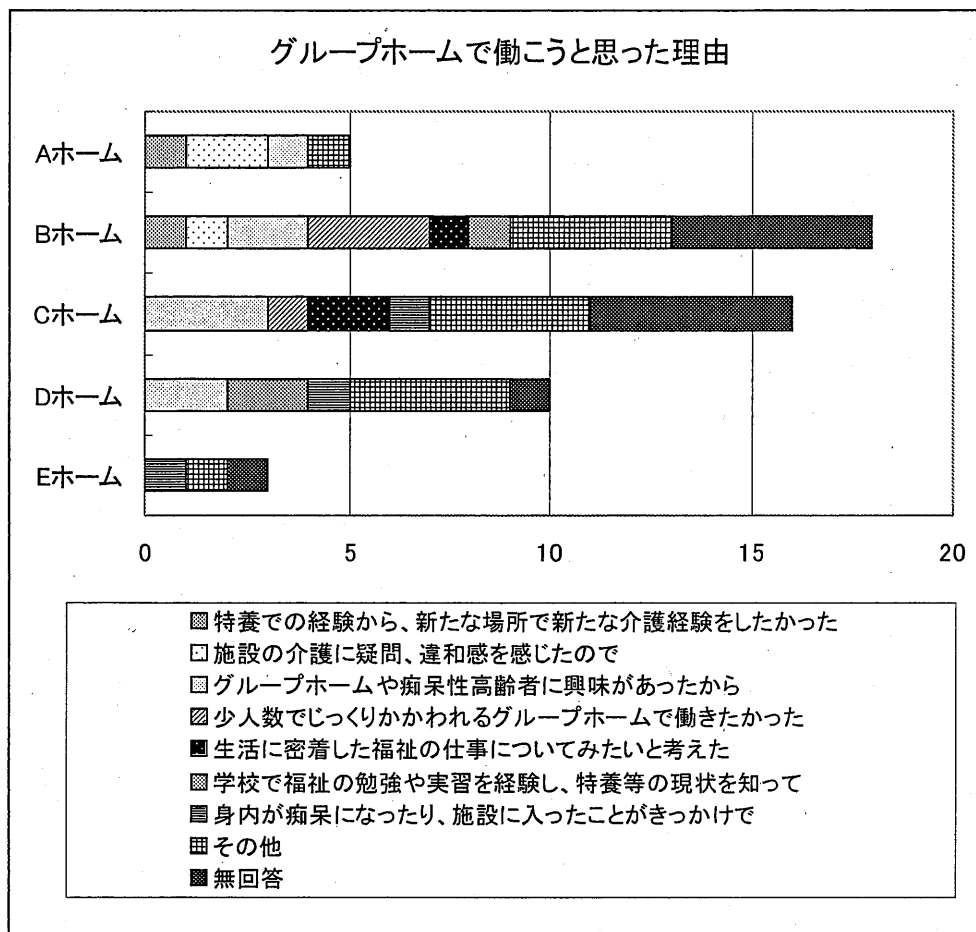


図 5-8 グループホームで働こうと思った理由(複数) (単位:人)

「なぜ、グループホームの介護スタッフになろうと思いましたが？何かきっかけなどありましたら、差し支えない範囲で教えて下さい」という、自由記入の質問に対する答えを、図 5-8 に示す。その他を除けば、最も多いのは「グループホームや認知症高齢者に興味があったから」という理由で、次いで「少人数でじっくりかかわれるグループホームで働きたかった」「(特養などの)施設での介護に疑問を感じた」「生活の仕事に密着した仕事についてみたいと考えた」と続く。以前、特養で働いていた人では「入居者とじっくり関われる時間がなく、残念に思っていた」という思いからグループホームに転職する人が多く、また、医薬品、老人介護用品や健康食品などを取り扱った仕事に就いていた人は「医療全体についてや、

高齢者の方は実際どのような病気になり生活を送っているのか、また防ぐ方法はないのか、また、リハビリなどについて興味をもち、生活に密着した福祉の仕事についてみたいと考え、選びました」と回答していた。

また、以下表 5-1 に、その他に該当する理由一覧を示す。この中でも、特養よりグループホームで働きたかったと答えている人がいる。

表 5-1 その他の理由

その他の内容	
Aホーム	高齢化社会より不景気がなそうなため
Bホーム	大型施設では働きたくないと思い、グループホームの存在を知ってからグループホームで働きたいと思い始めた。 グループホームの勤務について、とくに動機はない。人に紹介されて入職することになった。グループホームに勤めて、私たちのやろうとしている支援は、特別なものではなく、施設でも在宅でも変わらないものだと感じている。 特養のように規則がなく、入居者の意思を大切にしながら働けるので。
	初めは、徳用の勤務を入社前に希望していたが、勤務場所がグループホームになり、全く実習でも経験のないところでとても戸惑いました。しかし、今はグループホームに勤務できてとてもよかったですと思っています。
Cホーム	お年寄りの生活や終いの住家については子供の頃から疑問や関心のあったことです。介護の問題は自分にとって現在進行形の問題です。専門的な技術や知識を身につけたいと思いグループホームを希望しました。 新規オープンということで、未経験の私にも1から教えていただけるのではないかと思います。
	なるべく、家庭に近い環境の下で働きたかった為。
	福祉の世界をいろいろと実感したかったので。社内での公募があったので。 理念に共感できた為。
Dホーム	無限の可能性を感じたからです。
	自分の親が亡くなっている為、もし生きていたら・・・と思い、ヘルパーの資格を取った。 自転車に乗れない。自宅に近い。
Eホーム	ヘルパーになって1年です。この施設で働いて初めての経験をたくさんしています。

5-3 グループホームの外出・地域利用状況

5-3-1 日常的外出頻度

図 5-9 に、それぞれのホームの入居者の、一週間の外出頻度を示す。

A ホームと D ホームで、ほぼ毎日出かける人がホーム全体の 8 割以上となっている。C ホームは、ユニットにより入居者の要介護度が大きく分かれており、図 5-9 で示しているものは、ホーム全体での人数を表わしている。

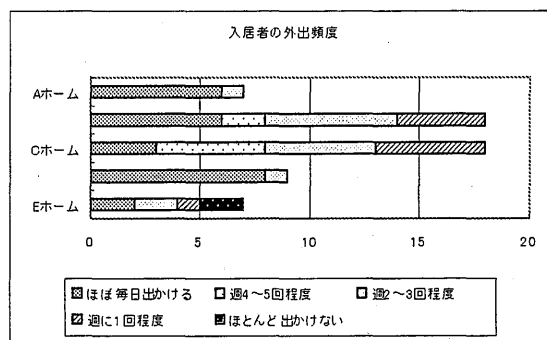


図 5-9 入居者の外出頻度 (単位:人)

表 5-2 買い物、散歩時の状況

項目	買い物(徒歩)				散歩			
	頻度(／週)	入居者(人)	スタッフ(人)	時間(分)	頻度(／週)	入居者	スタッフ	時間
Aホーム	7	2~3	1	60	1~2	2~3	1	30
Bホーム	14	2~3		60	7	2~3		60
Cホーム	30	1~8		40	14	1~9		60
Dホーム	7	2		90	7	2		45
Eホーム	2	2		60	6	2~3		50

表 5-2 は、それぞれのホームの日常的外出(買い物、散歩)状況を示している。

買い物の頻度は最も多い C ホームで週 30 回ほど(1 日平均 4.2 回)行っており、それぞれのユニットでの合計を示しているようだ。前述の通り、このホームはユニットによる要介護度が大きく違うので、単純にどのユニットも 1.5 回(=4.2 ÷ 3)ずつ出かけているとはいえない。次に多い B ホームも週 14 回で、1 日平均 2 回になるが、このホームの場合は、2 ユニットどちらも要介護度に大きな差は見られない。各ユニット 1 日 1 回は出かけていると見てよい。

買い物の所要時間は 40 分から 90 分であり、平均すると約 1 時間となる。

同様に、散歩についてみると、やはり C ホームで最も多く週 14 回、続いて B ホームと D ホームで週 7 回ずつとなっている。所要時間は 30 分~60 分と倍近く差がある。

一度に外出する人数は、C ホームを除いてほぼ 2~3 人程度で、(A ホーム以外スタッフの人数が不明となっているが)スタッフ 1 人あたりがみられる入居者は 2~3 人が適当と思われる。

5-3-2 よく利用する店舗

各ホームのスタッフに「グループホームの周辺で、普段よく利用する商店や施設を、利用する頻度が多いほうから3つ教えて下さい。また、その施設までの所要時間(徒歩の場合は入居者の足で)となぜその施設を利用するのかを簡単にお聞かせ下さい」という質問をした。また、地図を利用し、こちらでホームから各店舗までの直線距離も算出した。以下に、その結果を示す。グラフは、各ホームごとにスタッフが回答した答えを全て合計したものを示している(頻度が多い順位関係なし)。

■よく利用する店舗の種類

図5-10より、それぞれのホームで利用する店舗の種類にばらつきがあるのが分かる。Aホームは主として駅前の商店街とその近くにある小売店を半々に利用し、また、Bホームはホームの近くにある、何でもそろそろ食品スーパーを中心に利用していることが読み取れる。商店街もある程度は利用している。また、前5つのホームで飲食店をあげたホームがBホームだけだったことも注目できる。Cホームは一番多いのが小売店で、次いでスーパーを利用している。コンビニが2件あったが、ホームの近くで足りないものを買う程度だとコメントにある。DホームはAホーム同様、商店街と小売店をほぼ同じくらい利用し、スーパーも少し利用している。デパートは車を利用していくようである。Eホームは小売店を主に利用している。足りないものやここで売っていないものをスーパーで買っているようである。

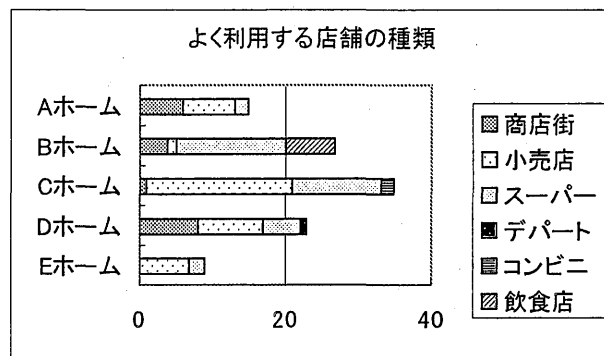


図 5-10 スタッフが(入居者と)よく利用する店舗の種類 (複数) (単位;人)

■店までの所要時間

図 5-11 に、各店舗までの所要時間(入居者の足で、片道)を示す。

E ホームを除いて各ホームで一番多いのは、徒歩 10~20 分で行ける店舗である(A ホームで7割、B ホームで5割、C ホームで3割、D ホームで7割)。次いで、B ホームと C ホームで徒歩 5~10 分の距離にある店舗をよく利用している。E ホームで最も多く利用しているのは徒歩 5 分以内の店舗である。

■店までの直線距離

図 5-12 はホームからよく利用する店舗までのおおよその直線距離を示している。A ホーム~C ホームまでは、100m~500m に位置する店舗をよく利用していることが分かる。D ホームでは 500m~1km の店舗を利用する割合が多く、全体を見ても、上図 5-11 の所要時間とほぼ比例の関係にあることが読み取れる。

■よく利用する理由

図 5-13 に、その店舗をよく利用する理由を示す。A ホームではお店の雰囲気や店員の対応がよいことをあげているおり、B~D のホームでは品物が揃っているという便利さをあげている。また、近いことを理由にあげるホームは C ホームと D ホームで多くなっている。C と D ホームで配達やおまけをしてくれるからという理由があるが、おまけが目的ではなく、結果としてその店を利用すると、おまけをしてくれると記述されている。

その他の理由としては、「〇〇を(この店で)購入するため」「近くにスーパーが無いから」といった理由から、「毎日旬の魚が並びアドバイスをくれるので」「利用者の散歩を兼ねて行ける」「(その店の商品が)利用者に人気がある」といった理由までさまざまみられた。

■よく利用する店舗の種類とホームからの直線距離のクロス集計

図 5-14 は、全ホームでの集計である。500m~1km の範囲に店が多く集中している。

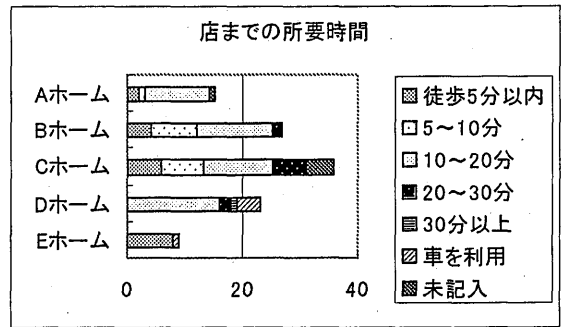


図 5-11 よく利用する店舗までの所要時間 (複数) (単位;件)

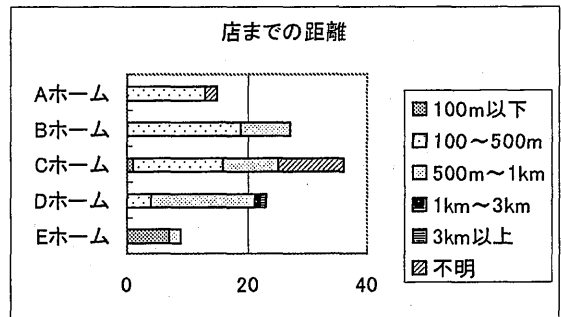


図 5-12 よく利用する店舗までの直線距離 (複数) (単位;件)

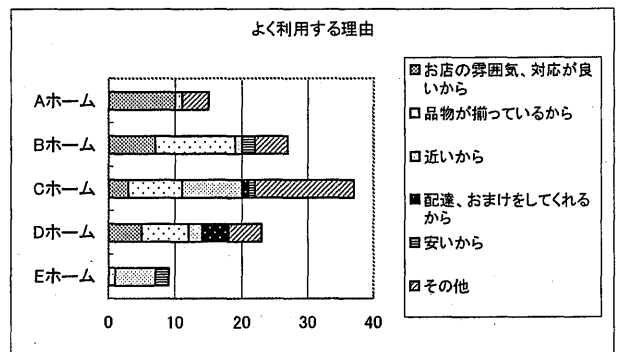


図 5-13 よく利用する理由 (複数) (単位;件)

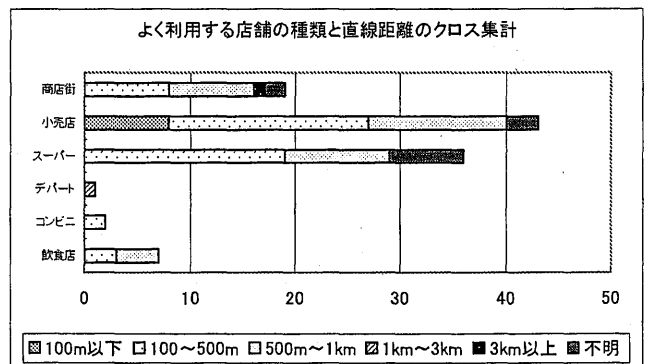


図 5-14 よく利用する店舗の種類と直線距離のクロス集計 (複数) (単位;件)

5-3-3 各ホームの日常生活圏

■各ホームの日常生活圏

地図を用いたアンケートで、日常的によく外出する場所を書き込んでもらうものを行った。これをもとにして、以下、調査対象の5つホームの日常生活圏の範囲や、生活圏の型を分類する。

図 5-15 は、A ホームの日常生活圏を示している。また、表 5-3 は図 5-15 地図上の所要施設の概要である。

ホーム西方にある商店街を中心に、買い物などを行っており、商店街とホームに500mほどの線上の生活圏が形成されている。A ホーム周辺地域が住宅地であることもあり、商店街や店での交流に加え、外出中でも様子を多くの人に見守られていたり、会話、交流が生まれると予想できる。

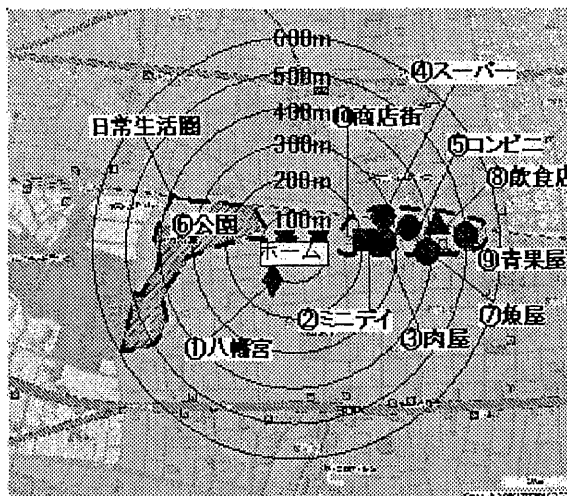


図 5-15 A ホームの日常生活圏

表 5-3 A ホーム周辺施設の概要

施設名	①八幡宮	②ミニデイ	③肉屋	④スーパー	⑤コンビニ
目的	散歩・参拝	交流	買い物	買い物	買い物
時間	徒歩10分		徒歩20分	徒歩20分	徒歩25分
頻度	月1~2回	月1回	週1回	週5回	週1回
コメント			肉を購入		パンを買うことが多い
距離	80m	240m	240m	280m	380m
施設名	⑥公園	⑦魚屋	⑧飲食店	⑨吉果屋	⑩商店街
目的	散歩	買い物	食事	買い物	買い物
時間	徒歩15分	徒歩25分	徒歩30分	徒歩30分	
頻度	週3回	月2~3回	週2~3回	月2~3回	
コメント		魚購入	そば屋		
距離	400m	400m	480m	520m	250m

図 5-16 は、B ホームの日常生活圏、表 5-4 は所要施設の概要である。

B ホームは商店街が2つと中規模なスーパーが点在している事から、やや広域な面的日常生活圏が形成されていることが分かる。その日の入居者やスタッフの組み合わせ、利用する店舗により、外出の経路が違い、様々な人との交流の機会が持ちやすくなっている。

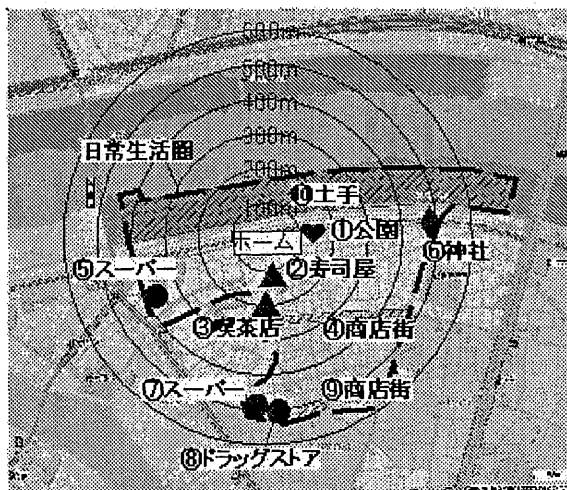


図 5-16 B ホームの日常生活圏

表 5-4 B ホームの周辺施設の概要

施設名	①公園	②飲食店	③喫茶店	④商店街	⑤スーパー
目的	散歩	食事	お茶	買い物	買い物
時間			徒歩5分	徒歩15分	徒歩15分
頻度	週4~5回			1回毎日	1回毎日
コメント		寿司屋。おいしい。店の人が親切。	店の人が親切で、利用者からの評判もいい。	ホームから近い。	品揃えが豊富。便利な大型スーパー。
距離	80m	140m	180m	270m	340m
施設名	⑥神社	⑦スーパー	⑧ドラッグストア	⑨商店街	⑩土手
目的	参拝	買い物	買い物	買い物	散歩
時間		徒歩20分	徒歩20分	徒歩20分	
頻度	週3~4回	1回毎日	週3~4回	週3~4回	
コメント		店は小さいが、必要な食材は揃っている。	共同調理場。大体揃っている。	スーパー、パン屋、ドラッグストアなどいろいろ。	
距離	420m	440m	440m	440m	

図 5-17 は C ホームの日常生活圏、表 5-5 は所要施設の概要である。

C ホームには近隣に商店街はないが、B ホーム同様、いくつか点在する 700m 以上のスーパーや小売店により広域な日常生活圏が形成されている。日常的に多くの人とふれあう機会がある生活圏といえる。

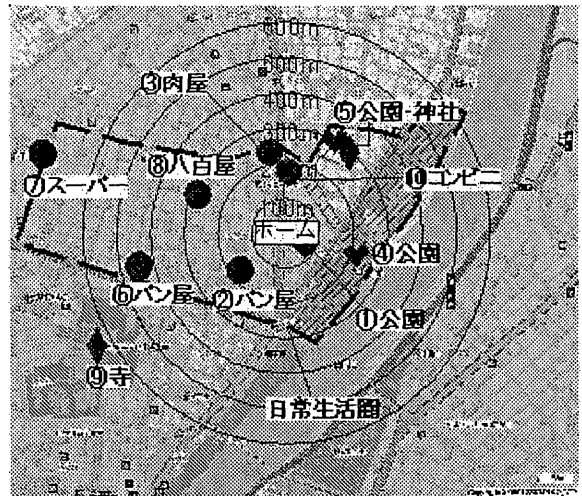


図 5-17 C ホームの日常生活圏

表 5-5 C ホームの周辺施設の概要

施設名	①公園	②パン屋	③肉屋	④公園	⑤公園-神社
目的	散歩	買い物	買い物	散歩	散歩
時間	徒歩2~3分	徒歩10分	徒歩5分	徒歩	徒歩30分
頻度		週2回	週3回	週2~3回	週2~3回
コメント	利用者だけで行く	手づくりパンケーキ			徒歩道・緑が多い
距離	60m	160m	200m	220m	260m
施設名	⑥パン屋	⑦スーパー	⑧八百屋	⑨寺	⑩コンビニ
目的	買い物	買い物	買い物	参拝等	買い物
時間	徒歩20分	徒歩20分	徒歩10分		
頻度	週2回	毎日毎日・2回	週3回		
コメント	手作りパン		ちょっとした食材		
距離	420m	720m	260m	600m	160m

図 5-18 は D ホームの日常生活圏、表 5-6 は、所要施設の概要を示している。

D ホームも A ホームと同じ型になり、ホーム北方にある商店街と、南西にあるスーパーを利用し、ホームとこの 2 つの施設までのそれぞれの道はおおよそ線となっている。限られた地域施設を多く利用することになるので、日常生活圏は一定の限度ができてしまう。良く利用する道上にある民家などの人とあいさつや交流を行う事はできるが、それ以上の交流は生まれにくい。A ホームも線型の生活圏であるものの、商店街までの道は住宅地となっているので、商店街の店員や買い物客以外に、行き帰りで地域住民との交流ももてる。しかし D ホームの周辺が住宅地(用途地域第 1 種住宅地域)であるにもかかわらず、5-2-1 で見たように、坂道や大きな道路といったものしかないため、商店街までの道には地域住民とかわりが持てるような環境があまりない。

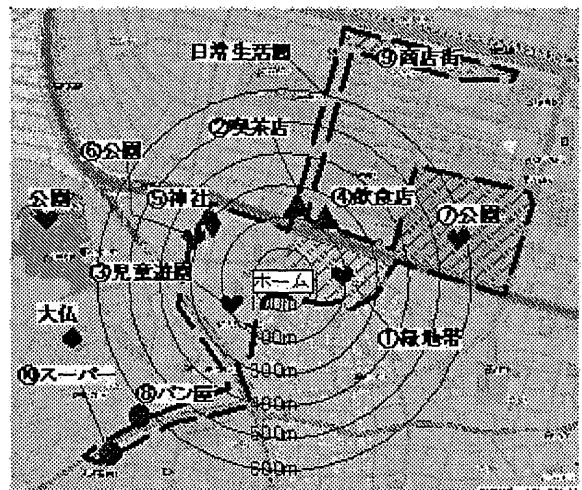


図 5-18 D ホームの日常生活圏

表 5-6 D ホームの周辺施設の概要

施設名	①緑地帯	②飲食店	③児童遊園	④飲食店	⑤神社
目的	散歩	食事	散歩	食事	参拝
時間	徒歩5分	徒歩15分	徒歩15分	徒歩15分	徒歩15分
頻度	毎日(晴日)	週1回	週2回	週1回	毎日
コメント	緑多い	昼、おやつetc	静かでお天場	昼、おやつetc	特定の人
距離	160m	200m	220m	220m	300m
施設名	⑥公園	⑦公園	⑧パン屋	⑨商店街	⑩スーパー
目的	散歩	散歩	買い物	買い物	買い物
時間	徒歩15分	徒歩20分	徒歩25分	徒歩25分	徒歩30分
頻度	週1回	週1回	週3回	週4回	週2回
コメント	緑多い!	緑多い!	食品購入	野菜・肉購入	食品購入
距離	320m	600m	620m	780m	820m

図5-19はEホームの日常生活圏を表し、表5-7はEホーム周辺の所要施設の概要を示している。

Eホームは日常的に利用するスーパー(小型)、肉屋、八百屋が100m圏内と狭域で、入居者の徒歩による外出範囲は極めて狭いといえる。Eホームは、ホームからこれらの商店までの道も一本道で線型なため、本当にごくわずかな限られた人と交流を持つ程度にしかかかわりが持てないと言えるだろう。

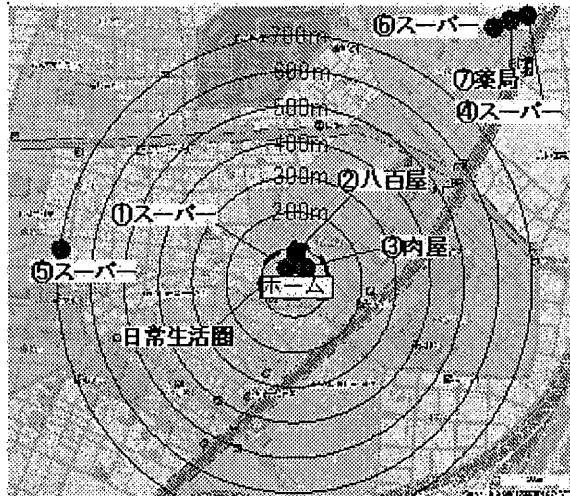


図5-19 Eホームの日常生活圏

表5-7 Eホームの周辺施設の概要

施設名	①スーパー	②八百屋	③肉屋	④スーパー	⑤スーパー
目的	買い物	買い物	買い物	買い物	買い物
時間					
頻度	週5回	週5回	週5回		
コメント	近い、雑貨品類も取り扱っており食品も品数が多い	安い、大がいて利用者が多い			安く肉・魚・野菜・日用品が1箇所で揃えられる
距離	100m	100m	100m	100m	640m
施設名	⑥	⑦			
目的	ラビット	サンテ			
時間	⑥スーパー	⑦薬局			
頻度	買い物	買い物			
コメント	日用品購入				
距離	880m	920m			

■日常生活圏の型

以上を踏まえ、5つのホームを表5-8に示すような3種類の生活圏に分類する。

①(やや)広域・線型

AホームとDホームが該当する型で、ホーム周辺の日常的利用施設等が数箇所に限られ、ホームと線的な道で結ばれている型である。前述のように、外出先目的地(例えば小売店)での交流以外に、途中での地域住民との交流が予測されるが、かかわりの範囲はこの線状にほぼ限られ、交流の深い人ができる反面、かかわりの可能性に限度ができてしまっている型といえる。

「やや」というのは、生活圏が500m前後であるAホームにつけた。Dホームは最大で700m以上日常的徒歩生活圏ができているため、広域といっていだろう。

②広域・面型

BホームとCホームが該当し、ホーム周辺に様々な生活資源が存在しているため、その日の外出の組み合わせや目的施設により、経路に様々なパターンができる。これによって目的地との往復の間で、地域とのかかわりが、①の型よりも密接にもてると予想できる。

③狭域・線型

Eホームに該当する型である。日常生活資源が狭い範囲にしかなく、外出の範囲も必然的に狭くなる。さらに、Eホームの場合は、その狭い範囲の生活資源がほぼ隣接して所在しているため、これらとホームをつなぐ道は線となってしまふ。

かかわりを持てる機会が極めて少なくなる。

①～③のどの型にしても、ホームと目的地間にかかわりが持てる要因がなければ、当然かかわりを持つことはできない。その要因として、立地条件と環境があげられるだろう。Aホームのようにホームと目的地の間に住宅地があるような場合や、公園など人の集まれる場所があれば、様々な人達と交流を持ちやすい。Eホームのような、交通の激しい道路や急な坂道などしかない場合は、ホームの外に出ても、かかわりを持つことは難しくなる。

この類型をもとに、第1章で扱った23区のグループホームの日常生活圏を全て見てみると、各類型に該当する施設数は以下の表5-9のようになる(23区のグループホームの日常生活圏の地図については付録を参照)。

表5-8 各ホームの日常生活圏の型

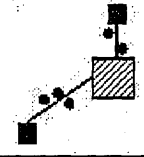
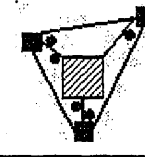
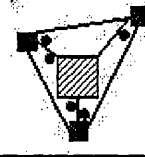
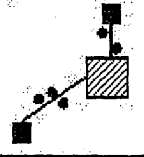
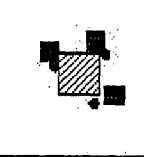
ホーム	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム
生活圏の型					
	やや広域・線型	やや広域・面型	広域・面型	広域・線型	狭域・線型
店舗利用	商店街中心	商店街+スーパー	小売店+スーパー	商店街+スーパー	小売店中心
生活圏	～500m	～500m	～750m	～800m	～100m

表5-9 東京都23区グループホームの日常生活圏の分類

生活圏の型	狭域線型	広域面型	やや広域線型	やや広域面型	広域線型	広域面型
該当ホーム数	1	5	4	9	2	8

※注 上記の分類は、周辺施設の利用頻度などについて記入もれがあるホームがあること、店までの詳しいルートが不明であること等より、こちらで地図と利用頻度を参照に推定した分類である。

5-4 地域とのかかわりについての現在の取り組み

5-4-1 地域に根ざしたホームかどうか

図 5-20 に、地域に根ざしたホームかどうかの質問への回答を示す。A~D ホームでは5割以上の方が地域に根ざしたホームだと思うと答えている。逆に、地域に根ざしたホームだとは思わないという人は、A~D ホームで2割から3割であった。E ホームで地域に根ざしたホームだと答えた人はいなかった。

■地域に根ざしていると思う理由

図 5-21 に、地域に根ざしていると思う理由をまとめた。

各ホームで理由にばらつきがあるが、B, C, D ホームであいさつや会話など、地域の人と日常的な交流があることをあげている人が多い。C ホームとD ホームではそうありたいと思い、日々努力しながら過ごしていると答えた人が多い。

地域に根ざしているかいないかの分かれ目ともなるが、大きく分けると2つのタイプになり、地域の資源を使ったり、積極的にかかわっているなど、ホームの取り組み自体によって「地域に根ざしている」と考えているタイプと、その取り組みに加え「(地域に)名前を覚えてもらう」「なじみの関係」「入居者への理解」というような結果まで見て「地域に根ざしている」と考えているタイプに分かれている。

B ホームやD ホームで数人見られる、「グループホームでの生活は在宅での生活と同じ」と考える人たちは、前者のホームの取り組み自体によって「地域に根ざしている」と考えているタイプに含まれると考えられる。

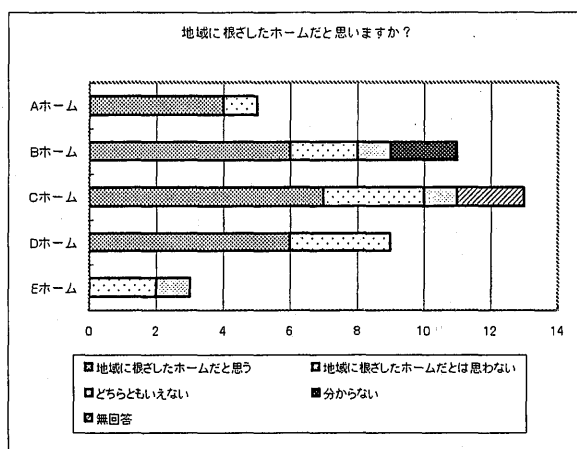


図 5-20 地域に根ざしたホームかどうか (単位;人)

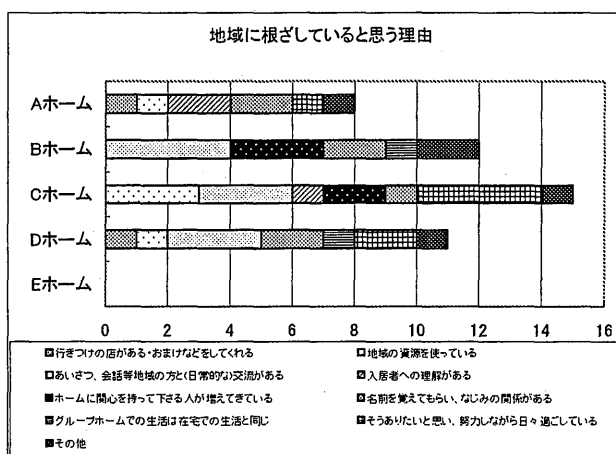


図 5-21 地域に根ざしたホームだと思う理由 (複数) (単位;人)

以下表 5-10 には、その他の内容を示す。内容はさまざまである。

表 5-10 その他の内容

その他の内容(地域に根ざしていると思う理由)	
Aホーム	地域の方に情報を公開して、このホームを知って頂けるようにしているから。
Bホーム	土地の提供、品物の寄付など、地域の方々に助けて作っていただいたホームだと思っている。建てる際に反対されたが、その分関心を持って下さっていたのだと思う。 地域の方々と、GHの入居者の方の気質が似ている点もあり、地域から特に浮いている感じは受けません。
Cホーム	ただ、まだ設立してからは日が浅く、いたらない部分は多々あると思う。
Dホーム	買い物、散歩、イベントなどで交流がある為。

B ホームでは、建てる際に反対されたことをマイナスと考えず、「その分関心を持って下さっていたのだと思う」と、プラスの視点で考えている人がいた。ホームを作ること自体、「地域の方々に助けて作っていただいたホーム」という言葉から、既に地域とかかわっているのだと考えているようである。

■ 地域に根ざしていないと思う理由

図 5-22 より、全体的に多かったのが「開所から間もないから」ということで、まだまだ時間がかかると思うと答えている人が多かった。B ホームは5つのホームの中で最も経過年数が低いが、「開所から間もないから」を理由にしている人はいなかった。「目指しているが、まだ足りない」という人も多い。

以下、表 5-11 には、地域に根ざしていないと思う、その他の理由を示す。

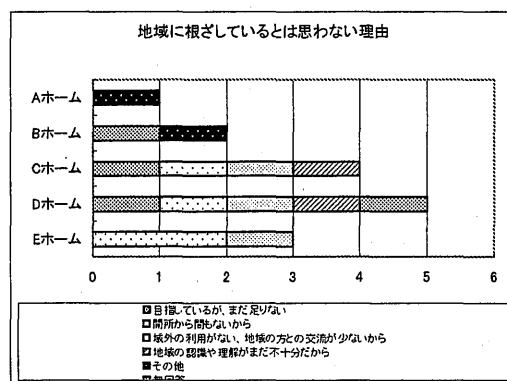


図 5-22 地域に根ざしているとは思わない理由 (複数) (単位;人)

表 5-11 その他の内容

その他の内容(地域に根ざしていないと思う理由)	
Aホーム	世間一般的だと思います。
Bホーム	私が考える地域に根ざすとは、例えば商店街を通った時に品物を買わなくてもあいさつしてくれたり、「今日は何食べるの?」「今日は何が安いよ」等声をかけてくれたり、地域の方とすれ違ったときにあいさつをしたり立ち話したり、又、ホームに遊びにきてくれたり等を考えている。しかし、現状はそうっていないから。

B ホームの人は自分自身の「地域に根ざす」という定義をしっかりとっており、現状がまだそうっていないことを踏まえたうえで「地域に根ざしていない」と考えている。

■ どちらともいえない、分からない理由

以下、表 5-12 にはどちらともいえないと思う理由を、表 5-13 には分からない理由を示す。

表 5-12 どちらともいえないと思う理由

どちらともいえないと思う理由	
Bホーム	どちらともいえない。地域に根ざしているところもあるが、まだこれからだと思う。
Cホーム	地域に根ざしつつ、まだ根ざす方向性があるホームだと思う。まだこれからだと思う。地域との関係がなければ成り立ちはないと思うので。
Eホーム	開設して1年と少し。地域に根ざしつつあり、祭事等暖かく迎え入れていただいている。

表 5-13 分からない理由

分からない理由	
Bホーム	勤務経験が少ない為、分からない 地域に根ざしたホームなのかどうか、まだ判断に迷いますが、入居者またスタッフも地域活動に参加すること、ふれあう機会をたくさん増やすように日々努力しています(新聞、地域報をこまめにチェック)

表 5-12 より、B ホームと C ホームの人は、「どちらともいえない」と答えつつ、「まだこれからだと思う」述べており、どちらかといえばまだ地域に根ざしていないと考えているようである。

表 5-13 では、「まだ判断に迷うが、入居者、スタッフともに地域活動に参加したり、ふれあう機会をたくさん増やすように日々努力している」と述べている。

何をもって地域に根ざしたといえるかは、難しい問題であり、一度地域に根ざしたからといって、ホームの積極的な取り組みをやめてしまったり、時間的・社会的な変化によってまた事情は変わってくるかもしれない。ホームの立地条件(地域的な問題)も関係してくるだろう。

第 1 章の東京都 23 区のグループホームでの調査の解析で「根ざす」ということの定義がホームによってまちまちだったのと同様、ホームのスタッフ一人一人によっても、また違うことが分かる。

ただ、ホームから地域に向かってさまざまな取り組みや働きかけをしており、積極的に地域とかわりを持とうとしているホームが増えている。

5-4-2 どのくらい地域に認識されていると思うか

「貴グループホームは、どのくらい地域に認識されていると思いますか。また、そう思う理由をお聞かせください」という自由記入の回答に対する答えをまとめたものを、図 5-23 に示す。

回答は、グラフに示す6つのどれかに分類した。図 5-23 より、「ホームの近所や商店街にはほとんど認識されていると思う」「地域で知っている人は知っているし、知らない人は知らないと思う」「よく利用する商店など、一部のみだと思う」の3つは認識の範囲についてであり、どの答えも地域のほとんどまで認識されるに至らず、一部分のみにとどまっていると思っている。その理由としては、商店などの利用、地域の人とのあいさつ・声かけ・会話、困った時に助けてもらう…などが多かった。

「名前は知っていてもグループホームがどういう所かまでは分からないと思う」というのは、認識の程度についてであり、こちらについて回答した人は少なかったが、名前を知ってもらう程度ではまだまだだと考えているようである。中には「隣の老健のイメージが強いため、『施設』として捉えられている」という回答もあった。

「今、少しずつ認識されている段階だと思う」では、開設から半年ちょっとのBホームとCホームで、「開設からはまだ時間が経っていないが、ホーム側で地域に密着した生活を送っており、顔なじみになる店が増えたり、近所の人とあいさつなどをするようになった」と答えている。

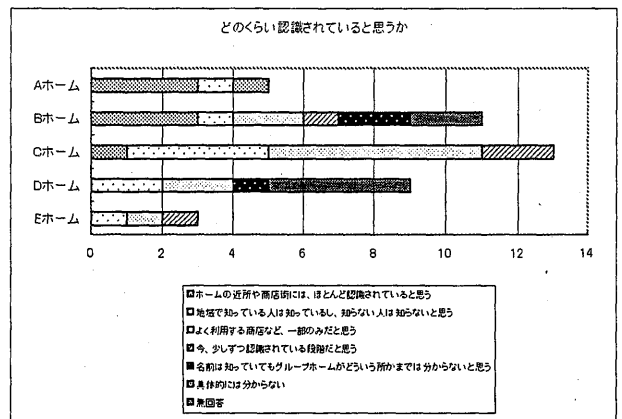


図 5-23 どのくらい地域に認識されていると思うか (単位;人)

5-4-3 ホームの立地環境について

図 5-24 に、グループホームの立地環境はいいと思うかどうかの質問についての結果を示す。A ホームでは8割、B、C ホームでは5割、D ホームで4割、E ホームで6割の人がホームの立地環境はいいと答えている。ただし、いいと答えていても、不満な点もある中で、全体的に判断していいと思うと答えており、どのホームでも良いところ、悪いところがあるようだ。

■ ホーム周辺の立地環境の良い点

図 5-25 に、ホーム周辺の立地環境の良い点についての結果を示す。前述のように、良い点、悪い点のさまざまな点を総合的に評価して判断しているので、このグラフでは、「立地環境はいい」「立地環境は良くない」「どちらともいえない」全ての回答者があげた、ホーム周辺の立地環境の良い点を示すことにする。

全体的に多いのが、徒歩圏内の程よい距離に、商店や公園が多いという回答であった。「程よい距離に」というのは、「利用者さんは遠い、と言っていますが運動ということを考えると、いいのではないかと」という答えのように、近すぎず遠すぎずという距離のことを指しているようである。また、どちらかといえば、職員にとって環境のよしあしを判断したのではなく、入居者にとって生活しやすい場であるかを考えた人が多かった。

B ホームでは、ホームの前に道路を挟んで荒川沿いの土手があることと、地域の住民にとってなじみ深い銭湯があることをあげており、C ホームとE ホームでは1人だが祭などの行事が多いことをあげている。地域性のある回答といえる。

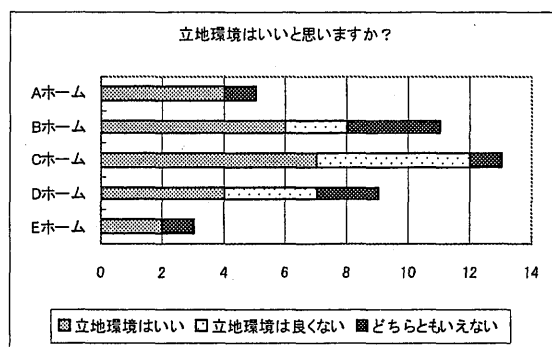


図 5-24 ホームの立地環境はいいと思うか (単位;人)

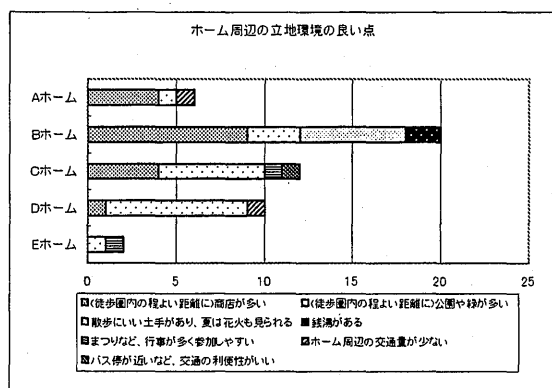


図 5-25 ホーム周辺の立地環境の良い点 (複数) (単位;人)

■ホーム周辺の立地環境の良くない点

図 5-26 に、ホーム周辺の立地環境の良くない点を示す。

C ホームと D ホームで、買い物をするには少し遠い気がする」と答えている人が多い。利用者にとって遠いと感じている人や、そもそも、ホーム周辺に店が少ないことをあげている人がいる。次いで、ホーム周辺の交通量と騒音をあげる人が多く、入居者の(特に一人での)外出時に危険であると考えているようだ。

B ホームはホームの立地的に駅から遠いことをあげる人が多い。

E ホームでは、良くない点をあげる人はいなかった。

■どちらともいえないと思う理由

一番初めの「ホームの立地環境はいいと思いますか?」という質問に対し、どちらともいえないと答えた人の理由を、以下表 5-14 に示す。

表 5-14 どちらともいえないと思う理由

どちらともいえないと思う理由	
Aホーム	どちらともいえない。買い物に行くには少し遠い気がするが、神社や公園は近くにあり、周辺に住居が多いので、安心できる部分もある。
Bホーム	どちらともいえない。商店街など近くにあり便利だが、交通量が多い道路が目の前にあり危険。しかし、散歩に良い土手などがある。 近所にはこの地域ならではの銭湯があり、その他スーパーや商店街が近くにありますが、家のすぐ目の前には荒川が流れ、夏には花火がよく見えます。ただし、家の前は車がよく通り、駅から遠いのが少し難点です。 もう少し駅に近ければと思うこともあるが、特別悪いとも言えない。
Cホーム	どちらとも言えないと思う。歩いて買い物に行く距離として身体的なレベルが高い時はちょうど良い距離にあると思うが、レベルが下がった時に歩行するには少し遠いように感じる。
Dホーム	散歩は近くにかなり良い(大きい)緑地帯があるのでいいと思います。交通に関しては、大きな道路が近くにあり、車通りが激しいので少し怖いと思います。 自然という意味では都内とは思えない程緑に恵まれていると思う。生活として考えると、スーパーも商店街も遠く、車の必要性は高い。
Eホーム	現段階では、よし悪し難しい。(利用者、ご家族の声が大切)

表より、理由としてはどれもこれまでにあげたものとほぼ同じで、本人の判断に迷って「どちらともいえない」と答えた人が多い。

E ホームで「利用者、ご家族の声が大切」と答えた人がいる。グループホームは入居者だけでなく、その家族も主体と考えているからだろう。

また、参考までに「他のグループホーム等での勤務経験のある方は、過去のホーム等と比較してみてのお考えを教えてください」と補足をして質問したが、比較してのコメントをした人はいなかった。

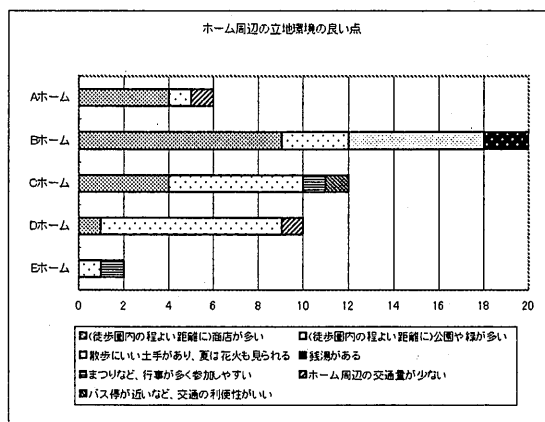


図 5-26 ホーム周辺の立地環境の良くない点 (複数) (単位:人)

5-4-4 これまでの地域とのかかわり

第1章と同様、グループホームの職員としてこれまでどう地域にかかわってきたか、普段特に気をつけていることや、地域とのかかわりの中でのエピソードなどを自由回答してもらった。

■これまでの地域とのかかわりと現状

図5-27より、これまでや今現在、地域の人達とどういう関係になってきているかを記述してくれた人はCホームで最も多かった。後で述べるが、AホームやBホームでは普段気をつけていることなどを記述してくれた人が多かった。

Cホームを初めとして、全体的には店の店員や客と利用者が顔見知りになることをあげた人が最も多く、次いでB、C、Dホームで店の店員が入居者のことを理解し、支援してくださっていると答えた人が多かった。さらに、店のお得意さんになり、店におまけをしてもらうという、店とのかかわりをあげる人が多い。

第1章の東京都23区のホームを対象にしたホームでは行事などで地域住民との交流をあげた人が多かったが、今回は答える人がいなかった。

また、表5-15にはその他の内容を示す。これも店とのやり取りの回答が多かった。

表5-15 その他の内容

その他の内容(これまでの地域とのかかわり)	
Cホーム	八百屋に行けば、店の人と立ち話をしたり、入居者から「まけてよ～」という声を聞くこともある。
	今までおいていなかったパンを利用者のために要望に答えて作っておいしてくれた
	魚のおすそ分けをした時に、お返しをホームまで持ってきてくれたことがある。
	お店にお客がいなくて「お茶しませんか？」と声をかけてくれ利用者も喜んでいる。

■普段気をつけていることなど

図5-28に、ホームのスタッフが普段気をつけていることなどを示す。グラフより、最も多かったのはいつも積極的にあいさつや声かけをするように心がけていることで、ホームから地域との関係を築いていこうとしていることが分かる。これは、第1章の東京都23区のホームを対象にしたアンケートと同じ結果である。

その他を除いて、「店員、客と入居者のかかわりを邪魔しないようにする(見守る)」「ほぼ毎日買い物に行く」「スタッフではなく入居者に米、酒、出前などを注文していただく」「スタッフも入居者と同じくらい注目され、見られていると意識している」が2人ずつ並ぶ。

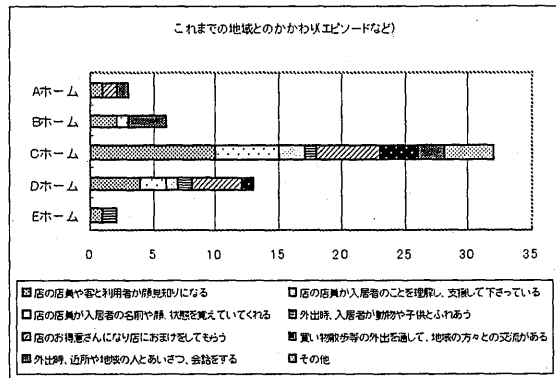


図5-27 これまでの地域とのかかわりと現状 (複数) (単位;人)

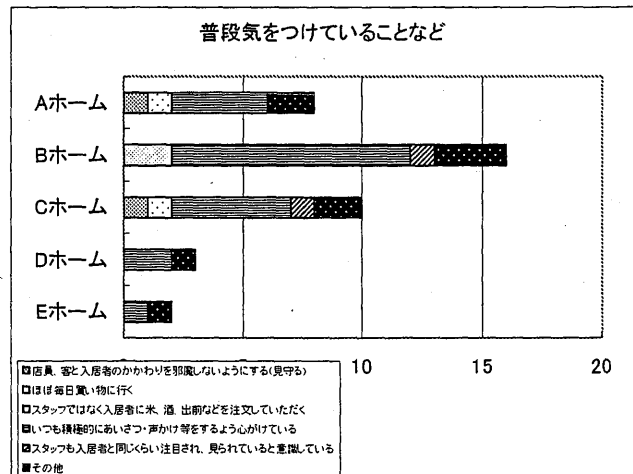


図5-28 普段特に気をつけていること (複数) (単位;人)

表 5-16 にはその他の内容を示す。「これまで、地域との関係はほとんどない」「地域とのかかわりはこれからやっていきたいと思う」と答えた人も見られた。

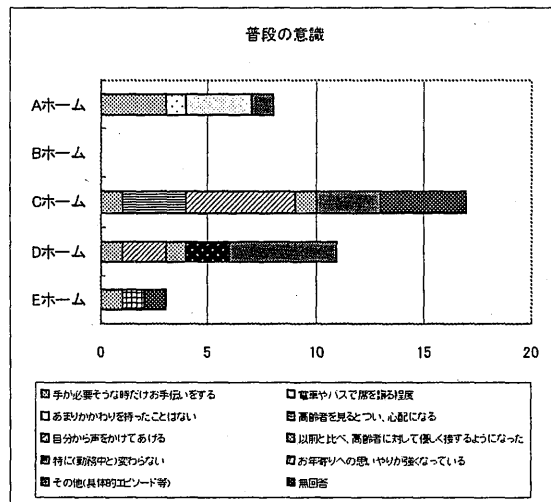
表 5-16 その他の内容

その他の内容(普段気をつけていることなど)	
Aホーム	利用者をありのまま知っていただきたく、かくしたり、かっこつけずにいる。 初めの頃はホームのことについて世間話の中におりませで話したりした
Bホーム	かわわりは、これからやっていきたいと思う(まだ勤務して2ヶ月目なので) 花壇の草むしり(虫がわからないようにすること)や家の周りは特にきれいにしよう心がけています。 スーパーや商店街に行く際、毎回同じルートで行くようにしている。特にエピソードはありませんが、途中に通るお店の人や地域の方に顔を覚えてもらうことで、あいさつから始まり、コミュニケーションを図り、つながりができることを考えて。もちろん、入居者の方に道を覚えてもらうということも含めて。
Cホーム	いつも行くスーパーの店員さんからご家族の話を聞く(家にも年寄りが出て…) 今まで、地域との関係はほとんどない。
Dホーム	入居者さんが、以前住んでいた場所の商店街へ買い物に行き、なじみの方々とふれあいを持つ。
Eホーム	地域住民との親睦。互助の精神

5-4-5 勤務以外でのスタッフの意識

参考程度になるが、「グループホームの仕事ではない、休日に外に出た時や仕事が終わったあとの、自分が高齢者(勤務しているホームに限らず)に対する態度は、普段の仕事の時と比較してどうでしょうか?特に意識はしていないと思いますが、何かエピソードがあればお聞かせ下さい」という自由回答の質問をした。アンケート作成と配布時期の関係で、Bホームのスタッフへの質問は出来なかったが、他の4ホームからの回答を得られた。

以下、図 5-29 にその結果を示す。



その他を除けば、一番多かったのは「(困っている人に)自分から声をかけてあげる」で合計 7 人、次いで「手が必要そうな時だけお手伝いする」と答えた人が 6 人だった。

図 5-29 普段の意識 (複数) (単位:人)

表 5-17 には、その他の内容を示す。

回答者が実際に経験した具体的エピソードが多い。

表 5-17 その他の内容

その他(具体的エピソード等)の内容	
Aホーム	バス停でバス待ちをしている時、横入りしてきた70歳代の女性がいた。当然、横入りしないようにと注意をしたのだが、もしも並んでいるという認識ができない痴呆状態にある方だったら間違っている!と言い切れたか、考えさせられた。
Cホーム	仕事が終わったあと、雨がすごく降っていた時、シルバーカーを押してくるお年寄りが手から血を流していた(傘も折れていた)のを見て、声をかけ、自分ができることをした。 近くの(家)コンビニでさっぱりした身なりの男性(70才代)がお会計をしようとして、店の人に「お金が足りないよ!」と言われていた。品物1つ手に持って残念そうに買わずに出て行った。自分の買い物を急いで済ませ、後を追いかけてみようとしたが、外に出たら姿が見えなかった。追いかけて何をしようとしたのか自分でも分からないが、むなしさが残った。
Dホーム	繰り返し同じことを言う人に対して、共感的態度でかかわれた。 休日に知らないおばあさんに、〇〇に行きたいんだけど、バスはどこから来るの?と聞かれ、話しているうちに少し変だなと思い、交番と一緒にいき、家族と連絡が取れたが、一人で住んでいるので、交番には2~3回お世話になっていたとのこと。 スーパーで低血糖で倒れた人がいたので、店の人に言って砂糖水をもらった。 知的障害者が来たときに普通に対応した。 近所のマンションに住んでいる老人が車道の所に居たので安全なところに寄せた。ご自分の居住が分からず医院に連絡し探してもらった(少し痴呆があった様)。

5-5 グループホームと地域とのかかわりについての意識

5-5-1 グループホームと地域とのかかわりについて

■グループホームと地域とのかかわりの必要性

「グループホームと地域とのかかわりは必要だと思いますか?」という質問に対しては、回答者全員が「必要だと思う」と答えている(「必要だとは思わない」「どちらともいえない」「無回答」はなし)。

■グループホームと地域とのかかわりが必要だと思う理由

図 5-30 に、地域とのかかわりが必要だと思う理由を示す。グラフより、その他を除いて全体の中で最も多かったのは「認知症高齢者を正しく理解し、受容してもらい、地域全体で支えてもらうホームをめざすため」という理由で、合計 13 人が答えている。続いて「他の人や地域とのかかわりを持つことは当然のことだから」と答えた人が合計 10 人、「地域とのかかわりは入居者にとって安心やいい刺激となる」と答えた人が合計 9 人だった。「地域とのかかわりに入居者にとって安心やいい刺激となる」という理由は、第 1 章の東京都 23 区のホームでの最も多い回答だった。

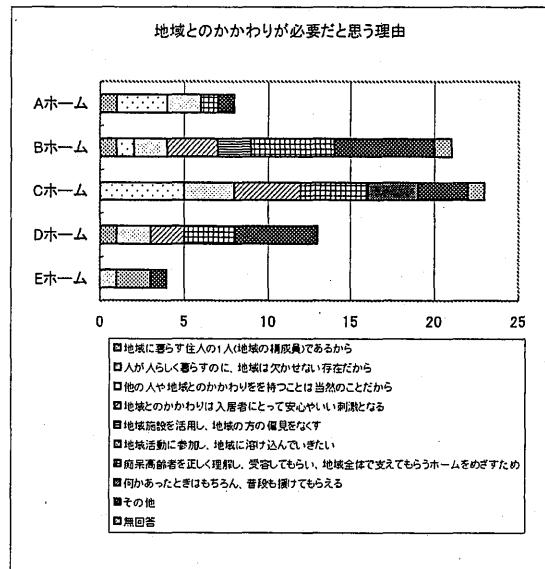


図 5-30 グループホームと地域とのかかわりが必要だと思う理由 (複数) (単位;人)

表 5-18 その他の理由

その他の内容	
Aホーム	まだまだ世の中では、痴呆＝分からない、頭がおかしくなった、こわいなどのイメージがあるので、そうではない事を理解して助け合う世の中になった方が誰もが住みよいと思うから。
Bホーム	グループホームの中で生活を完結するのではなく、地域とのかかわりを持ち、地域に受け入れられなければならないと思う。グループホームは開放的でなければならないと思うし、地域の人ともっと関わって欲しいと思う。
	入居者が痴呆の状態であっても、自分の力で生きるためには、特別な環境ではなく、今までの生活で慣れて来たような(経験した生活と変わらない)環境が望ましい。また、地域住民の中にも、痴呆が何か特別変わったものではなく、何も出来ない人ではないことを理解し、老いること、痴呆になること、そういう人がいることを当然のことと考えてくれる人が増えて欲しいと思う。
	入居者さんのためにも、グループホームのこれからの発展のためにも必要だと思う。
	人との出会いによって入居者の方も「私はこの地域で生活しているんだ」と実感することができ、それが生きる活力につながっていくのではないかなと思うから。
Cホーム	絶対に必要だと思います。グループホームも普通に生活する家だからです。ごく普通に自然に関わることが望ましいと思います。
	グループホームだけではやっていけないこともある。地域の方と一緒にこの土地で生活していきたい。
	地域とのかかわりがなければ、グループホームの人間らしく生きることの意味が薄れてしまう。収容所化してしまう。痴呆である事をオープンにすることは、家族の方にとっても大変、勇気のいることだと思います。外の人と接することは良い緊張感をもたらすと思います。
Dホーム	本人は痴呆とは思っていない方が多いので普通通りの生活を営むことが必要だと思いますので、自然の近所付き合いというのは必要かと思えます
	痴呆という状態にある人にとってかかわりを持つことが困難になるので、積極的に地域とかかわりを持つことは必要だと思う。
	グループホームは特養や老健と違って、外に出る機会も多い。私たちが生活する上で地域との関わりはとても重要になっていると思うが、それと同様に施設だから必要ないという思いではなく、全ての方が地域とのかかわりを増やさなければ良い環境は築けないと思う。
	たとえ痴呆状態にある人であっても1人の人間として生きている以上、隔離するのではなく、少しでも社会参加し、1人の地域住民としてあるべきと思うから。
Eホーム	いろいろな人と接する事が出来る。
	地域とのかかわりが持てるからグループホームが存在する。
Eホーム	入居者の世代の価値観が「むこう三軒両どなり」があるから、近所と交流したがる

表 5-18 にはその他の理由を示す。「地域とのかかわりがなければ、グループホームの人間らしく生きることの意味が薄れてしまう」「グループホームは特養や老健と違って、外に出る機会も多い」「地域とのかかわりが持てるからグループホームが存在する」というような、他の高齢者施設とは違い、グループホームの意義を述べる内容の回答が目立つ。

また、「認知症が何か特別変わったものではなく、何も出来ない人ではないことを理解し、老いること、認知症になること、そういう人がいることを当然のことと考えてくれる人が増えて欲しい」と、地域に対する願いを答えた人もいた。ホームのスタッフが地域に対して望むことは、後で詳しく述べることにする。

5-5-2 これから地域とどうかかわっていききたいか

「グループホームおよび地域全体をよくするために、これから地域とどうかかわっていききたいと思いませんか」という自由回答についてまとめた結果を、図5-31に示す。

グラフより、その他を除き、最も多かったのは「地域の活動に参加し、地域の一員になる」が19人で、「積極的に交流の場を作る」11人、「地域に認知症高齢者のさまざまな面を知り、理解してもらう」10人と続く。「地域に認知症高齢者のさまざまな面を知り、理解してもらう」は、第1章の東京都23区のホームを対象にしたアンケートで最も多かった内容だった。

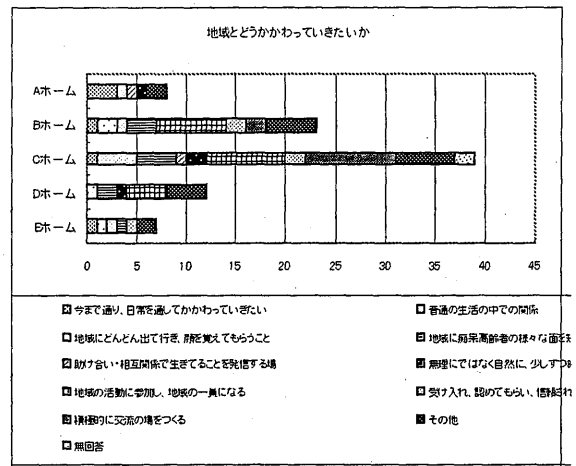


図5-31 これから地域とどうかかわっていききたいか (複数) (単位:人)

表5-19 その他の内容

その他の内容	
Aホーム	良くするの意味が分からない 分かりません。
Bホーム	地域の方々にはグループホームに興味を持っていると思います。誕生会や何か行事がある時は日頃お世話になっている方々を呼んで当ホームのことを知ってもらいたい。 例えば、地域で何か催し物があるときなど、参加できることがあれば参加することで、その地域にとけこんでいきたいと思いますし、ここはそのような土地柄だと思います。 近所付き合いを大切に "痴呆の方でも、立派に生活ができるんだよ"ということを地域からアピールして、安心して住める環境(地域)になれるといいな、と思います。 何か人と人とのふれあいの場がもてたらいいと思いますが、まだ具体案は探中です。
Cホーム	なかなかかかわる機会が少ないので、もっとかかわる機会が増えればと思う。 新しい機会をたくさん増やしていきたい。 他のグループホームも多く見てみたい(趣旨を聞きたい)。グループホームのお年寄りが外に出るためには、自分ももっと地域を探索しなければと思う。 出来るだけ迷惑(お手数)をかけない様、地域の一員として、行事・等々への参加をしていけると良いと思います。 交流の場をつくり、グループホームと地域のバリアフリー こちらからも発信して呼びかけていく。
Dホーム	やはり、お年寄りの好きな子供、動物などを通し、誰にも不快感を感じさせないようにかかわりたいと思う。痴呆高齢者の場合は、職員の力量で変化していくと思う。 積極的にかかわりたい。 法人でバザーなどイベントをした時、近所の人が遊びに来てくれるか?また、地域のイベントにどれだけ参加できるか。 グループホームは生活の場であるから人を呼んで公開してゆくのは無理だがチャンス(老健の祭など)があれば存在を示す。
Eホーム	難しい質問です(答えはないでしょう...)地域の特性があります。 今までどおり、挨拶、説明などを継続して、親しみやすいホームにしたい。また、地域の介護の相談に乗れるようにしたい。

表5-19には、その他の内容を示す。「新しい機会をたくさん増やしていきたい」「こちらからも発信して呼びかけていく」「積極的にかかわりたい」といった、もっとホームからアピールしていきたいという内容が多い。また、「他のグループホームも多く見てみたい(趣旨を聞きたい)。グループホームのお年寄りが外に出るためには、自分ももっと地域を探索しなければと思う」と答えた

人もいる。同じ地域はもちろん、可能な範囲でのグループホーム同士の交流というのも、入居者にとっても、スタッフにとってもいいことなのかもしれない。

5-5-3 地域に対して望むこと

■地域に対して望むことはあるか

「グループホームおよび地域全体を良くするために、ホーム周辺の住民や商店の方に対して望むことはありますか？」という質問と、あるというホームにはその内容を回答してもらった。結果を図5-32に示す。

グラフより、全体の54%の人が「地域に望むことがある」と答えている。

また、「特に望むことはない」と答えた人は24%だった。

■地域に対してどんな事を望むか

図5-33には、地域に対して望むことの内容を示す。

グラフより、「認知症やグループホームの理解と受容(あたりまえのこととして)」と答えた人が一番多く、全体で10人だった。続いて「どういう人が入居しているかなど、関心を持って欲しい」「もっと気軽に入居者に話しかけて欲しい」「ゆっくり温かい目で見守って欲しい」と答えた人がそれぞれ6人、「普通の人として、自然なご近所付き合い」がそれぞれ5人ずつ続く。

少数意見の中では、「もっと地域にアピールしていきたいが、その前に職員の意識を高める必要がある」と答える人がDホームとEホームで1人ずついた。

以下、表5-20には、その他の地域に望むことの内容を示す。

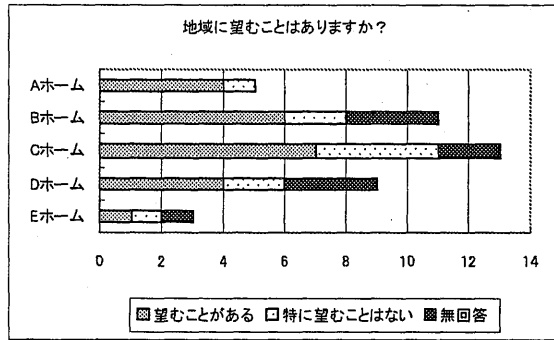


図5-32 地域に望むことはあるか (単位;人)

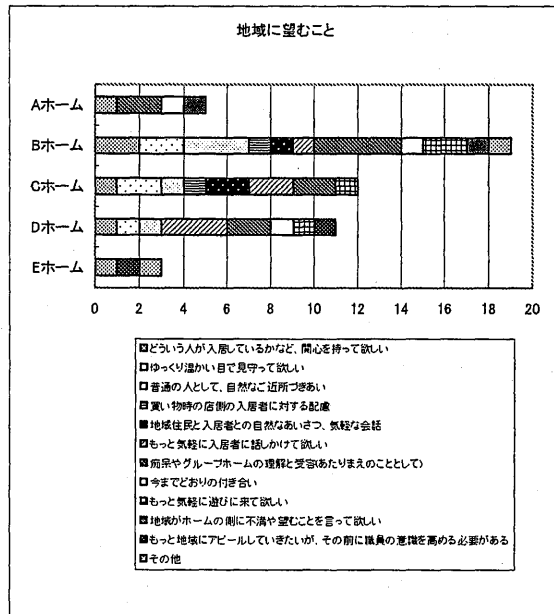


図5-33 地域に望むことの内容 (複数) (単位;人)

表5-20 その他の内容

その他の内容	
Bホーム	入居者が外で困った時は助けてもらいたい
Eホーム	住民の望むことです。

5-6 5つのグループホームによるスタッフの意識の違い

5-6-1 5つのグループホームスタッフの基本属性のまとめ

表5-21 5つのグループホームスタッフの基本属性のまとめ (上段;人、下段:%)

ホーム	年齢							性別			
	10才代	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	合計	男性	女性	合計	
Aホーム	0	3	2	0	0	0	5	2	3	5	
	0	60	40	0	0	0	100	40	60	100	
Bホーム	0	5	3	2	1	0	11	3	8	11	
	0	45.5	27.3	18.2	9.1	0.0	100	27.3	72.7	100	
Cホーム	1	4	3	3	2	0	13	3	10	13	
	7.7	30.8	23.1	23.1	15.4	0	100	23.1	76.9	100	
Dホーム	0	5	1	0	3	0	9	3	6	9	
	0	55.6	11.1	0	33.3	0	100	16.7	33.3	50.0	
Eホーム	0	1	0	0	0	2	3	1	2	3	
	0	33	0	0	0	67	100	17	33	50	
全体	1	18	9	5	6	2	41	12	29	41	
	2.4	43.9	22.0	12.2	14.6	4.9	100	29	71	100	
ホーム	職業経験				スタッフの自宅						
	半年以内	半年~1年	1年~5年	合計	地域内	区内	都内・県内	都外・県外	無回答	合計	
Aホーム	1	1	3	5	0	2	2	1	0	5	
	20	20	60	100	0	40	40	20	0	100	
Bホーム	5	6	0	11	0	6	3	2	0	11	
	45.5	54.5	0	100	0	54.5	27.3	18.2	0	100	
Cホーム	1	10	2	13	0	2	10	1	0	13	
	7.7	76.9	15.4	100	0.0	15.4	76.9	7.7	0	100	
Dホーム	0	1	8	9	1	4	2	2	0	9	
	0	11.1	88.9	100	11.1	44.4	22.2	22.2	0	100	
Eホーム	0	1	2	3	1	0	1	0	1	3	
	0	33.3	66.7	100	33.3	0	33.3	0	33	100	
全体	7	19	15	41	2	14	18	6	1	41	
	17.1	46.3	36.6	100	4.9	34.1	43.9	15	2	100	

表5-21に、第2章で取り扱った5つのグループホームの調査対象の属性をまとめておく。ホームごとに回答者の年齢、性別、職業経験、スタッフの自宅をそれぞれ示し、上段は

その人数、下段はパーセントで割合を示してある。

5-6-2 基本属性×地域に根ざしていないと考え

ている人の理由

表 5-22 地域に根ざしていないと考える人の属性とその理由のクロス集計

「地域に根ざしていない」と考えている人の属性とその理由のクロス集計		地域に根ざしているか		地域に根ざしていないと思う理由(複数)						
		地域に根ざしていない	どちらともいえない・分からない	←時間的要因			目標未達成→		その他	無回答
				開所から間もないから	域外の利用がない、地域の方との交流が少ないから	目指しているが、まだ足りない	地域の認識や理解がまだ不十分だから			
年齢	20才代	6	2	1	0	2	1	2	0	
	30才代	2	1	2	1	1	1	0	0	
	40才代	1	0	0	1	0	0	0	0	
	50才代	1	1	0	0	0	0	0	1	
	60才代	1	1	1	1	0	0	0	0	
性別	男性	3	3	0	0	0	0	2	1	
	女性	8	2	4	3	3	2	0	0	
職業年数	半年以下	2	1	0	0	1	0	1	0	
	半年～1年	3	3	2	1	0	1	0	0	
	1年～5年	6	1	2	2	2	1	1	1	

表 5-22 には、地域に根ざしていないと考えている人の属性と、その理由のクロス集計結果を示す。この表はホームの枠を取り払って、回答者個人の属性のみで判断してある。また、23 区のホームでの集計と同様、地域に根ざしていないと思う理由の左側が時間的要因、右側が目標未達成と分けてみた。

地域に根ざしていないと答える人のおおよそは、20 才代の人で、その理由は「目指しているが、まだ足りない」という理由が多かった。性別でも地域に根ざしていないと考える人の多くは女性で、理由はいくつもあげられたが、地域の認識や理解がまだ不十分よりも、開所から間もないことを多くあげ、時間的な要因で地域に根ざしていないと考えている。

(グループホームスタッフとしての)職業年数で比べてみると、「地域に根ざしていない」と考えている人の割合はグループホームスタッフとして1年以上働いている人が多い。半年～1年では、まだ判断に迷う人の割合が多かった。

5-6-3 基本属性×地域に根ざしていないと考え
ている人の理由

表 5-23 地域に根ざしていないと考える人の属性と
今後、地域とどのようにかかわっていききたいかのクロス集計

「地域に根ざしていない」と考える人の属性と、今後、地域とどのようにかかわっていききたいかのクロス集計	今後、地域とどのようにかかわっていききたいか									
	←自然な形での地域とのかかわり				痴呆の理解・ホームの受け入れ→				その他	
	今まで通り、日常を通してかかわっていききたい	普通の生活の中での関係	無理にではなく自然に、少しずつ時間をかけて、ゆっくり	積極的に交流の場をつくる	地域にどんな様子を見てもらおうか	地域の活動に参加し、地域の一員になる	地域に痴呆高齢者の様々な面を知り、理解してもらおう	受け入れ、認めてもらい、信頼されるホーム		
年齢	20才代	2	0	1	1	2	4	2	3	3
	30才代	1	0	1	1	0	2	1	0	2
	40才代	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	50才代	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	60才代	0	1	0	0	1	0	1	0	1
性別	男性	1	0	0	1	1	4	1	1	4
	女性	2	1	2	2	2	4	3	2	5
職業年数	半年以下	0	0	0	0	1	3	1	0	1
	半年～1年	2	0	1	3	0	3	1	3	5
	1年～5年	1	1	1	0	2	2	2	0	3

表 5-23 には、地域に根ざしていないと考える人の属性と、今後、地域とどのようにかかわっていききたいかのクロス集計を示す。今後、どのようにかかわっていききたいかの左側は、自然な形での地域とのかかわりで、右側は認知症の理解やホームの受け入れと、より高い目標をもってかかわろうとしているホームの回答である。

「地域の活動に参加し、地域の一員になる」と答えた人は 20 才代に多く、性別では差がなかった。また、職業年数でもそれほど大きく差はなかった。

「受け入れ、認めてもらい、信頼されるホーム」という回答が多かったのもやはり 20 才代の若いスタッフで、職業経験半年～1 年の人だった。

前項の東京都 23 区のホームを対象に行ったアンケートでは、どちらかといえば全体的に普通の生活の中でゆっくりと自然な関係を築いてから、最終的にホームや認知症高齢者を受け入れてもらう方向で取り組んでいこうとしているホームが多かったのに対し、ここでは、町内会など地域の活動に参加し、そこから大きく、ホームを受け入れ、認めてもらい、信頼される関係を築いていこうとしている人が多い。

5-6-4 地域に根ざしていないと考える人の理由×今後、地域とどのようにかかわっていききたいか

表 5-24 地域に根ざしていないと考える人の理由と今後、地域とどのようにかかわっていききたいかのクロス集計

地域に根ざしていないと答える人が、今後、地域とどうかかわっていききたいか		今後、地域とどのようにかかわっていききたいか								その他
		←自然な形での地域とのかかわり				痴呆の理解・ホームの受け入れ→				
		今まで通り、日常を通してかかわっていききたい	普通の生活の中での関係	無理にはなく自然に、少しずつ時間をかけて、ゆっくり	積極的に交流の場をつくる	地域にどんどん出て行き、顔を覚えてもらうこと	地域の活動に参加し、地域の一員になる	地域に痴呆高齢者の様々な面を知り、理解してもらう	受け入れ、認めてもらい、信頼されるホーム	
地域に根ざしているか	地域に根ざしていない	2	1	2	2	3	5	3	1	5
	どちらともいえない・分からない	1	0	0	1	0	3	1	2	4
地域に根ざしていないと思う理由	開所から間もないから	1	1	1	1	1	1	1	1	2
	域外の利用がない、地域の方との交流が少ないから	0	1	0	1	1	0	1	0	1
	目指しているが、まだ足りない	0	0	1	0	1	2	1	0	0
	地域の認識や理解がまだ不十分だから	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	その他	1	0	0	0	1	1	1	0	1
	無回答	0	0	0	0	0	1	0	0	1

表 5-24 には、地域に根ざしていないと考える人の理由と、今後、地域とどのようにかかわっていききたいかのクロス集計の結果を示す。

地域に根ざしていないと答える人の中で、開所から間もないことを理由にあげる人は、今後地域とは自然な形から認知症の理解・ホームの受け入れまで幅広い目標を持ってかかわっていきこうとしており、どの項目もあげられている。域外の利用が少ないという人は、普通の生活から積極的に交流の場をつくり、地域に認知症高齢者のさまざまな面を知ってもらおうと考えている。

5-7 まとめ

■ホームの日常生活圏は、入居者の外出時の、地域とのかかわりの可能性に大きく影響していることが分かった。

■各ホームの入居者の一週間に外出する頻度を見ると、「ほぼ毎日出かける」という人が、AホームとDホームで8割以上見られた。

■スタッフに行ったアンケートから、それぞれのホームで利用する店舗の種類は異なっており、Aホームは主として駅前の商店街とその近くにある小売店を半々に利用し、また、Bホームはホームの近くにある、何でもそろう食品スーパーを中心に、商店街もある程度は利用している。Bホームは全5ホームのうち、唯一、飲食店の利用もあげている。Cホームが一番多いのが小売店、次いでスーパーを利用している。DホームはAホーム同様、商店街と小売店をほぼ同じくらい利用し、スーパーも少し利用している。Eホームは小売店を主に利用し、足りないものやここで売っていないものをスーパーで買っていた。

■ほとんどのスタッフが地域に根ざしたホームだと思うと答えており、その理由はあいさつや会話など、地域の人と日常的な交流があること、そうありたいと思い日々努力しながら過ごしていると答えた人が多かった。地域に根ざしているかないかの分かれ目ともなるが、大きく分けるとホームの取り組み自体によって「地域に根ざしている」と考えているタイプと、その取り組みに加え「(地域に)名前を覚えてもらう」「なじみの関係」など結果まで見て「地域に根ざしている」と考えている2つのタイプに分かれている。逆に、「地域に根ざしていない」と答えた人は「開所から間もないから」の理由が最も多く、「目指しているが、まだ足りない」と答えた人も多かった。

■ホームがどのくらい地域に認識されていると思うかの質問では、地域のほとんどまで認識されるに至らず、一部分のみにとどまっていると答えた人が多く、商店などの利用、地域の人とのあいさつ・声かけ・会話、困った時に助けてもらう…等を根拠としていた。

■ホームの立地環境の良し悪しについては、ホームごとに「良い」「良くない」の比率が違うが、4

割～8割の人が総合的に「立地環境はいい」と答えている。徒歩圏内の程よい距離に商店や公園が多いこと答えた回答が多かった。逆に、良くない点としてホーム周辺に店が少ないこと、ホーム周辺の交通量と騒音が多いことなどがあげられている。

■回答者の全員が「地域とのかかわりは必要」と答えており、「認知症高齢者を正しく理解し、受容してもらい、地域全体で支えてもらうホームをめざすため」「他の人や地域とのかかわりを持つことは当然のことだから」などが主な理由となっている。

■これから地域とどうかかわっていきたいかについて、「積極的に交流の場を作る」「地域に認知症高齢者のさまざまな面を知り、理解してもらう」などが多くあげられた。

■スタッフの54%が「地域に望むことがある」と答えており、「認知症やグループホームの理解と受容(あたりまえのこととして)」と答えた人が一番多く、続いて「どういう人が入居しているかなど、関心を持って欲しい」「もっと気軽に入居者に話しかけて欲しい」と、もっとグループホームを知り、受け入れて欲しいと考えているスタッフがかった。

第6章 周辺地域住民のとらえるグループホームの認識

6-1 研究の目的と方法

本章では、第4,5章と同様、グループホームの地域との関わり方の実態をとらえることを目的としているが、ここでは特に周辺の地域住民がその地域に立地するグループホームをどのようなイメージで認識しているか、一般の市民の意識構造を明らかにすることを目的としている。

6-1-2 研究の方法

(1) 調査の方法

第5章で選定したグループホームを対象にしてその周辺の地域在住者に対してアンケート調査を行い、住民の意識を把握することとした。

(2) 調査の概要

- 調査実施期間 平成16年11月5日(金)～12月5日(日)
 - 調査対象 第2章で対象としたAホーム～Eホームの5つの周辺地域住民
 - 調査方法 各地域にアンケートを200部ずつ、直接訪問依頼またはポスティングによりお願いし、後日郵送で返却してもらった(一部の人にはヒアリング実施)
 - 回収率 A ホーム・・・48人(24.0%)
B ホーム・・・35人(17.5%)
C ホーム・・・21人(10.5%)
D ホーム・・・25人(12.5%)
E ホーム・・・29人(14.5%)
合計・・・158人(15.8%)
- ※ 以下「Aホーム」という記述は「Aホーム周辺の住民」を意味することとする。(B～Eホームも同じ)

6-2 調査対象者と地域生活の概要

6-2-1 アンケート回答者の基本属性

■ 年齢

図3.1-1より、全体で最も多いのは50才代からの回答で、全ホームの合計は40人である。そ

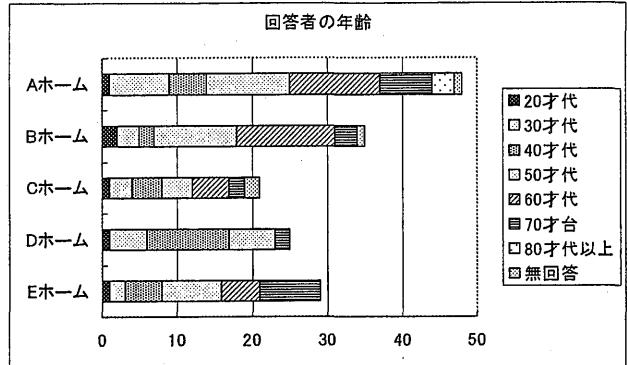


図 3.1-1 アンケート回答者の年齢 (単位:人)

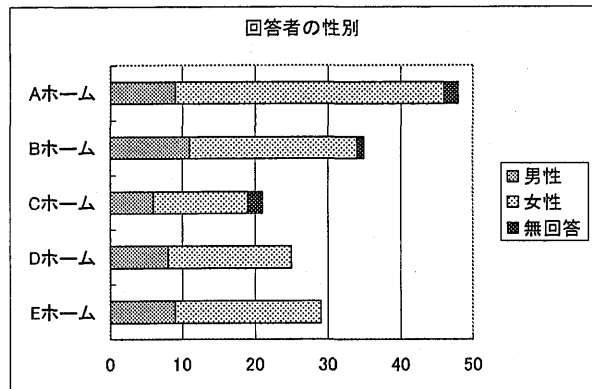


図 3.1-2 アンケート回答者の性別 (単位:人)

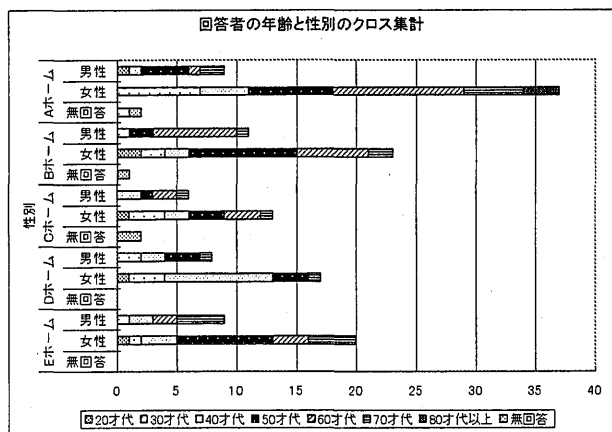


図 3.1-3 アンケート回答者の年齢と性別のクロス集計 (単位:人)

の後は60才代の35人が続き、急に少なくなって40才代27人、70才代22人、30代21人と続く。20才代の若い回答者は、わずかずつではあるが、各ホームにいる。50才代を中心に、40才代、50才代、60才代の人数を合計すると102人に達し、全体の64.6%となる。

■性別

図3.1-2には、回答者の性別を示す。回答の多くが女性であることが読み取れるが、具体的にはAホームで女性の割合が全体の7割以上、B～Eホームで女性の割合は6割以上となっている。男性の回答者が10人を超えたのはBホームのみで、11人であった。

図3.1-3には、年齢と性別のクロス集計を示す。Aホームの女性の人数が最も多く、年齢も30才代、50才代、60才代がほとんどを占めている。また、80才代を超える人も、Aホームの女性に属しており、3人である。Bホームで多かった男性は60才代の人が多いことが分かる。

■職業

図3.1-4には、回答者の職業を示す。グラフより、Eホームで主婦であると答える人が多くなっていることにまず気がつく。主婦はAホームとDホームでも若干多く、会社員と同じ人数である。

自営業を営んでいる人は、とくに今回のアンケートの大きな鍵となると思うが、Dホームで少なかったものの、その他のホームで5～7人いた。その他の職業としては、大学講師、大学事務、ヘルパー、翻訳業などがみられた。

■同居中している家族の人数

図3.1-5に、回答者が現在同居中の家族の人数を示す。4人以上の人と住んでいる人が最も多く、全体で43人であった。

■65歳以上の高齢者との同居

前問で同居している家族がいる人には、さらに65歳以上の高齢者と同居しているかを尋ねた。図3.1-6に、その結果を示す。「同居している」と答えた人はAホームに多く22人だった。次いでEホームで12人いるものの、B,C,Dのホームでは10人にも満たず、全体でも少ないことが分かる。

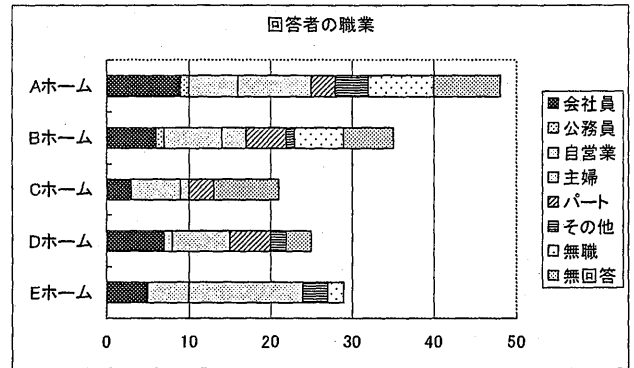


図 3.1-4 回答者の職業 (単位:人)

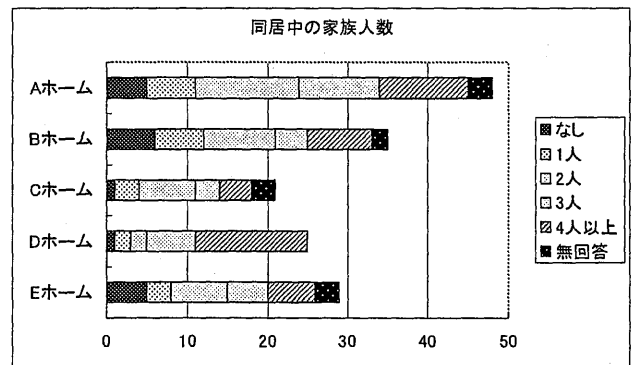


図 3.1-5 同居している家族の人数 (単位:人)

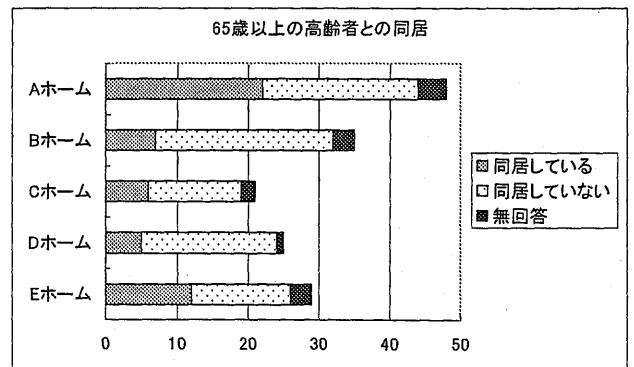


図 3.1-6 65歳以上の高齢者との同居 (単位:人)

■地域への居住年数

「あなたがこの地域に住み続けてどのくらいになりますか?」という質問に対する答えを、図3.1-7に示す。グラフより、どのホームでも20年以上、それぞれの地域に居住している人が多かった

6-2-2 アンケート回答者の日常的買い物の様子

「あなたはこの地域での買い物は週にどれくらいしますか?また、その時間帯とよく利用する店を例にならって3つお答え下さい」という質問に対する回答を以下に示す。

この質問は、Eホームのスタッフとのアンケート作成上の都合によりEホーム周辺の住民に質問することが出来なかったため、AホームからDホーム周辺の住民からの回答のみ示すことにする。

■買い物の頻度

図3.1-8に、回答者の買い物の頻度を示す。最も多いのが週3~4回で、全てのホームで最も多い頻度となっている。後に続くのは、AホームとDホームで週1~2回と週5~6回が同数で、Bホームでは週5~6回、Cホームで週1~2回となっている。

ほぼ毎日買い物に行くという人はそれほど多くなく、どのホームでも1~4人ととどまっている。

■買い物の時間帯

図3.1-9には、買い物の時間帯についての回答を示す。1日に1回とは限らないので、例えば午前中と夕方など、1日2回行くことが多いと答えた人はそれぞれの数をカウントした。

グラフより、どのホームでも15時~18時に買い物をするという人が最も多くなっている。Aホームで19人、Bホームで13人、Cホームで7人、Dホームで9人である。一般的に考えても、15時~18時は夕食の買い物をする時間帯であり、また、17時以降は勤めをしている人も仕事が終わる時間帯でもあるので、買い物をする人が最も多くなることうなづける。

2番目に多いのは各ホームでまちまちであ

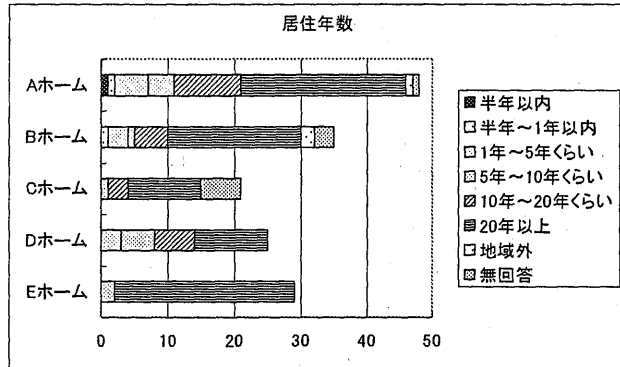


図 3.1-7 回答者の居住年数 (単位:人)

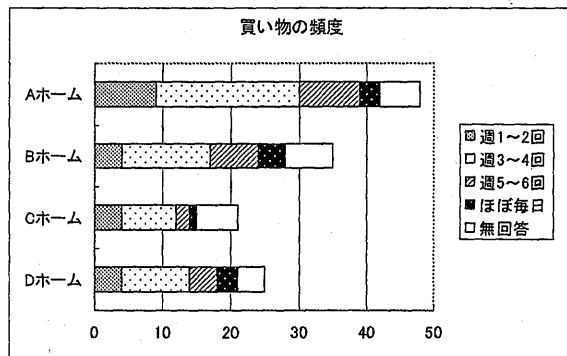


図 3.1-8 回答者の買い物の頻度 (単位:人)

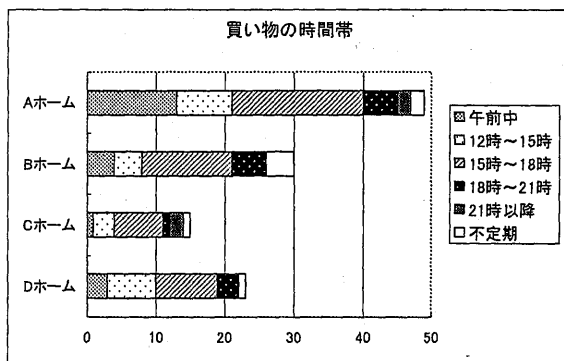


図 3.1-9 回答者の平均的な買い物の時間帯 (単位:人)

るが、全体的には12時～15時と答えた人が22人、午前中と答えた人が21人の順に多くなっている。

■ 普段よく利用する店舗

「普段よく利用する店」については、利用する頻度が多い順に3つまで回答してもらい、それらを「商店街」「小売店」「スーパー」「デパート」「駅ビル」「コンビニ」の6つに分類した。以下図3.1-10にその結果を示す。

グラフには、最もよく行く店舗から順に店舗①、店舗②、店舗③の順になっている。全体的にみると、スーパーを利用する人が目立つ。スーパーを利用する人の割合は、全体の5割以上を占めており、食料品を中心に、身近に多い店を利用しているようである。

次に多いのはデパートであるが、どちらかといえば日常的に頻繁に利用するのではなく、スーパーにはないようなものを購入する場合や週末などに家族で出かけることが多いようである。

3番目には商店街が多くなっている。ホームの立地によっては商店街がないところもあり(Cホーム)最も商店街を活用しているのはAホーム周辺の住人であるといえる。

6-2-3 周辺地域についての認識

「この地域について、あなたはどのようにお考えですか？当てはまるものすべてに○をつけて下さい」という質問をし、周辺環境について以下の項目に該当するかどうか回答してもらった。その後、ホームごとに集計をし、それぞれの項目について○の数をパーセントで示した。(この質問はAホーム～Eホームの全てのホームで行った)

■ 環境を示す項目

- 1 緑が多い
- 2 空気がきれい
- 3 騒音が少ない
- 4 自然が多い
- 5 家賃が安い
- 6 物価が安い
- 7 交通の便がよい

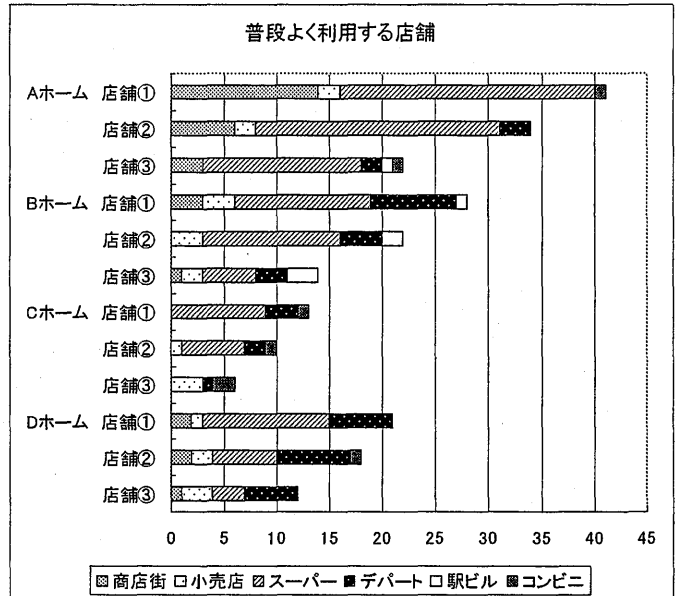
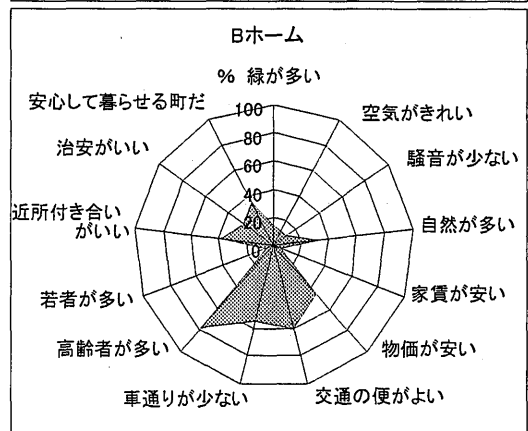
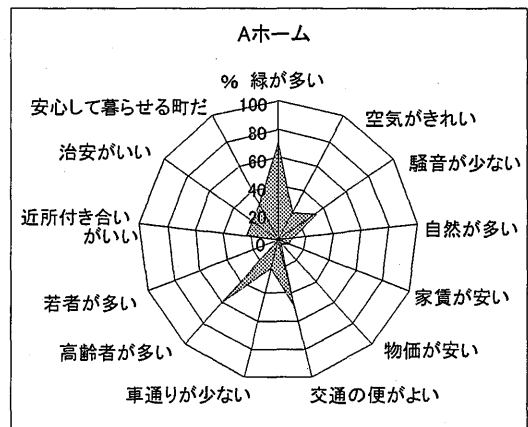


図 3.1-10 普段よく利用する店舗 (単位:人)



- 8 車どおりが少ない
- 9 高齢者が多い
- 10 若者が多い
- 11 近所付き合いがいい
- 12 治安がいい
- 13 安心して暮らせる町だ

■それぞれのホーム周辺住民の評価

図 3.1-11 に、各ホームの住民の、周辺環境の評価に対する回答をまとめたものを示す。全体的に5割を超える項目はそれほど多くない。以下、それぞれのホームについてみていく。

A ホームでは「緑が多い」と答えた人が目立ち、68.8%の人が答えている。次いで多いのは「高齢者が多い」で58.3%である。逆に

「若者が多い」と答えた人は0だった。

B ホームで最も多いのは「高齢者が多い」で77.1%である。続いて「交通の便がよい」が60%となっている。この地域に走っているコミュニティバスをさしているのであろうか？以下、「車通りが少ない」54.3%「物価が安い」45.7%、と続く。A ホーム同様、「若者が多い」と答える人は少なく、0ではなかったものの、わずか5.7%であった。

C ホームでも「高齢者が多い」と答える人が最も多く、71.4%にのぼる。50%を超えた項目はこれだけであり、以降は「近所付き合いがいい」42.9%、「安心して暮らせる町だ」38.1%、「みどりが多い」と「治安がいい」が同数で33.3%と続く。このホームでも「若者が多い」と答えた人は0であった。

D ホームでは「緑が多い」をあげた人が一番多く、88.8%にのぼる。これは、D ホームの近くにある大きな公園と緑地帯をさしていると思われ、ホームの入居者のみならず周辺の人も散歩などを行っていることから、真っ先に思いつく人が多いのだろう。「高齢者が多い」は2番目に多く60%である。そして「若者が多い」「治安がいい」と答えた人は0であり、総合的な評価に値する「安心して暮らせる町だ」はわずか8%であった。

E ホームでもこれまでのホーム同様、「高齢者が多い」が6割を超え、62.1%で最も多い

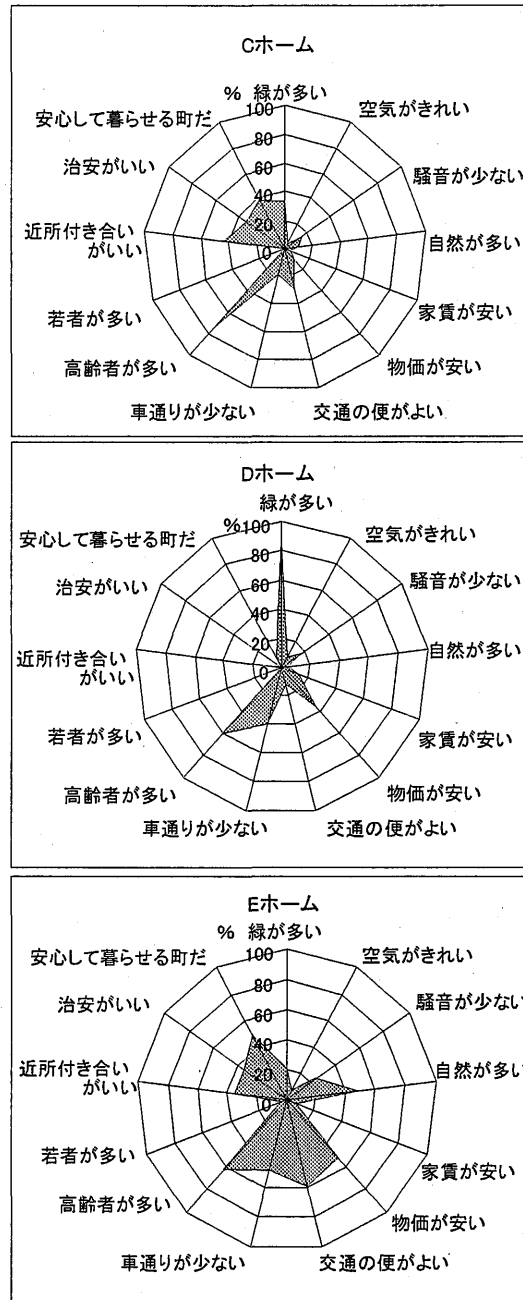


図 3.1-11 周辺地域の評価

項目となっている。「交通の便がよい」が2番目に多く58.6%、3番目に多い項目は3つで「自然が多い」「車通りが少ない」「安心して暮らせる町だ」である。それぞれ48.3%で、全体的に住みやすいと思っている人が多いようである。

6.3 地域住民のグループホームの認知度

6-3-1 それぞれの地域にあるグループホームについて

「あなたはグループホーム〇×(Aホーム～Eホームの正式名称)をご存知ですか?以下の当てはまるもの1つに○をつけて下さい」という質問に対する、それぞれの回答を図3.2-1に示す。

- 1 よく知っている
- 2 名前や存在は知っているがよく知らない
- 3 何となく聞いたことがある
- 4 全く知らない

グラフより、「よく知っている」が多かったのはAホームとBホームであり、それぞれ13人、12人であった。「名前や存在は知っているがよく知らない」と答えた人はAホームで圧倒的に多く27人、また、Dホームでも「よく知っている」より多く17人の人が存在は知っていると答えている。

「全く知らない」と答えた人はBホームとEホームに多くそれぞれ14人ずつだった。

6-3-2 どの程度まで知っているか

次の質問では、前問で「よく知っている」「名前や存在は知っているがよく知らない」と回答してくれた人に、さらに「このホームの人が近隣の商店街を利用していることをご存知ですか?また、どの程度までご存知か、以下の当てはまるもの1つに○をつけてください。」という質問をした。

- 1 グループホーム〇×かは分からないが、どこかの施設の人が利用していると知っている
- 2 グループホーム〇×の人が利用していると知っている(入居者で名前を知っている人はいない)

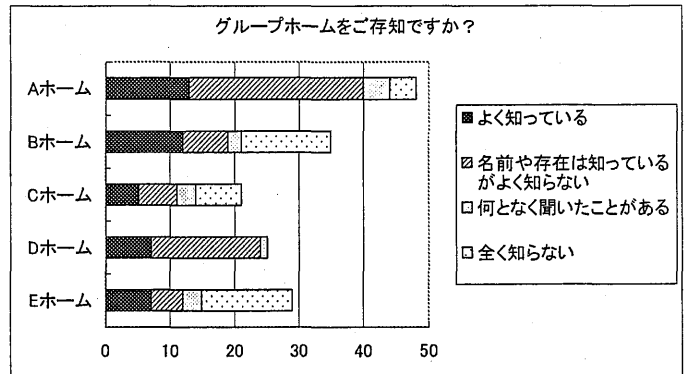


図 3.2-1 グループホームの存在について (単位:人)

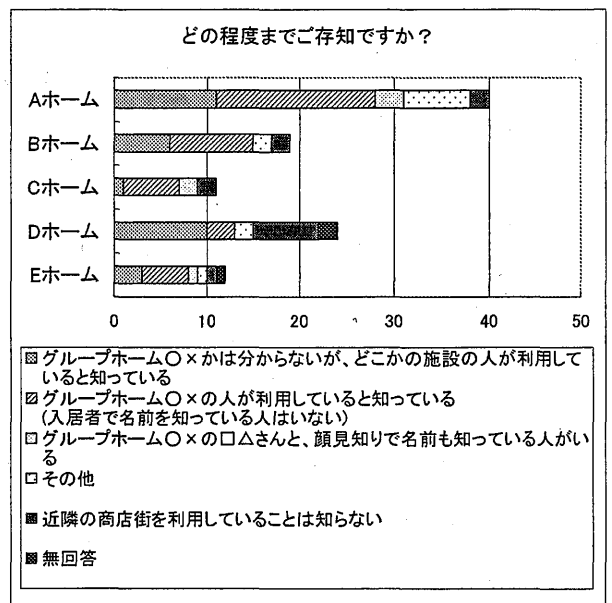


図 3.2-2 どの程度まで知っているか (単位:人)

- 3 グループホーム〇×の□△さんと、顔見知り
で名前も知っている人がいる
- 4 その他
- 5 近隣の商店街を利用していることまでは知らない

以下、図 3.2-2 に、その結果を示す。

グラフより、「(入居者の名前は知らないが)グループホーム〇×の人が利用していると知っている」と答えた人が5つのホームで合計40人と最も多かった。次いで「グループホーム〇×かは分からないが、どこかの施設の人が利用していると知っている」と答えた人が31人であった。

意外にも多かったのは、前問でグループホームの存在を知っているにもかかわらず、この問いで「近隣の商店を利用していることは知らなかった」と答えていた人が16人いたことである。AホームとDホームでそのように答えた人が多いが、特にDホームでは全体の人数(24人)に対する「近隣の商店を利用していることは知らない」と答えた人の割合は、Aホームよりも多くなっている。グループホームの存在を知り、「普通の生活を送っている」その趣旨をきちんと理解していれば、実際に商店街を利用している姿を見ることがなくても理解できると思うのだが…。まだそこまで理解している人が少ないということなのだろうか。

グループホームについて周辺住民がどの程度理解しているかは、第4章で詳しく分析していくことにする。

表 3.2-1 には、その他の内容を示す。

「散歩をしているのをよく見かける」や店の人であれば「買い物をしに来ていただいている」という内容が多い。

6-3-3 グループホームができたことについて

「グループホーム〇×ができたことをどう思いますか? 以下の当てはまるものを全てに○をつけて下さい」という質問に対する回答の結果を、図 3.2-3 に示す。

それぞれの項目は

その他の内容	
Aホーム	お店にお花を買いに来て下さいます
	お世話する方と散歩をしているのを良く見かけます
	家の前で日向ぼっこしている時天気の良いさつなどはするが、知らない方です
	静かな暮らしの雰囲気を感じる程度
	酒類・食品店をしていて毎日のように買い物に来ていただいている。
Bホーム	夫がアルツハイマー病ですので、Aホーム設立当時よりお世話になっています。利用者さんを我が家にご招待することがあります。
	利用者さんの名前は知らないが、スタッフのFさんを知っている
Dホーム	散歩しているのをよく見かける
Eホーム	職員が引率して散歩しているのでEホームの人と分かる

表.3.2-1 その他の内容

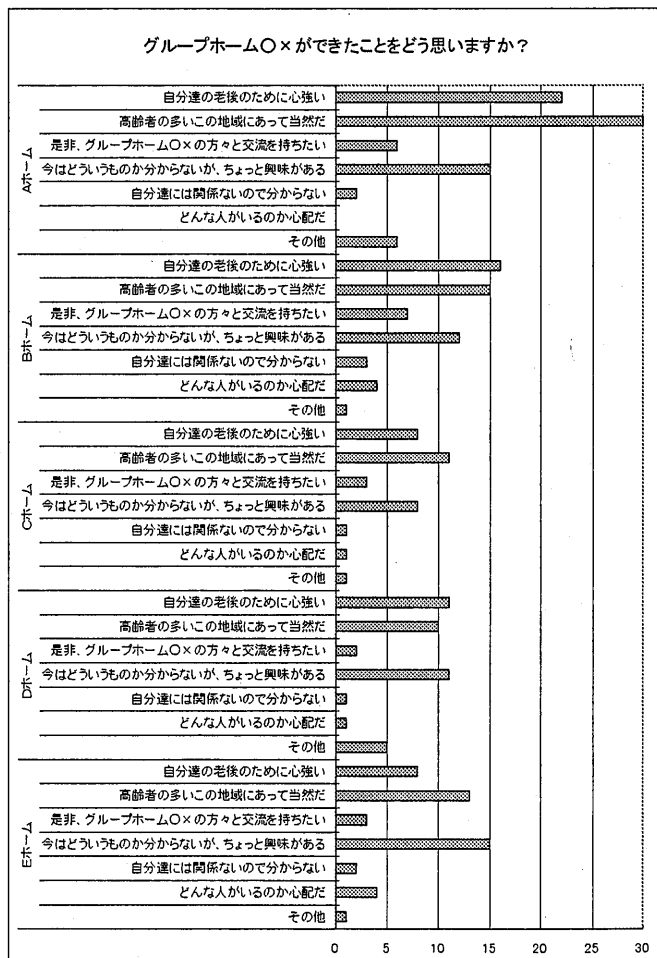


図 3.2-3 グループホームができたことをどう思うか (複数) (単位:人)

- 1 自分達の老後のために心強い
- 2 高齢者の多いこの地域にあって当然だ
- 3 是非、グループホーム〇×の方と交流を持ちたい
- 4 今はどういものか分からないが、ちょっと興味がある
- 5 自分達には関係ないので分からない
- 6 どんな人があるのか心配だ
- 7 その他

の7項目となっている。

グラフより、各ホームごとに分析してみると、Aホームでは「自分達の老後のために心強い」「高齢者の多いこの地域にあって当然だ」と答えている人が多く、5つのホーム中でも最も多くなっている。「今はどういものか分からないがちょっと興味がある」も15人が回答しており、ホームに対して関心を持ち、受け入れようと考えている人が多い。

Bホームでも全体の回答数は少ないが、回答者の傾向はAホームとほぼ同じである。「自分達の老後のために心強い」16人、「高齢者の多いこの地域にあって当然だ」15人となっている。「どんな人があるのか心配だ」「自分たちには関係ないので分からない」と答えている人の数もAホームより多く4人となっており、前項で8割以上の人が「高齢者が多い」と答えている地域にもかかわらず、まだグループホームについて認識されていないこと、高齢者施設に興味のない人があるといえる。その一方で、「是非、グループホーム〇×野方と交流を持ちたい」という人はAホームより多い7人であった。

Cホームでも同様に「高齢者の多いこの地域にあって当然だ」が11人を初めとし、「自分達の老後のために心強い」「今はどういものか分からないがちょっと興味がある」が8人ずつおり、「自分達には関係ないので分からない」「どんな人があるのか心配だ」と答えた人が1人ずついた。

Dホームは「自分たちの老後のために心強い」「今はどういものか分からないが、ちょっと興味がある」が同数の11人、「高齢者の多いこの地域にあって当然だ」と答える人は10人であった。

E ホームは「今はどういうものか分からないが、ちょっと興味がある」15人、「高齢者の多いこの地域にあって当然だ」13人、「自分達の老後のために心強い」8人の順になっている。「どんな人がいるのか心配だ」と答えた人は、B ホームと同じ4人であった。

表より、A ホームでは「老後、自分も入りたいと思う」「この地域に関係なく、高齢化社会にはあって当然のことだと思います」「生活者のホームの中での様子を見たことがないので、一度見てみたい」というホームに関心を持つ意見が多い。

B,C,E ホームは1人ずつであった。B ホームでは「ホームの中がどのような構造になっており、どの様に生活が営まれているか、その実態を是非見学したい。そして本でしか知らない知識と比較し、そのギャップをうめたい」とかなり興味を抱いた内容だった。

6-3-4 グループホームと特別養護老人ホームの違いについて

上記の質問の後、グループホームの説明として

「認知症高齢者グループホームとは、認知症高齢者が小規模な生活の場で少人数(5人から9人)を単位とした共同住居の形態で、食事の支度や掃除、洗濯などを入居者がスタッフとともに共同で行うものです。一日中家庭的で落ち着いた雰囲気の中で生活を送ることにより、認知症の症状の進行を穏やかにし、少人数の中で『なじみの関係』をつくり上げることによって生活上のつまづきや行動障害を軽減し、心身の状態を穏やかに保つことができます」

ということ述べたうえで、「あなたは、グループホームと特別養護老人ホームの違いをご存知ですか?」という質問をした。以下、図3.2-4にその結果を示す。

グラフより、「はい(=知っている)」と答えた人はA ホームで最も多く27人となっており、A ホームの回答者の半数以上を占めていた。続いて多いのはE ホームで「はい」と「いいえ」が半数の14人ずつであった。それ以外のホームは「はい」より「いいえ」のほうが多く、B ホーム

その他の内容	
Aホーム	老後、自分も入りたいと思う
	少ない人数だと建物から思いますが、それだけに人間関係の良し悪しに心配
	当然とは思わないが、高齢の方にとっても地域の方にとっても良いと思う
	この地域に関係なく、高齢化社会にはあって当然のことだと思います
Bホーム	いつどこにきたのですか
	生活者のホームの中での様子を見たことがないので、一度見てみたい
	交流を持つに至るか否かは不明だが、ホームの中がどのような構造になっており、どのように生活が営まれているか、その実態を是非見学したい。そして本でしか知らない知識と比較し、そのギャップをうめたい。誰にでも起こりうる老後の姿であるので、しっかりとした、客観に基づいた判断の基準(Reference)を得たい。
Cホーム	初めて目にするので場所を確認したい
Dホーム	特に何も思った事はない
	巨額な運営が多いので、事故が心配
	住環境の良いこの地域は、そのような施設にとって好条件なのだろうと思う
Eホーム	子供が小さいので、お年寄りとの交流が持てたらと以前から思っていた。子育ては今頑張ってます
Eホーム	Eホームそのものが分からない

表.3.2-2 その他の内容

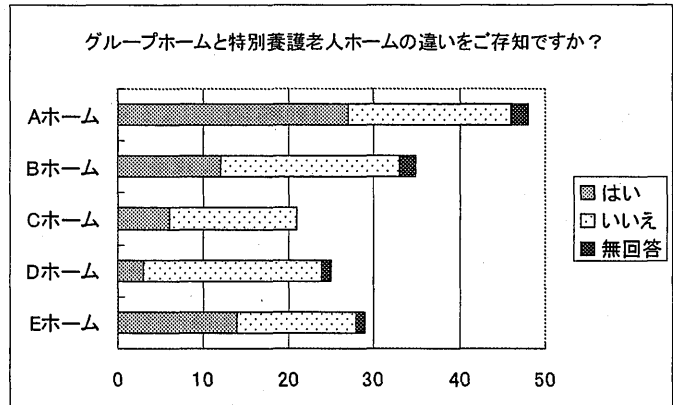
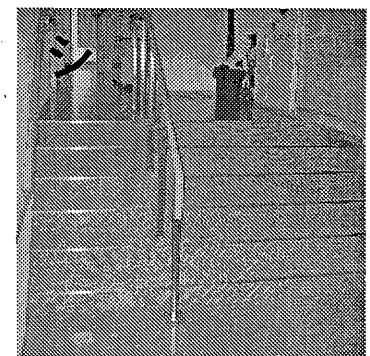
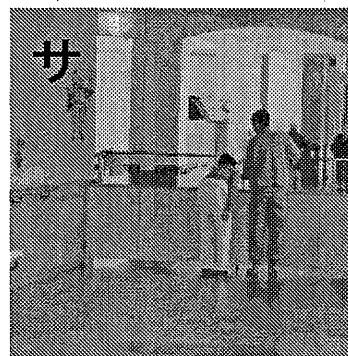
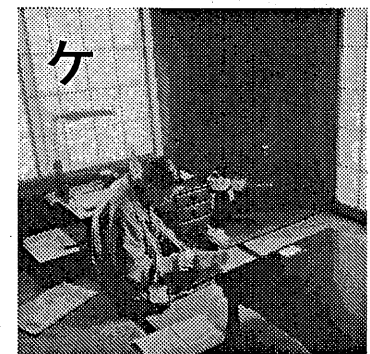
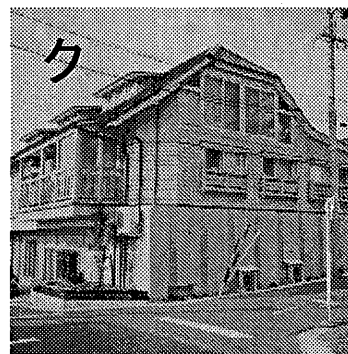
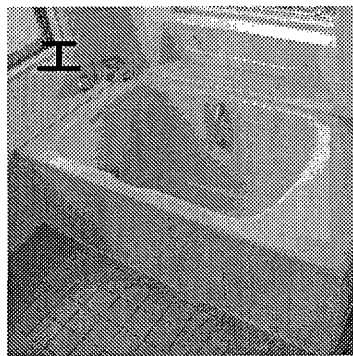
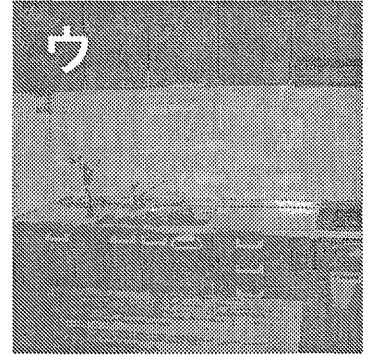
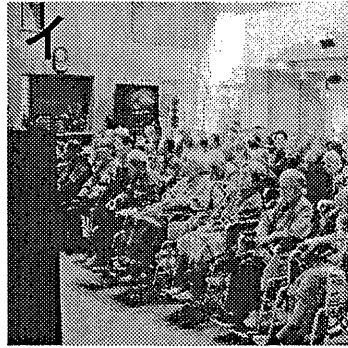
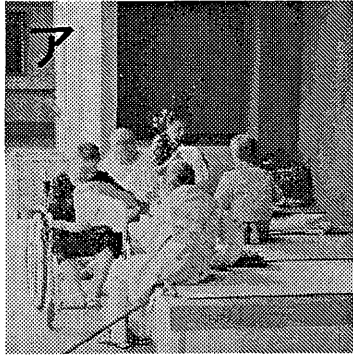


図 3.2-4 グループホームと特別養護老人ホームの違いについて知っているか (単位:人)

では「はい」12人に対し「いいえ」21人となっている。C,D ホームで「はい」と答える人は10人以下で、C ホームでは6人、D ホームではわずか3人であった。

6-3-5 グループホームのイメージについて

住民がとらえるグループホームについてのイメージを把握するため、以下の12枚の写真が撮影された場所を「グループホーム」「特別養護老人ホーム」「それ以外」の3つのうち当てはまると思われるものに分類してもらった。



■写真ア

グラフより、どのホームもほとんどの人がグループホームと答えている。

正解である特別養護老人ホームと答えた人は、Aホームで10人、BホームとCホームで各5人、DホームとEホームでそれぞれ7人となっている。

その他では、デイケアと答えた人が1人いた。

この写真は12枚の写真の中でも正答率が低く、A～Eホーム全てをあわせた正答率は21.5%とかなり低くなっている。



正解・特別養護老人ホーム						
正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	20.8%	14.3%	23.8%	30.4%	24.1%	21.5%

特別養護老人ホームでの、入居者の団楽の様子である。ポイントとなるのは、入居者が座っている小上がりの畳や、後ろのほうに見える籠で、特養っぽさがよく出ている。
以下、図3.2-5に、それぞれのホーム周辺の住人がこの写真についてどの様に回答したかを示す。

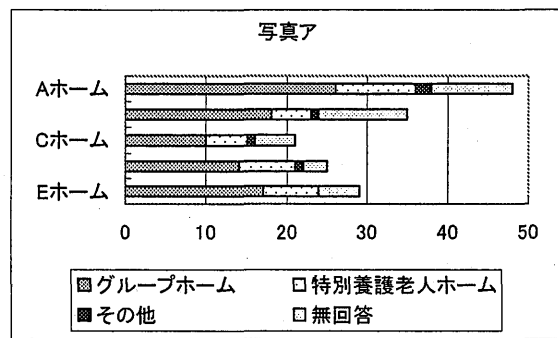


図 3.2-5 写真アについて (単位:人)

■写真イ

グラフより、写真イが特養で撮影されたと思うと答えた人はどのホームでもかなりの人がそう思っており、どのホームでも正答率は65%を越えている。ちなみに、全体での正答率は71.5%となっている。12枚の写真の中で最も正答率が高い写真である。

その一方で、この写真をグループホームと答えた人も各ホーム2～6人おり、「小規模な生活の場で少人数を単位とした共同住居」という、グループホームの大きな特徴がまだ理解されていないと思われる。

その他については、「それ以外と思うものはその理由もお書き下さい」とお願いをしたが、この写真について記述してくれた人はいなかった。



正解・特別養護老人ホーム						
正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	77.1%	65.7%	76.2%	78.3%	65.5%	71.5%

この写真も、特養で撮影されたものである。写っている入居者のほぼ全員が車椅子で、大人数の集団的な生活をしていることから、1ユニット5人～9人程度で小規模で生活するグループホームとは考えにくいだろう。
この写真についての回答結果は図3.2-6に示す。

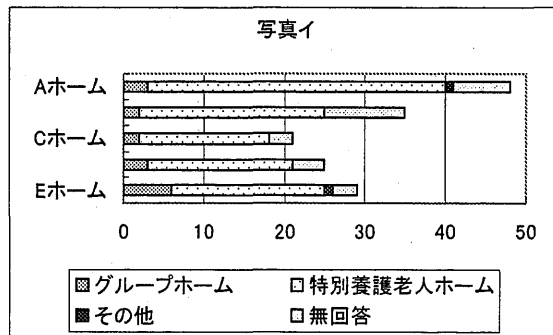


図 3.2-6 写真イについて (単位:人)

■写真ウ

グラフを見ると、ホームによって写真から受ける印象が大きく違っていることが分かる。この写真をグループホームと答えている人が多いのはAホームとEホームの回答者であり、それぞれ23人、22人となっている。しかしながら、正答率は回答者の絶対数がやや少ない中で正解者が多かったEホームで75.9%に達している半面、Aホームでは回答者の絶対数が多いため、正答率は47.9%まで落ちており、5つのホームをあわせても48.1%とかなり低くなっている。

グループホームでの写真と答えた人はAホームに多く、Dホームでは0人であった。Dホームではこの写真をその他と答える人が多かったが、「バリアフリーではない、老人向けの施設ではない、医療施設のような」や「一般の家庭や病院と比べて段差がある」と答えた人がいた。

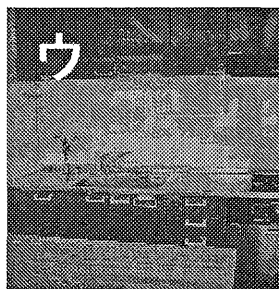
全体での正答率は48.1%であった。

■写真エ

グラフから、この写真がグループホームのものと正しく回答した人はそれほど多くはない。この写真も、写真ウ同様、AホームとEホームで正解している人が多く、Aホームの正答率62.5%、Eホームの正答率69.0%となっている。他のホームの正答率はBホーム40.0%、Cホーム47.6%、Dホーム39.1%と40%前後であった。

各ホームとも特別養護老人ホームと答えている人がおり、多いところでは5~6人が答えている。

その他については、「普通の家」と答えている人が1人、「手すりが少なく、浴槽が深い」と指摘し、その他と答えている(その他の何の施設のものかは記述なし)人が1人いた。また、写真ウ同様、「一般の家庭や病院と比べて段差がある」と答えている人がいた。



正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	47.9%	40.0%	42.9%	34.8%	75.9%	48.1%

写真ウは、東京都内のグループホームで撮影されたものである。家庭の台所と大きく変わらないようだが、普通の人はどう答えるだろうか。造りは家庭とほとんど変わらないものの、食器や調理道具などが置かれていないため、少し家庭とは感じたい印象もある。
図3.2-7に、回答の結果を示す。

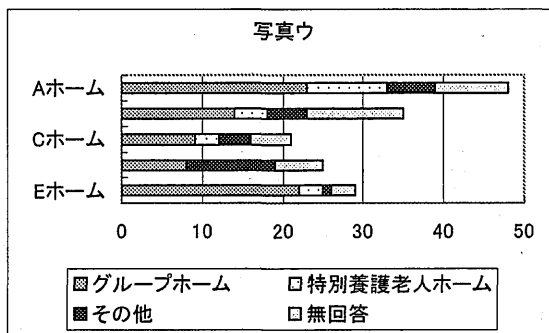
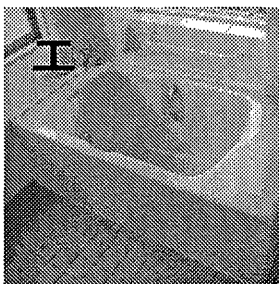


図3.2-6 写真ウについて (単位:人)



正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	62.5%	40.0%	47.6%	39.1%	69.0%	52.5%

この写真は、グループホームで撮影された浴室である。手すりがついているが、浴槽は大きく、一般の家庭と同じであり、施設らしさは感じられない。
この写真についての回答を、図3.2-7に示す。

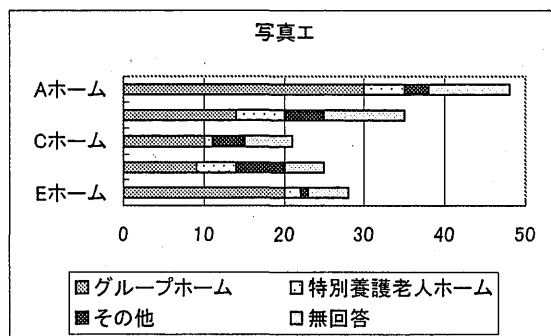


図3.2-7 写真エについて (単位:人)

■写真オ

グラフより、写真オをグループホームと答えた人が多く、各ホームで5割~6割くらいである。特養と答えて正解している人はわずかであり、AホームとCホームで2割程度、それ以外ではBホームで14%、Eホームで13%、Dホームではかなり低くわずか4%である。写真より、確かに、大規模な大型施設を感じさせず、何となく施設っぽさがない。だが、「施設っぽくない=グループホーム」という考えを持ち、ただ単に建物の造りだけから判断すると、間違ってしまうのだと思う。後のほうの解析に記述するが、ホームの中での生活を理解していない一般の人は多い。

その他と回答した人の中では、ペンションに見える人と答えた人がいた。

全体での正答率はかなり低く、15.1%にとどまった。



正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	20.8%	14.3%	19.0%	4.3%	13.8%	15.2%

特養での、食事の用意をする写真である。奥の方のカウンターや、手前の机、イスを見て、写真に写っている2人の人だけの食事ではなく、数人の食事を用意している様子がわかる。グループホームであれば、手前のイスに座っている人もなく、入居者も調理や食事の用意をすることが多いことを考えると、特養と判断できるのではないだろうか。写真オについての回答の結果を、図3.2-8に示す。

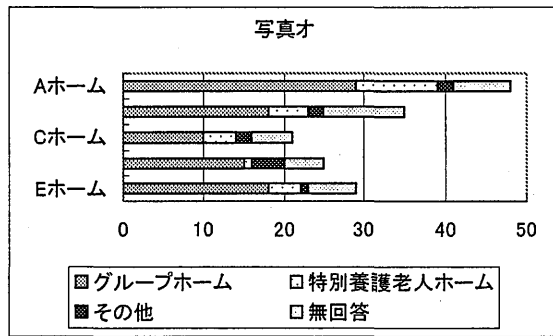


図 3.2-8 写真オについて (単位:人)

■写真カ

グラフを見ると、特別養護老人ホームと答えている人が半数いることが分かる。Aホームで22人、Bホームで16人、Cホームで9人、Dホームで10人、Eホームで17人である。正答率はA~Dはどのホームも45%くらいで、Eホームで他より高く58.6%となった。全体では46.8%であった。

この写真をその他と回答した人は、病院の病室と答えた人が2人、デイケアと答えた人が1人、医療施設のようなと答えた人が1人いた。それ以外でその他と答えた人は、具体的に何だと思ったかは無記入だった。



正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	45.8%	45.7%	42.9%	43.5%	58.6%	46.8%

若干、写真が見づらいが、この写真は特養の多床室で撮影された写真である。よく見るとベッドが2つあることが分かる(実は写真範囲外にまだベッドがある)。病院の病室とも取れなくもない。この写真に対する回答を3.2-9に示す。

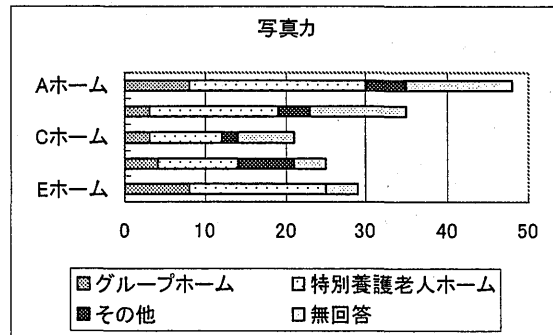
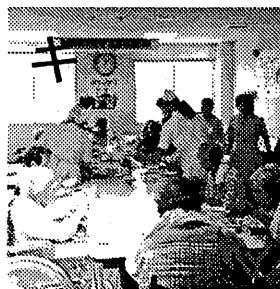


図 3.2-9 写真カについて (単位:人)

■写真キ

グラフを見ると、写真キを解くようだと答えている人が多いことが分かる。この写真は、写真イと並んで正答率が高い写真であり、Bホームで正答率が45.7%と若干他より低くなっているものの、Aホームで72.9%、Cホームで76.2%、Dホームで56.5%、Eホームで65.5%と6割を超え、全体では62.7%と高くなっている。

この写真について、その他の具体的な内容を記述してくれた人はいなかった。



正解・特別養護老人ホーム						
正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	72.9%	45.7%	76.2%	56.5%	65.5%	62.7%

写真キは、特養での食事の風景である。少し見づらいが、手前の方に車椅子に座って食事をしている女性や、奥の方には病院の看護士のような格好をしたスタッフが入居者に食事を食べさせている様子が写っている。
グループホームの場合、食事はスタッフも入居者とともに取るというホームが多いが、そこまで理解して回答している人はいたのだろうか？結果については、以下図3.2-10に示す。

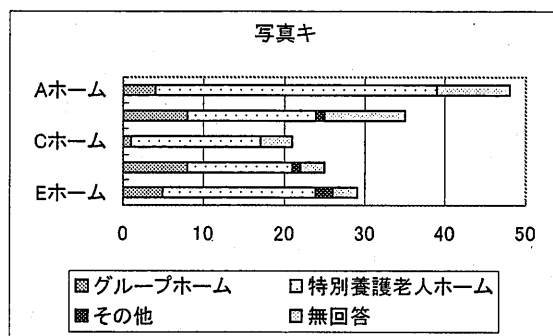


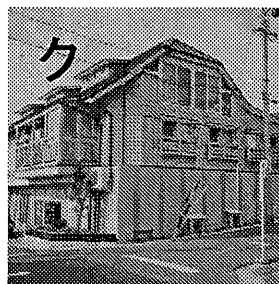
図 3.2-10 写真キについて (単位:人)

■写真ク

グラフから、ホームによりばらつきはあるものの、A, B, E ホームで、この写真をグループホームのものと思った人が多い。Aホームで32人、Bホームで20人、Eホームで22人である。CホームとDホームはグループホームと答えた人は少なく、それぞれ10人、6人となっている。

正答率は正解者の多いA, B, E ホームで60%を超え、Eホームは75%にまで達している。正解者の少ないCホームは47.6%、Dホームは26.1%まで下がっている。全体の正答率は57.6%であった。Dホームではその他と答える人が多かった。

その他で具体的な記述による回答は「グループホームかとも思ったが、違うようにも見える」と答えた人が1人とどまった。



正解・痴呆性高齢者グループホーム						
正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	66.7%	60.0%	47.6%	26.1%	75.9%	57.6%

写真クは、あるグループホームの外観である。
グループホームといっても、民家改修型や、特養やデイサービス、病院などと併設しているもの、ビルの一部に入っているものなど、運営形態はさまざまであるから判断しがたい部分もあると思うが、一般の人はどう答えているのだろうか？結果を、図3.2-11に示す。

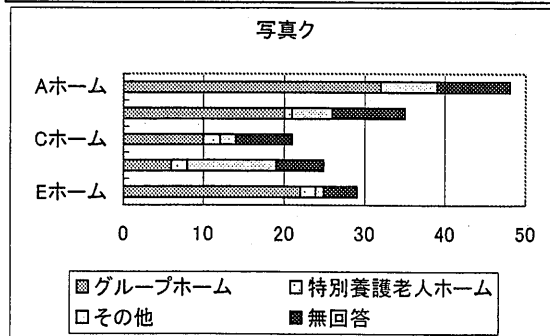


図 3.2-11 写真クについて (単位:人)

■写真ケ

A, B, E ホームで、この写真をグループホームであると答えた人が多いことが分かる。前写真同様、C, D ホームで少なく、その中でもD ホームで最も少ない。

各ホームの正答率は、A ホームで 47.9%、B ホームで 51.4%、C ホームで 33.3%、D ホームで 13.0%、E ホームでは最も高く 75.9% となり、最大で 62.9% もの差が開いた。ちなみに、全体での正答率は 43.0% であった。

この写真を特養と答えた人はそれほど多くはないが、E ホームで最も多く 7 人いた。

その他と答えた人はA ホームとD ホームに多かった。その他の内容としては、1 人暮らし(の自宅)と答えた人が 4 人いた。

E ホームは民家改修型のグループホームであり、このアンケートの回答者が、そのE ホーム周辺の人で、中には見学を下ることがある人もいれば、E ホームの正答率が高いこともうなずける。



正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	47.9%	51.4%	33.3%	13.0%	58.6%	43.0%

写真ケは、グループホームの個室での写真である。
床は畳で、使用している机や家具などおそらく入居者本人のものであろう。
本間に、グループホームもさまざまな形態があるのでなかなか難しいと思うが、一般の人がどう答えたか見てみることにする。
以下、図3.2-12に結果を示す。

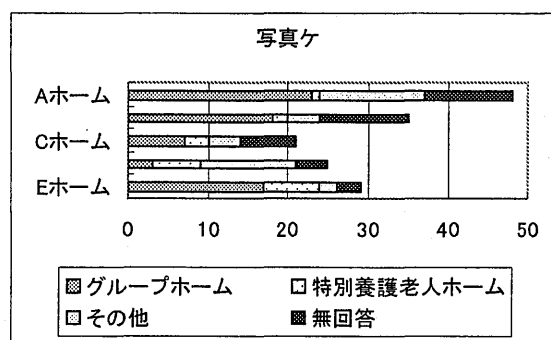


図 3.2-12 写真ケについて (単位:人)

■写真コ

グラフを見ると、特養と答えた人が多いが、グループホームと答えた人も、各ホームわずかながらいることが分かる。正解者はA ホームとE ホームに多く、各ホームについて正答率を見てみると、A ホーム 43.8%、B ホーム 45.7%、C ホーム 31.8%、D ホーム 34.1%、E ホーム 65.5% と、またしてもE ホームで群を抜いて正答率が高くなっている。

全体の正答率は 45.6% であった。

その他と答えた人はA ホームとD ホームに多く、病院と答えた人が 2 人いた。



正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	43.8%	45.7%	38.1%	34.8%	65.5%	45.6%

写真が見づらいが、これは特養でスタッフが入居者の入浴を介助している場面である。
病院のように見えなくもない。
結果は、図3.2-13に示す。

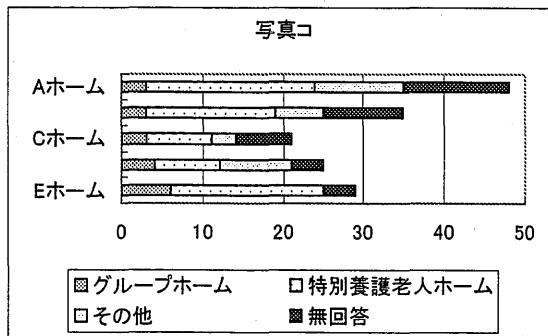


図 3.2-13 写真コについて (単位:人)

■写真サ

グラフより、全体的には特養での写真と答えた人が多いが、各ホーム3~7人の人がグループホームで撮影されたものであると答えている。これまでの写真同様に正答率を見ると、Dホームで最も高く65.2%、その後Eホーム55.2%、Aホーム52.1%、Bホーム42.9%、Cホーム38.2%の順となっている。また、全体での正答率は50%となっていた。

その他と答えた人は少なかったが、病院での写真と答えた人が1人いた。



正解・特別養護老人ホーム						
正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	52.1%	42.9%	38.1%	65.2%	55.2%	50.0%

写真サは、特別養護老人ホーム内の写真である。
 入居者とスタッフらしき人の前に、おおきな柵があることが分かる。グループホームは家庭的な環境であるため、このような柵を置くことはほとんど無いと言ってよく、玄関の鍵すら屋間は開けっ放しにしているところも多い。
 一般の人の見方はどうだろうか？結果を図3.2-14に示す。

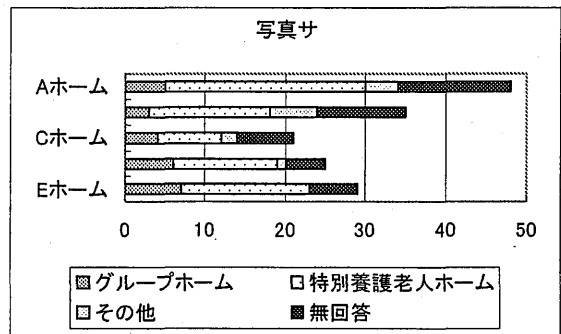


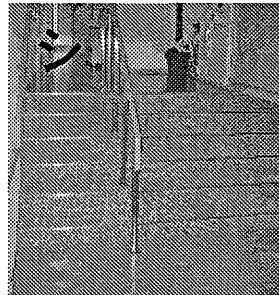
図3.2-14 写真サについて (単位:人)

■写真シ

図3.2-15に結果を示す。グラフから、グループホームと答えたのはBホームの住民が最も多く、11人となっているが、他の3ホームではわずか2~3人となっている。これら3つのホームでは逆に、特養と答えている人が多く、Aホームで21人、Cホームで9人、Dホームで11人となっている。

正答率を見てみると、写真オと同様にかなり低く、Bホームで31.4%以外は、Cホームで14.3%、AホームとDホームではわずかに3~4%であった。4ホーム全体の正答率は14.7%だった。

Aホームではその他と答えた人も多かったが、全体でその他についての記述を見ると、有料老人ホームと答えた人が1人、「階段はグループホームにも特養にも無いと思う」と、「高齢者施設=全てバリアフリー」という考えの人が1人いた。



正解・痴呆性高齢者グループホーム						
正答率	Aホーム	Bホーム	Cホーム	Dホーム	Eホーム	全体
	4.2%	31.4%	14.3%	8.7%	—	14.7%

写真シは、グループホームの中に設けられている1m程の階段を撮影したものである。このホームは、ビルの上階に位置しており、入居者のリハビリを兼ねて日常的に利用してもらおうと言う目的で設置されたものである。
 この写真の回答に至っては、Eグループホームの方とアンケート作成の兼ね合いで、Eホーム周辺の住民を除く、A~Dホーム周辺の住民のみの回答しか得られなかったため、A~Dホームの結果のみを示す。

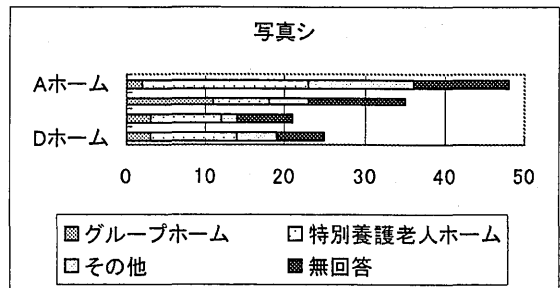


図3.2-15 写真シについて (単位:人)

■各ホームの正答率（写真ア～写真サ）

以下、図 3.2-16 から図 3.2-21 まで、各ホームのそれぞれの写真の正答率を示す。

A ホームと B ホームでは、写真アとオの正答率が低かったものの、他は全て 40%以上の正答率になっているが、グループホームはあまり理解されていないと思われる。

C ホームも A, B ホームと同様、写真アとオの正答率が低い、他は 30%以上の正答率となっている。D ホームは写真アの正答率は 30%とまずまずだが、写真オの正答率が 5 ホーム中最も低く、10%にも満たなかったのと、写真クとケの正答率が他のホームと比べ、極端に低くなっている。写真オ, ク, ケ以外の写真は 30%以上の正答率となっている。

E ホームもこれまでの 4 つのホーム同様、写真アと写真オの正答率が低い、それ以外の写真の正答率は 5 割を超え、全体でもかなり高い正答率となっている。

図 3.2-21 の、全体の正答率を見ると、やはり写真アと写真オの正答率が低いのが目立つ。最も正答率が良い写真は写真イであり、70%を超えている。それ以外の写真はおよそ 40%~60%台となっており、まだまだグループホームと特養の違いは、ほとんどの住民に理解されていないことが分かる。

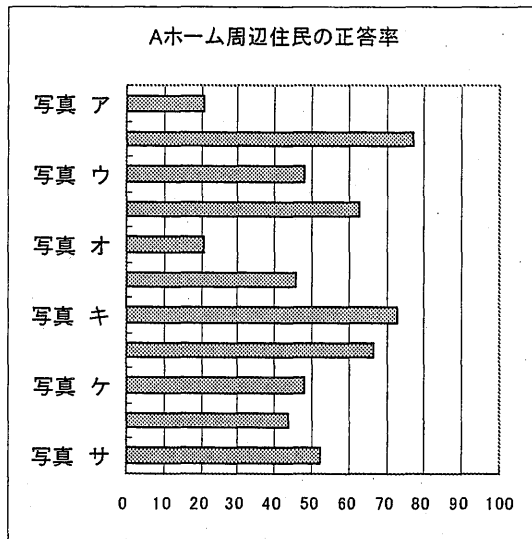


図 3.2-16 A ホーム周辺住民の正答率（単位:人）

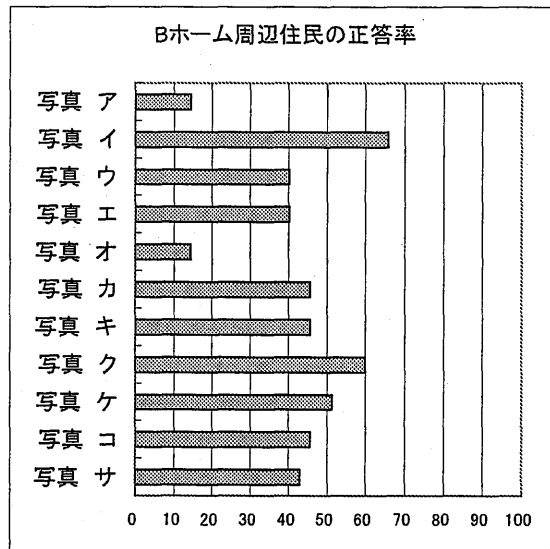


図 3.2-17 B ホーム周辺住民の正答率（単位:人）

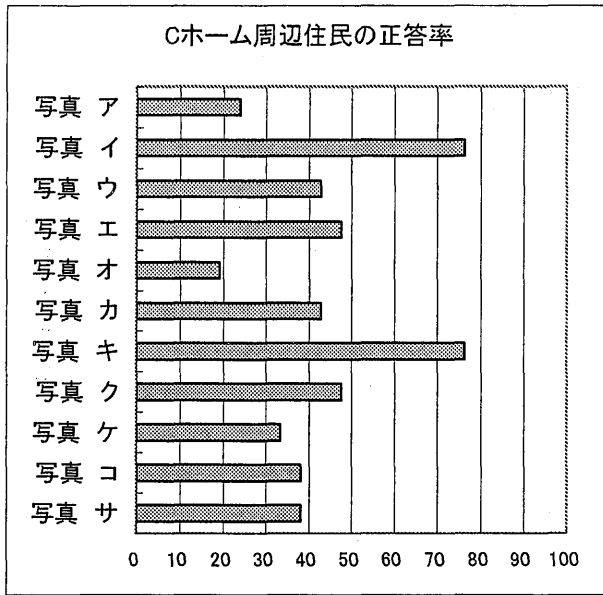


図 3.2-18 C ホーム周辺住民の正答率 (単位:人)

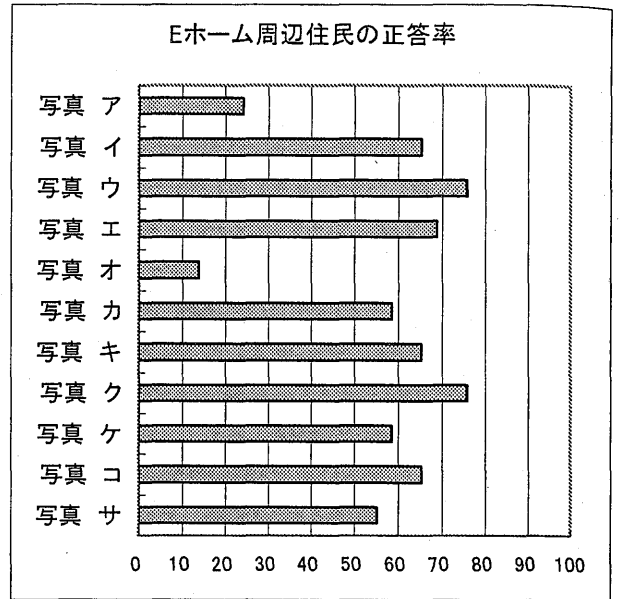


図 3.2-20 E ホーム周辺住民の正答率 (単位:人)

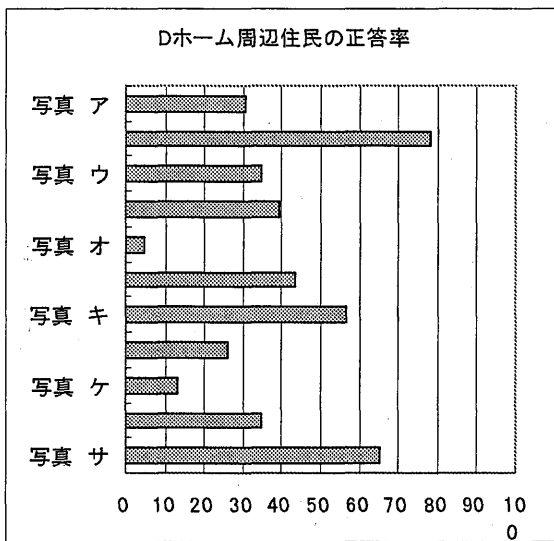


図 3.2-19 D ホーム周辺住民の正答率 (単位:人)

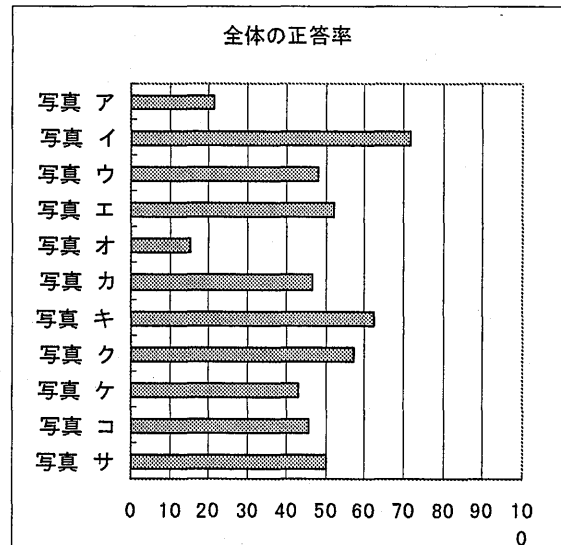


図 3.2-21 全体の正答率 (単位:人)

6-3-6 各ホームと周辺施設の認識率

各ホームが主要な周辺施設と比べてどの程度認識されているのかを把握するため、「この地域にある施設で、あなたが知っているものには○を、知らないものには×をつけて下さい」と言う質問をし、A～Eの各ホームと、その周辺の代表的な施設を10つ、合計11つについて、○の数を集計した。この数についてそれぞれの施設ごとにパーセントで表わしたものを、以下図3.2-23から図3.2-27に示す。

図3.2-23より、Aホームの認知度は、スーパー①、公園①、病院、小学校に次ぐ5番目で87.5%と高く、周囲の施設と比べればまずまず知られているといえる。周辺施設はランダムに選んだが、全体的にどの施設も周辺住民によく知られている。

図3.2-24より、Bホームの認知度は10番目で54.3%であった。Bホームのある地域には、2つのデイサービスセンターがあるが、これらのデイとBホームの高齢者施設は、神社や公園、銭湯、スーパー、よりも低く、あまりよく知られていないようである。

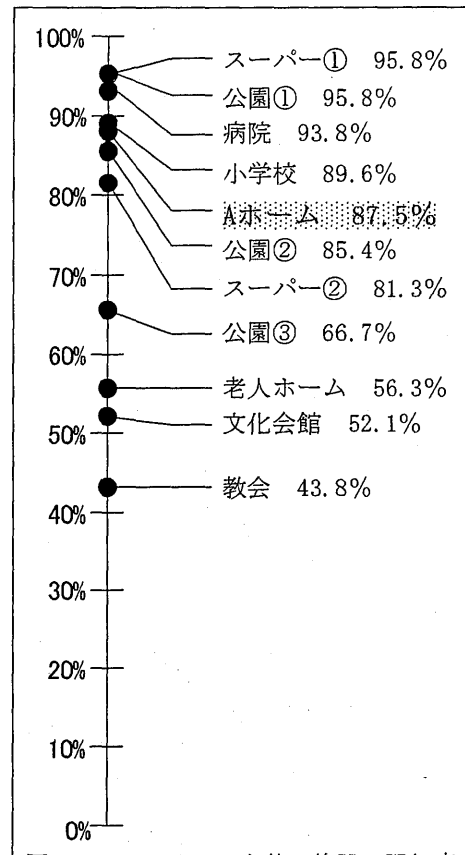


図3.2-23 Aホームと他の施設の認知度

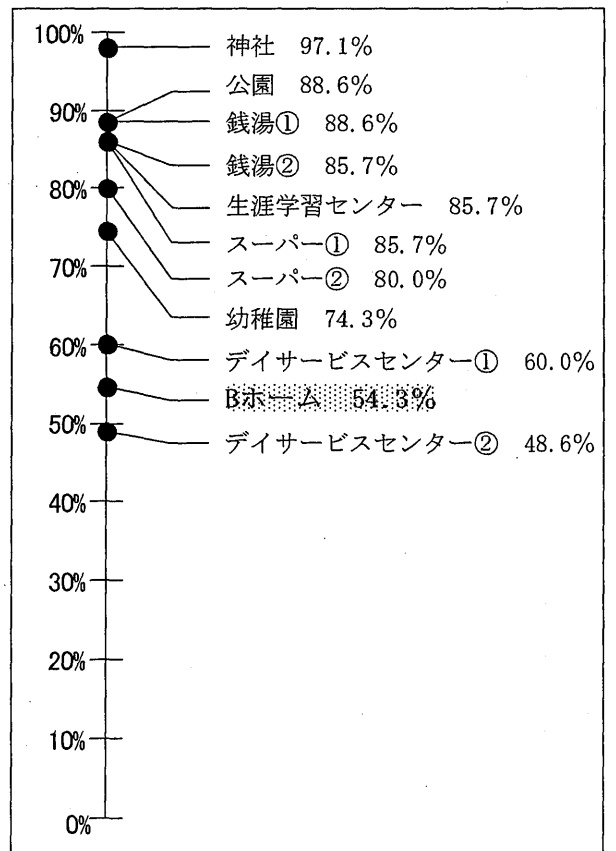


図3.2-24 Bホームと他の施設の認知度

図 3.2-25 より、C ホームの認知度も B ホームと同様、他の施設に比べて認知度は低い。47.6%で、全体の 10 番目である。認知度が高いのは公園①が 90%、演芸ホールが 85.7%、小学校が 81% などとなっている。ちなみに、回答者の中には、6 番目のスーパーが火事になった、9 番目の温泉は今はないということを記述してくれた人もいた。

図 3.2-26 を見ると、D ホームの認知度は 76.0%で、8 番目に認知されている。上位にあるのは大仏と公園が 100%と、回答者全てに認知されている。また、続く美術館、寺、神社も 96%でよく知られているといえる。D ホームの 1 つ上位の病院は、D ホームに併設しているクリニックを指しており、若干、このクリニックの方が認知されているようである。最下位にあるグループホームは、D ホームとは別のグループホームを指しており、認知度は 8%ときわめて低い。

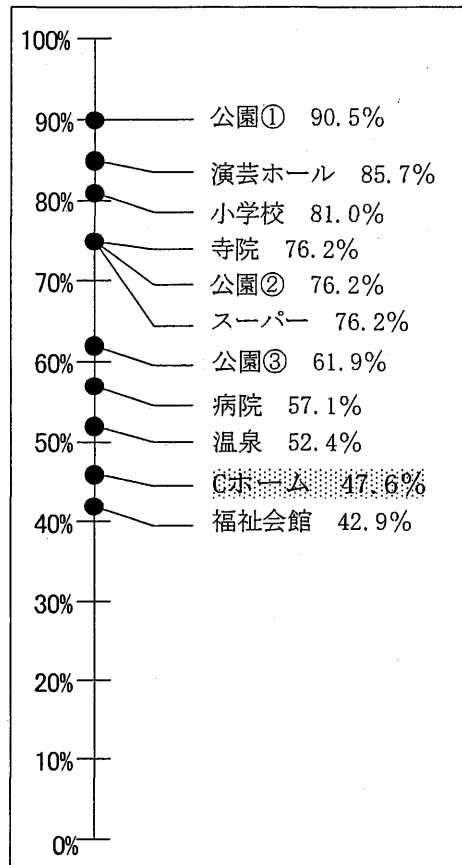


図 3.2-25 C ホームと他の施設の認知度

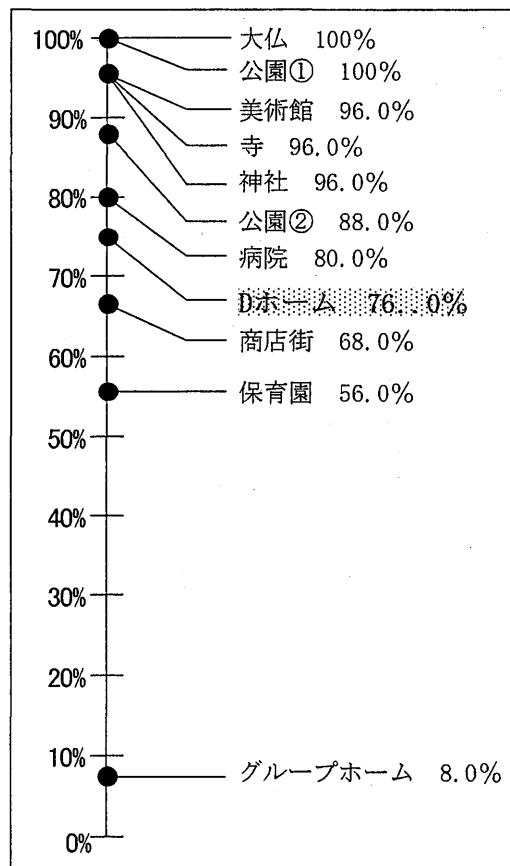


図 3.2-26 D ホームと他の施設の認知度

図 3.2-27 には、E ホームと他の施設の認知度を示す。E ホームの認知度は、周囲の施設と比べて最も低く、44.8%である。

認知度が高いのは公園①、公園②、競輪場で100%である。以降も病院①、スーパー①、病院②、小学校②が 96.6%、周辺施設で一番低い公園③でも、82.8%と全て8割の人が認知している。

全体を通して、他の周辺施設に比べれば、まだまだグループホームの認知度が低いようである。このアンケートをきっかけに、名前を初めて知ったという人もいるので、もっと多くの人に知ってもらいたいと思う。

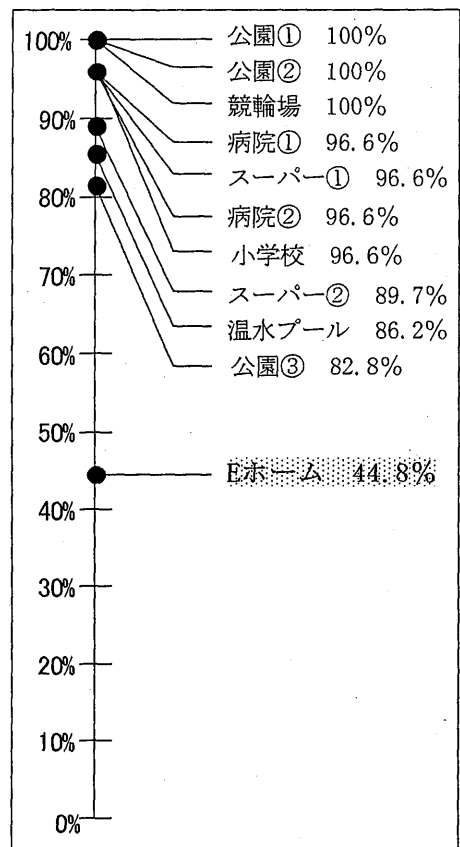


図 3.2-27 E ホームと他の施設の認知度

6-4 今後のグループホームおよび高齢者施設とのかかわりに対する意識

6-4-1

「将来、自分が高齢者になった場合に、どのようなところに住みたいですか？以下の当てはまるもの全てに○をつけて下さい」という質問をした。回答項目については以下の通り。

- 1 自宅にずっとすんでいたい
- 2 設備の整った老人ホームなどの施設に入りたい
- 3 引っ越すことはあっても、この地域の中で住み続けたい
- 4 どこでも良いから、グループホームのような暮らしをしたい
- 5 その他

回答者には既に 65 歳以上の高齢者もいるが、現状ではなく、あくまでも自身の希望を聞いてみた。以下、図 3.3-1 に、結果を示す。

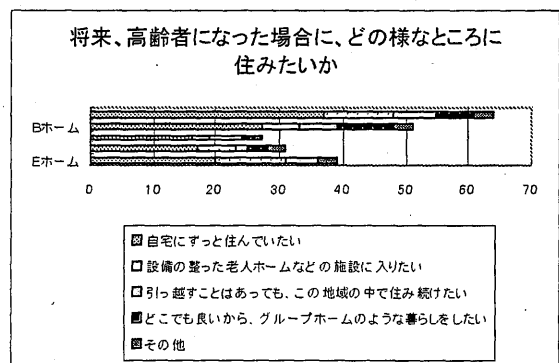


図 3.3-1 高齢になった場合の住み家（複数）（単位：人）

グラフより、「自宅にずっとすんでいたい」と答えた人がどのホームでも圧倒的に多く、およそ7割の人が答えている。以下の回答をした人数はぐっと低くなっているが、「設備の整った老人ホームなどの施設に入りたい」が全体の23.4%、「引っ越すことはあっても、この地域の中で住み続けたい」15.8%、「どこでも良いから、グループホームのような暮らしをしたい」12.7%の順となっている。

ほとんどの人は、たとえ年をとっても、自宅で住みたいと思っており、その一方で「子供に迷惑をかけたくない」等の理由で、施設を考えている人も多いようである。また、自分が生活してきた地域での継続については、「引っ越すことはあっても、この地域の中で住み続けたい」と答える人はそれほど多くなく、地域での生活にこだわりはあまり無いといえる。これは特に、Dホームでわずか8%の人しか回答せず、最も回等率の高いCホームでも、23.8%と4分の1にも満たなかった。

「どこでも良いから、グループホームのような暮らしをしたい」と回答した人は、A～Dホームでは2～9人いたものの、Eホームには1人もいなかった。

以下、表3.3-1に、その他の内容を示す。

「(将来の事について)まだ分からない」と答えた人が7人で、その時の自分の体の状況や家族のことなどの問題を考慮してみないと考えられない人が多かった。

その他の内容としては、Aホームの「古里に帰って旧友達と近所づきあいをしたい」「どこでもOK」「まったく全てをやってもらうのではなく、自分でできることはやらせてもらいたい」などがあった。

その他の内容	
Aホーム	古里に帰って旧友達と近所づきあいをしたい 老人ホームに行かなくて済むのが好きで、介護の方の経では、グループホームが良いとか、自分が介護者になつたとき介護者が無い方がいいか、考えは変わります。 （病状になった場合は、グループホームが良い）
Bホーム	まったく全てをやってもらうのではなく、自分でできる事はやらせてもらいたい どこでもOK
Cホーム	その時にならないと分かりません 高齢者施設について、今はまだ分からないことが多い、もっと身近に知ることが出来たら考えていこうと思う。
Dホーム	状況による 家族や他人に迷惑をかけたくないと考えているが、将来一人で一人になったときに老人ホーム等へ入るのとか、今は思えない （考えが定まらない）
Eホーム	まだ分からない（具体的に考えた事が無い） 今後の情報を、積極収集していきたい。

表 3.3-1 その他の内容

6-4-2 高齢者施設に求めるもの

「もし、あなた自身やあなたの家族が介護のための入居施設を利用するとしたら、何を基準に選びますか？以下の当てはまるもの全てに○をつけて下さい」という質問をした。選択肢は以下の通りである。

- 1 入居にかかる費用が安いところ
- 2 明るくて優しいスタッフがいるところ
- 3 面倒を良くみてくれるところ
- 4 建物が新しいところ
- 5 個室の部屋が利用できるところ
- 6 自宅から近いところ
- 7 その他

結果を以下、図 3.3-2 に示す。

Aホームでは、多いほうから「明るくて優しいスタッフがいるところ」81.3%、「入居にかかる費用が安いところ」と「面倒を良くみてくれるところ」が同数の70.8%の順になっている。「建物が新しいところ」を望む人は多くなく、4人で13.8%であった。

Bホームでは「入居にかかる費用が安いところ」「明るくて優しいスタッフがいるところ」「面倒を良くみてくれるところ」が同数の23人で、65.7%となっている。以降は「自宅から近いところ」「個室の部屋が利用できるところ」「建物が新しいところ」の順で、このホームでも建物の新しさはさほど重視されていないことが分かる。

Cホームは「明るくて優しいスタッフがいるところ」が16人、76.2%を初め、「面倒を良くみてくれるところ」「自宅から近いところ」が同数の13人、61.9%と続く。

Dホームの上位もCホームと同様で「明るくて優しいスタッフがいるところ」が21人で84.0%を初め、「面倒を良くみてくれるところ」「自宅から近いところ」が19人ずつで76.0%となっている。以降は「個室の部屋が利用できるところ」「自宅から近いところ」「建物が新しいところ」の順である。

Eホームでも上位3つは他の4ホームとほぼ同じで「明るくて優しいスタッフがいるところ」26人、89.7%、「入居にかかる費用が安いところ」24人、83.8%「面倒を良くみてくれるところ」

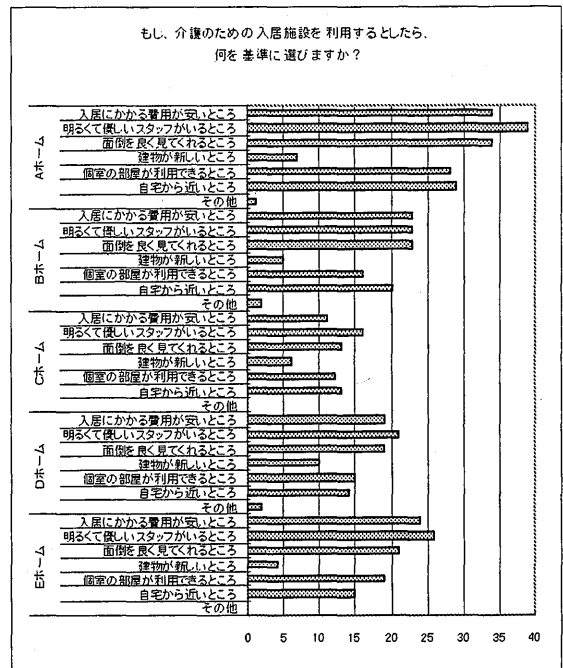


図 3.3-2 高齢者施設に求めるもの (複数) (単位:人)

その他の内容	
Aホーム	ネットなどで離れたところから施設の状況を常に映像で確認できるシステムのあるところ、清潔感がある所、バリアフリーな施設、医療施設が近い所。
Bホーム	特にトイレなど、掃除の行き届いているところ 昼間は他の入居者と一緒について、夜は自分の部屋で休む(個室があるところ)
Dホーム	入居者に対して部屋の広さ、天井が低くない、医療設備もある、又は、安心できる医師や看護士がいる。

表 3.3-2 その他の内容

21人、72.4%の順である。以降、「個室の部屋が利用できるところ」「自宅から近いところ」と続き、やはり「建物が新しいところ」と答える人は少ない。

全体的には、「明るくて優しいスタッフがいるところ」が最も多く79.1%、次いで「入居にかかる費用が安いところ」70.3%、「面倒を良く見てくれるところ」69.6%が上位となっている。大部分の人が高齢者施設に、明るく優しいスタッフがいることを希望しており、入居にかかる費用よりも重視されている。以下は「自宅から近いところ」57.6%、「個室の部屋が利用できるところ」57.0%、「建物が新しいところ」20.3%の順で、個室の部屋でなくても良いと考える人はおよそ4割いると判断できる。

表3.3-2には、その他の内容を示す。医療設備が整っているところをあげる人や、最新の設備を備えた「ネットなどで施設の状況を離れたところから常に確認できるシステムのあるところ」をあげた人がいた。

6-4-3 グループホームと地域のかかわりについて

■グループホームと地域とのかかわりの必要性

「グループホームと地域とのかかわりは必要だと思いますか?」という質問に対する回答結果を以下図3.3-3に示す。

グラフより、どのホームもおおよそ半数以上の人が必要だと思うと答えている。

「必要だと思う」と答えた人の割合が最も少ないのはDホームで48.0%、割合が最も多いホームはCホームで71.4%であった。

■グループホームと地域とのかかわりが必要だと思う理由

表3.3-3に、グループホームと地域とのかかわりが必要だと思う理由と、ホームごとの人数を示す。多いほうから5つの理由には網掛けをしてある。

また、以下図3.3-4には、無回答を除く、表3.3-3をグラフにしたものを示す。

表およびグラフより、「お互いに助け合い、理解しあって仲良く生活していきたいから」が最も

ホーム	ホームと地域とのかかわりが必要だと思いますか?	必要だと思う理由	必要としない理由	その他	無回答
Aホーム	3	2	3	5	3
Bホーム	3	0	1	1	1
Cホーム	3	0	0	2	0
Dホーム	1	0	1	2	0
Eホーム	1	0	0	1	0
合計	11	2	5	11	4
ホーム	お年寄りや小さい子供にも良い影響があると思う	高齢者が多い地域なので、地域の人材を上手に活用したい	地域の人材を上手に活用したい	地域とのかかわりによって、地域の人材が上手に活用できる	地域とのかかわりによって、地域の人材が上手に活用できる
Aホーム	1	2	1	1	2
Bホーム	0	1	3	3	0
Cホーム	0	2	1	0	2
Dホーム	0	0	0	0	1
Eホーム	1	0	1	1	1
合計	2	5	6	5	6

表 3.3-3 グループホームと地域とのかかわりが必要だと思う理由

多く、5つのホームの合計で14人となっている。次いで多いのは「ホーム、地域双方が何かあったときに助け合えると思う」という理由で、合計11人であった。3番目に多かったのは「高齢者に限らず、地域とのかかわりなくして生活は成り立たない」という理由で、「かかわりはあたりまえ」と思っているようだ。以降は「入居者が地域とかかわることで認知症を遅らせ、人間としての尊厳を保てると思う」が合計9人、「同じ地域に住んでいるので近隣の住人と同様に付き合いたい」と考える人が合計7人と続く。

「グループホームと地域とのかかわりは必要だと思う」と答えていながらも、その理由について無回答だった人はかなり多く、表3.3-3より、合計76人に登ることが分かる。前問で「分からない」という選択肢は選ばず、「かかわりは必要」と答えた上で理由が向かいとうだったということは、どういう理由で必要だと思うかは、あまり考えたことがないということなのだろうか？

表3.3-4には、その他の内容を示す。

表より、「人と接することが、一番の自分の存在を確信できる時だから」と答える人や、「人手不足の補いになると思って、ボランティアのお手伝いもしやすいと思う。地域の人もいろいろ勉強になるのではないかなと思う」など、さまざまな理由があげられている。

大きく分けると「かかわりは必要」とする理由には『人としてかかわりを持つことがあたりまえ』『今後のために大切(自分のためにも、地域のためにも)』『高齢者を大切にすべき(少し大袈裟だが)』のようなグループに分けられそうである。これらの詳しい分析は、後で行うことにする。
■グループホームと地域とのかかわりが必要だとは思わない理由

「グループホームと地域とのかかわりは必要だとは思わない」と答えた人は、図3.3-3よりAホームで2人、BホームとCホームで3人、Eホームで2人いた。その人たちが「必要だとは思わない」という理由を、表3.3-5に示す。表に乗っていない人(7人)は、その理由について無回答だった。

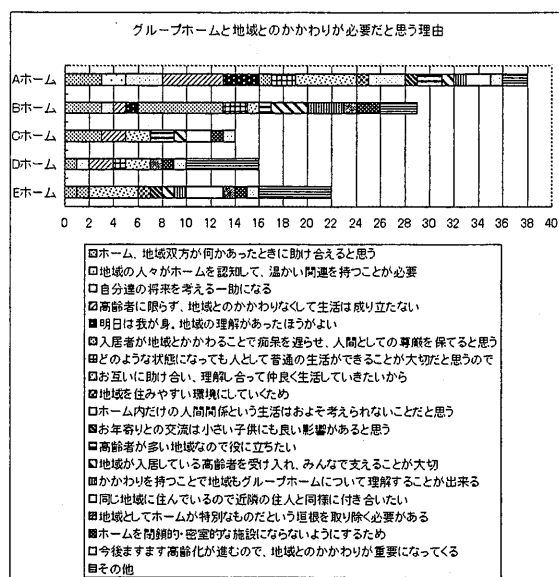


図 3.3-4 グループホームと地域とのかかわりが必要だと思理由 (複数) (単位:人)

その他の内容	
Aホーム	家の前をいつもお買い物に行かれて、お顔に「あの方は今日はいないけどどうしたのかな」なんて思ってもありますが、お声をかけていいのやら迷います。ボランティアの方が一緒に付いている方がもう一声、ホームの方と私達の間をどうもっていいのではと思うこともあります。お年寄りの方が近寄って話そうとするのを「行きましよう」といった感じで、お若い方が一生懸命やってくれているから仕方ないのかな、と思います。
Bホーム	身近なことなので、情報交換ができる 自立を尊重し、できる事をやらせるようにする。スタッフが影でサポートする事が必要だと思う。 老人ホームではないから、地域の人間は地域で見送りたい、また、自分も地域で見送られたい。Bホームはいい土地があると思う。などがあればもっといいと思う。
Dホーム	今後高齢者が増えていき、施設(?)に入りたくも入れない状況が来た時のため、地域では今から交流をもち、専門家のノウハウを勉強しておく必要がある。 この地域には、4年暮らす、いまひとつ地域性が感じられない。物騒な事件が多い中、子育てと合わせてひらかれたおびやかな環境を、お互いに、人と人とのふれあいは良いと思う。 お互いにどこでこの種であるかを助けていることは安心感につながると思う。あいさつ程度の付き合いであっても、いざというときには助け合えたらと思います。 人間らしく、生きている人生を楽しく過ごすため、人々のふれあいを大事にし、自分は死ぬまで世の中に残っている、大切にされていると実感したい。 人と接する事が、一番の自分の存在を確信できる時だから。
Eホーム	徘徊や迷子になってしまうお年寄りもたくさんいらっしゃいますので、日頃から隣り近所の付き合いを密にし、地域で困った方々の手助けができるような環境作りが必要なのではないかと思っています。楽しく生活をしていくようにお互い助け合えようと思っております。 近所の人は皆友達 グループホームだと友達が出来、淋しくない 一般的近所、町会として 地域と少しずつもかかわっていくことにグループホームの意味があると思います。境を越えていくことがお互い大切でしょう。 人手不足の補いになると思ってボランティアのお手伝いもしやすいと思う。地域の人もいろいろ勉強になるのではないかなと思います。

表 3.3-4 その他の理由

かかわりは必要ではないと思理由	
Bホーム	自然であれば良い。意図的なかかわりは不要。
Dホーム	生活リズム・生活パターンがお年寄りとは違う。お年寄りとかかわれる余裕が取れない。
Eホーム	生活における違いを、あえて結びつける必要はない。

表 3.3-5 かかわりは必要ではないと思理由

お年寄りと自分達は、意図的な関わりは不要と答える人が1人、生活パターンが違うと答えている人が2人だった。

■分からない理由

表 3.3-6 には、「分からない」と答えた人の理由を示す。「分からない」と答え、その理由について無回答だった人は34人であった。

表 3.3-6 より、「責任がどこまで持てるか分からない」「人それぞれ」「個人的に地方や介護の知識がないため、そのような者がかかわることがいいのか分からない」というような理由があげられた。

ホームのことを知らないからこそ、積極的にかかわりを持って自分の知識や経験を深めようとする一方で、上記のような消極的な人考えを持つが一部でみられた。

6-4-4 地域の中でしていること

「地域全体の高齢者の暮らしを良くするために、地域の中で今、何かしていることはありますか？些細なことでも構いません。以下の当てはまるもの全てに○をつけて下さい」という質問をした。項目は以下の通り。

- 1 お年寄りにあいさつをする
- 2 時々、おすそ分けをしている
- 3 道であつたら声をかけている
- 4 食事作りや掃除を手伝うボランティアをしている
- 5 特に何もしていない
- 6 その他

以下、図 3.3-5 に、結果を示す。また、図 3.3-6 にも、同じ結果を、項目ごとに並べたものを示す。グラフより、D ホームを除く4つのホームで「お年寄りにあいさつをする」が多く、A ホームで58.3%、B ホームで65.7%、C ホームで52.4%、E ホームでは41.4%となっている。参考までにD ホームでは20.0%で、全体ではちょうど50%である。

次いで多い項目は「道であつたら声をかけている」が全体では40.5%でA, B, E ホームで45~51%の人が答えているものの、C ホームでは28.6%、D ホームでは16.0%にとどまっている。以下、全

分からない理由	
Aホーム	廃棄の高齢者に温かくの思いはありますが、責任がどこまで持てるかわかりませんので、人それぞれだから、いい面と悪い面があるのです。 グループホームの実態を知ってからのこと、何とも言えない。
Cホーム	グループホーム自体良く分からない、どのようなことをして、どのように介護をするのか？費用とかも、その時になってみないと分からない
Eホーム	廃棄の改善には、周囲とのかかわりは必要だと思いますが、個人的に、廃棄や介護の知識がないため、そのような者がかかわることがいいのかわからず悩まされました。 活動内容が分からない。

表 3.3-6 分からない理由

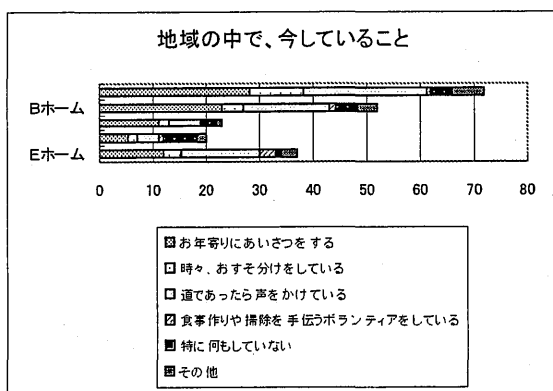


図 3.3-5 地域の中でしていること (複数) (単位;人)

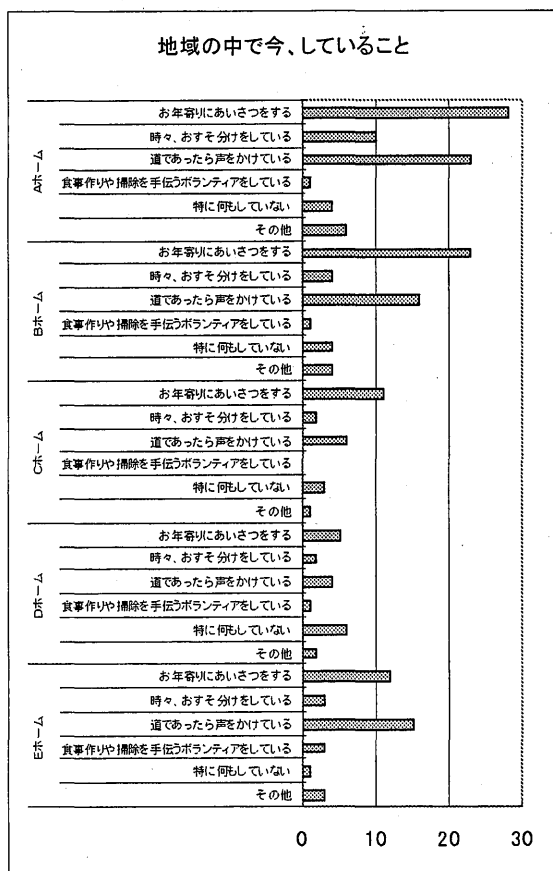


図 3.3-6 地域の中でしていること (単位;人)

体の割合では「時々、おすそ分けをしている」が13.3%、「特に何もしていない」11.4%、「その他」10.1%と続き、「食事作りや掃除を手伝うボランティアをしている」はわずか3.8%にとどまった。Eホームは、全体の回答者数が少ないものの、ホームや地域のお年寄りに積極的に活動をしている人が多く、回答者に対する割合は多くなっている。

表3.3-7には、その他の内容を示す。

表より、行っている行為はさまざまであり、「家に招待したことがある」「ボランティアに行っている」「花壇の手入れを手伝っている」「町内会で差し入れなどを積極的に行っている」など、積極的なことから、「出会いがあればなるべく会話をするようにしている」「自然体におつきあいをしている」といった、日常的に出来ることまで幅広い。商店を経営している人は、品物の配達や、在宅出張散髪をしているようだ。

その他の内容	
Aホーム	出会いがあれば、なるべく会話をするようにしている
	理容師をしているので、特養、シルバーホーム等、在宅出張散髪をしている
	知らない方でも、声をかけられたり、何か求められた時はこたえるようにしている。
Bホーム	話を聞いてあげる。
	荷物を持ってあげる。近所なら車に乗せてあげる。
	家族が音楽を愛好しているので、音楽演奏に家に招待したことがある。
	自分から入っていくことはできないが、よほどの要請があれば
Cホーム	地域のお年寄りに買い物の商品を配達
	商品の配達
Dホーム	タオルを半分に分けてオシロイを作って、毎月1回老人施設に届けている
Eホーム	近隣の老人ホームにボランティアに行っている。
Dホーム	Dホームに見学に行ったことがあります。5、6年前。
Eホーム	花壇の手入れを手伝っている。
Eホーム	町内会で炊き出しやお弁当の差し入れなどを積極的に行っています。
Eホーム	特にこれといったものはないが、自然体におつきあいをしている

表 3.3-7 その他の内容

6-4-5 グループホームに望むこと

■グループホームに望むことはあるか

「グループホームおよび地域全体をよくするために、グループホームに対して望むことはありますか？また、あるという方はその内容をお聞かせ下さい。」という質問をした。以下、図3.3-7に、その結果を示す。

グラフより、Bホームを除き、他の4つのホーム周辺の住民は「特に望むことはない」と回答している。逆に、「望むことがある」と答えている人を見ると、Bホームで15人となっている以外は、A、C、D、Eホームで10人にも満たない。

「特に望むことはない」「無回答」をあわせると、A、C、D、Eホームでその割合は7~8割にのぼり、Bホームでも6割に及ぶ。

次に、「望むことがある」と答えた人の内容を見してみる。

■グループホームに何を望むか

図3.3-8に、「グループホームに望むことがある」と答えた人の、望むことの内容を示す。

その他を除くと、全体では「もっと地域などの行事に参加し、地域とホームが交流すべき」「できたことやどんな人が入っていてどんな暮らし

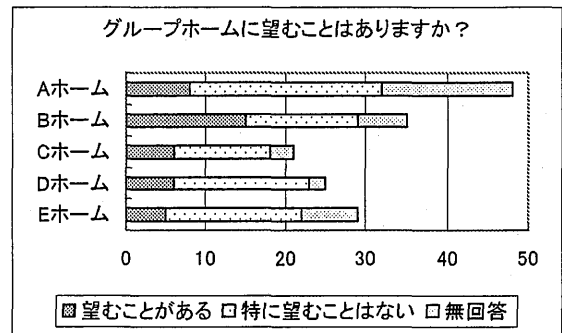


図3.3-7 グループホームに望むことはあるか（単位：人）

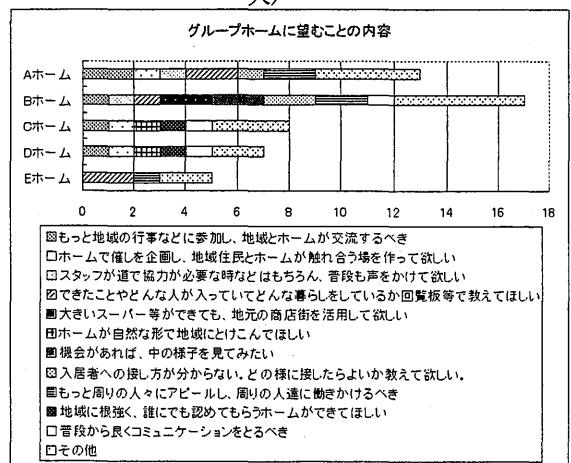


図3.3-8 グループホームに望むことの内容（複数）（単位：人）

をしているか回覧板等で教えてほしい」「もっと周りの人々にアピールし、周りの人達に働きかけるべき」が同数の5人であった。ついで多いのが、「ホームで催しを企画し、地域住民とホームが触れ合う場を作って欲しい」「入居者への接し方が分からない。どの様に接したらよいか教えて欲しい」「普段から良くコミュニケーションをとるべき」を3人が答えている。また、数は少ないが「ホームの中を見てみたい」という人が2人いた。外での入居者の行動は良く目にされていて、中でどのような生活をしているかはまだよく知られていないようだ。

表 3.3-8 には、その他の内容を示す。かなり内容は具体的なものとなっている。

B ホームでは、「ホームから商品の配達など、電話やFAXで受ければ配達してあげたい。今、商店街全体で進めている」とあり、商店街ぐるみでグループホームに関心を持っているところもあるようだ。

また、「グループホームの従業員も地域および住人を知るようにつとめる事」「グループホームを利用している高齢者だけではなく、周りの人たちにも気配りとやさしさを…」という、厳しい意見も見られた。

■特に望むことはない理由

参考程度に、表 3.3-9 には、「特に望むことはない」と答えた人で、記述による回答をしてくれた人の内容を示しておく。

このアンケートを通して初めてグループホームの存在を知った人や、日常的にあまりかかわりのなかった人にとっては、「まだ考えていない」「知らずに生活している」という回答が出たように思う。

A ホームの人は、「特に望むことはない」と答えながらも、もっと周辺住民の認知度や理解を得るため、積極的に地域に働きかけた方がいいと答えている。回答から、いささか人事のように思っていると感じられる。

その他の内容	
Aホーム	グループホームでしかできないサービスがあるはずで、しかし、1つのグループホームが大きくなっていくので、「地域圏」を重視した「住み分け」が進めばと思う。今のやり方を続けてほしい。スタッフの人たちが地域に対してアドバイスなど、地域に対して開放的にしてほしい。体を動かすようなプログラムがあって欲しい。ホームの近くに小公園をつくって、自然を楽しみながら通りがかった時気軽に話ができるといいかな。 どの様にしたらいいのか、活動内容をもっと知らせた方がいい。 お互いに協力、強固しながら生活ができればいいと思う。それにはお互いをよく知ることが大切ではないだろうか？ 何かあっても安心するように、名刺をつけたい。
Bホーム	ホームから、商品の配達の種類など、電話やFAXで受ければ配達してあげたい。今、商店街全体で進めている。 地域住民優先で入居の順位を決めてほしい。 ペットに関する事です。ペット(猫)を置き去りにして老人ホームや引越、をせざるを得ないお年寄りがいます。置いていくなせめて去勢手術をして欲しい。地域猫として住民が面倒を見て欲しい。動物に罪はありません。
Cホーム	グループホームの従業員も地域及び住人を知るようにつとめる事。 グループホームを利用している高齢者だけではなく、周りの人たちにも気配りとやさしさを…。近所からパート他の人を採用する
Dホーム	Dホームの車両は、マナーが悪く乱暴な運転である。お年寄りが乗っている車とは思えない。ホームが地域に馴染むことは何なのかを知りたい。
Eホーム	少しでも風景が軽くなるようなかわりを持っていただきたいです。 団地で生活するにもあまり狭い室は…。一人室で6帖は欲しい。

表 3.3-8 その他の内容

特に望むことはない理由	
Aホーム	グループホームの存在を地域の人たちにも知ってもらうための広報活動のボランティア募集。オープンハウス等が有効だ。認知度が上がるのは、地域住民がもっと積極的に声をかけていけるような環境になってほしい。
Dホーム	特に事故や迷惑となることなどもなく知らずに生活しているため)
Eホーム	まだ考えていません。

表 3.3-9 特に望むことはない理由

6-4-6 自分たちができること

「グループホームおよび地域全体を良くするために、自分たちができることは何だと思いますか？以下の当てはまるもの全てに○をつけて下さい」という質問をした。回答項目は以下のとおり。

- 1 あいさつをしっかりとし、顔見知りの関係を築いていくこと
- 2 積極的にホームへのボランティアや、高齢者の手伝いをする
- 3 祭りなど町内会行事を企画し、高齢者にも参加してもらって楽しんでもらうこと
- 4 現状のままで十分(今のままでとてもよい地域)なので、何もする必要はない
- 5 その他

以下、図 3.3-9 に回答結果を示す。グラフより、Cホームを除くA,B,D,Eホームで「あいさつをしっかりとし、顔見知りの関係を築いていくこと」が最も多く、回答率が高いAホームで35人、72.9%となっている。Cホームではこの項目は2番目に多く、12人、57.1%である。Cホームで最も多かった項目は「祭りなどの行事を企画し、高齢者にも参加してもらって楽しんでもらうこと」であり、14人、66.7%の人が答えている。他の4ホームでは、この項目は2番目に多く、Aホーム37.5%、Bホーム34.3%、Dホーム52.0%、Eホーム51.7%である。Cホームは台東区の祭りの多い地域であり、祭好きの人が多からこのような結果となったのであろうか。「積極的にホームへのボランティアや、高齢者の手伝いをする」と答えている人はそれほど多くなく、5つのホームの合計でも29人となっている。「現状のまま(今のままでとてもよい地域)なので、何もする必要はない」と答えた人を見ると、Aホーム6人、Bホーム3人、Cホーム3人、Dホーム4人、Eホーム7人であり、どんな属性の人がこの項目を選んだのかは、後で詳しく分析することにする。

表 3.3-10 には、その他の内容を示す。具体的に何かをするという内容としては、Aホームの「グループホームその他地域の施設、もよおし等についてもっと連絡・広告し、分かるようにして

その他の内容	
Aホーム	つながる場があって欲しい。いろんな世代(子供+グループホーム)でかかわりがあって欲しい ボランティアはしておきたいと思いますが、現状では無理なので、 グループホームその他地域の施設、もよおし等についてもっと連絡・広告し、分かるようにして欲しい。 空に度くらい、広報誌でも出して見てほしい。 高齢者の能力を発揮できるチャンスを多く企画してほしい。子供との交流を盛んにして高齢者の経験を子供たちに伝える機会を多く作ってほしい。 自分達の暮らしで一杯
Bホーム	人に迷惑をかけず、自分自身でしっかりすること ない
Cホーム	Cホーム前の道路は少し暗い気がします。
Dホーム	子育て中で忙しい。あまりできないが……
Eホーム	企画する事はないこと、提示板などで知らせると良い。

表 3.3-10 その他の内容

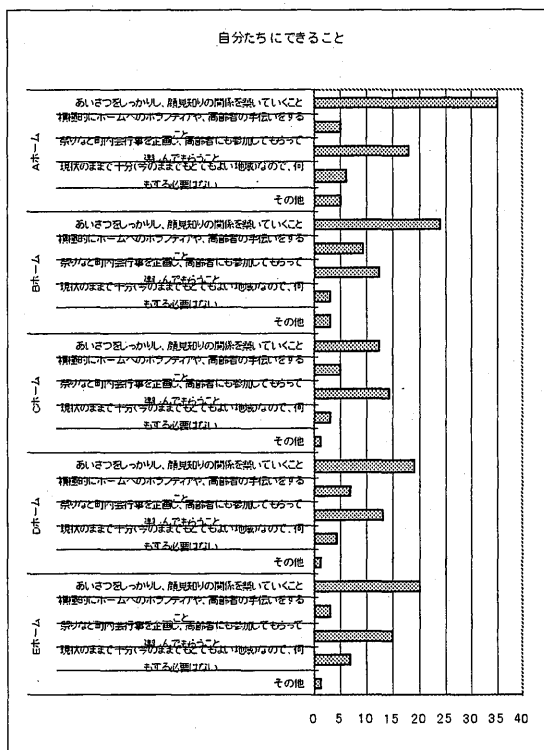


図 3.3-9 グループホームおよび地域のために自分達にできると思うこと(複数) (単位:人)

おきたい」という答えくらいであり、あとは「○
○であればよい」「○○であってほしい」という、
やや他人事のような回答と「自分たちの暮らしで
精一杯」という、現状では無理だという内容が多
い。

6-4-7 グループホームとのこれからのかかわ りについて

「グループホーム○×および、これからできる
グループホームと、今後どのようにかかわってい
きたいと思いませんか？ご自由にお書き下さい。」
という、自由記入によるアンケートを行った。以
下、図3.3-10に、その結果を示す。

グラフより、その他、無回答を除けば、「でき
る範囲で積極的にかかわっていききたい」が最も多
く14人で、自分にとっても、グループホームに
とっても無理のないようにかかわっていきたく
いという人が多かった。似たような回答として「温
かく見守り、自然体でかかわっていききたい」と
いう回答もあり、5つのホームで合計6人が回答し
ていた。

続いて多かったのは、「グループホームを良く
分かっていないので答えようがない」という消極
的な回答で、合計11人だった。良く分かってい
ないからこそこうしたい、こうして欲しいとい
うところまで結びつかず、とても残念である。

その一方で、「(良く分かっていないので)も
っとかかわって理解していききたい」という回答も
見られた。「グループホーム側にも、もっと地域に
オープンであって欲しい」が8人、「認知症高齢
者との接し方のアドバイスを受け、もっとかかわ
っていききたい」「見学などをして、グループホ
ームをもっと理解していききたい」がそれぞれ3人
で、もっとホームを理解していこうという人も可
なりいる。「3.3-6 グループホームに望むこと」
の中でもあったように、ホームの中での生活の
様子が分からないので、回覧板や広報等で知らせ
て欲しいという人も多かった。また、ホームの中
を見学したい人も多くいるようだ。

また、「決して他人事とは思わず、温かい気持
を持ち続けていききたい」と答えた人が合計9人
おり、このようにホームをもっと身近に感じる人

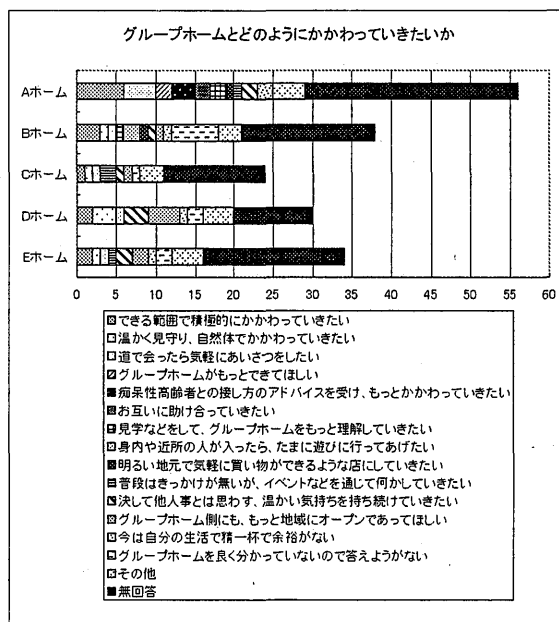


図3.3-10 今後、グループホームとどのようにかかわ
っていききたいか (複数) (単位:人)

増えてくれればよいと思う。

表 3.3-11 には、その他の内容を示す。

図 3.3-15 に含まれる内容とほぼ同じものもあるが、個人の具体的な意見・エピソードが多くなっている。

やはり多いのは「ホームも積極的に働きかけを」という内容である。Bホームの人ように「ホームができる前から、話し合いなどかかわりが持てれば」という人もいる。また、Dホームの人が指摘するように、「どのようにかかわればよいか分からないので、かかわり方を教えて欲しい」という考えの人が多く、ホームもより積極的に、ホームのことを地域にアピールしていく必要がある。

その他の内容	
Aホーム	できたばかりでよく分からない。時間があれば交流はしたい。例えば、体操などを紹介してあげたい。 仕事(理・美容)を通して何か協力したいと思っている。2級ヘルパーもった。高齢者を理解するために、Aホームの存在を全く知りませんでした。このアンケートにも、所在地等、少し詳しくお教えいただけると有りかたかと思 います。 皆様と仲良くしています
Bホーム	できたばかりでよく分からない。何人入っているのかとか、情報を教えてくれればよいと思う。広報みたいな知らせはな か。誰でもできることと重なることは聞いている。 地域にグループホームの事をもっとアピールしていただいて、お互いに望むことを話し合いができればいいと思う。また、 ホームができる前からやっていたらいい。 特にかかわっていくつもりはない ホームができるということの知らせを受けていなかった気がする。これからまた、中の様子などをいろいろ教えて下さい。 町内会とよく話し合いをすると良いと思う。
Cホーム	私はバリエーションにパートに行っています。そこに週に1〜2度位グループで来店されますが、楽しそうですがまた大変そうでも あり、でも私たちも待っています。いつも楽しみにしています。これが地域に愛され密着していることだと思います。私も30 年近くと生活してきましたので、いつも楽しみにしています。Cホームさん、とても楽しそうです。 今のところホームからアクセスが無いので放っています。協力のアクセス(有料ボランティア)があれば積極的ににか わりたいと思います。
Dホーム	内容を良く分かっていないので答えようがありません。と思っている人が大勢いるのではないのでしょうか?「かかわる」とい うより、施設のことをもっと分かるように、施設側から働きかけをしてもらう方が良いように思います。 子供が高齢者の頃、ピアノやバイオリンの演奏をホームでさせて欲しいとお訊たことがあります。あー、面白いお返事しか い ただけず、立ち消えになったことがあります。ホームとしてはもっとオープンになって地域の人にもっと理解を深める必要 を感ずきます。 Dホームは老人保健施設という理解です。病院と家の中間は施設だという理解です。 福祉にかける予算が多すぎ、他にひずみ(例えば教育)が出ている。適切な使い方を望む。 こ近所をあれこれ大物してほしい
Eホーム	特別には分かりませんが、街のネットワークができていないと、老後ひとりであるのが普通になってくる。もっと行政も入 らない。無理がある。あいつするもの。各家庭において勤務すべき問題といえる Bホームがグループホームである事を、今回のアンケートで初めて知りました。60歳の両親と同居中であることから、運営 側にも要望があります。地域福祉会、民生委員の理は、希望します。 個人でのつながりは、私自身もあつてつい機会を失いがちです。町会などを通してボランティアとか、行事の取り組みな どを知らせてもらえと、かかわるきっかけができればいいと思います。

表 3.3-11 その他の内容

6-5 施設のイメージに関する考察

6-5-1 基本属性×写真の正答率

まず、グループホームと特養の違いが分かって答えた人、分からないと答えた人、無回答の人で分類し、分析する。

(1) グループホームと特養の違いが分かって答えた人

表 4.4-1、表 4.4-2 に、グループホームと特養の違いが分かって答えた人の基本属性と、写真の正答率のクロス集計を示す。表 4.4-1 は人数で、表 4.4-2 は割合を示している。

違いが分かって答えた人で、8割以上の正答率はわずか3人。多いのは4~6割、6~8割。50才代、60歳代の人が多い。男性よりも女性のほうが8割以上正解した人は多かったが、それ以外は男女ともほぼ同じくらいの正答率だった。65歳以上の高齢者との同居で正答率を見ると、2~4割と6~8割正解している人は同居があったほうが多いが、4~6割と8割以上の正答率は同居が無い方が正解している人がわずかに多い。全体的には同居の有無で差があまり見られなかった。

属性	写真の正答率					n=62	
	~2割	2~4割	4~6割	6~8割	8割以上		
年齢	20才代	0	0	0	2	0	2
	30才代	0	0	2	1	0	3
	40才代	0	0	3	4	1	8
	50才代	3	4	0	6	1	20
	60才代	3	4	3	2	1	17
	70才代	2	1	4	2	0	9
	80才以上	1	0	0	0	0	1
性別	無回答	0	0	1	1	0	2
	男性	4	2	5	4	0	15
	女性	5	7	17	13	3	45
65歳以上の 高齢者との 同居	無回答	0	0	2	0	0	2
	同居あり	4	5	3	8	1	27
	同居なし	4	4	11	7	2	28
無回答	1	0	4	2	0	7	

表 4.4-1 基本属性と写真の正答率のクロス集計 (単位:人)

属性	写真の正答率					合計	
	~2割	2~4割	4~6割	6~8割	8割以上		
年齢	20才代	0	0	0	100	0	100
	30才代	0	0	66.7	33.3	0	100
	40才代	0	0	37.5	50.0	12.5	100
	50才代	15	20	30	30	5	100
	60才代	17.6	23.5	41.2	11.8	5.9	100
	70才代	22.2	11.1	44.4	22.2	0	100
	80才以上	100	0	0	0	0	100
性別	無回答	0	0	50	50	0	100
	男性	26.7	13.3	33.3	26.7	0	100
	女性	11.1	15.6	37.8	28.8	6.7	100
65歳以上の 高齢者との 同居	無回答	0	0	100	0	0	100
	同居あり	14.8	18.5	33.3	29.8	3.7	100
	同居なし	14.3	14.3	39.3	25.8	7.1	100
無回答	14.3	0	57.1	28.6	0	100	

表 4.4-2 基本属性と写真の正答率のクロス集計 (単位:%)

(2) グループホームと特養の違いが分からないと答えた人

表 4.4-3 と表 4.4-4 に、グループホームと特養の違いが分からないと答えた人の、基本属性と写真の正答率のクロス集計を示す。

違いが分からないと答えた人で、8割以上正解している人は、分かると答えた人と全く同数だった。年代ごとに見ると、正答率の構成比は、正答率が2割以下で50代から70代の人それぞれ33~45%、また4~6割の正答率の人でも20~52%多くなっている。30代では30%近くの人が正答率2~8割に分布それぞれしている。

性別で比較すると、絶対数は女性のほうが多いが、正答率の比率は男性が2割以下、2~4割、4~6割のそれぞれで女性より高くなっている。

グループホームと特養の違いが分かるという人は、65歳以上の高齢者との同居の有無でほぼ同じ人数だったのに対し、違いが分からないという人では、65歳以上の高齢者と同居している人が24人、同居していない人が61人と大きく差が開いた。高齢者との同居の有無で正答率を比較すると、4割以下の正答率の低いところでは同居ありの人のほうが多いが、正答率4割~8割の間では、同居なしの人のほうが多くなっていた。高齢者と同居していても、グループホームと特養の違いが分からない人は、写真の正答率があまり高くなかったといえる。

(3) グループホームと特養の違いについての質問に無回答だった人

グループホームと特養の違いが分かるかどうかについて無回答だった人(5人)についても、同様に見てみる。表 4.4-5 には、グループホームと特養の違いが分からないと答えた人の基本属性と、写真の正答率のクロス集計を示す。グラフが見やすくなるように、数値のあるセルのみ、色をつけてある。

表 4.4-5 より、8割以上の正答率の人はいなく、正答率6割~8割に1人(60代の女性で、高齢者との同居なしの人)、他は正答率4割以下の人達であった。グループホーム自体にあまり関心がないのか、写真の正答率も低い。

属性	写真の正答率					n=90	
	~2割	2~4割	4~6割	6~8割	8割以上		
年齢	20才代	0	1	1	2	0	4
	30才代	3	5	4	5	0	17
	40才代	1	5	10	2	1	19
	50才代	9	1	5	4	1	20
	60才代	5	2	3	4	1	15
	70才代	5	2	4	1	0	12
	80才以上	0	0	1	0	0	1
	無回答	1	0	1	0	0	2
性別	男性	7	5	10	3	0	25
	女性	16	11	18	15	3	63
	無回答	1	0	1	0	0	2
65歳以上の 高齢者との 同居	同居あり	7	6	6	4	1	24
	同居なし	15	9	22	13	2	61
	無回答	2	1	1	1	0	5

表 4.4-3 基本属性と写真の正答率のクロス集計 (単位:人)

属性	写真の正答率					合計	
	~2割	2~4割	4~6割	6~8割	8割以上		
年齢	20才代	0	25	25	50	0	100
	30才代	17.6	29.4	23.5	29.4	0	100
	40才代	5.3	26.3	52.6	10.5	5.3	100
	50才代	45	5	28	20	5	100
	60才代	33.3	13.3	20	26.7	6.7	100
	70才代	41.7	16.7	33.3	8.3	0	100
	80才以上	0	0	100	0	0	100
	無回答	50	0	50	0	0	100
性別	男性	28.0	20	40.0	12.0	0	100
	女性	25.4	17.5	28.6	23.3	4.8	100
	無回答	50	0	50	0	0	100
65歳以上の 高齢者との 同居	同居あり	29.2	25.0	28.6	16.7	4.2	100
	同居なし	24.6	14.8	36.1	21.3	3.3	100
	無回答	40	20	20	20	0	100

表 4.4-4 基本属性と写真の正答率のクロス集計 (単位:%)

属性	写真の正答率					n=6	
	~2割	2~4割	4~6割	6~8割	8割以上		
年齢	20才代	0	0	0	0	0	0
	30才代	0	0	0	0	0	0
	40才代	0	0	0	0	0	0
	50才代	0	0	0	0	0	0
	60才代	0	0	0	2	0	3
	70才代	0	0	0	0	0	1
	80才以上	0	0	0	0	0	1
	無回答	0	0	0	0	0	0
性別	男性	0	0	0	2	0	2
	女性	0	2	0	0	0	2
	無回答	0	0	0	0	0	0
65歳以上の 高齢者との 同居	同居あり	0	0	0	0	0	0
	同居なし	0	0	0	2	0	2
	無回答	0	0	0	0	0	0

表 4.4-5 基本属性と写真の正答率のクロス集計 (単位:人)

6-5-2 写真の正答率×地域とのかかわり

(1) グループホームと特養の違いが分かると答えた人

表 4.4-6 と表 4.4-7 には、グループホームと特養の違いが分かると答えた人の写真の正答率と、グループホームと地域との関わりは必要だと思うか、これから地域とどうかかわっていききたいかのクロス集計を示す。

全 62 人のうち、かかわりは必要とは思わないと答える人はいなかった。また、写真の正答率の分布は表 4.4-7 より、4 割～6 割が 34.9% と最も多く、ついで 6 割～8 割とまずまずの正答率だった。

今後、グループホームとどうかかわっていききたいかについて、表より、正答率 4 割～6 割、6 割～8 割の人は「グループホームをもっと理解していきたい」「お互いに助け合っていきたい」「認知症高齢者との接し方のアドバイスを受け、もっとかかわっていききたい」「できる範囲で積極的にかかわっていききたい」と積極的なかかわりを答えている。

正答率の低い 4 割以下の方は、「グループホームを良く分かっていないので答えようがない」という消極的な回答をする人が多かった。

(2) グループホームと特養の違いが分からないと答えた人

表 4.4-8、表 4.4-9 にはグループホームと特養の違いが分からないと答えた人の写真の正答率と、グループホームと地域との関わりは必要だと思うか、これから地域とどうかかわっていききたいかのクロス集計を示す。表より、全 90 人中、グループホームと特養の違いは分からないが、関わりは必要だと思っている人は 50 人と多い。正答率の分布は、かかわりが必要と思っている人で正答率 4～6 割が 15 人で 30%、正答率 6～8 割は 12 人と、違いが分かる人とほぼ同じくらいの人数となっている。また、グループホームと特養の違いが分からない人で、かかわりが必要と思わない人の人数は、表 4.4-6 の違いが分かる人でかかわりが必要と答えた人より多くなっている。

正答率と今後、グループホームとどうかかわっていききたいかは、消極的から積極的まで幅広く分

グループホームと特養の違いが分かると答えた人の写真の正答率と かかわりについてのクロス集計		写真の正答率					n=62
		～2割	2～4割	4～6割	6～8割	8割以上	
グループホームと地域のかかわりについて	かかわりは必要	3	0	3	3	0	9
	かかわりは必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
無回答		3	1	2	0	0	6
グループホームとどうかかわっていききたいか	積極的	0	0	1	0	0	1
	見守りが必要	0	0	0	1	0	1
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	1	0	1
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	1	0	1
	見守りが必要とは思わない	0	0	1	1	0	2
	見守りが必要とは思わない	0	0	1	1	0	2
	見守りが必要とは思わない	0	0	1	2	0	3
	見守りが必要とは思わない	0	0	2	3	0	5
	見守りが必要とは思わない	0	0	3	2	0	5
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	1	1
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	1	0	1
消極的	0	0	0	0	0	0	
その他	2	2	2	1	1	7	
無回答	7	4	14	7	1	33	

表 4.4-6 正答率と地域とのかかわりについてのクロス集計 (単位;人)

グループホームと特養の違いが分かると答えた人の写真の正答率と かかわりについてのクロス集計		写真の正答率					n=62
		～2割	2～4割	4～6割	6～8割	8割以上	
グループホームと地域のかかわりについて	かかわりは必要	14	0	14	3	7	38
	かかわりは必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
無回答		0	15	4	3	0	22
グループホームとどうかかわっていききたいか	積極的	0	0	100	0	0	100
	見守りが必要	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	100	0	100
消極的	0	0	0	0	0	0	
その他	22	22	22	11	22	100	
無回答	21	12	42	21	3	100	

表 4.4-7 正答率と地域とのかかわりについてのクロス集計 (単位;%)

グループホームと特養の違いが分からないと答えた人の写真の正答率と かかわりについてのクロス集計		写真の正答率					n=90
		～2割	2～4割	4～6割	6～8割	8割以上	
グループホームと地域のかかわりについて	かかわりは必要	3	0	3	3	0	9
	かかわりは必要とは思わない	4	0	13	3	0	20
無回答		4	0	0	0	0	4
グループホームとどうかかわっていききたいか	積極的	0	0	2	0	0	2
	見守りが必要	0	0	2	0	0	2
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
消極的	0	0	0	0	0	0	
その他	2	3	2	1	1	9	
無回答	15	10	17	7	0	49	

表 4.4-8 正答率と地域とのかかわりについてのクロス集計 (単位;人)

グループホームと特養の違いが分からないと答えた人の写真の正答率と かかわりについてのクロス集計		写真の正答率					n=90
		～2割	2～4割	4～6割	6～8割	8割以上	
グループホームと地域のかかわりについて	かかわりは必要	3	0	3	3	0	9
	かかわりは必要とは思わない	4	0	13	3	0	20
無回答		4	0	0	0	0	4
グループホームとどうかかわっていききたいか	積極的	0	0	2	0	0	2
	見守りが必要	0	0	2	0	0	2
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
	見守りが必要とは思わない	0	0	0	0	0	0
消極的	0	0	0	0	0	0	
その他	2	3	2	1	1	9	
無回答	15	10	17	7	0	49	

表 4.4-9 正答率と地域とのかかわりについてのクロス集計 (単位;%)

散しており、グループホームと特養の違いが分からず、写真の正答率が低い人でも、ホームと積極的なかかわりを持つようとしている人もいた。

(3)グループホームと特養の違いを知っているかの質問に無回答だった人

表 4.4-10 には、グループホームと特養の違いを知っているかの質問に無回答だった人の、写真の正答率とグループホームと地域との関わりは必要だと思うか、これから地域とどうかかわっていききたいかのクロス集計を示す。人数が少ないので、パーセントで表わした表はなくし、当てはまるセルのみ、色をつけた。

表より、正答率8割以上の人はおらず、2割以下、4~6割、6~8割、でそれぞれ2里ずつだった。かかわりは必要という人は3人、また、グループホームと今後どうかかわっていききたいかについては、あまり積極的にかかわろうという答えはなかった。

6-5-3 基本属性×グループホームに望むこと、これからどうかかわっていききたいか

続いて、グループホームと地域とのかかわりは必要だと答えた人、必要ではないと答えた人、分からない人、無回答の人に分類して示す。

(1)グループホームと地域とのかかわりが必要だと答えた人

■グループホームに望むこと

表 4.4-11 に、地域とのかかわりが必要だと答えた人の、属性とグループホームに望むことのクロス集計を示す。全体的に人数のばらつきがあるので、人数の多いところを色付けした。表より、人数が多いところから見ていくと、65歳以上の高齢者と同居していない人でも、グループホームに何らかのことを望んでいる人が多く、この人数は高齢者との同居がある人よりも多い。項目としてはその他が一番多いが、「もっと地域とホームが交流するべき」「できたこと、どんな人が入っているかなどを回覧板で教えてほしい」というような回答が多くなっている。また、男性よりも女性による要望が多い。

グループホームと特養の違いについての質問に無回答だった人の写真の正答率と、かかわりについてのクロス集計	写真の正答率					n=6
	~2割	2~4割	4~6割	6~8割	8割以上	
ホームと地域のかかわりは必要	0	0	0	0	0	3
地域のかかわりには必要ではない	0	0	0	0	0	1
わかりにくい	0	0	0	0	0	1
無回答	0	0	0	0	0	1
グループホームがもとで来てほしい	0	0	0	0	0	1
これまで範囲で身体がつかかわってほしい	0	0	0	0	0	1
グループホームを良く分かっていないので答えようがない	0	0	0	0	0	1
無回答	0	0	0	0	0	3

表 4.4-10 正答率と地域とのかかわりについてのクロス集計 (単位:人)

地域とのかかわりが必要と答えた人の属性とグループホームに望むことのクロス集計	グループホームに望むこと (複数可)											n=58
	もっと地域と交流するべき	ホームで暮らす	スタッフと話すこと	できたこと、どんな人が入っているかなどを回覧板で教えてほしい	男性が来るといい	女性が多いといい	高齢者が来るといい	若者が来るといい	障害者が来るといい	地域と連携してほしい	その他	
年齢	20才代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	30才代	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	40才代	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0	5
	50才代	2	0	0	2	2	0	1	1	1	1	15
	60才代	1	1	0	1	0	0	0	1	0	1	12
	70才代	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	5
	80才以上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
性別	男性	1	0	0	0	1	1	1	2	2	0	4
	女性	2	1	0	2	1	1	0	2	1	1	13
	無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
同居の有無	同居あり	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1
	同居なし	0	0	0	1	2	1	1	1	1	1	11
	無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
65歳以上の高齢者との同居の有無	同居あり	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	同居なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 4.4-11 基本属性とグループホームに望むことのクロス集計 (単位:人)

■グループホームとどうかかわっていききたいか

表 4.4-12 には、地域とのかかわりが必要だと答えた人の、グループホームとどうかかわっていききたいかのクロス集計を示す。また、内容に、第3章で質問として取り上げた「グループホームおよび地域全体を良くするために、自分たちができることは何だと思えますか？」の選択肢にあげた「今のままで十分(今のままでとてもよい地域)なので、何もする必要はない」と答えた人の人数も示しておく。

表より、どうかかわっていききたいかの内容について見てみると、この項目に関しても、高齢者の同居がある人よりも、同居がない人のほうが回答が多かった。年代的には、50才代が最も多く、続いて40才代と60才代の人による回答が多い。

具体的にどうかかわっていききたいかについて、あげられた内容を「無関心・消極的」から「積極的な交流」まで並べてみると、極端に「無関心・消極的」「積極的な交流」の人は少なく、真ん中辺りの項目を答える人数が多い。人数については、その他を除いて最も多いのが、「できる範囲で積極的にかかわっていききたい」で50才代、女性、高齢者との同居なしの人で多くあげられている。

「今のままで十分」と答える人にはおそらく2通りの人がおり、無関心なため十分と答えている人と、本当に満足して十分と答えている人に分けられる。「今のままで十分」と答えている人がどんな属性なのかは、また後で詳しく分析する。

(2) グループホームと地域とのかかわりが必要ではないと答えた人

表 4.4-13 には、グループホームと地域とのかかわりは必要ではないと答えた人について示す。人数が少ないので基本属性と、グループホームに望むこと、グループホームとどうかかわっていききたいかについてまとめたクロス集計を示す。

「ホームと地域とのかかわりは必要ではない」と答えた人は10人だった。「かかわりは必要」と答えた人と比較しても、「グループホームに望むこと」はほとんどなく、その他に3名いるだけであった。また、今後グループホームとどうかかわっていききたいかについても、「良く分かっている

ホームと地域のかかわりは必要ではないと答えた人の属性と、ホームに望むこと、どうかかわっていききたいかのクロス集計	グループホームに望むこと その他	グループホームとどうかかわっていききたいか (複数)				無回答	合計
		無関心・消極的 グループホームを良く分かっていないか	満く保守的、自然体でかかわっていききたい	今のままで十分が自分たちでできるとの間で	その他		
年齢							
30才代	0	0	0	0	0	0	1
40才代	0	0	0	0	0	0	1
50才代	3	0	2	2	0	0	7
60才代	0	0	0	0	0	0	1
70才代	0	1	0	0	0	0	1
性別							
男性	3	0	1	1	1	0	7
女性	0	0	1	1	0	0	2
65歳以上の高齢者との同居							
同居あり	3	0	0	1	1	0	5
同居なし	0	0	2	1	1	0	4
無回答	0	0	0	0	0	0	0

表 4.4-13 基本属性とグループホームに望むこと、どうかかわっていききたいかのクロス集計 (単位:人)

いので答えようがない」「自然体でかかわっていききたい」「今のままで十分」と、無関心、消極的な回答しかなかった。

年齢は50才代の人が多く、男女で大きな違いは見られなかった。高齢者との同居の有無で比較すると、無回答を除けば、これも回答に大きく差は見られない。

(3) グループホームと地域のかかわりは必要かどうかわからないと答えた人

表 4.4-14 には、グループホームと地域のかかわりは必要かどうかわからないと答えた人について示す。(2)のかかわりは必要ではないという人と同様、基本属性と、グループホームに望むこと、グループホームとどうかかわっていききたいかについてまとめたクロス集計を示す。

表より、「ホームと地域とのかかわりは必要かどうか分からない」と答えた人は全部で41人だった。第3章で見たように、「かかわりは必要だと思うが、知識がない自分がかかわってよいものかどうか」「認知症高齢者にどう接したらよいか分からない」という意見の人が多かったことを踏まえて表を見ると、グループホームに望むこともあまりなく、グループホームのことをもっと教えてほしいと答える人がわずかにいた位だった。ホームとどうかかわっていききたいかも、どちらかといえば無関心・消極的な回答をする人が多く、無回答の人数も多い。

年齢にそれほど差はみられなく、男女で比較すると、無回答を除いても女性のほうが、ホームに望むこと、これからどうかかわっていききたいかで多く意見を述べている。

高齢者との同居の有無では、「ホームに望むこと」はあまり差がみられないが、「どうかかわっていききたいか」については、同居なしの人のほうが、消極的な意見を述べている人が多い。

(4) グループホームと地域のかかわりは必要かどうかの質問に無回答だった人

表 4.4-15 には、質問に無回答だった人について示す。この表も、基本属性と、グループホームに望むこと、グループホームとどうかかわって

ホームと地域のかかわりは必要かどうかの質問に無回答だった人の属性と、ホームに望むこと、どうかかわっていききたいかのクロス集計	グループホームに望むこと		グループホームとどうかかわっていききたいか				合計	
	入居者への関心が高くない、誰にでも頼める、ホームができればいい	実際に住んでみる、自然体でかかわっていききたい	消極的・無関心 今のままで十分と答えた人	積極的な交流 誰かを見守り、自然体でかかわっていききたい	明るい地元で気持ちよく暮らしたい	その他		無回答
年齢	30才代	0	0	0	0	0	0	1
	50才代	0	0	0	0	0	0	2
	60才代	0	0	0	0	0	0	7
	70才代	0	0	0	0	0	0	1
性別	男性	0	0	0	0	0	0	3
	女性	0	0	0	0	0	0	4
65歳以上の高齢者との同居	同居あり	0	0	0	0	0	0	3
	同居なし	0	0	0	0	0	0	4
	無回答	0	0	0	0	0	0	1
								2

表 4.4-15 基本属性とグループホームに望むこと、どうかかわっていききたいかのクロス集計 (単位:人)

きたいかをまとめて示す。

表より、「ホームと地域のかかわりは必要か」の質問に無回答だった人は11人おり、年齢ではホームに望むこと、どうかかわっていききたいか両方で50才代の回答が多くなっている。

男女で見ると圧倒的に女性、高齢者との同居の有無では、同居なしの人が多く意見を述べている。

内容については、ホームに望むことはあまりあげられず、どうかかわっていききたいかでは積極的な交流より、消極的・無関心な内容の方が全体的に多い。

6-6 調査結果のまとめと5施設の特徴

(1) まとめ

- 写真を見て、グループホーム、特養、その他のいずれかを答えてもらう質問では、正答率が8割を超えた写真はなく、まだまだグループホームのイメージが特養と同じようなものを抱いている人が多い。階段を写した写真では、「高齢者施設＝バリアフリー」と決め付けていて、グループホームでも特養でもないと答えた人がいた。
- 将来、高齢者になった場合のすみかについては、「自宅にずっとすんでいたい」とおよそ7割の人が答えている。全体では「設備の整った老人ホームなどの施設に入りたい」「引っ越すことはあっても、この地域の中で住み続けたい」「どこでも良いから、グループホームのような暮らしをしたい」と続く。ほとんどの人は、たとえ年をとっても、自宅に住みたいと思っており、その一方で「子供に迷惑をかけたくない」等の理由で、施設を考えている人もいるようである。
- 「もし、介護のための高齢者施設に入居したら、何を基準に選びますか？」という質問に対し、全体的には、「明るくて優しいスタッフがいるところ」が最も多く79.1%、次いで「入居にかかる費用が安いところ」70.3%、「面倒を良く見てくれるところ」69.6%が上位となっている。大部分の人が高齢者施設に、明るく優しいスタッフがいることを希望しており、入居にかかる費用よりも重視されている。

- どのホーム周辺の住民も、グループホームと地域とのかかわりについて、およそ半数以上の人々が「必要だと思う」と答えている。「その理由として「お互いに助け合い、理解しあって仲良く生活していきたいから」が最も多く、以降は「ホーム、地域双方が何かあったときに助け合えると思う」「高齢者に限らず、地域とのかかわりなくして生活は成り立たない」という理由が続き、「かかわりはあたりまえ」と思っている人が多いようだ。「グループホームと地域とのかかわりは必要だと思う」と答えていながらも、その理由について無回答だった人はかなり多く、どういう理由で必要だと思うかまでは、あまり考えたことがない人が大多数と思われる。逆に、「必要だとは思わない」と答えた人は、意図的な関わりは不要、お年寄り自分達は生活パターンが違う、という理由だった。ホームのことを知らないからこそ、積極的にかかわりを持って自分の知識や経験を深めようとする一方で、消極的な人考えを持つが一部でみられた。
- 「グループホームに望むことはありますか？」という問いに対し、「望むことがある」と答えている人は、4つのホームで10人にも満たなかった。「特に望むことはない」「無回答」をあわせると、4つのホームでその割合は7~8割にのぼっていた。「望むことがある」のと答えた人の内容は、ホームと地域がもっと交流することや、ホームの中での生活を知りたい、認知症高齢者とどう接したらいいかわからないという答えが多かった。
- グループホームとこれからどうかかわっていききたいか、という質問には、「(グループホームについて良く分かっていないので)もっとかかわって理解していききたい」という答える人がいる一方で、「グループホームを良く分かっていないので答えようがない」という消極的な回答もみられ、まだまだホームが地域に理解されるには時間がかかりそうである。

(2) 5施設の特徴

■外出に見る認識の範囲と深さ

前述のように、ホームに対する興味・関心を示す尺度として、図 4.5-28 で示した各ホームをどの程度まで知っているかの中の、「○×ホームの人と分かる」と「顔や名前も分かる」を合わせた合計は A ホーム→C ホーム→B ホーム→E ホーム→D ホームという順であった。

「各ホームの日常生活圏」で見たように、外出の際、商店等での目的地での地域住民とのかかわりだけではなく、ホームから目的地までの間でも、日常生活を持つ可能性がある。

ホームから目的地を一本の線とすると、その間の環境が、図 4.5-32 に示すような公園・住宅地など、人が集まる場所、人と出会う可能性の多い場所であれば、かかわりを持つ可能性が出てくる。

ここで注意すべきは、2~3 人が入居し、外出時も毎回同じメンバーであるような少人数のホームならば話は変わってくるが、少なくともここで取り上げているホームは入居者が6人以上、一度の外出人数も平均的に2~3人程度であるとすれば、その日その日で、外出メンバーの組み合わせも変わってくるということである。例えば、ほぼ毎日同じ時間に外出し、同じ道を通って買い物に行ったとしても、メンバーが違っていれば、同じ人がホームから目的地の間の住民と会う可能性も少なくなる。

さらに、これも 2.2-3 で見たように、ホームから目的地の間に住民とかかわる環境的要因(公園、住宅地など)がないホームでは、かかわりの可能性がかなり低くなる。また、一本の線上でのかかわりを持つ可能性は、地域資源がホームの回りに点在し、日常生活圏が広がって面的になるとさらに高くなるといえる。

ホームから目的地までの一本の線はその間の環境も含めて、ホーム入居者と周辺住民がかかわりを持つ可能性を表わし、線が集まって面になってゆくと、その可能性が増していくことが予測できる。

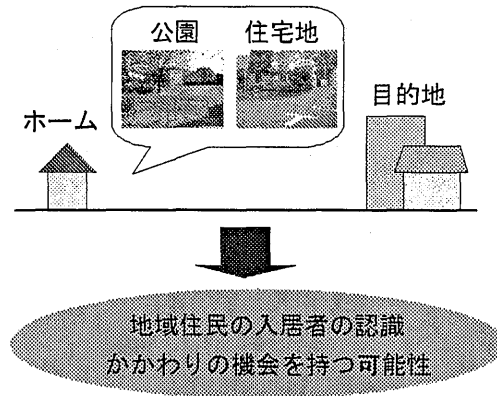


図 4.5-32 ホームから目的地までの外出時のかかわりを持つ可能性

以上を踏まえて、図 4.5-28 を、各ホームごとにもう少し細かく分析してみる。

(1) A ホーム

図 4.5-33 は、A ホームの外出と地域住民の認識についてまとめた図である。

A ホームは開設から一定の経過を経ており、存在を知らないという人はあまりいない。また、商店街や月 1 回交流のあるというミニデイなどと、買い物や行事を通して深いかかわりがあり、この人たちのホームの認識も深い。その他について、上図は表 3.2-1 の内容を考慮した図になっている(例;お店にお花を買いに来てくださいます→A ホームの人と分かる、あるいは顔や名前も知っている)。以下のホームでもその他はこのようにまとめた。

A ホームは線型の生活圏であるため、住民とのかかわりに限界があるといえる。D ホームのまとめでも述べるが、ある程度かかわりの限度までできている、今のままの外出スタイルであれば、これ以上はなかなかかかわりを増やすことは難しいといえる。しかしながら、目的地(主に商店街)との間の道が住宅地であることから、その間でのかかわりをもっと密にし、住民の認識を「どこかの施設の人」→「A ホームの人と分かる」あるいは「顔や名前も知っている人がいる」まで高めていくことは可能であろう。

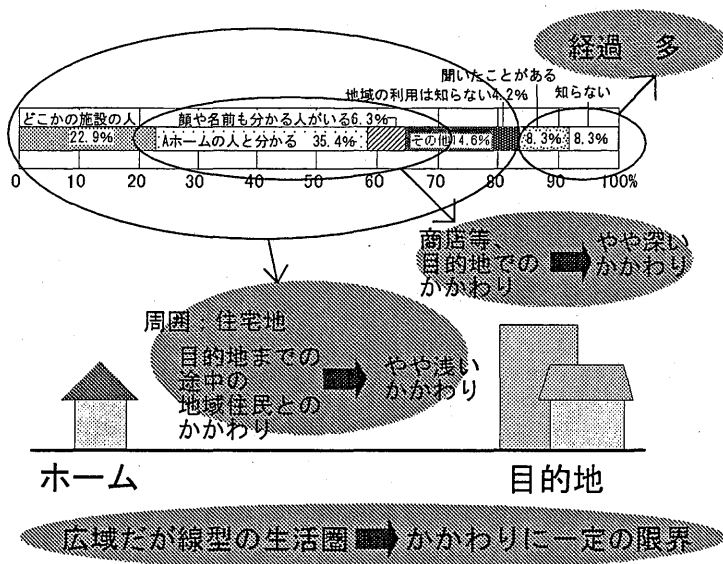


図 4.5-33 A ホームの地域住民とのかかわりのまとめ

(2) B ホーム

図 3.4-34 に、B ホームのまとめを示す。

B ホームと C ホームは経過、立地環境、生活圏の型がほとんど良く似ている。

開設からまだ1年未満であり、何となく聞いたことがある人や存在自体を知らないという人がまだまだ多い。

しかしながら、毎日の買い物、散歩による積極的な外出と、ホームの周囲に点在する、広域な生活資源の甲斐もあり、数はまだ少ないが、密なかかわりを持っている。商店が多いこと、周囲が住宅地であることで、外出先の目的地に加え、道の途中でも周辺住民とかかわりを持ち、徐々に関係を築いている。

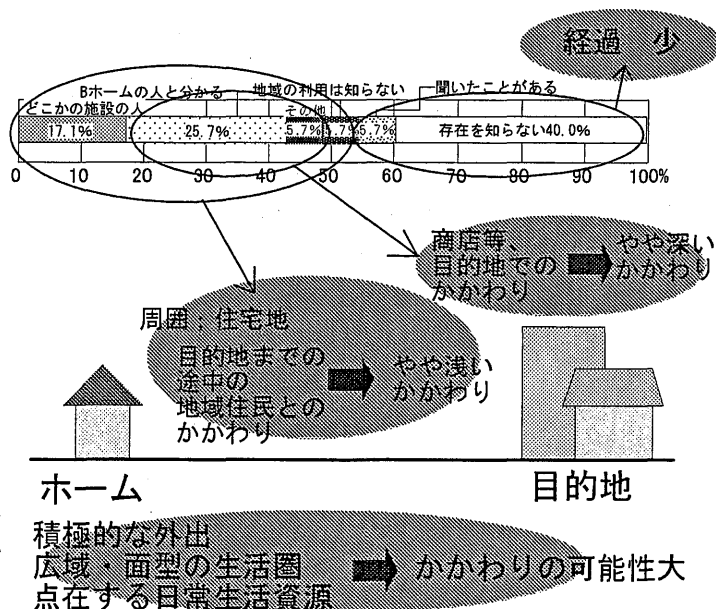


図 4.5-34 B ホームの地域住民とのかかわりのまとめ

また、BホームもCホームも、生活圏が面型であるため、日によって、時間によって、道によって出会う人が違うこともあり、まだ存在自体を知らない人がスタッフと数人の入居者が外出する姿を見て、(Bホームの人であることは分からなくても)認識が深まる可能性は出てくる。また、今はたとえ顔や名前が分からず、「どこかのホームの人」の認識の人でもBホームがそのまま積極的な外出をしていけば、時間が経つにつれて、「Bホームがあるという認識」と「Bホームの人が外出している」ということが結びついてくる可能性もある。

しかしながら、それでも生活時間帯の合わない人、高齢者にあまり関心のない人もいるので、外出以外にも、地域住民と触れ合う機会をもつことは必要といえるだろう。

(3)Cホーム

図4.5-35は、Cホームのまとめである。

前述のように、CホームもBホームとほぼ同じまとめができる。

Cホームは周囲の多くがマンションやオフィス街となっているが、広域に点在するスーパー等の地域資源が多いこと、目的地までの道には小売店、郵便局、個人経営の小規模な病院、コンビニ、公園等が多いため、目的地だけではなく、道の途中でもかかわりを生みやすい生活圏であるといえる。

Cホームもまだ開設から1年未満であり、存在自体を知らない人は多い。しかし、積極的な外出による効果もあり、徐々に地域住民と関係を築いている。まだまだこれからの可能性が大きいホームである。

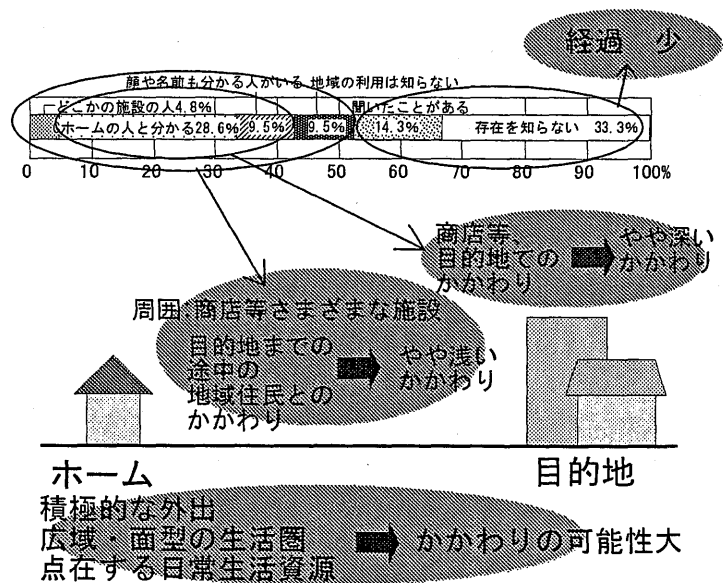


図4.5-35 Cホームの地域住民とのかかわりのまとめ

(4)Dホーム

図4.5-36に、Dホームの地域住民とのかかわりのまとめを示す。

DホームもAホーム同様に、ホームの開設からある程度経過しており、存在を知らないという人はかなり少ない。

しかし、その一方で、商店街とスーパーを中心に日々外出しているものの(図2.2-29、表2.2-5

参照)、徒歩による主な日常的な外出先はおおよそ線型、さらにホームから週4回程度利用する商店街までの線上の間は大きな道路が通っている、坂道が多い等であまり日常的に関係を築ける場所はない。ホーム南西のスーパーやパン屋は割と住宅の多い地域でもあるがやはり坂道が多く週2.3回程度の利用にすぎないため、目的地までの環境は割といいといえるが頻度においてなかなか関係を築きにくいといえる。

それゆえ、ホーム自体の存在はよく知られているが、かかわりの深い人は良く利用する商店などに限られてしまっている。存在を知っている人の多くは、「Dホームがある」ということと「Dホームの人が地域にでて外出している」という認識がまだ結びついていない人である。

開設から3年半経ち、周辺住民がホームの存在を知ってある程度落ち着いたホームではあるが、地域環境に恵まれず、このままの日常生活ではこれ以上深いかかわりを持つことは難しい、限界に来ているホームであるといえるだろう。

ホームのスタッフは「地域との関わりは必要」と答えており(2.4 グループホームと地域とのかかわりについての意識参照)、日常にかかわりを持つのが難しいならば、地域住民と行事を通して交流を行うなどをし、ホームの存在のみでなく、ホームの内容をもう少し住民に理解してもらえようようなある程度工夫が必要であるといえる。

(5)Eホーム

Eホームは開設から1年と少し経過し、A,DホームとB,Cホームの間にあるホームといえるが、図4.5-26でホームの存在を「知らない」と答えた住民が最も多かったホームだった。

図2.2-30に示したように、Eホームの日常生活圏は100m以内と極めて狭く、日常的な外出頻度も少ないため、周辺住民の認識がほとんどないのだろう。

上図4.5-37「Eホームの人と分かる」「顔や名前も分かる人がいる」というのは、よく利用するスーパー、小売店での付き合いと、周辺が戸建ての民家が多いことから近所づきあいがかかわっている人にほとんど限られてしまっているとい

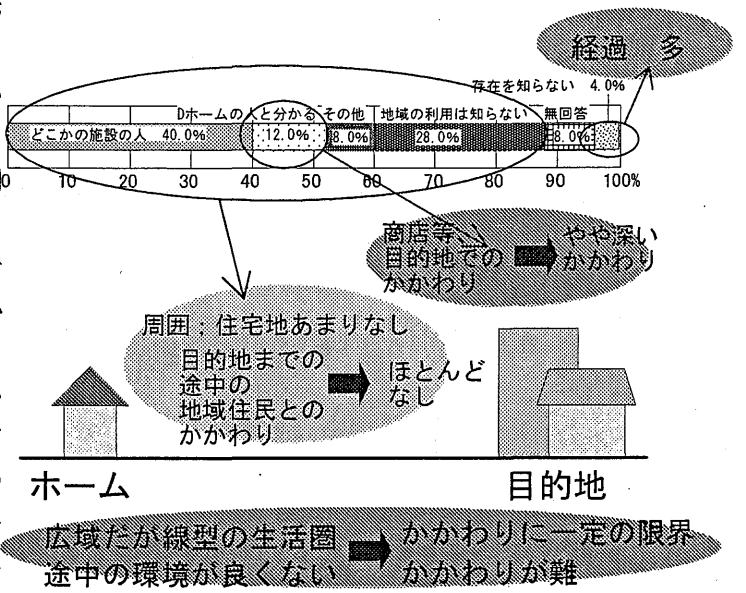


図4.5-36 Dホームの地域住民とのかかわりのまとめ

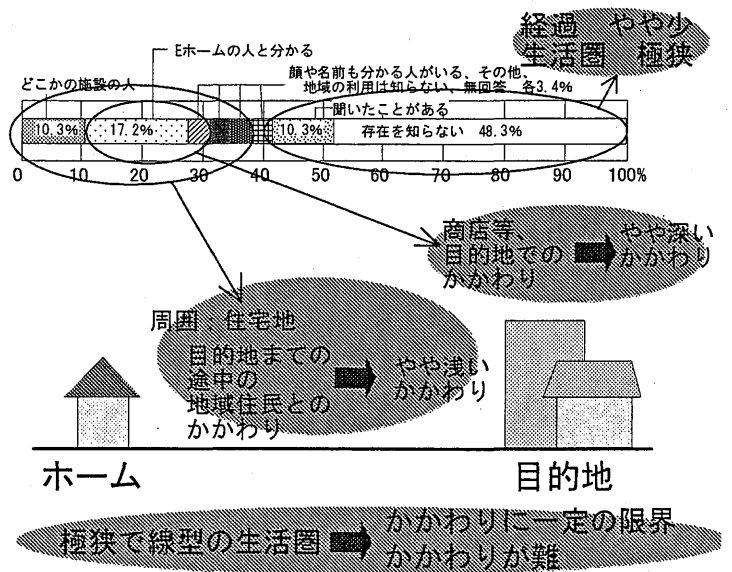


図4.5-37 Eホームの地域住民とのかかわりのまとめ

える。外出の機会も少なく、外出の範囲も狭いので、このホームもこのままの外出スタイルであれば、Dホームのように限られた人しかかかわりが持てないままになってしまうだろう。

ホーム周辺の地域資源の関係や、入居者の事情等でなかなか外に出る機会がないならば、これまでのホームで考察してきたように、周辺住民をホームに招くということも、単にかかわりを持つためというのみではなく、「ホームの中を見たい」「どういう暮らしをしているのか分からない」といった住民にホーム内部や入居者の暮らしを理解してもらう上でも有効な手段といえるのではないだろうか。

第Ⅲ部 認知症高齢者のための居住施設と地域との相互浸透に関する研究

第7章 地域密着型小規模多機能施設の動向に関する考察

7-1 研究の目的と方法

小規模多機能と呼ばれる施設やそれに準ずるサービス機能を持った「宅老所」などは全国に展開しており、その規模やサービス内容、職員の考え方などは実に様々である。そこで本研究では、調査対象施設を下記の内容において分析することで、全国に展開している「地域密着型小規模多機能施設」の現状を把握し、今後の高齢者ケア環境のあり方を探ることを目的としている。

- ・ サービス内容について
- ・ 運営形態について
- ・ 利用者について
- ・ スタッフについて
- ・ 地域との関わりについて
- ・ これまでの活動経緯について
- ・ 建物について
- ・ 空間構成について
- ・ その他、特徴などについて

調査対象施設は、「宅老所・グループホーム全国ネットワーク」に登録されている420施設のうち、原則として通い・泊まり・住むの3つのサービス機能を持つ施設14施設を選出した。また、建物が新築や民家改修型であるもの、運営主体がNPO法人や社会福祉法人、株式会社であるもの、など、様々な形態の施設を調査できるように選出した。

そのようにして選出した14の施設において、実際に訪問し、調査をさせていただいた。調査方法は、職員の方に行うヒアリング調査である。上記の内容(2 研究の目的 の内容)についてヒアリングを行い、また、職員の方の説明を受けながら建物を見学させていただいた。

その後、訪問調査を行ったそれぞれの施設についてヒアリング内容をまとめ、建築的な面においていくつかの視点から分析を行った。

7-2 調査対象施設の概要

7-2-1 全国の施設の概要

「宅老所・グループホーム全国ネットワーク」に登録されている420施設について、サービス機能の種類と数によってパターンを分けて、パターンごとの施設数や動向について考察した(表7-1)。

「通い、泊まり、ホームヘルプ、住む、ケアマネジメント、配食、移送」の7つのサービス機能のうち、どの機能を持っているかによって48のパターンに分けられた。機能の数は1~7までであり、機能の数が少ない施設の方が多い傾向がある。また、それぞれの機能の組み合わせは様々なものが見られた。

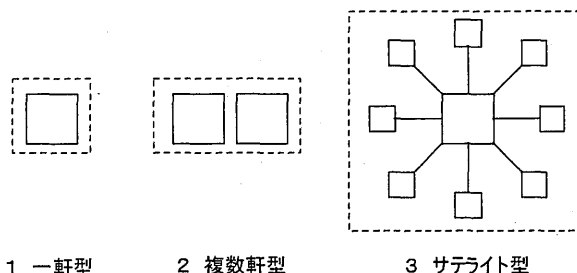
最も多いのは「住む(1機能)」で122件、次に「通い(1機能)」60件、「通い、泊まり(2機能)」30件、「通い、泊まり、住む(3機能)」25件、「通い、住む(2機能)」16件と続く。「住む(1機能)」はグループホーム、「通い(1機能)」はデイサービスセンターのことであり、多機能化がまだ進んでいないことが分かる。

表7-1

パターン 番号	機能類	通い	泊まり	ヘルプ	住む	ケアマネジメ ント	配食	移送	施設数	
1	1	○							60	
2				○					2	
3					○				122	
4	2	○	○						30	
5		○		○					11	
6		○			○			○	16	
7		○				○			12	
8		○						○	3	
9		○							○	5
10				○		○				5
11					○	○				3
12					○	○				9
13					○	○			○	3
14		3	○	○	○					6
15	○		○		○				25	
16	○		○			○			11	
17	○		○				○		1	
18	○		○						○	1
19	○				○	○				1
20	○				○	○				5
21	○				○			○		1
22	○				○				○	4
23	○					○				7
24	○					○		○		1
25	○					○			○	1
26					○	○	○			7
27					○	○			○	1
28					○	○	○		1	
29	4	○	○	○	○	○			7	
30		○	○	○		○			4	
31		○	○	○				○	4	
32		○	○		○	○			5	
33		○	○			○		○	1	
34		○			○	○			5	
35		○			○	○	○		1	
36		○			○	○		○	9	
37		○			○		○	○	3	
38	○				○	○	○	1		
39	5	○	○	○	○	○			9	
40		○	○	○	○		○		2	
41		○	○	○	○			○	2	
42		○	○	○		○		○	3	
43		○			○	○	○	○	1	
44		○		○	○	○		○	2	
45	6	○	○	○	○	○		○	2	
46		○	○	○	○		○	○	1	
47		○	○	○		○	○	○	1	
48	7	○	○	○	○	○	○	○	3	

7-2-2 調査対象施設の分類

調査対象施設を、建物の形態によって3つの型に分類した(図7-1、表7-2、表7-3、表7-4)。1つは「一軒型」であり、サービスが一軒の建物において行われている施設とする。もう1つは「複数軒型」であり、サービスが複数軒の建物において行われている施設とする。「複数軒型」では、2軒が隣り合っている場合や改修によって2軒の民家がつながっている場合など、さまざまなケースがみられる。そしてもう1つが「サテライト型」である。特別養護老人ホームや医療施設など本体となる施設があり、その本体から宅老所、ケア付きマンション、逆デイサービス、小規模多機能施設などといった機能が地域に展開しているような場合を「サテライト型」とする。



1 一軒型 2 複数軒型 3 サテライト型

図7-1

1 一軒型

表7-2

	事業所名	運営主体	都道府県	サービス内容					開所年月日
				通い	ホームヘルプ	泊まり	住む	ケアマネジメント	
1	小規模多機能ホーム きなっせ	NPO法人 コレクティブ	熊本県	○	○	○	○	○	1994年4月
2	宅老所 ながせ	NPO法人 たすけあい佐賀	佐賀県	○	○	○	○	○	1999年5月16日
3	小規模多機能施設 まりやの家	社会福祉法人 まりやの家	宮城県	○		○	○	○	1999年6月
4	生活リハビリクラブ きらら	NPO法人 生活リハビリクラブきらら	宮城県	○		○	○		1995年11月1日
5	ことぶき園	社会福祉法人 ことぶき福祉会	島根県	○		○	○		1987年4月1日
6	瀬の浦・さくらホーム	有限会社 親和会	広島県	○		○	○		2004年4月1日

2 複数軒型

表7-3

	事業所名	運営主体	都道府県	サービス内容					開所年月日
				通い	ホームヘルプ	泊まり	住む	ケアマネジメント	
7	のぞみホーム なんちゃってのぞみホーム	NPO 法人のぞみの会	栃木県	○	○	○	○	○	1993年7月1日
8	デイホーム手のひら グループホーム手のひら	NPO 法人手のひら会	栃木県	○		○	○		1996年10月1日
9	宅老所よりあい	社会福祉法人 福岡ひかり福祉会	福岡県	○		○	○	○	1991年11月
10	デイサービスセンター憩 グループホーム憩	株式会社 アサヒライフコーポレーション	広島県	○	○	○	○	○	2002年2月

3 サテライト型

表7-4

	事業所名	運営主体	都道府県
11	ケイジングループ	特別医療法人 恵仁会 社会福祉法人 恵仁福祉協会 メディコケイジ 株式会社 有限会社 けいじん	長野県
12	せんだんの社	社会福祉法人 東北福祉会	宮城県
13	せんだんの社ものう	社会福祉法人 東北福祉会	宮城県

7-3 地域密着型小規模多機能施設の概要

1 小規模多機能ホーム きなっせ

見学日 2004年11月25日(木)

所在地 〒861-5504 熊本県熊本市小糸山町771-5

事業所名 小規模多機能ホーム きなっせ

運営主体 特定非営利活動法人コレクティブ

開所年月日 1994年4月

施設までのアクセス JR植木駅から車で7分

ヒアリング対象者 川原 秀夫 代表

現在のサービス内容

通い(介護保険、認知症単独)

定員10名、365日9:00~18:00

泊まり(自主事業)

自宅に出向く 365日24時間

住む 定員8名

ケアマネジメント

現在の建物

形態 新築。木造平屋建て。壁を白っぽくしたくなかったが、許可されなかった。腰窓の高さまでは木にすることを許された。他にも、屋根裏部屋を作ることが許可されなかったり、防火壁でないといふだめだったりした。

規模 土地:120坪、建物:70坪

その他 この土地を選んだ理由は、熊本市内にあり、住宅地で、安くて、交通の便がよい、ということ。利用者にとっては、建物の中に隠れ家・好きな場所があることが必要。「きなっせ」では、自室以外に好きな場所が7~8箇所ある。

利用者

人数 デイサービス 登録17人

訪問介護 登録12人

グループホーム 入居7人

受付方法 募集はしたことがない。待機は取らない。「困ったときは今日からでも」という姿勢。

利用者の居住地域・交通手段

交通手段はほとんどが送迎。一番遠くの方は片

道30分ほどかかる。他の施設では対応できない重度の方が多いので広域になる。

その他

21~22件中、7割は自宅に戻っている。1人を除いて要介護度4~5の方だったが、平均4.3から3.8~3.9になった。

スタッフ

人数 日中は最低4人、普通は5人いる。きなっせから車で15分くらいのところにあるレスパイトと合わせて14名。

地域とのかかわり

他のGHに移る方もいる。ケアマネージャーとの関わりがある。町内の清掃などに参加している。地域の方の協力・理解は深まっても、まだ「自分はいけないところ」と思われている。

これまでの経緯

1999年4月、認知症高齢者グループホームとして開所。これまで特別養護老人ホームに勤めていた人達が「認知症の人でも普通の暮らしができる」と何の補助も受けず始めたホームである。地域に開かれた、通って泊まって住める宅老所型グループホームを目指していたので、介護保険が始まる時、「認知症対応共同生活介護の指定を受けると地域からの利用ができなくなる」と指定を受けず小規模・多機能ホームとして運営がなされてきた。基本はデイサービスで介護報酬を受けながら、あとは自主事業である。

特徴

現在、「きなっせ」は3ヶ所あり、それぞれに特徴がある。

① 小規模多機能ホーム きなっせ

熊本市小糸山町771-5

入居定員8名と下記の事業及びNPO法人の介護サービスを実施、木造平屋建て

- ・ デイサービスセンター(認知症専用単独型、定員10名)
- ・ ホームヘルパーステーション
- ・ 居宅介護支援事業所

② 緊急対応ホーム おいでなっせ

菊池郡西合志町須屋宇木原野ユトリック団地2351-80

認知症の人と家族の駆け込み寺。家庭の雰囲気のまま利用ができる。永住のためのホームではないが、介護保険のショートステイのような期間は設定しない。利用しながら自宅へ復帰又は相応しい利用ホームへの移行を手伝う。入居定員6名、バリアフリーの2階建て、温泉付き

③ コレクティブホーム いつでんどこでん

山鹿市古閑 1312-3

地域サポートセンターを核に、子供から障害のある方・お年寄りの方まで利用できるデイサービスセンター、住まい2棟（認知症の人用9部屋、障害のある方用9部屋、内それぞれ2部屋は緊急対応用）、生活支援毎日型配食サービスも実施。通って、泊まれて、住むこともできるホーム。支援費対象の方も利用できる。

・「きなっせ」の利用者は介護度が重度の方が多く、他の施設では受け入れられない方が多いので利用者の住まいが広域になりあまり地域との関わりがない。それに対して「いつでんどこでん」は地域密着型である。二つの施設のスタンスが違う。

・「いつでんどこでん」は新築の改修型。はじめは、利用者のプライバシーが守られずスタッフにとって管理しやすいような作りだったが、改修によって落ち着く空間、好きな空間ができた。利用者は管理されると逃げたくなるもので、家の中に隠れ家のような好きな場所が必要。

・GHについて。GHは「住む」しかないのが問題。地域などから切り離して移り住むことになってしまう。規模が小さいというだけで地域には役立たない。

建物に関するフォーマット(表7-5、表7-6)

表7-5

施設名称 小規模多機能ホームきなっせ				
性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者)自立支援性	(入居者、利用者)安全性	建築・インテリアのわらい
玄関	廊下へ続く。靴を脱ぎ履きするスペースが狭い。靴を置くところが斜めになっていて、車椅子の方には介助が必要。(写真②)	玄関には椅子が必要。	段差は、中途半端なものか除去。25cmくらいあれば認識できる。(写真②)	
廊下			手すりを付かれるようにはしているが、廊下に面して居室があるため連続して手すりを付けることができない。付けたら中途半端になってしまう。	床の材質と同じ幅で200ある。広いのでリビングやダイニングとしても使っている。たんすやソファ、ベンチなども置いている(購入したもの)。
居室(個室)		中に置いてあるものは自分のもの。鍵を中から閉めることができ、2人くらいが使用している。	玄関から居室が見えないようにしている。居室は畳が良い。布団もベッドでもどちらにも対応できる。コンクリートに比べて畳前にもつなかりにくい。洋間に畳を入れている人もいる。	元々和室の居室が1つある。老朽の高さより100cmほど上がっている。(写真③)
キッチン				キッチン、ダイニング、リビングがすべて一つの空間で、明確な区切りはない。キッチンは日当たりがよく明るい。

表7-6

施設名称 小規模多機能ホームきなっせ				
性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者)自立支援性	(入居者、利用者)安全性	建築・インテリアのわらい
ダイニング		机が3つあり、3か所を食べる。利用者の好きなどころで食べるが、大抵決まっている。		
リビング				畳の上がりをつくらした。暮らしとしての空間として、畳がほしいところはない。
浴室			2人入れるが、もっと小さくても良かった。	
トイレ		2つある。1つは家庭用、1つは車椅子用で広い。現在車椅子の入はいない。		
建具			引き戸が基本。押すのは危ない。	
換気・空調			エアコンは個室に個別にある。	
建物外観				写真④
その他		利用者にとっては、建物の中に隠れ家・好きな場所があることが必要。「きなっせ」では、自室以外に好きな場所が1~2箇所ある。		壁を白くしたかったが、許可されなかった。壁紙の高さまでは木にするのを許された。他にも、屋根裏部屋を作ることも許可されなかったり、防火壁がないとダメだった。

きなっせの図面(図 7-2)

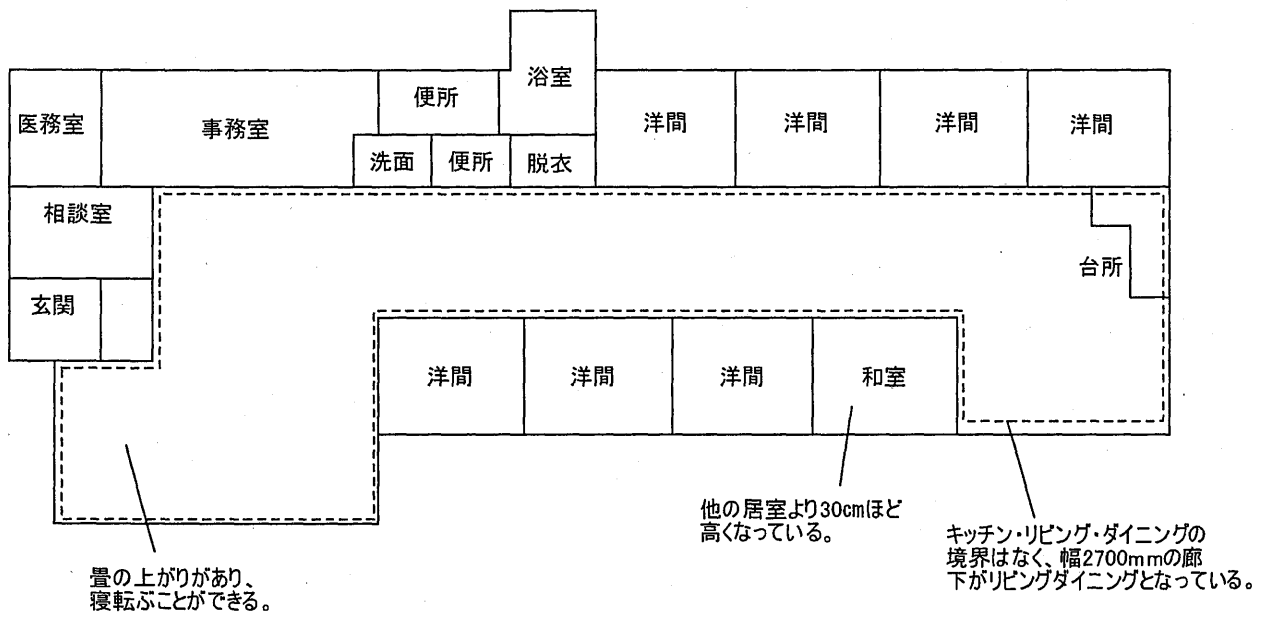


図 7-2

2 宅老所 ながせ

見学日 2004年11月26日(金)

所在地 〒840-0853 佐賀県佐賀市長瀬町10-37

事業所名 宅老所ながせ

運営主体 特定非営利活動法人たすけあい佐賀

開所年月日 1999年5月16日

施設までのアクセス JR佐賀駅から車で10分

ヒアリング対象者 西田 京子 代表

現在のサービス内容

通い(介護保険)

定員10名、365日9:00~17:00、延長可能

通い(自主事業)

定員若干名、365日9:00~17:00、延長可能

泊まり(自主事業)

定員5~7名、365日17:00~翌朝9:00、延長可能

自宅に出向く(介護保険、自主事業)

月~日

住む(自主事業)

定員3名

ケアマネジメント(介護保険)

月~土

その他のサービス

- ・障害者支援費制度 身体障害者居宅介護
- ・在宅福祉サービス 家事支援
 - ・障害者生活支援事業 移送サービス
 - ・子育て支援事業 一時託児・出張託児・学童保育・病児託児・障害者託児

現在の建物

形態 民家改修型。古い家は、認知症のお年寄りに大変なじみやすく、落ち着きやすい。家の中のバリアはわざと残している。

利用者

その他 高齢者以外に、障害者が7人利用している。

スタッフ

人数 日中は5人いる(11月26日)。送迎はその5人以外のスタッフが担当し、手厚くやっている。「たすけあい佐賀」のスタッフは非常勤も含め100名。内、常勤は44名。知的障害の方も働くこ

とができる。

これまでの経緯

「宅老所ながせ」は元々、一人暮らしのお年寄りの家だった。子供さんが6人みえたので大きな家だった。改築はせず100万円でトイレだけ作った。お風呂は元々広かった。最初は一部屋だけを使ってサロンのように始まった。

ながせの図面(図7-3)

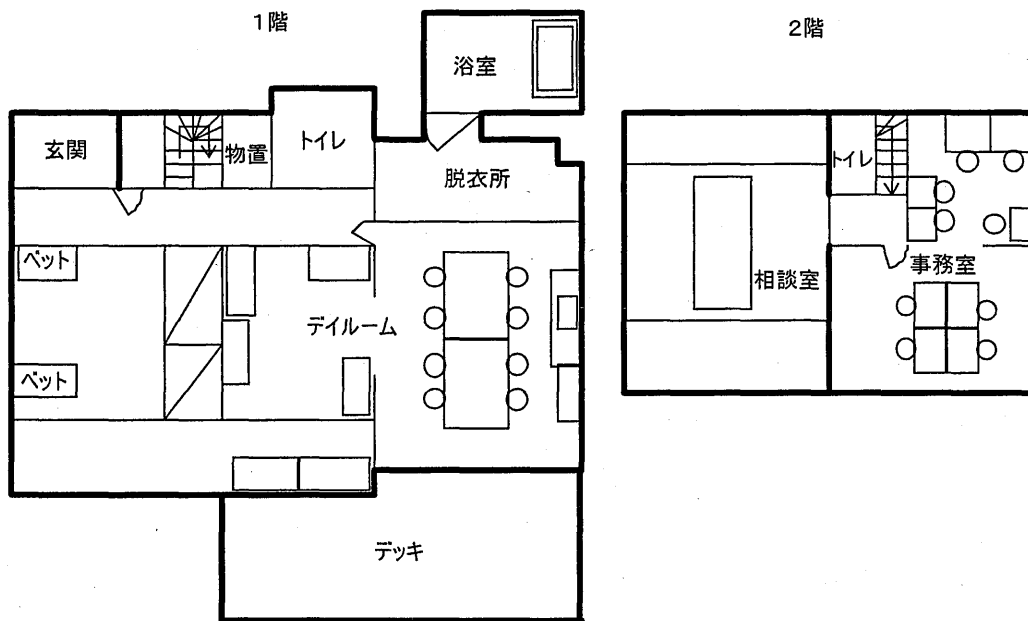


図7-3

3 小規模多機能施設 まりやの家

見学日 2004年12月16日(木)
所在地 〒989-5181 宮城県栗原郡金成町
 津久毛字小迫高見山7-1
事業所名 小規模多機能施設まりやの家
運営主体 社会福祉法人まりやの家
開所年月日 1999年6月
施設までのアクセス くりはら田園鉄道「沢辺
 駅」から車で5分

ヒアリング対象者 築茂 三郎 代表

現在のサービス内容

デイサービスまりやの家
 定員 月～金25人、土・日10人、365日8:30
 ～17:30
 グループホームまりやの家
 定員9人
 居宅介護支援事業所まりやの家
 定員50人
 宅老所まりやの家
 居住3人、お泊まり4人、お出かけ6人

現在の建物

設計者 基本設計:井上博文(東北工業大学大
 学院)

実施設計:高橋住研一級建築士事務所

形態 新築。自宅の隣に建てた。

規模 建物140坪

その他 良い素材を使い、良い空間をつくるこ
 とにこだわった。基本設計を大学院生
 の方にお願ひし、実施設計は知り合ひ
 の建築業者にお願ひした。床などには
 軟らかくて消臭作用のあるヒバを用
 い、壁には珪藻土を用いた。

- ・ 事務室の戸は開けっ放しにしている。機械などは見えないように木の扉の中に閉まっている。
- ・ 和室6畳が相談室。名目でつくったので、開けっ放しにして休憩室になっている。
- ・ 和室8畳が静養室。居間より30cmほど上がっていて、ちょうどいい高さ。座れて、そのまま上がれる。

- ・ 2階のホールが事務所。吹き抜けのため、2階にいて1階の音が聞こえ、気配が感じられる。
- ・ 2階の西の倉庫が収納、東の倉庫が女性更衣室・休憩室。機械室の南側が男性更衣室。現在、塾生室とリラックスマームをつくり中。
- ・ 収納がないので外につくる予定。鉄パイプの骨組みはできた。
- ・ 家の中にいろいろな逃げ場をつくっている。

利用者

全部で50～60人が利用

通い 25人登録

住む 9人

利用者の居住地域 地域を限定せず、どこの人でも利用できる。横浜からきた人もいた。

スタッフ

人数 26人。日中は13～14人いる。

その他 スタッフは、まりやの家で働きたい人を先着順で受け入れる。学歴、資格、年齢は問わない。4日間のボランティアや3ヶ月の実習などをしながら4回ほど話し合いをして決める。就職をしたらヘルパー2級、介護福祉士、ケアマネージャーなどの資格をとってもらう。

地域との関わり

野菜を提供してくれる方などがいるが、意図的に関わったりはせず、行事などもしない。

近所に買い物に行ったりする。

特徴

まりやの家グループとしては、有限会社経営の小規模多機能施設が、小牛田町・若柳町(平成16年4月開所)・築館町・栗駒町(平成16年6月開所)にあり、計画では金成町を中心に20ヵ所程度の地域密着型・小規模多機能施設を考えている。

建物に関するフォーマット(表7-7、表7-8)

表7-7

施設名称 まりやの家				
性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
玄関				玄関は普通に家の大きさ、居間に入るまでにもう1つドアがある。玄関のドアは断熱仕様様の一般用。
廊下				
居室(個室)	戸に小さな無透明の窓のようなものがあり、電気が通っているかどうか分かるので、部屋に人がいるかどうか分かる。	和室も洋室もあり、それぞれトイレと洗面がある。畳もある。便器の色や部屋のカーテンの色などは部屋ごとに違う。		居室1・2・4が宅専用、居室3・5とGH①～④がGH用、GH⑤と⑥は2人部屋、各部屋の地下に電気温水器がある。
キッチン	8畳のキッチン、ガスコンロが2台、シンクが2ヶ所、レンジ、オープンを設置。全て家庭用の物。			
ダイニング				
リビング	床とたつのある居間は、今は畳を敷いてシートステイに換えている。障子障から人が来て集まれるような場所にした。ミニキッチンも置いたが今は使われていない。	デイ用とGH用の居間があるが、こぼんの時はみんな分かれて別の机にそれぞれ座るが、大抵はデイの居間の方に集まっている。	床に使われている木材は骨折しにくく消臭作用もある。	玄関を開けると居間になっている。玄関を開けると事務室、というのでは家の雰囲気にならない。畳もあるが、歩けない人が通っていてもおかしくない。天井が高いので開放感がある。

表7-8

施設名称 まりやの家				
性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
浴室	洗濯場が手狭になったので、ドアを開けた外のとこに納戸を作りかかっている。除菌剤の準備はすでにできており、全て手作り。家の裏に作業所もありたさんの道具がある。	シャワーはひとつで、個別ケアをする。一人一人に入ってもらいたい。	浴槽の中にワンステップあり、可動式の手摺もある。小浴室は感染症などのためのもの。家庭用より少し小さいくらい。	お風呂は壁がビニキで、床は濡れと縁に光る石を使用。浴槽は大理石でできている。浴室は「濡れしし」ではなく「履し」。
トイレ	2階のトイレがスタッフ用。			各居室のトイレの他に、トイレ1・2がある。どちらも共用のトイレで車椅子に対応している。トイレ2はお風呂からも入れる。トイレ2からお風呂には入れないつくりになっている。
階段			階段前に木の枠のみのドアがある。階段を上って転倒するのを防ぐため。	
換気・空調			床下は利用者の希望で、10人平均人が付けている。	全室床暖房。
バルコニー				ウッドデッキは東向きで朝日、寒いので窓を持って閉めた。その後障子でウッドデッキに移した。今後、キッチンステップをウッドデッキに置く予定。(写真⑧)
アプローチ				見ただ目では分からないくらい暖かに傾けている。わざとらしいスロープはつくりず、自然に玄関につながるように。(写真①)
建物外観				かた直れの作りが良い。(写真①写真②)

まりやの家の図面(図7-4、図7-5)

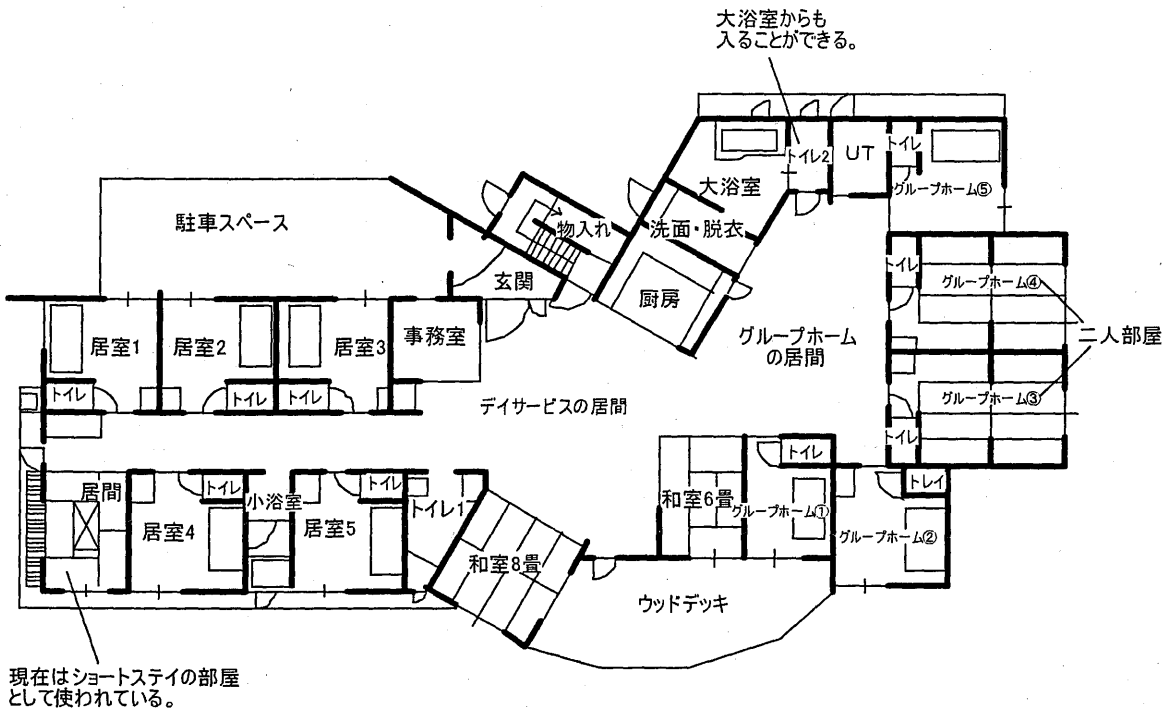


図7-4 1階

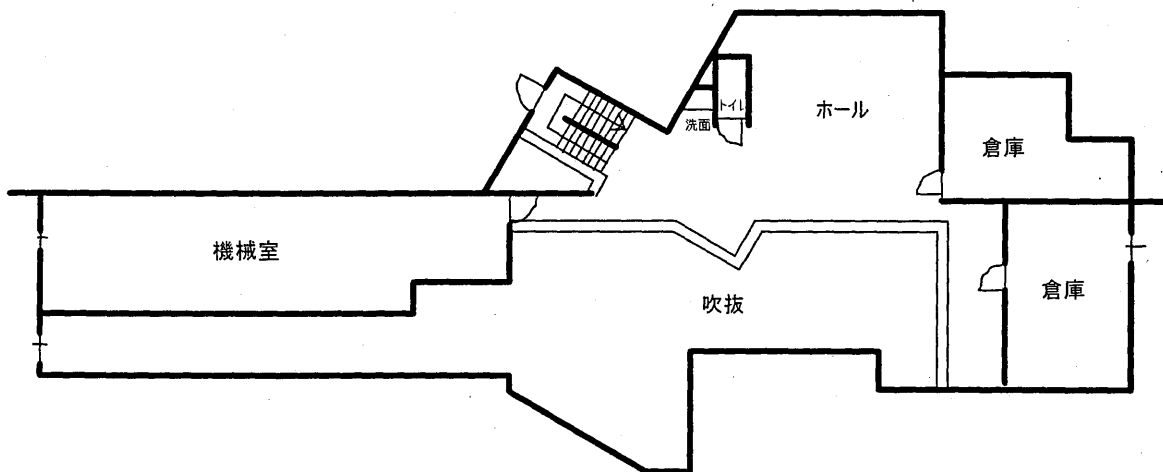


図7-5 2階

4 生活リハビリクラブ きらら

見学日 2004年12月17日(金)
所在地 〒981-0104 宮城県宮城郡利府町
中央3-6-4

事業所名 生活リハビリクラブきらら
運営主体 特定非営利活動法人生活リハビリ
クラブきらら

開所年月日 1995年11月1日
施設までのアクセス JR利府駅から徒歩5
分

ヒアリング対象者 内海 静子 代表

現在のサービス内容

通い(介護保険)	定員10名、
月～土9:30～16:00	
通い(自主事業)	定員1～2
名、月～土9:30～16:00	
泊まり(介護保険)	定員2名、
毎日24時間	
泊まり(自主事業)	定員3名、
16:00～翌9:30	
住む	定員2名

現在の建物

形態 築およそ100年経っている物置状態
だった民家を改築した。建坪165㎡。
水周りを10年くらい使っておらず、
建物も傾いていた。県の補助によって
お風呂、トイレ、洗面を新たにつくっ
た。

利用者

人数 通い 登録24～25名(月によって違
う)

利用者の居住地域 2市2町の方が利用。

その他 年齢の枠を設けず、障害者の方も受け
入れている。

スタッフ

人数	管理者	1名(兼務・生活相談 員)
	看護婦	2名(常勤2名)
	社会福祉士	1名(常勤)
	介護福祉士	2名(常勤1名、パー ト1名)

介護員 9名(うち2級ヘルパ
ー7名)

調理担当 1名

事務職員 1名

1日6～6, 5人が勤務。

地域とのかかわり

近くに町役場、保育所、銀行、商店がある。

これまでの経緯

平成7年11月、6畳2間のアパートを借りて
開所。

平成8年、アパートが狭くなり、一軒家の建物を
借りた。60坪の総2階の建物で、1階の半分
をデイサービスに、もう半分を居酒屋にし、2
階はお泊まりの場所とした。

平成12年6月、それまでに借りていた建物で
はデイサービスで7人くらいしか使えないた
め、もっと広いところを県と町がさがしてくれ
て、今の利府の家に移った。

建物が移動するたびに、利用者さんも移ってこ
られた。

建物に関するフォーマット(表7-9、表7-10)

表7-9

施設名称 生活リハビリクラブきらら

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
玄関			玄関に可動式のステップを取り付けている。料金の関係でスロープにはできなかった。(写真②)	
居室(個室)				居室は2部屋だが、特養室と相談室も居室として使っている。元々あった古い家具などが置かれている。2人部屋で、1部屋に2つずつベッドが置かれている。
浴室			脱衣場から浴室までの段差がなくなるように板を取り付けられるようになっている。また、浴室内につかまるところが少なくある。(写真④)	土間だったところに浴室をつつた。
トイレ	便器は科内に設置しており、介助しやすい。ただ、要領に使用してみるとトイレペーパーまでが送れて換気扇が回らなかった。洗面所にポータブルトイレがあり、お風呂で使いたいときに持っていったりする。(写真③)		トイレの便器にあわせて、手摺を大工さんにつけてもらった。収納することができる。(写真⑤)	元々倉庫だったところをトイレにした。2つあるが足りないくらい。

表7-10

施設名称 生活リハビリクラブきらら

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
バルコニー				縁側がある。椅子が置いてあり、外を眺められる。また、縁側の半分を事務室として使っている。
建物外観				写真①
事務室				縁側の半分を使っている。
医務室				
相談室				居室として使っている。
特養室				居室として使っている。

生活リハビリクラブきららの図面(図7-6)

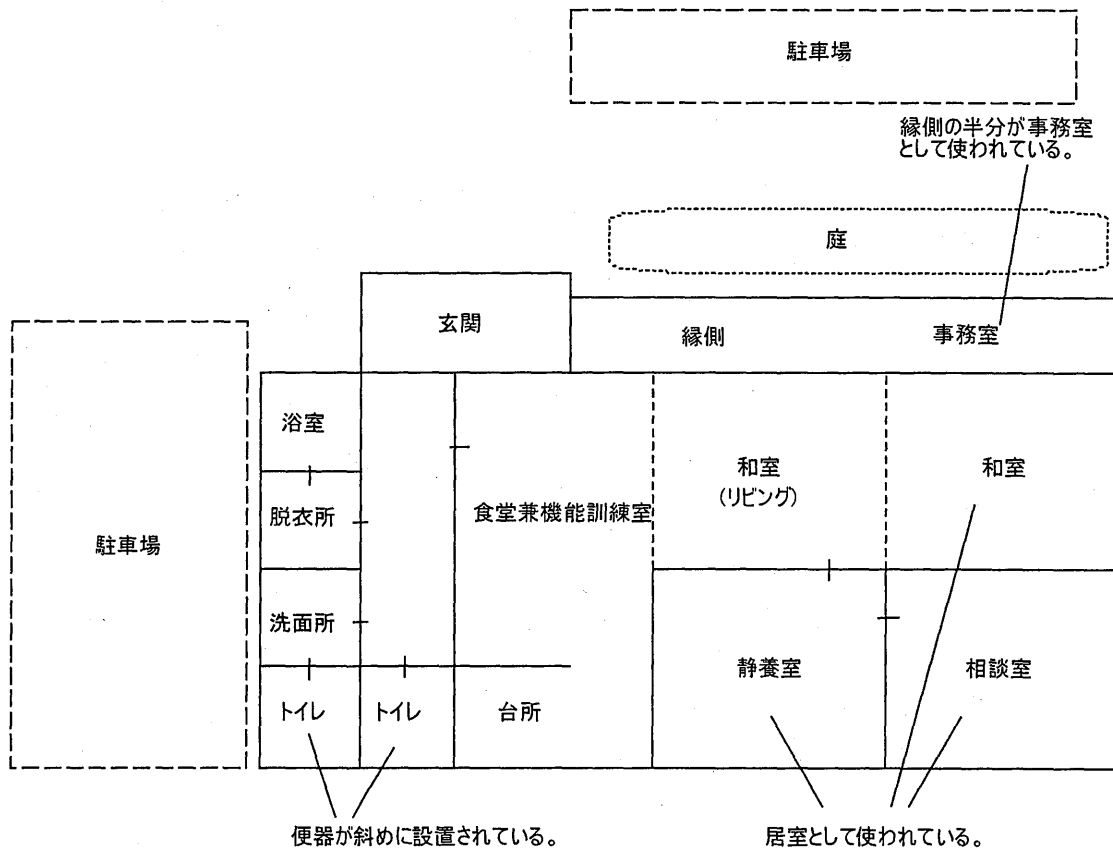


図7-6

5 ことぶき園

見学日 2004年12月20日(月)
所在地 〒693-0023 島根県出雲市塩冶
 原町1-50
事業所名 ことぶき園
運営主体 社会福祉法人 ことぶき福祉会
開所年月日 1987年4月1日
施設までのアクセス JR出雲市駅から車で
 約5分

ヒアリング対象者 槻谷 和夫 理事長

現在のサービス内容

通い(介護保険、認知症単独) 定員 10
 名、月～金 9:30～16:30

泊まり(自主事業) 定員 1～2
 名

住む(介護保険) 定員 8名

利用者

人数 通い 登録 10人
 住む 入居 8人(8人中
 7人が「通い」に登録している)

受付方法 定員を超えた場合は、待機してもら
 う。実際に、待っている方は多い。

利用者の居住地域・交通手段

近くの方ばかりで、地域密着型。自宅が近所
 にあり、歩いて来る方もいる。その他の方は送
 迎。

その他

認知症による混乱を避けるため、「通い」では
 月～金まで毎日来てもらうことが基本。そのため、
 10人定員で10人登録としている。介護保険の日
 数限度を越えても、出雲市の制度により介護度3
 以上の人は保険が出る。

職員

人数 「通い」と「泊まり」を合わせて
 13人。うち、常勤11人、パート2人。

その他 原則として、介護は職員がやり、ボ
 ランティアの人はしない。

ボランティアは全部で15人。月～
 金まで毎日2人ずつ来て21～22食
 の昼食を作る。火・金のみ夕食も作
 る。

地域とのかかわり

利用者の家族がよく訪れる。その他、近所の子
 ども達などが訪れる。

昼間、向かいの焼肉屋さんの駐車場を借りてい
 る。夜はことぶき園の駐車場を焼肉屋さんに貸
 している。

これまでの経緯

1987年 小規模多機能型老人ホームことぶき
 園開設

(民間の非営利団体としてぼけ老人
 をかかえる島根家族の会及び島根老
 人福祉問題研究会の後援を受け設
 立。)

当初の利用者は、通いが5人、泊ま
 りが1～2人、入所が8人だった。

1990年 日本生命財団老人福祉助成事業開始
 (3年間)

1991年 島根県高齢者介護ホーム事業受託経
 営

1992年 社会福祉法人ことぶき福祉会設立

1994年 全国グループホームモデル事業の指
 定を受ける(3年間)

老人ホームヘルプ事業受託経営

1995年 老人サービスD型事業乙立里家セン
 ター受託経営

1997年 認知症老人グループホーム受託経営

1998年 第二ことぶき園開設

老人デイサービスA型事業受託経営
 在宅介護支援センター受託経営

特徴

社会福祉法人ことぶき福祉会は、「ことぶき園」
 の他に2つの事業所がある。

・乙立里家センター

出雲市乙立町。1995年開所。土地も
 建物も出雲市が用意し、運営だけを任
 された。診療所が併設している。市内
 で最も高齢化率が高く人口の少ない乙
 立地区において、地域密着の小規模デ
 イサービスを実施し、地域で支える福
 祉社会の実現を目的としている。

・第二ことぶき園

出雲市古志町。1998年開所。デイサービス、ホームヘルプ、居宅介護支援事業所の機能を持つ。職員で話し合って設計をし、設計者も選んだ。その際に考慮したことは、

- ・トイレは左右反転のものを2つ(身体障害者のため)
- ・プライバシー確保のため、トイレはカーテンではなく戸で仕切ること。
- ・お風呂は一人が入れる大きさであった。実際にはお風呂は個浴以外に特殊浴槽を入れなければならなかった。特殊浴槽は今でもやはりなくいいと思うが、職員は楽だからあると使ってしまうというのが現状である。

現在の建物

設計者 槻谷 理事長

形態 新築(1987年築)。一部2階建て。

規模 土地：100坪、建物：80坪

その他 現在の建物が古くなってものも増え、また、個室にしたいという希望もあるので、1~2年後に近くに新築・移転をしようと考えている。現在300坪くらいの土地を探し中。

建物に関するフォーマット(表7-11、表7-12)

表7-11

施設名称 ことぶき園				
機能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者)自立支援性	(入居者、利用者)安全性	建築・インテリアのねらい
玄関	事務室につながる玄関がある。利用者の出入り口と隣り合っている。			スロープがあり、そのまま居間につながる。居間の窓が利用者の玄関と隣り合っている。
居室(個室)	壁で区切ったせいで不便になった。		戸は引戸戸。(写真④)	4人部屋を壁で2つに区切り、さらにカーテンで1人ずつに区切っている。
キッチン				居間から戸を開けてキッチンに入る。
リビング		大きな机が2つあり、こたべを置いたり何かを行ったりする。		建物は全面ガラス窓で、中には建物の様子が見えたり、また、道路からも中の様子が見えたりしている。そのため、暗い(写真③)、洋風の居間の床に20cmほど上がった空間がある。床を高くして、戸を開けて洋風仕切ることができる。
浴室	入り口のカーテン、中に入って、脱衣場と浴室の間もカーテンの仕切り。(写真①)	2~3人用の浴槽。1人で入れる人は裏に借りているアパートのお風呂に入りに行く。(写真②)		
トイレ	トイレの入り口のカーテン、男性用便器1つ、女性用便器2つも戸ではなくカーテンの仕切り、和紙便器1つだけには戸がついている。(写真②)	プライバシーを守るためのカーテンではなく戸にしたため、扉の両側で開閉。(写真②)		

表7-12

施設名称 ことぶき園				
機能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者)自立支援性	(入居者、利用者)安全性	建築・インテリアのねらい
内口				居間は南側の全面窓が明るく明るい。その窓の一部から出入りしている。
建具	居室の戸は引戸戸だが、浴室とトイレはカーテンで仕切っている。特製でのイメージが1階がなかったのだそう。			
照明				
階段	事務室から事務・応接室に上るための階段はあるが、利用者は使わない。			
事務室	事務室のドアを開けるとすぐ居間がある。			
スタッフルーム	10年前のことぶき園の頃に建てた2階の職員用の休憩室。彼らの集まる場所として建てたが、居間よりもっと狭くなるため居間から、売却したが、そのために、スタッフの休憩室になった。			
その他	ことぶき園の裏のアパート(2階2戸)を2部屋借りている。半分は物置に使っているが、一人で入浴できる利用者やお風呂に入りに行く、以前は来訪者が入居していた。			トイレのカーテンや4人部屋の、特製で建てたときの残りが設計に出ている。

ことぶき園の図面(図7-7)

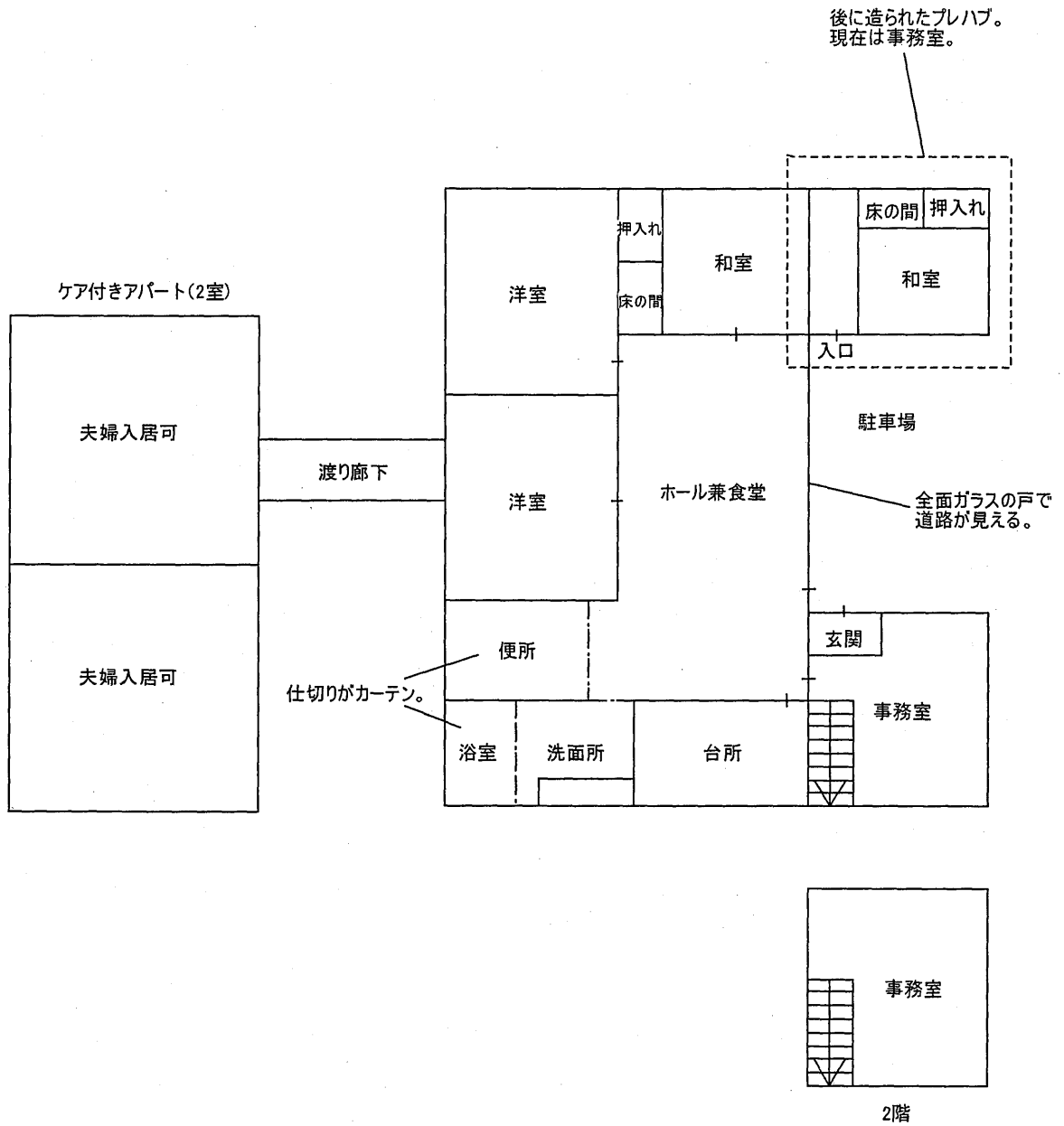


図7-7

6 鞆の浦・さくらホーム

見学日 2004年12月23日(木)
 所在地 〒720-0201 広島県福山市鞆町鞆
 552番地
 事業所名 鞆の浦・さくらホーム
 運営主体 有限会社 親和会
 開所年月日 2004年4月1日
 施設までのアクセス 福山駅から車で約40分
 ヒアリング対象者 羽田 富美江 施設長
 現在のサービス内容

通い 定員10名
 泊まり 定員5名
 住む 定員9名

現在の建物

設計者 企画・デザイン Watanabe
 形態 江戸時代に建造された約300年の歴史をもつ商家(醸造酢店)を改築した。木造2階建て。

規模 建物：延べ約480㎡
 その他 梁や土壁などを可能な限り残すように改築を進めた。また、利用者が監視されないような空間をつくり、さらに近所の人が入りやすく、入ったらほっとするところにした。

利用者

人数 デイサービス 登録15人
 グループホーム 入居9人

受付方法

近くの施設が、その施設の利用者にさくらホームを紹介してくれたりする。現在デイサービスの待ちが50人いるが、15人以上は受け付けない方針。

利用者の居住地域・交通手段

グループホーム：鞆の人のみ。一番遠い人で徒歩10分。

その他

高齢者以外に、障害者の方も利用している。

スタッフ

人数 23~24人。そのうち、鞆に住むスタッフは4人のみ。守秘義務を徹底するため、リーダーも鞆の住人ではないようにしている。また、

地域の人がボランティアをしている。

地域との関わり

歩いて5分以内に肉屋、八百屋、散髪屋、病院、歯医者などがある。利用者が散歩に出ると、近所の人から声掛けてくれる。「家に寄ってきー。」と言われ縁側に座らせてもらうとお茶を出してくれたりもする。街並みを歩くと昔の友人に会ったりして、普段話さない利用者から会話がでてくる。また、駄菓子屋を開いているので子供達が来る。月に1回、利用者が地域の「いきいきサロン」に参加している。また、地域の若い人たちを集めてスタッフと共に話し合いをし、情報交換をしたりお願いをしたりする。この話し合いは台風時などに効果を発揮した。

これまでの経緯

理学療法士とケアマネージャーの資格を持つ「さくらホーム」の代表者は、長年、隣近所に住む人同士が助け合うコミュニティ社会と、温もりが感じられる歴史ある木造建築が数多く残っている鞆町で福祉施設を一という構想を描いていたところ、今の物件が見つかった。そして、2004年4月1日開所。これまでに、2人を自宅にかえた。

特徴

鞆町には、隣近所に住む人同士が声を掛け合い、助け合う人情が残っている。この人情は「地域の力」である。鞆町では祭りが年に70日もあり、この祭りが町全体の連帯感を高めていると言える。鞆町は10年後には高齢化率が70%になる(2004年9月1日現在で35.9%)、と予想されているが、社会保障が希薄になる中、「地域の力」はますます重要になってきている。この力をさらに強めていくための活動の拠点にし、地域全体で力を合わせながら、安心して老いることのできる「住民流福祉の町・鞆」を実現していきたい、という思いでこの施設が立ち上げられた。

建物に関するフォーマット(表7-13, 7-14)

表 7-13

施設名称 さくらホーム

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
玄関		木のベンチが置いてある。(写真③)	段差はあるが、手摺がついている。(写真③)	
居室(個室)				GHの居室は、6つが洋室、3つが和室。(写真④)
リビング		デイサービスの居間にはソファベアがいくつか置いてあり、様々な人がソファにいて居間の人の気配を感じられるようにしている。(写真⑤)		

表 7-14

施設名称 さくらホーム

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
浴室			日内職の人のため、浴室内の白い手摺に赤いテープを巻きつけて自立させている。	GHは赤い湯がいつ、家庭用浴槽(写真⑥)、デイサービスは洗い場が立つ、櫛の浴槽、利用者はみんな櫛の浴槽を好み、現在はGHの浴室は使われていない、櫛の浴槽は使いやすい。
トイレ			日内職の人のため、トイレ内の白い手摺に赤いテープを巻きつけて自立させている。(写真⑦)	昇り上げ式のトイレ。(写真⑧)
建具				古い物をもってきた。
庭		庭には(リアフリーは一切無し)。(写真⑨)		
アプローチ				玄関は道路に面している。正式の玄関と、子ども達が入ってくる土間の入口がある。(写真⑩)
その他				隣接軒下の人が寝るために使っていた空間を、ロフトとして残した。

さくらホームの図面(図7-8、図7-9)

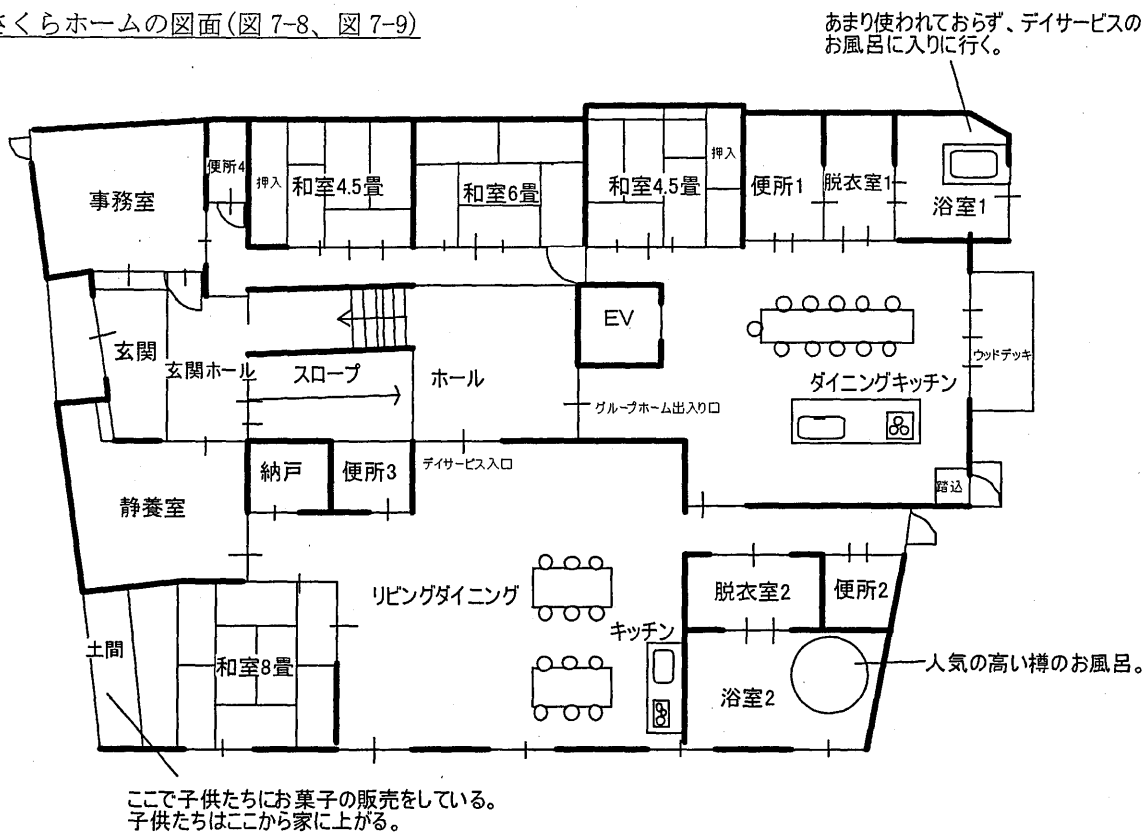


図7-8 一階

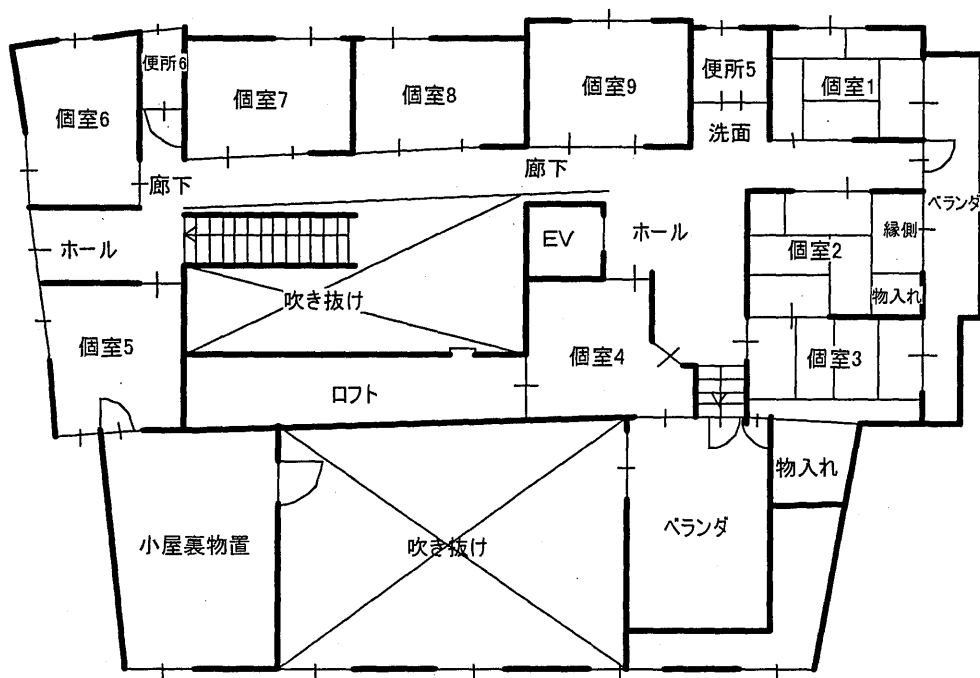


図7-9 二階

7 のぞみホーム・なんちゃってのぞみホーム

見学日 2004年11月8日(月)
所在地 〒321-0216 栃木県下都賀郡壬生町壬生丁145-10
事業所名 のぞみホーム
運営主体 特定非営利活動法人のぞみの会
開所年月日 1993年7月1日
施設までのアクセス 東武宇都宮線「国谷」駅下車徒歩7分

ヒアリング対象者 奥山 久美子 代表

現在のサービス内容

通い(介護保険)
 定員15人、月～金 9:00～18:00
 通い(自主事業)
 毎日、8:30～17:30
 泊まり(自主事業)
 定員3人、毎日
 自宅に出向く(介護保険、自主事業)

365日24時間

住む(自主事業)

定員10名

ケアマネジメント

9:00～13:00

配食

ご近所さんに1軒、1日3食届けている。

現在の建物

形態 「のぞみホーム」も「なんちゃってのぞみホーム」も民家改修型。「のぞみホーム」は3DKと2DKの2軒の民家を繋げて増改築し、「なんちゃってのぞみホーム」は前理事長が書斎として使っていた建物を増改築。2軒はすぐ隣り合っており、デッキによってつないでいる。

規模 土地:300坪、「のぞみホーム」:170㎡、「なんちゃってのぞみホーム」:150㎡

建物の使い分け 「のぞみホーム」に5人、「なんちゃってのぞみホーム」に4人住んでいる。昼間はみんな「のぞみホー

ム」の広いスペースに集まってくる。

利用者

人数 グループホーム 入居9人
 利用者の居住地域 デイサービスはほとんどが町内の人。宇都宮から来ている人もいる。

スタッフ

人数 16人(1人は事務スタッフで、週に1回)。介護福祉士、看護師、など。
 その他 月に一度、お年寄りの接し方を検討する。スタッフ一人一人に係が決められている。ほぼ5人のスタッフが毎日勤務。

地域とのかかわり

他のデイサービスとの情報交換。マッサージ師。診療所。他のケアマネージャー。

建物に関するフォーマット(表 7-15、表 7-16、表 7-17、表 7-18)

表 7-15

施設名称のぞみホーム				
機能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわらい
玄関				
廊下				広いリビングも、たんすや本棚を 使って仕切っている。
居室(個室)				特に無し。
キッチン				片面式で広い。
浴室				洗い。
トイレ				
バルコニー				「なんちゃってのぞみホーム」の バルコニーがなくていいです。 来ることができます。(写真④)
階段				大きな穴を埋めたいように感じ た。また、段で穴を埋めている。
アプローチ				スロープが玄関まで続く。(写真 ⑤)
家具				
照明				
空調				
その他				

表 7-16

施設名称のぞみホーム				
機能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわらい
玄関				玄関にはスロープからの段差が 無い。
廊下				カーテンで廊下を仕切り、扉裏の トイレを置いている。
居室(個室)				4人分の個室が2つ、6畳の個室 が2つ、1畳の洋室が1つある。 そのうち、2部屋が空いている。
キッチン				片面式のキッチン。(写真①) 今は使っていないキッチンがもう 一つあり、来館で使う場合は 使えるようにする予定。
ダイニング				キッチン、ダイニング、リビングは つながっており、広くオープンし て見渡せるようにしている。また、 用途もその時々で変わる。
リビング				お掃除の、お掃除機の下 置。また、リビングの一角の天井 は「天井パネル」を取り付け、い ざいざいお掃除機をかけるように している。(写真②)
浴室				浴槽が穴を大きく開いた状態で 掃除機をかけた。
トイレ				トイレの扉が、
バルコニー				3箇所あり、1つはスタンパ 用。また、広い。
階段				3箇所全てのトイレが壁付け 手配。引き戸。(写真③)
アプローチ				
家具				
照明				
空調				
その他				

表 7-17

施設名称のぞみホーム				
機能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわらい
玄関				犬を出入りできるようにした が置いてある。そのほか、 犬を出入りできるようにした が置いてある。
廊下				畳を敷いた部屋には、畳の 厚さを揃えている。(写真⑥)
居室(個室)				リビングの奥の扉は戸を 開けておくことができる。
キッチン				1階は2つ、2階は2つ、3階の2 つは元の扉の厚さだが、畳 で敷いた。その分、扉の厚 さの差がでてきた。
浴室				床を上げて天井を高くしたので 広く感じる。(リビングも同じ)
トイレ				木の扉がよい。(写真⑦)
バルコニー				3つと続く階段の手配。
階段				1階は2つ、2階は1つある。利用 者2人につき1つずつ。
アプローチ				
家具				
照明				
空調				
その他				

表 7-18

施設名称のぞみホーム				
機能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわらい
玄関				お掃除機、引き戸で入居 者が使いやすい。(写真⑧)
廊下				
居室(個室)				お掃除機の下置機が ある。(写真⑨)
キッチン				片面式のキッチン。(写真④) 今は使っていないキッチンがもう 一つあり、来館で使う場合は 使えるようにする予定。
ダイニング				キッチン、ダイニング、リビングは つながっており、広くオープンし て見渡せるようにしている。また、 用途もその時々で変わる。
リビング				お掃除の、お掃除機の下 置。また、リビングの一角の天井 は「天井パネル」を取り付け、い ざいざいお掃除機をかけるように している。(写真②)
浴室				浴槽が穴を大きく開いた状態で 掃除機をかけた。
トイレ				トイレの扉が、
バルコニー				3箇所あり、1つはスタンパ 用。また、広い。
階段				3箇所全てのトイレが壁付け 手配。引き戸。(写真③)
アプローチ				
家具				
照明				
空調				
その他				

のぞみホームの図面(図 7-10)

現在は使っていないが、夫婦の利用者が使えるようにしている。

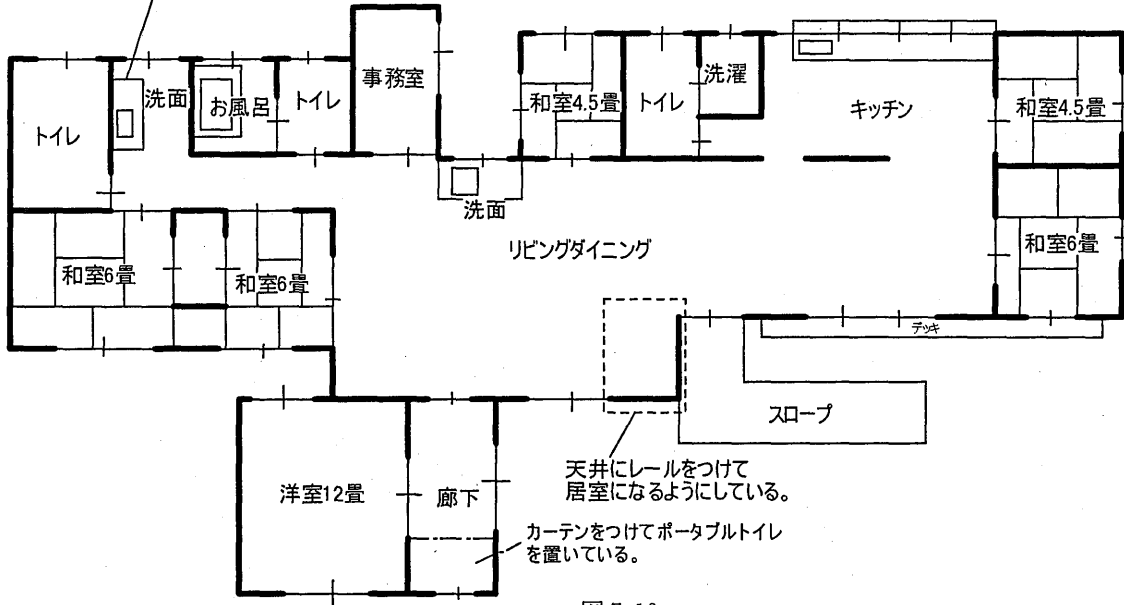


図 7-10

なんちゃってのぞみホームの図面(図 7-11)

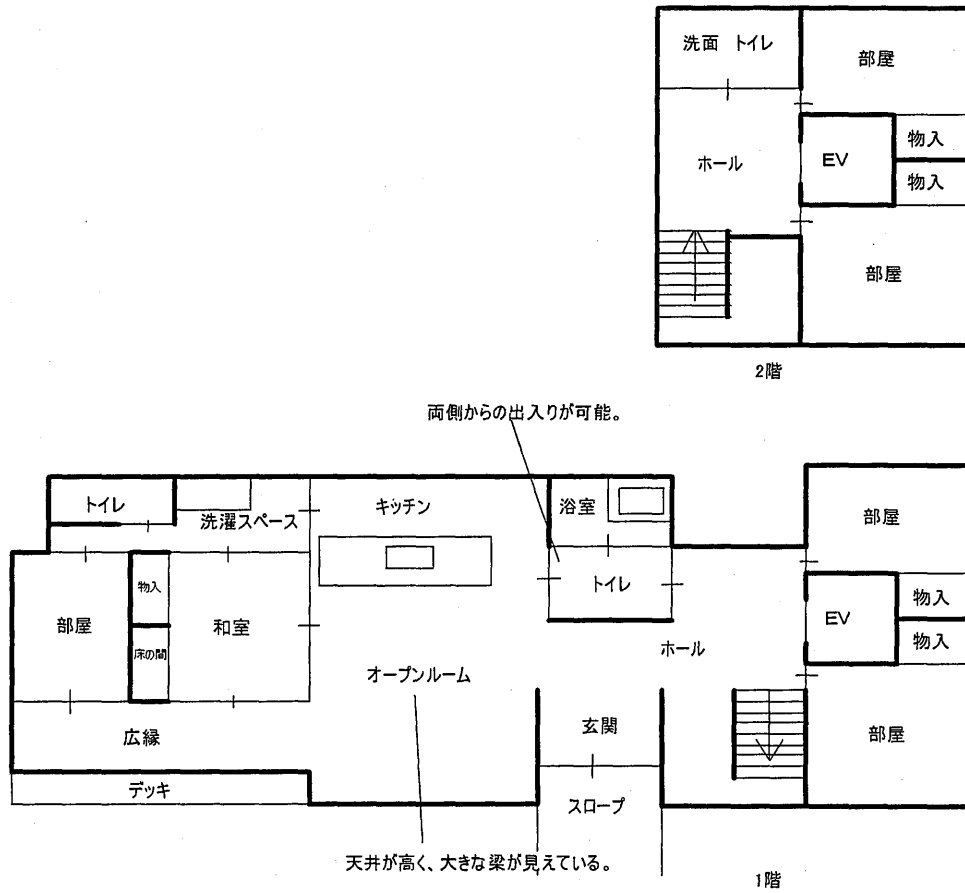


図 7-11

8 デイホーム手のひら・グループホーム手のひら

見学日 2004年11月8日(月)
所在地 〒321-1261 栃木県今市市今市322
事業所名 デイホーム手のひら(近くに「グループホーム手のひら」と共同住宅2棟がある)
運営主体 特定非営利活動法人 手のひら会
開所年月日 1996年10月1日

施設までのアクセス 東武日光線「上今市」駅下車、徒歩5分

ヒアリング対象者 沼尾 栄子 代表

現在のサービス内容

通い(介護保険)
 定員8人、毎日9:00~17:00
 通い(自主事業)
 泊まり(自主事業)

定員1人、
 住む(自主事業)

定員4名

現在の建物

形態 4軒とも民家を借りている。「デイホーム手のひら」は築20年、「グループホーム手のひら」は築80年、共同住宅2は築20~30年くらい。「デイホーム手のひら」と「グループホーム手のひら」は民家を一軒挟んだところにある。そこから車で約5分のところに共同住宅が一軒、約20分のところにもう一軒がある。

建物の使い分け 介護度の高い高齢者6人が「グループホーム手のひら」に住み、日中は「デイホーム手のひら」に通ってくる。夜は気ままに過ごしたいという介護度の低い高齢者が共同住宅に住み、その中には「デイホーム手のひら」に通う人も他のデイサービスに通う人もいる。共同住宅ではサポートはするが管理はしない。

その他 どんなに重度の認知症の人でも「人に家に住んでいる」という感覚がある。それをいかに家にいる感覚に近づけるかということを大切にするため、民家を利用し、一切改修はしていない。

利用者

人数 グループホーム:6人
 デイホーム:6人(デイサービスのみの人はいない)
 共同住宅1:不明
 共同住宅2:2人

受付方法 相談で決める。最初は100%通いのみ。徐々にショートステイ→グループホームというふうにその人に合わせていく。

利用者の居住地域 ほとんどが近くの住人。隣町の人もいる。

スタッフ

人数 7人(事務を含む)。
その他 考え方の統一が難しい。見守りが大事だと頭では分かっているが「やってあげたい」という自分の思いが先行してしまうスタッフもいる。

地域とのかかわり

他のデイホームに通っている人がいる。りんごをくれる農園がある。地域の人がバザーのために品物を奉仕してくれる。

建物に関するフォーマット(表7-19)

表 7-19

施設名称グループホーム手のひら

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわらわ
玄関	玄関が2つあり、リビングに続いて いる方の玄関は車椅子専用。			
廊下		廊下から外に出ることができ、外 には煙がある。		リビングと個室2つの周りをぐるり と囲みキッチンにつながっている。
居室(個室)				2つの個室が2部屋、一部屋に二 人が寝る。布団かベッドかはその 人に合わせる。
キッチン		キッチンが他の部屋より一段下 がっている。その段差の認識が 癖への判断になって良いらしい。 (写真②)		
ダイニング	テーブルと椅子がある。広いので 聞きべも変わる。(写真③)		キッチンとダイニングをつなぐ戸 は2つあり、その2つの戸の間の 柱を右手で支えたり左手で支え たりできる。(写真④)	
リビング	移動の人が居る場所。(写真⑤)			和室も置、こたつがある。(写真 ⑥)
浴室			二人用の浴室。	
トイレ		トイレと重いた張り紙をトイレの 前に貼っている。		

デイホーム手のひらの図面(図 7-12)

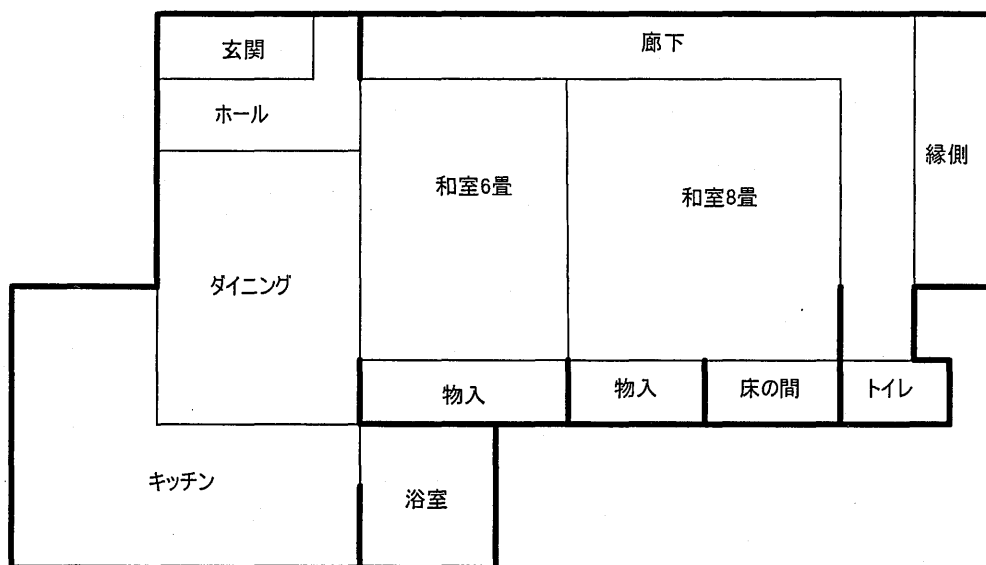


図 7-12

グループホーム手のひら図面(図 7-13)

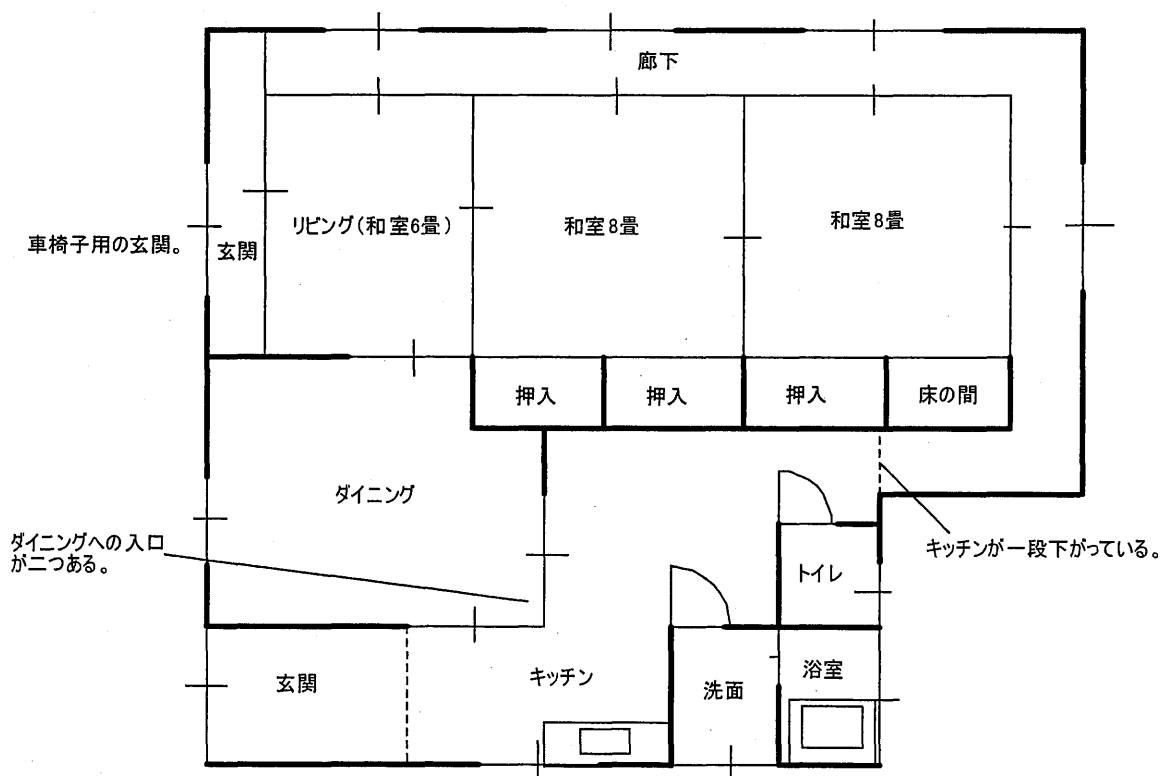


図 7-13

9 宅老所 よりあい

見学日 2004年11月26日(金)
所在地 福岡県福岡市中央区地行1-15-14
事業所名 宅老所よりあい
運営主体 社会福祉法人 福岡ひかり福祉会
開所年月日 1991年11月
施設までのアクセス 地下鉄「唐人町駅」より
 徒歩3分
ヒアリング対象者 下村 恵美子 施設長

現在のサービス内容

通い(介護保険)
 定員10名、毎日9:00~17:00
 泊まり(自主事業)

毎日

住む(介護保険)
 定員5名
 ケアマネジメント(介護保険)
 月~土9:00~17:00

現在の建物

形態 民家改築型。二つの民家をつなげた。
空間の使い分け 二つの民家のうち、一つを住む用、一つを通い用として使っている。
その他 大通り近くはにぎやかでよい。どこに行くのも近く、交通の便がよい。その分、地価は高い。

利用者

人数 デイサービス 10人
 グループホーム 入居5人
利用者の居住地域・交通手段 遠い人で、車で20分。

その他 現在にいたるまでに、12人の方が亡くなった。

スタッフ

人数 12人(うち、通いのスタッフが7人、住まいのスタッフが5人) 20代から50代まで。「第二宅老所よりあい」はスタッフが9人。看護婦さんもスタッフと同じように介護をする。

職種 医療職がいると家族も安心する。
その他 ボランティアが6グループ40人いる。月に1~2, 3回来てもらおう。毎日見て

いるからこそ今日のことが分かるのがスタッフ。ボランティアの人は個人の情報を知らなくてよいし、ケアはやらせない。ボランティアとスタッフのやることを区別しなければならない。

これまでの経緯 次項の表7-20参照。

第7章 地域密着型小規模多機能施設の動向に関する考察

表 7-20

これまでの経緯	運営方法	建物	サービス内容	利用者	スタッフ
1991年6月					下村唐美子、永末里英、中島真由美の3人娘(!)、大場ノブラさんと出会う。
11月		伝照寺の茶室を借りる。	週一回の宅老所スタート。	2人。	3人。
1992年3月		伝照寺の広間を借りる。	週三回実施に。	利用者が増えた。	
7月~11月	改築資金作りのためにバザー、募金、行商に奔走。	伝照寺の借家を借り、改築することになる。			
11月	「宅老所よりあい」と名づけ、新たな出発。	一軒家改築完成。	入所、宿泊事業を始める。		
1994年8月	増築資金400万円をつく	増築完成。		宿泊者が増え手狭になった。	
9月	チャリティシンポジウム「家庭のような小規模ホームの実践と計画から」開催。				
1995年4月	社会福祉法人福岡ひかり福祉会の高齢者部門として、ひかりグループに仲間入りする。通所事業が福岡市より認可、デイサービスセンターE型として委託される。	西長住3丁目の一軒家を借りて、2か所目の「よりあい」を開所する(無認可)。			
6月	長住公民館にて「第2宅老所よりあい」の開所を祝う会を開催。				
10月	第1回「第2宅老所よりあい」バザーを開催。改築資金をつくる。				
11月		「第2宅老所よりあい」改築完成(スロープ、風呂、トイレ)。			
1996年4月	「宅老所よりあい」と名づけ、新たな出発。第2宅老所よりあい」がデイサービス事業の基準弾力型で福岡市より運営委託される。				
6月			杷木町でセミナー「オムツ外し学会」を開催。		
7月			「第2宅老所よりあい」がデイサービスのみから泊まりを始める。		
11月	「第2宅老所よりあいを支える会」が結成される。				
1997年3月	ひかりの20周年・よりあい5周年記念シンポジウムが開催される、800人の参加。				
4月	「宅老所よりあい」の入所事業がグループホーム事業と厚生省のモデル事業として認可される。				
9月	「宅老所よりあいとともに新しい老人ホームを作る会」が結成される。長尾下水処理場跡地に特別養護老人ホームをつくるための取り組みが始まる。				
1998年2月		「第2宅老所よりあい」増築完成(6畳間・トイレ・サンデッキ)。			
4月	「第2宅老所よりあい」がデイサービスセンターとして正式に認可される。				
11月	8周年目を祝う「共に楽しく長生きしよう会」。				
1999年1月	全国宅老所グループホームネットワーク結成。				
5月	宅老所よりあい8周年記念セミナーを開催。				
7月	福岡県宅老所(小規模ホーム)連絡会結成。				
2000年4月	介護保険スタート。地域住民が安心して暮らすための拠点づくりとして、特定非営利活動法人『NPO笑顔』が長住にオープン。	「よりあい」の隣にあった大家さんの家を使い始める。			
10月		「第2宅老所よりあい」増築完成(6畳間・トイレ・サンデッキ)。5畳の和室・洋室が増え、台所を改築。			
2001年11月	元気に10周年を迎える。				
2003年12月		「よりあい」の二つの民家の全面改修を始める。			
2004年8月		全面改修が終わる。			

建物に関するフォーマット(表7-21、表7-22)

表7-22

施設名称 宅老所よりあい

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
空間				北側にGHの空間、東側にデイサービスの空間がある。GHの空間は天井がガラス張りで見える。またデイサービスとGHをつないでいる。デイサービスの空間にはさら板がありそこで靴を脱ぐ。ホールによりあい係りなどの張り板があり、Tシャツなどが売られている。(写真②、写真③)
キッチン				GHは対面式。デイサービスは背板式キッチン、どちらにも2人が入れる木製のカウンターがある。(写真④)
ダイニング				
リビング				
浴室	デイサービスの脱衣場から直接GHのデッキにつながるが、中庭に洗濯物を干しに行ける。	GHもデイサービスもシャワーがついて風呂。(写真⑤)		
トイレ	改築前トイレは居間の近くにあったため、暑と臭いがあった。改築でトイレは居間から離れたところにつくった。			GHのトイレは木製につくったので風情が残っている。

表7-23

施設名称 宅老所よりあい

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
照明			GHの照明は後継ですが、安全のため小さなライトはずっとつづけておく。	GHは柱むき出しなので照明は暗めに、デイサービスはみんなが集まる所なので照明は明るめにしていく。
バルコニー				深1.5mに近所のお年寄りや子ども達などが寄っていく。(写真⑥)
庭	GHの中庭を洗濯物干し場にしていく。(写真⑦)			
アプローチ			GHの空間へのアプローチは2つあり、1つは深れ縁から縁の段があるもので、もう1つはスロープである。そのスロープの片側にベンチが、もう片側に手摺がある。デイサービスの空間に縁スロープは両側に手摺がある。(写真⑧、写真⑨)	GHのベンチは木製で居るところが畳になっている。そのベンチの下に籠を収納する。(写真⑩)
建物外観				写真⑪
事務室	パソコン台がたくさんある。ワーマネージャーなども事務室を使う。			

宅老所よりあいの図面(図7-14)

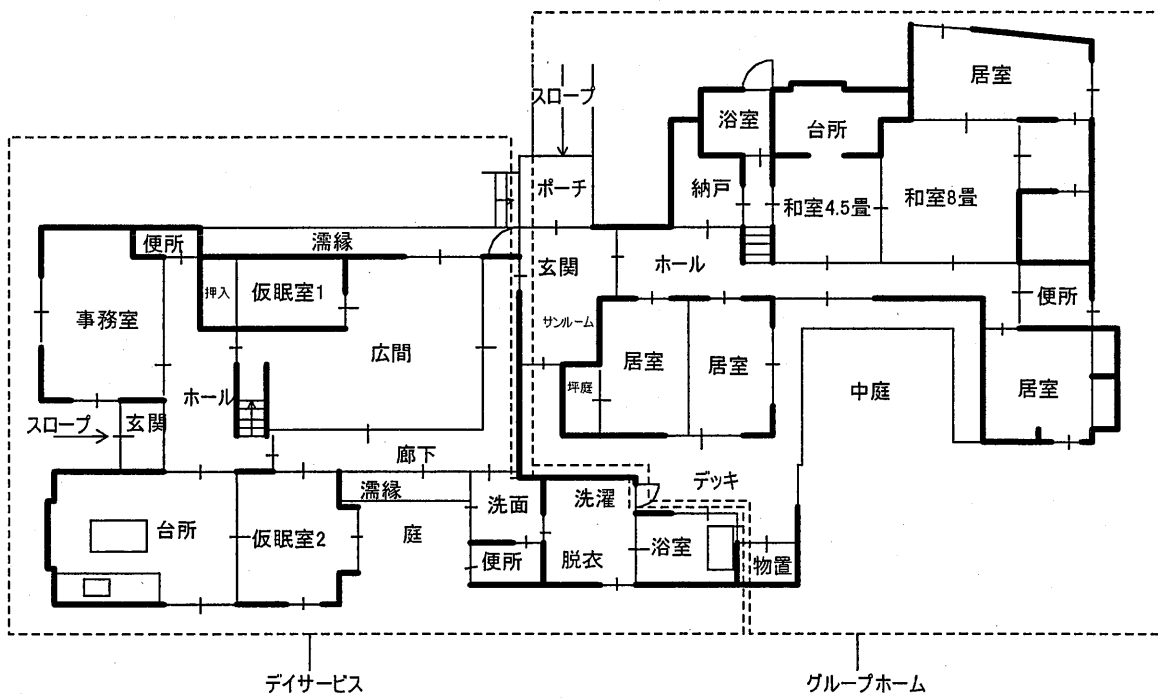


図7-14

10 デイサービスセンター憩・グループホーム憩

見学日 2004年12月21日(火)

ヒアリング対象者 森本 宏美 主任

所在地 〒720-0082 広島県福山市木之庄町5丁目18-22

事業所名 デイサービスセンター憩

運営主体 学校法人朝日専修学園グループ株式会社アサヒライフコーポレーション

開所年月日 2002年2月

施設までのアクセス JR福山駅から徒歩約20分

所在地 〒720-0092 広島県福山市山手町1385-1

事業所名 グループホーム憩

運営主体 学校法人朝日専修学園グループ株式会社アサヒライフコーポレーション

開所年月日 2003年11月

施設までのアクセス 「デイサービスセンター憩」から車で約20分

現在のサービス内容

通い(介護保険、自主事業)

定員16名(許可は21人だが、21人に対して空間が狭いため16人を定員としている)、月～土9:00～16:00、自主事業は要介護を認定されていない人を対象としている

泊まり(自主事業)

定員1名

自宅に出向く(介護保険)

住む

定員9名×2ユニット=18名

ケアマネジメント

月～土9:00～18:00

移送

要介護度1以上の方で、通院などヘルパーの付き添いが必要な際、要望に応じる

現在の建物

設計者 誠和建設

形態 デイサービスセンター憩:新築。1部2階建て。

グループホーム憩:新築。総2階建て。

建物の使い分け 「デイサービスセンター憩」で通い・ホームヘルプ・ケアマネジメント・移送のサービスを行い、「グループホーム憩」で泊まり・住むのサービスを行う。泊まりはグループホームの空いている部屋を使用する。

利用者
人数

デイサービス

登録54人、1日平均13.8人、週1回の方や月に2回の方もいるが、一番多い人は週に5回の利用。

泊まり

1年間で延べ4～5人(最初の頃はGHの入居者が少なく、部屋がいくつも空いたので泊まりの定員は多かった)。

訪問介護 登録83人

グループホーム 入居17人

その他

デイサービスの利用者は、要介護度4や5の方もいるが1の方が一番多い。要介護度が高い方は病院や施設を利用する傾向がある。

また、デイサービスの利用者は曜日を決めて通う方もいるが、毎日決まっているリクリエーションの内容を見て通う日を決める方もいる。

スタッフ

人数

GH 16名

デイサービス 7名

ヘルパー 20名(うち、常勤は2名)

ケアプランナー 2名

(兼任しているスタッフもいる)

ボランティア リクリエーションの絵手紙やフラワーアレンジメント、フラダンスなどを教えに来てくれる。

その他

常にデイサービスでいられるスタッフは5人くらいだが、足りないと感じ

表 7-25

施設名称 グループホーム 楚

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
玄関				
廊下				
居室(個室)	スタッフが見えるようにドアに窓があるが、大きくて中が見えなのでもう少し小さくても良かった。		居室の入口で立ち上がる際に靴の手指が必要、戸の手指を持つと動けなくて危険。	居室内に収納、洗面がある。基本的に家は家から馴染みの家具を持ってきてもらう。鍵がついていて押めたい人は押めらる。居室内の手摺は家具を置いた部屋に馴染むような感じがある。また、ベッドから起き上がる際に手摺がなくて危険。居室前の番号をつけた札を貼る予定。
キッチン				シンクの高さが、車椅子の利用者や背の低い利用者には高く、スタッフには低い。
ダイニング		ダイニングの机・椅子の高さが均一で、合わない人もいる。		
リビング				30cmほど上がった茶の間にあり隠れたところがあるが、遠すぎて足が届かないので危険。あまり利用されていない。茶間はこぼれに備えるために使いたいのだが。
浴室			総衣所内に新たに手摺を設けた。立ったり座ったりするのに必要。	家庭用浴槽。
トイレ	トイレ内の欄が高すぎる。	トイレのドアについていた窓が大きくて中が見えたのでプライバシーを守るためすりガラスに替えた。	手摺掛けが高すぎる。	利用者がほか、スタッフルームにつながる。個室にポータブルトイレを置く予定。トイレ内に洗面があるが使っていない。トイレの外の洗面を使うが利用者は自動の蛇口に慣れておらず、最初は戸惑っていた。

表 7-26

施設名称 グループホーム 楚

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのねらい
エレベーター				階段にある。
バルコニー				2階のバルコニーに洗濯物を干すが日が当たらない。
庭				日が当たらない。
その他				握り型の手摺ではなく手を置く型の手摺だが、真骨同様のもの。見た目には良いが、握らばほとんど利用されていない。居室内の手摺に至っては物置になっている。

デイサービスセンター憩の図面(図7-15)

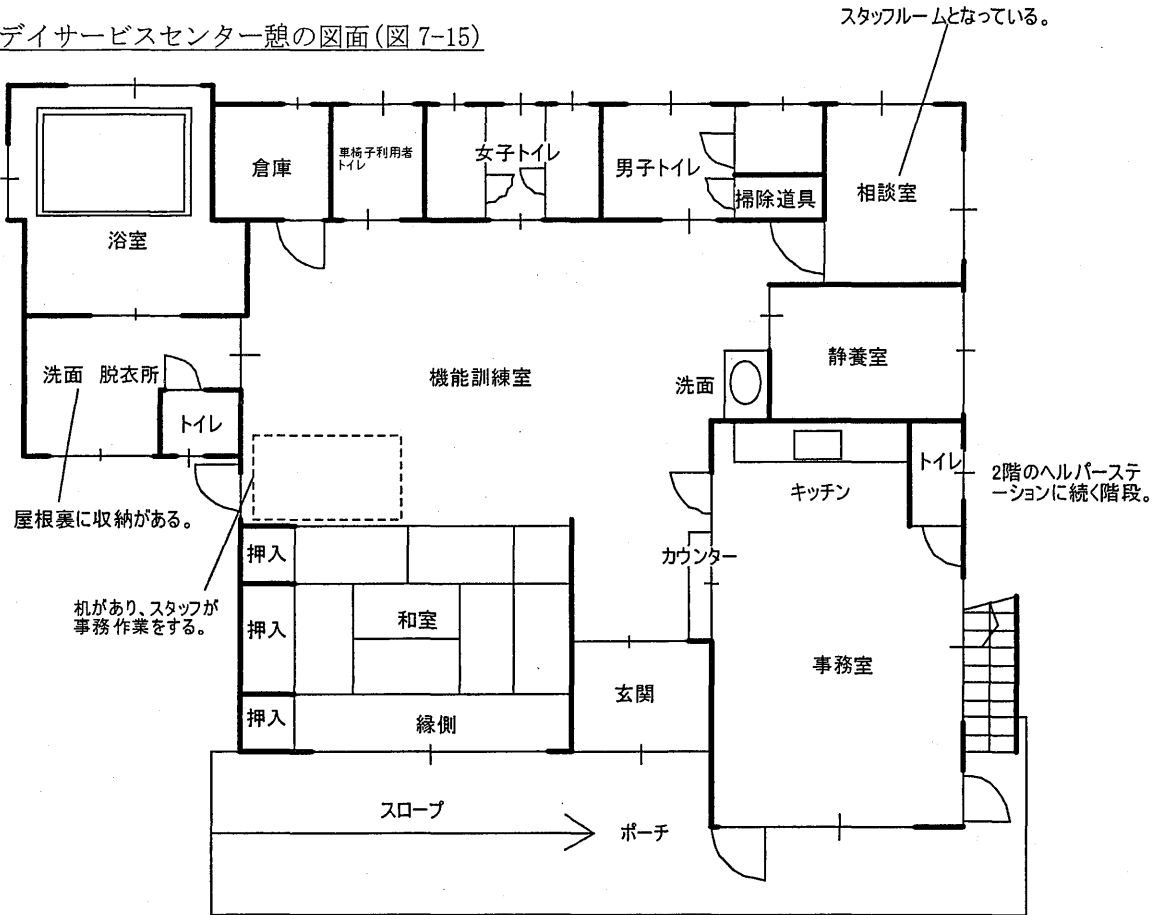


図7-15

グループホーム憩の図面(図7-16)



図7-16

11 ケイジングループ

ヒアリング対象者:小林 亜貴(宅老所 露風庵 世帯主)

ケイジングループ(長野県)

- ・特別医療法人 恵仁会 (保健・医療・福祉)
- ・社会福祉法人 恵仁福祉協会 (福祉)
- ・メディコケイジシ 株式会社 (医療介護用品販売・レンタル)
- ・有限会社 けいじん (住まいの提供)

<ケイジングループの事業内容(表 7-27)>

表 7-27

地区	医療部門	介護部門	保健部門
中込地区 (佐久市)	くろさわ病院	<ul style="list-style-type: none"> ・介護老人保健施設 安寿苑 ・老健通所リハビリ ・病院通所リハビリテーション ○中込在宅サービスセンター ・佐久市中込在宅介護支援センター ・訪問看護ステーション中込 ・ヘルパーステーション中込 ・中込デイサービスセンター ・宅老所 露風庵 ・宅幼老所 のざわ ・ケアホーム (ケア付き住宅・マンション) ひだまり ふれんず あおぞら そよかぜ せせらぎ さざなみ 複合型 1F ハートリッチぬくもり 2F ハートリッチなごみ 3F ハートリッチふれあい ○小規模多機能：長土呂在宅サービスセンター 1F・地域ケアセンター長土呂 (居宅介護支援) ・宅幼老所ながとろ ・訪問介護ステーション長土呂 ・ヘルパーステーション長土呂 2F・ケアホームどんぐり 3F・ケア付きマンションまほろば 	<ul style="list-style-type: none"> ・保健医学センター ・健康運動センター
塚原地区 (佐久市)	つかばらクリニック	<ul style="list-style-type: none"> ・介護老人保健施設シルバーポートつかばら ・佐久市塚原在宅介護支援センター ・訪問看護ステーション塚原 ・ヘルパーステーション塚原 ・グループホーム シルバーハウス塚原 ・ケアホーム りんご畑 ・ケア付き住宅 アトゥレ優 A棟・B棟 ・宅幼老所 つかばら 	
真田地区 (真田町)	さなだクリニック 菅平高原クリニック	<ul style="list-style-type: none"> ・通所リハビリテーション 	

<小規模ケア施設への経緯>

- 1998年1月 長野県佐久市に定員9人のケア付き住宅「シルバーハウスひだまり」が誕生。当時、高齢者が病院から退院しても、在宅で支えるのは不可能・特養は空き待ち・老健は期間限定で高齢者とその家族の行き場がない、というケースがたくさんあった。そんな時、当時の恵仁会理事長故黒澤正憲先生が思いついたのは、10人未満のケア付き住宅（高齢者共同住宅）だった。
- 1998年10月 長野県内初の認知症高齢者グループホーム「シルバーハウス塚原」を新築型で設置。
- 12月 重度の高齢者（障害者）対応の民家改修型ケアホーム「ケアホームふれんず」を設置。
- 2000年8月 ケアホームあおぞら 開設。
11月 ケアホームりんご畑 開設
- 2001年4月 小規模複合型ホーム ハートリッチ 開設
- 2002年5月 老健 安寿苑の入所定員・通所定員を縮小
11月 宅老所 露風庵 開設
12月 ケアホームせせらぎ 開設
- 2003年1月 中込デイサービスの定員を縮小
ケアホームさざなみ 開設
4月 ケアホームそよかぜ 開設
10月 宅幼老所のざわ 開設
12月 小規模多機能（都市型）「Serena Vita 浅間」 開設
- 小規模多機能（都市型）「Serena Vita 浅間」
1F長土呂在宅サービスセンター
・宅幼老所ながとろ
・地域ケアセンター長土呂（居宅介護支援事業）
・訪問看護ステーション長土呂・ヘルパーステーション長土呂
2Fケアホームどんぐり
3Fケア付きマンションまほろば
アトレ優 A棟・B棟 開設
- 2004年3月 宅幼老所 つかばら 開設

<恵仁会が提案する小規模多機能ホームについて>

1. 農村型、地域型
宅老所の通所系サービスにショートステイと住みつく機能を加えたもの。建物は新築型と民家の増改修型を想定している。
2. 都市型
土地を取得しにくい都会では、平屋ではなく、階を積み上げる形。建物は新築型と空きビル等の増改修型を想定している。
3. 街かど福祉：ながの版
長野で本当に目指したいのがこのパターン。土地も豊かにあるので、真中に中核施設としての多機能の宅老所をつくり、その周囲に戸建の高齢者住宅をつくる。農業に親しんできた方も多いため、野菜作りなど畑仕事もできるスペースも設ける。そして、高齢者・障害者に限らず、ファミリー世帯などいろんな人たちが暮らせれば良いとする。

<中込地区の小規模ケア施設>

病院・老健の周囲半径500メートル内に小規模施設を点在させている。
まちなかの倒産した銀行を改修して、病院や老健の中にあった在宅サービス部門（デイサービス、在宅介護支援センター、訪問看護ステーション、訪問介護ステーション）を移し、老健本体のデイ部門の定員を減らした。また、宅老所やケア付き住宅、認可外のグループホームが、新築や民家改修、空きビルの活用などで計10ヶ所、整備されている。

中込地区の小規模ケア施設(図7-17)

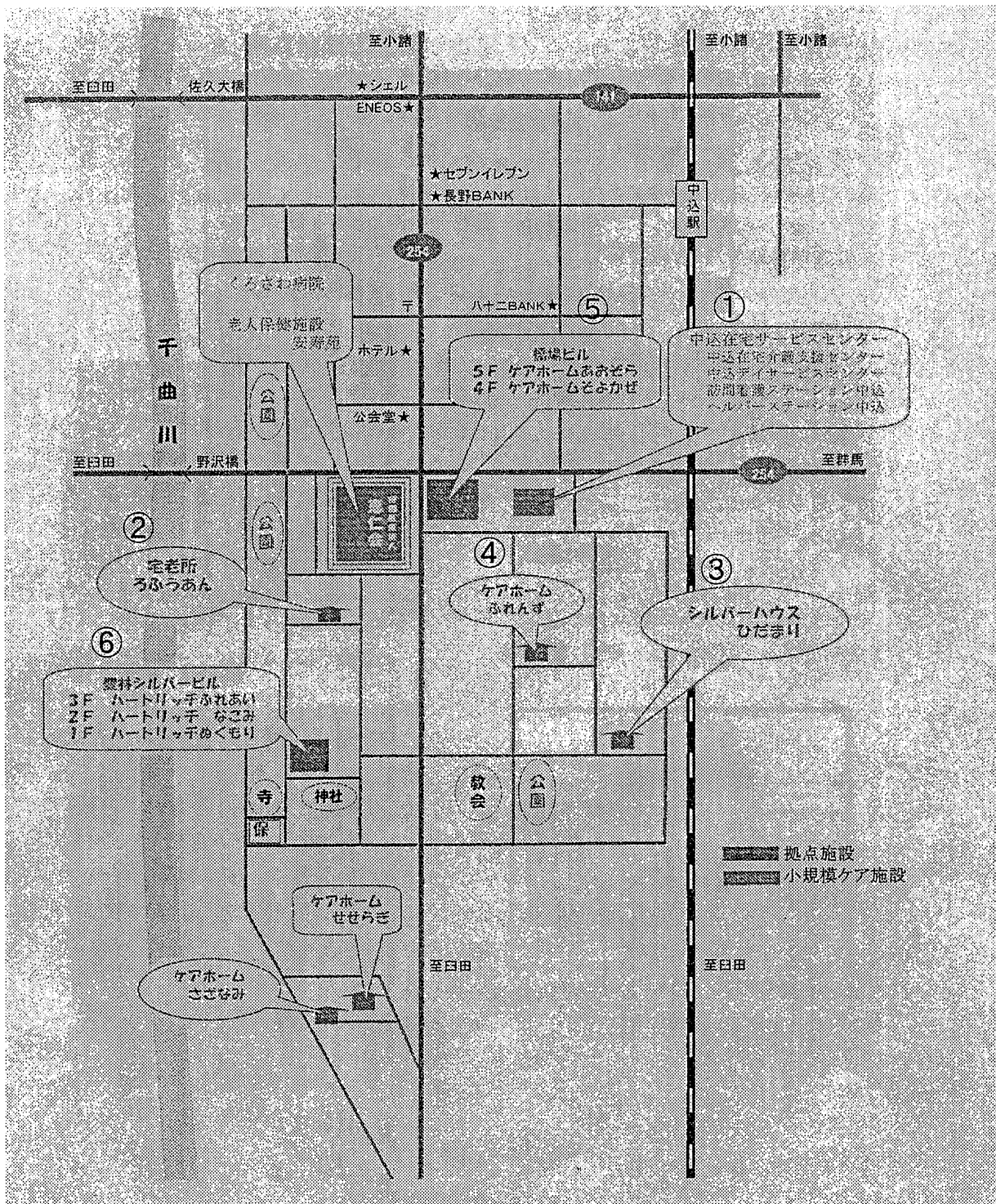


図7-17

12 せんだんの杜

場所：宮城県仙台市青葉区国見ヶ丘

運営主体：社会福祉法人東北福祉会

ヒアリング対象者：澤田 光子（生活支援部 実習教育課）

<せんだんの杜の事業概要>

本体

〔高齢者〕

- ①ホームヘルプ
- ②デイサービス
- ③ショートステイ
- ④特別養護老人ホーム（ユニットケア、逆デイサービス）

〔児童〕

- ①保育園
- ②児童自立援助ホーム

〔他〕

- ①実習教育センター

川平小学校区

〔地域福祉〕

- ①在宅介護支援センター
- ②居宅介護支援事業所
- ③子育て支援センター
- ④障害児・者相談支援センター
- ⑤市民・ボランティア活動応援センター

〔高齢者〕

- ①ホームヘルプ
- ②デイサービス
- ③お泊り

〔児童〕

- ①自主保育

〔障害者〕

- ①自主通い

中山小学校区

〔地域福祉〕

- ①在宅介護支援センター
- ②居宅介護支援事業所
- ③子育て支援センター
- ④障害児・者相談支援センター
- ⑤市民・ボランティア活動応援センター

〔高齢者〕

- ①ホームヘルプ
- ②デイサービス
- ③お泊り
- ④居住

〔障害児・者〕

- ①障害児放課後ケア
- ②障害児・者レスパイトケア
- ③障害者就労支援
- ④デイサービス

吉成小学校区

〔地域福祉〕

- ①在宅介護支援センター
- ②居宅介護支援事業所
- ③子育て支援センター
- ④障害児・者相談支援センター
- ⑤市民・ボランティア活動応援センター

〔高齢者〕

- ①ケアハウス

国見小学校区+貝ヶ森小学校区

〔地域福祉〕

- ①在宅介護支援センター的機能
- ②居宅介護支援事業所
- ③子育て支援センター
- ④障害児・者相談支援センター
- ⑤市民・ボランティア活動応援センター

〔高齢者〕

- ①ホームヘルプ
- ②デイサービス
- ③お泊り
- ④居住

〔児童〕

- ①無認可保育園

くせんだんの杜 地域サテライト展開図
(図7-18)>

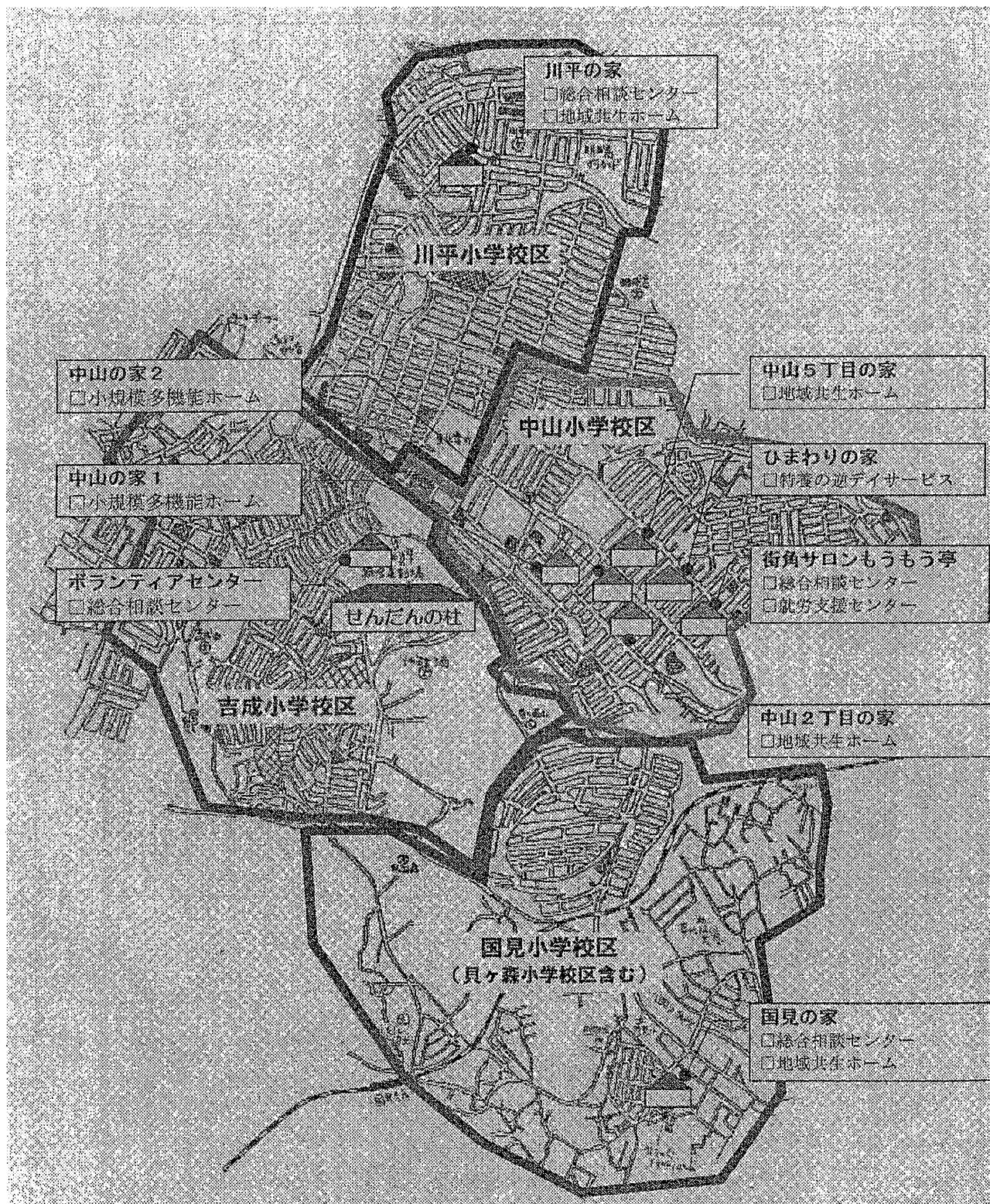


図7-18

<せんだんの杜の実践の流れ(表 7-28) >

表 7-28

年号	本体	中山中学校区		第1中学校区	吉成中学校区
		川平小学校区	中山小学校区	吉成小学校区	国見小学校区 (貝ヶ森小学校区含む)
1996年	せんだんの杜開所。開設当初、デイ、特養、ケアハウス、ショート、在介、V.Cで開始。 7月：デイホームを設置 9月：柏木の家設置(特養の逆デイサービス)				
1997年	4月：すだれの間設置 6月：ミニデイホーム1設置		* 柏木から中山へ移転 12月：旧中山の家設置(特養の逆デイサービス)		
1998年	6月：ミニデイホーム2設置 10月：ひまわりの設置				
1999年					
2000年	3月：さくら設置 6月：せんだんの家設置(児童自立援助ホーム)		* 旧中山の家終了 9月：中山の家設置(本体デイの逆デイサービス)		
2001年	せんだんの杜全体のユニットケア開始 7月：道草の間、響きの間設置	7月：ひまわりの家設置(特養の逆デイサービス) 9月：中山2丁目の家設置(障害児・者の放課後ケア、レスパイトケア)			
2002年	9月：よりみちの家設置(ショート逆デイサービス)		* 中山の家の名称と機能変更 5月：中山の家1設置 5月：中山の家2設置(小規模多機能ホーム) * 本体総合相談から分離 9月：街角サロンもうもう亭設置		* 本体総合相談から分離 5月：国見の家設置
2003年	各中学校区単位に、地域サービス部を設置し、相談支援課と在宅支援課のそれぞれに、各小学校区担当を配置。 5月：せんだんの間設置	6月：川平の家設置		5月：市民：ボランティア活動応援センター、フェリコ館所管を吉成地域サービス部へ移行	
2004年			5月：中山5丁目の家設置		

<せんだんの杜の理念と機能>

理念 ご本人の思いや願いに寄り添う
 <利用者主体>

機能 その人らしい暮らしを継続する支援
 <介護付住宅群>
 地域住民と共に住み残るための支援
 <まちのサービスセンター>

<中山小学校区における小規模ケア(図7-19)>

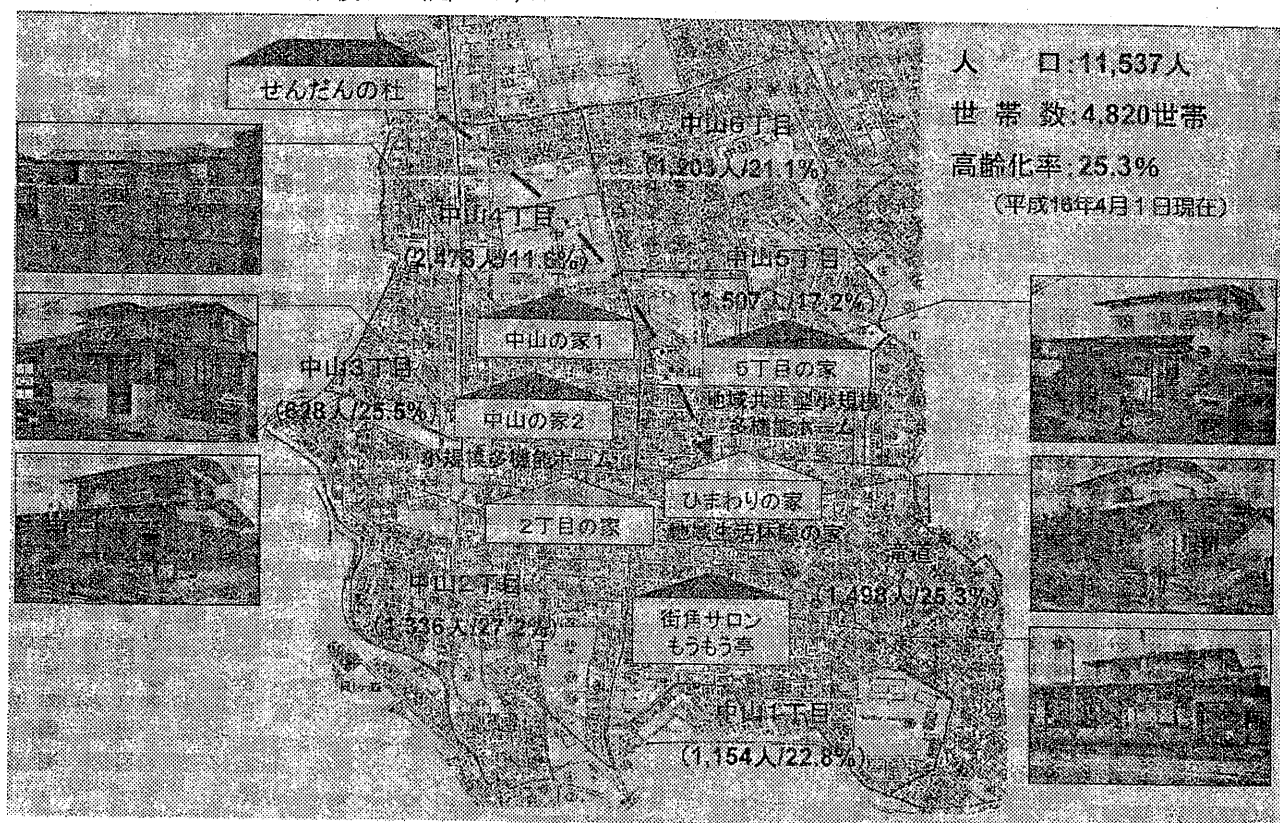


図7-19

①中山の家1

[地域共生型小規模多機能ホーム]

開所 2002年5月

サービス内容 デイサービス

お泊り

ホームヘルプ

障害児・者レスパイトケアサービス

ス

建物 民家改修。1階建て。築40年の民家で、本体の特養の利用者の家だった。2004年には新たに増築を行い、居間・テラス・居室をつくった。

障害児の放課後ケア

障害児・者レスパイトサービス

近所のお年寄りの見守り

生きがいサロン

託児

建物 民家改修。一部2階建て。

改修では内装と縁側の改修を行った。内装といっても手摺をつけ、絨毯を敷いたくらい。

サービスはほぼ1階のみで収まるが、一人でいたい子どもや逃げたい子どもが2階やベランダに行く。

②中山の家2

[地域共生型小規模多機能ホーム]

開所 2002年5月

サービス内容 デイサービス

お泊り

居住

ホームヘルプ

障害児・者レスパイトケアサービス

ス

建物 民家改修。一部2階建て。

「中山の家1」に住んでいた方の息子さんの家で、「中山の家1」とは道路を挟んで向かい合っている。もともとバリアフリーの家だったのであまり改修はしておらず、「中山の家1」の重度の利用者がお風呂を利用しに来たりする。

⑤ひまわりの家

[特養の逆デイサービス]

開所 2001年7月

サービス内容 特養の逆デイサービス

建物 民家改修。一部2階建て。

⑥街角サロンもうもう亭

[街角サロン&総合相談センター]

開所 2001年9月

サービス内容 居宅介護支援事業所

在宅介護支援センター

子育て支援センター

障害児・者相談支援センター

ボランティアセンター

サロン

建物 焼肉屋を改修。1階建て。

③中山2丁目の家

[地域共生型小規模多機能ホーム]

開所 2001年9月

サービス内容 障害児の放課後ケア

障害児・者レスパイトサービス

近所のお年寄りの見守り

生きがいサロン

建物 民家改修。一部2階建て。

④中山5丁目の家

[地域共生型小規模多機能ホーム]

開所 2004年5月

サービス内容 外部障害者入所施設入所者逆デ

イ

13 せんだんの杜ものう

場所：宮城県桃生郡桃生町中津山字八木

運営主体：社会福祉法人東北福祉会

ヒアリング対象者：柿沼 利弘 施設長

<せんだんの杜ものうの事業概要>

桃生地域

本体

[地域福祉]

- ①居宅介護支援事業所
- ②実習教育センター
- ③市民・ボランティア活動応援センター

[高齢者]

- ①ホームヘルプ
- ②デイサービス
- ③ショートステイ
- ④特別養護老人ホーム（ユニットケア、逆デイサービス）

中津山第一小学校区

[地域福祉]

- ①居宅介護支援事業所
- ②総合相談センター

[高齢者]

- ①ホームヘルプ
- ②デイサービス
- ③お泊り
- ④グループホーム

[児童]

- ①学童保育

石巻地域

山下小学校区

[地域福祉]

- ①居宅介護支援事業所
- ②市民・ボランティア活動応援センター

[高齢者]

- ①デイサービス
- ②お泊り

<せんだんの杜ものう展開図(図 7-20)>

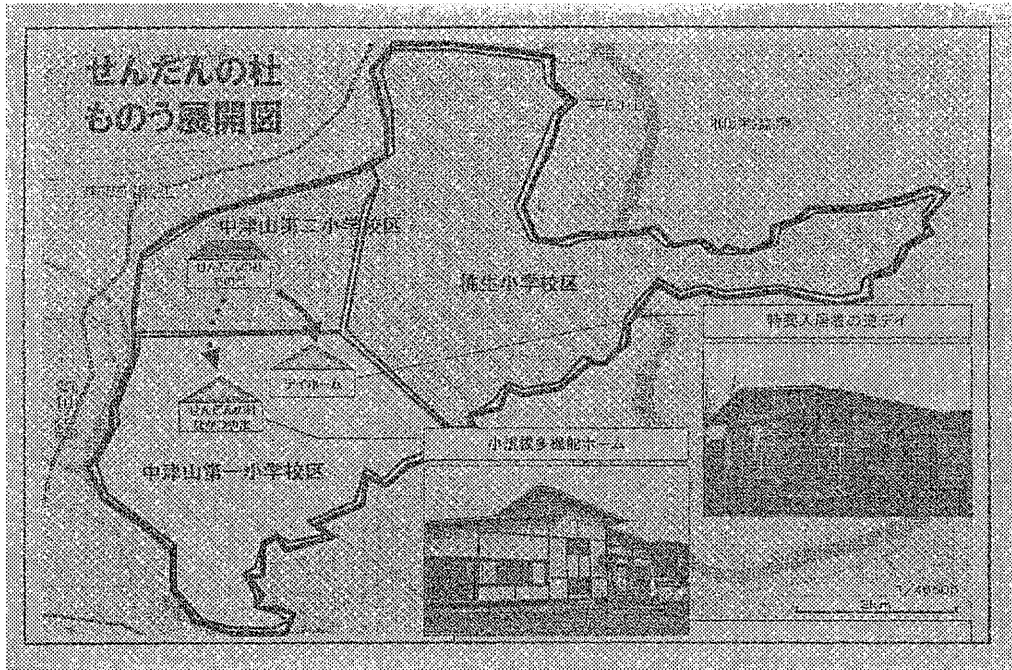


図 7-20

<せんだんの杜ものうの歩み(表 7-29)>

表 7-29

	せんだんの杜ものう	せんだんの杜中津山	せんだんの杜いしのま
1999年	4月：開設 特別養護老人ホーム「ファミリオ」 デイサービスB型 デイサービスE型 ショートステイ ヘルパー派遣事業 9月：開設 ケアハウス「フェリカ」		
2000年4月	介護保険制度施行により介護保険事業所へ移行 特別養護老人ホーム「ファミリオ」→介護老人福祉施設「ファミリオ」 デイサービスB型 →せんだんの杜ものう地域福祉センター通所介護事業所 デイサービスE型 →せんだんの杜ものう通所介護事業所 ショートステイ →せんだんの杜ものう短期入所生活介護事業所 ヘルパー派遣事		
2000年	4月：居宅介護支援事業開始	6月：町との協議開始 12月：整備事業着手	
2001年	7月：第1回高齢者の住まいと地域生活支援を考えるセミナー開催	4月：国・県との協議開始	
2002年	4月：逆デイ事業開始	4月：工事着工	6月：開設 通所介護事業所 居宅介護支援事業所 8月：全日本8時間耐久三輪車レース共催
2003年	7月：第2回高齢者の住まいと地域生活支援を考えるセミナー開催	4月：開設 痴呆性高齢者生活共同介護通所介護事業所 居宅介護支援事業所 訪問介護事業所 ナイトケア事業所 学童保育事業	5月：ナイトケア事業開始 8月～10月：全日本8時間耐久三輪車レース共催（宮城県北部地震のため延期）

本体である「せんだんの杜ものう」が1999年に開設し、その後、地域生活支援構想として桃生町内の3つの小学校区に多機能なサービスを持つ拠点（サブセンター）を整備する計画が立てられた。地域の人が、介護が必要な状態になったり家族の介護力が低下したりしても、住み慣れた地域で馴染みの人間関係から切り離されることなく生活を継続することができる「地域分散型」の高齢者福祉サービスの確立をめざし、2003年4月に「せんだんの杜ものう なかつやま」が、2005年4月に「せんだんの杜ものう うした」がオープンした。

地域に暮らす高齢者に限らず、子どもを対象とした「学童保育」を行うことにより、子どもやその親など、地域に暮らす多世代の人たちとの関わりを多く持つようになった。

14-I せんだんの杜ものう なかつやま

所在地 宮城県桃生郡桃生町給人町字東町96-2

サービス内容

通い（介護保険）	定員 10 名、 月～日（祝日も開設）
泊まり（基準該当）	定員 2 名
住む（介護保険）	定員 9 名
ケアマネジメント（介護保険）	
ナイトケア（自主事業）	定員 2～3 名、要支援もしくは要介護 1～5 の方
学童保育（高齢者と放課後児童との交流事業、自主事業）	定員 15 名、学校終了後から午後 6 時

現在の建物

形態 新築。木造一部2階建て。全国で初めて、厚生労働省の補助を使った。

規模 550 m²

その他 2001年に合併のためになくなった幼稚園の跡地に建てた。当時からある木やフジはそのまま残している。
道路に対して30度の角度をつけて建物を建てているのは、地域に公開する

スペースが道路から見えるように、また、GHというプライベートな空間を道路から奥まったところに配置するためである。さらに、農業地域であるこの土地では「山を見て季節を判断していた」と言われているが、その山を建物の中から見ることができるようにするためでもある。

利用者

人数	通い	1日平均4名。多い日は7名くらい。
	学童保育	小1～小3。1日平均15名。
利用者の居住地域		GHの9名中、4名が町内、5名が町外の方。
その他		2003年1月から徐々にGHへの入所に向けて準備をはじめ、その1年後から入所が始まった。

地域とのかかわり

すぐ隣に小学校があり、校庭との境界には何もないので小学生が自由に入って来ることができる。

建物に関するフォーマット表 7-30、表 7-31、表 7-32)

表 7-30

施設名称 せんだんのむなかつやま

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわら
玄関				玄関がデイトレス階段。玄関はシューズボックスを併用。玄関のG-4用は、玄関にのみ。玄関は玄関がデイトレスと字を併用で使われ、玄関が使用されず、玄関のG-4で使われている。(写真①)
廊下			廊下の両側に手を置く型の手摺がついている。取り外しが可能。床は緑色。(写真②)	幅は800だが、800で4畳かたと思ふ。(写真③) 床の広さが予定より小さく、よいと聞かぬ。床を小さくしたが、廊下に4畳半の空間ができて、居間のような機能を実現している。
居室(個室)				G4、シューズボックスに設置。G4の北側は問題のみ対応で残りは緑色。(写真④)
キッチン				
リビングダイニング				デイトレスのリビングダイニングには希望に応じて畳敷いた(写真⑤)。デイトレスとG4のどちらのリビングダイニングにも、20cm以上上がった畳のところがある。G4では緑色のところから畳のところに比べて美観が保たれている。シューズボックスの人の足が踏む人が居間、G4の人の居間を利用する動線だったが、実際にはみんなG4のリビングを利用する。居間は白黒の畳のため居室として使われ、居間はG4の一人がもう一つの居室として利用している。
浴室	デイトレス、G4のどちらも浴槽は備わっているが、浴槽はかなり広い。(写真⑥)		所蔵角の変わりリネーターをつけている。	
トイレ				デイトレスにのみ、G4にのみある。

表 7-31

施設名称 せんだんのむなかつやま

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわら
内口				居間に備わったが、居間と居間の間は大きなガラスの開口で、デッキにつながっている。
建具				
照明				
階段				ヘルプステーションにつながる階段がある。
採光・空調				
エレベーター				
バルコニー				緑色畳敷き部屋とG4のリビングダイニングにウッドデッキがある。
庭				植物の真中に中庭がある。

表 7-32

施設名称 せんだんのむなかつやま

性能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわら
アプローチ				スロープになっている。デイトレスの空間は緑色から見えるが、G4の空間は少し奥まったところにある。
建物外観				デイトレスの棟とG4の棟を区別するため、外観の色を少し違わせている。(写真⑦、写真⑧、写真⑨)
事務室				デイトレスとG4にそれぞれひとつずつある。
居間室				
相談室				
作業室				
スタッフルーム				2階にヘルプステーションがある。
その他				リビングの一部で、緑色畳敷き部屋が「リビング」であることを除けば、床は全て緑色である。(写真⑩)

せんだんの杜なかつやまの図面(図7-21)

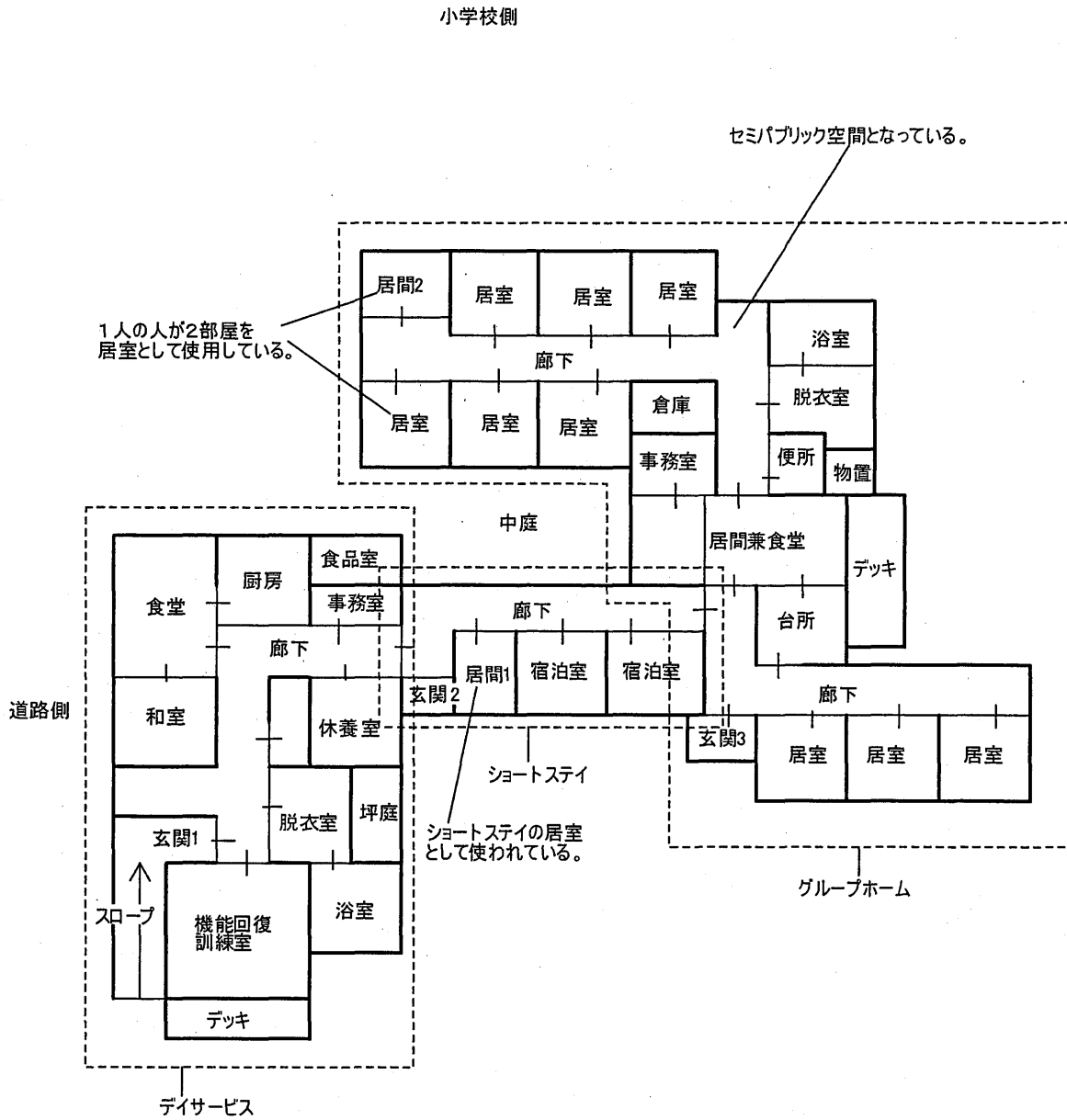


図7-21

14-II せんだんの杜ものう うした

見学日 2005年5月14日(土)
 所在地 宮城県桃生郡桃生町牛田字雷50番
 2
 事業所名 せんだんの杜ものう うした
 運営主体 社会福祉法人 東北福祉会
 開所年月日 2005年4月

現在のサービス内容

通い(介護保険) 定員10名
 泊まり
 住む(介護保険) 定員9名

現在の建物

形態 以前設計事務所だった建物を改築した(増築は無し)。
 規模 敷地面積: 1,516 m²
 建物構造: デイサービスセンター 木造平屋建て 180.53 m²
 予備室
 木造平屋建て(一部2階) 12.69 m²
 グループホーム
 木造平屋建て(一部2階) 320.20 m²

利用者

人数 デイサービス
 グループホーム 入居8人

利用者の居住地域 桃生小学校区の住民。

特徴

桃生町を「第一小学校区」「第二小学校区」「桃生小学校区」の3つの小学校区に分け、「第一小学校区」には小規模多機能ホーム「せんだんの杜ものう なかつやま」を、「第二小学校区」には特別養護老人ホーム「せんだん杜ものう」を、「桃生小学校区」には小規模多機能ホーム「せんだんの杜ものう うした」をそれぞれ配置している。

第一小学校区
 小規模多機能ホーム
 「せんだんの杜ものう なかつやま」

第二小学校区
 特別養護老人ホーム
 「せんだんの杜ものう」

桃生小学校区
 小規模多機能ホーム
 「せんだんの杜ものう うした」

建物に関するフォーマット(表7-33)

表7-33

施設名称: せんだんの杜ものう うした				
機能 部位	介助者(スタッフ)支援性	(入居者、利用者) 自立支援性	(入居者、利用者) 安全性	建築・インテリアのわらわ
居室(個室)				個室がない。現在、個室が一つ空いていて洗濯物干し場などに使用している。
キッチン	GHキッチンが狭い(スタッフ専用)。			
ダイニング				デイサービスのダイニングに畳コーナーが設けられている。畳コーナーは中庭に面している。
リビング				GHの通路1は中庭に面している。廊下2は居室の間にあり、セミプライベート空間になっている。
浴室				デイサービスに一つ、GHに一つある。どちらも浴槽は浴槽でシャワーも一つ、洗い場、脱衣室は少し広い。
トイレ				デイサービスに二つ、GHに三つある。
庭				中庭をはさんでデイサービスとGHがある。
作業室	デイサービスの作業室とGHの合所が扉一枚で仕切られていて、スタッフはそこで行き来ができる。			

せんだんの杜ものううしたの図面(図7-22)

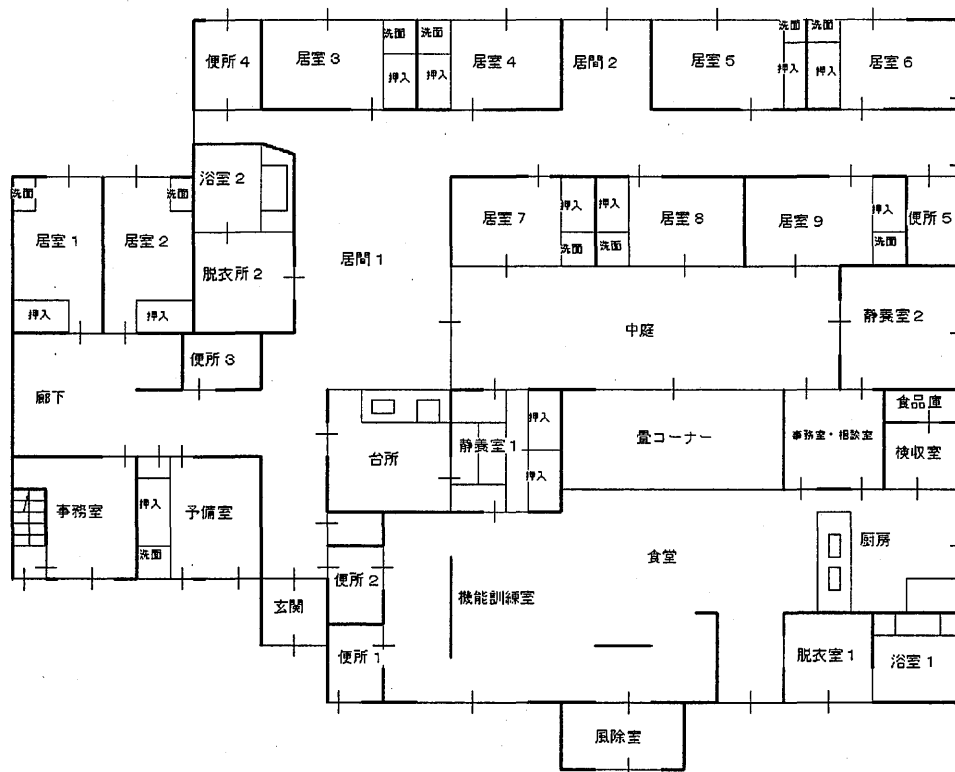


図7-22

7-4 地域密着型小規模多機能施設の空間についての考察

小規模多機能サービス拠点の空間を、下記の4つの視点において分析した。対象施設は11軒で、うち6軒が一軒型、4軒が複数軒型、1軒がサテライト型における小規模多機能施設である。「1 増改築の経緯」については経緯が特徴的である2軒のみとしたが、「2 新築と民家改築型の違い～4 空間構成について」については11軒すべてを対象とした。

- 1 増改築の経緯
- 2 新築と民家改修型の違い
- 3 サービス機能と空間の対応について
- 4 空間構成について

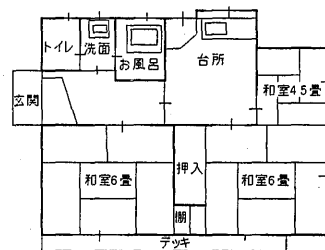
7-4-1 増改築の経緯

開所年月が早く、民家の増改築の経緯が顕著である「のぞみホーム・なんちゃってのぞみホーム」と「宅老所 よりあい」を取り上げる。増改築の経緯を知ることにより、空間に対する要求がどのようなものであったか、また、その要求に対してどのように応答していったのか、を理解する。

<のぞみホーム・なんちゃってのぞみホームの経緯(図7-23)>

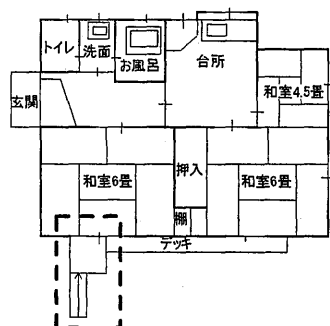
1993年7月1日 **のぞみホーム誕生**

利用者の一人が所有していた家から始まった。



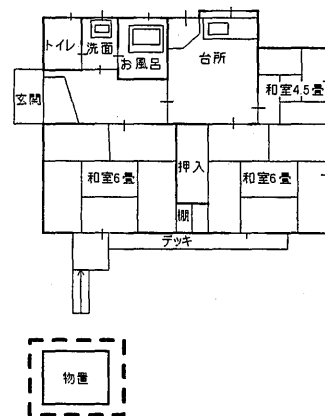
1994年1月 **スロープの設置**

車椅子の方の利用が始まることになったが狭い玄関から車椅子が入るのは無理だったため、6畳間の濡縁を切り取ってスロープを造り、そこから出入りすることにした。



1994年8月 **物置の設置**

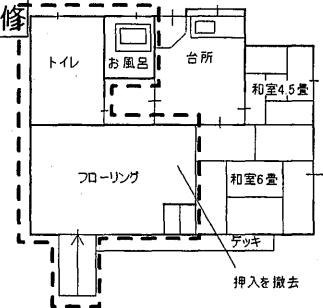
「お泊まり」などの利用も始まっていたため3DKでは手狭になっていた。そのため、展示品の物置を安く買ってのぞみホームの東側に置き、バザーの品物を収納していた。



1994年12月～1995年2月 **スロープ、6畳間、トイレ、浴室の改修**

全労済の助成金によりホームの一部を改修した。

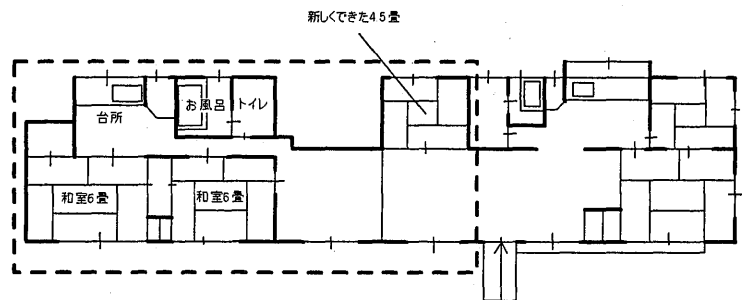
- ・スロープをより丈夫なものにした。
- ・出入り口になっていた和室の6畳間をフローリングにした。
- ・もともとの玄関をつぶしてトイレを広げた。
- ・お風呂場に段差がなくなるようなすのこを敷いた。



1997年5月～7月 **隣の空き家とのぞみホームをつなぐ**

1997年5月から栃木県の単独補助事業である「高齢者デイホーム事業」を受託した。初年度の設備費200万円と「のぞみ会」の会費を使って改修を行った。

- ・隣の家が空き家になったので借りてのぞみホームとつなげた。
- ・4.5畳の部屋を増築した（この部屋はすぐに住人が現れた）。



1998年1月 **事務室とひのきのお風呂が完成**

社会福祉・医療事業団の助成金により、改修を行う。

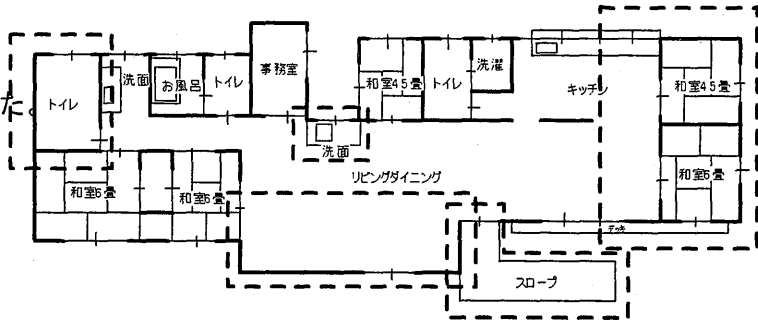
- ・浴室を改修。浴槽はひのき（と言っているけどさわら）。
- ・変形3.5畳くらいの部屋を増築（物置部屋として建てたが現在は事務室として使用している）。



2001年1月 **のぞみホームの大改修が始まる**

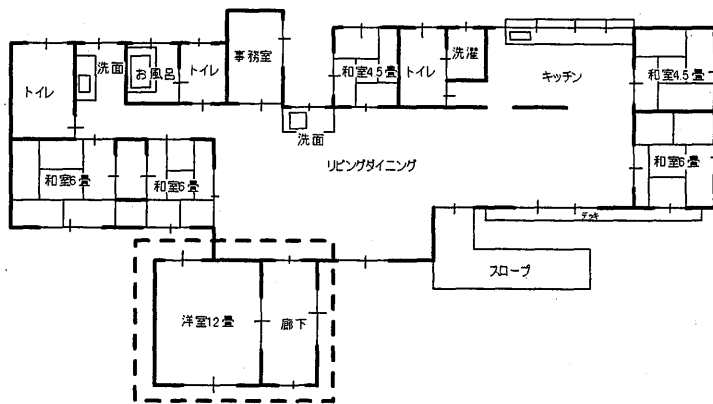
栃木県の「デイサービスセンター整備促進事業」として
1526万7千円の補助金でのぞみホームの大改修が始まる。

- ・和室を増築して台所を広げた。
- ・スロープをつけた。
- ・リビングが広くなり洗面もつけた。
- ・トイレが一つ増えた。



2000年6月 **一部屋増築**

「のぞみホームにどうしても住みたい」という人が現れた
ため。一部屋増築した。



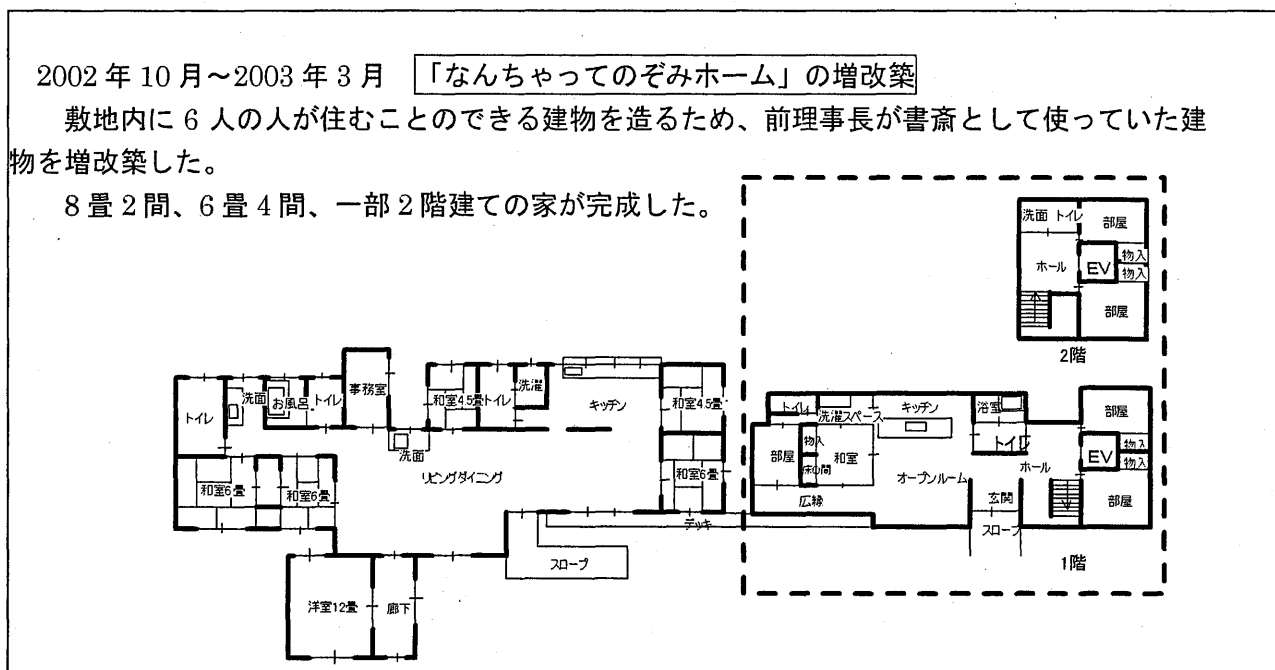


図 7-23

<宅老所よりあいの経緯(図 7-24)>

1991年11月 伝照寺の茶室を借りてスタート

利用者2人とスタッフ3人で週1回の宅老所がスタートする。

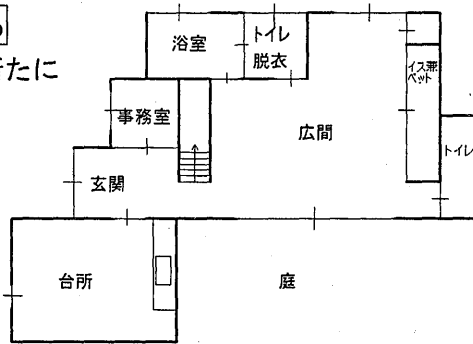


1992年3月 伝照寺の広間を借りる

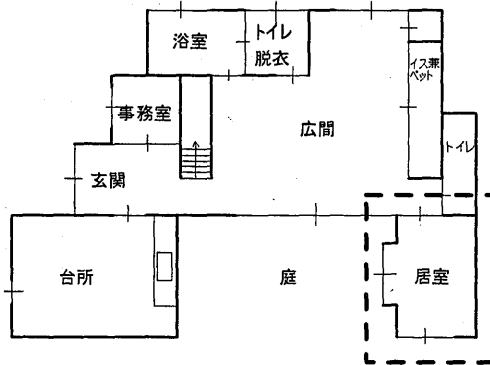
利用者が増え、サービスも週3回になった。



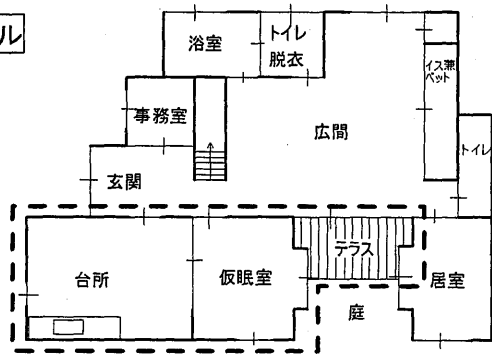
1992年7月～11月 **伝照寺の借家を借り改築する**
 11月に完成し、「宅老所よりあい」と名づけて新たに
 スタートする。入所、宿泊事業も始める。



1994年8月 **一部屋増築**
 一人の利用者のための部屋をつくる。

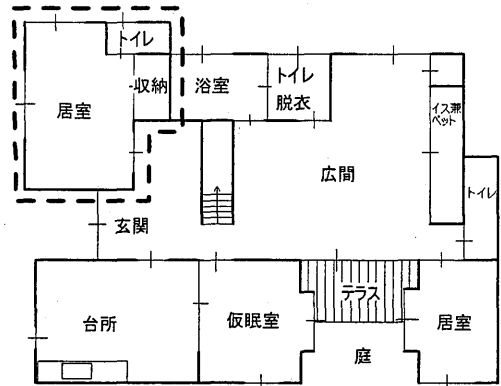


1994年11月 **和室、テラスを増築し、台所をリニューアル**
 ・庭の一部をつぶして和室（仮眠室）を増築する。
 ・テラスをつくる。
 ・和室の増築に伴って台所の流しの位置を変えて
 リニューアルする。



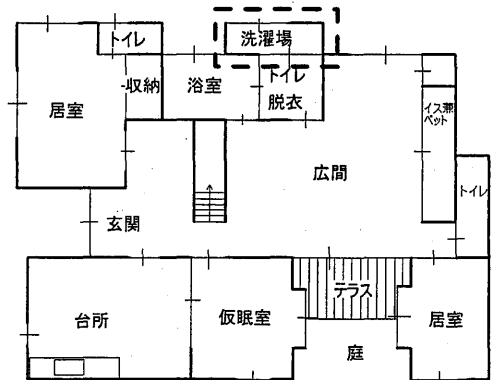
1996年2月 **和室とトイレを増築**

ある利用者が病院から帰ってくるために和室とその横にトイレを増築する。



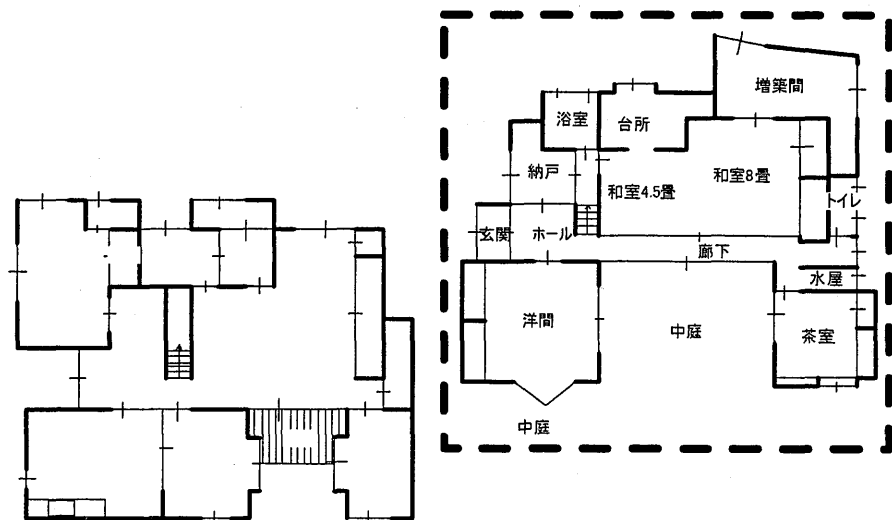
1998年6月 **洗濯場を増築**

洗面所の裏に洗濯場を増築する。



2000年4月 **裏の家を借りる**

介護保険制度で、裏の家(「宅老所よりあい」の大家さんの家)をグループホームとして借りる。





2001年8月 **お風呂を改修**

「宅老所よりあい」の浴槽、すのこをリニューアルし、ひのきのお風呂に改修する。



2003年12月～2004年8月 **2軒の家を全面改修**

2軒の家を全面改修し、つなげた。

改修前に出た意見と解決策

- ・トイレの音と臭いが気になる。→トイレの位置を広間から離れた。
- ・光がない→天窓のあるサンルームをつくった。
- ・縁側が欲しい。→濡縁をつくった。
- ・台所を使いやすくしたい。→流しを2つにした。
- ・土間が欲しい。→土間をつくった。
- ・風が通らない。
- ・居場所がない。等

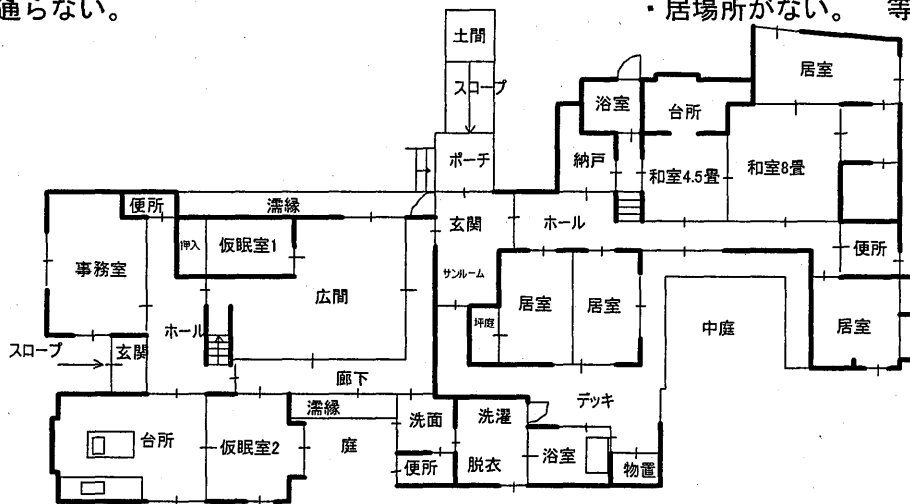


図 7-24

7-4-2 新築と民家改修型の違い

「小規模多機能サービス拠点」には、新築と民家改修型がある。施設長自らが設計に加わって新築したもの、高齢者介護は民家でやるのが良いという考えのもと、最初から民家を借りて始めたもの、新築したかったが資金の関係で民家を借りることになったもの、借りた民家を何度も増改築し理想に近づけていったもの、など、様々なケースが見られる。

そこで、新築と民家改修型の間にはどのような違いが見られるのか、また、それは高齢者介護にどのような影響があるのかを考察する。ただし、それぞれの特徴を挙げたが、その特徴にはあてはまらず、例外となるものもある。

<新築の特徴>

居室が整然と並んでいる・・・

居室の広さがそれぞれ同じで、整然と並ぶような配置になっている(図7-25、図7-26)。

居室と共用空間が直接つながっている・・・

居室の戸を開けるとすぐに共用空間となっている(図7-25、図7-26)。「認知症高齢者が居室を出たときに廊下などがあると混乱してしまう」という話もあった。しかし、共用空間から居室の中が見えてしまうなど、プライバシーの確保が難しいと考えられる。

(例)

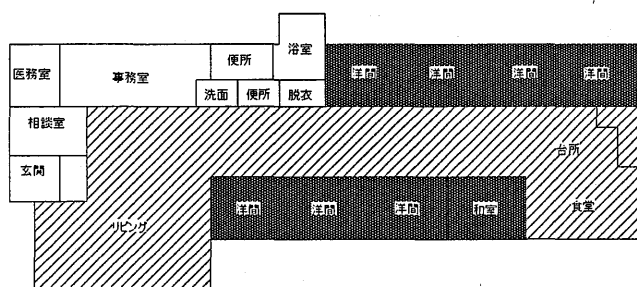


図7-25 小規模多機能ホーム きなっせ

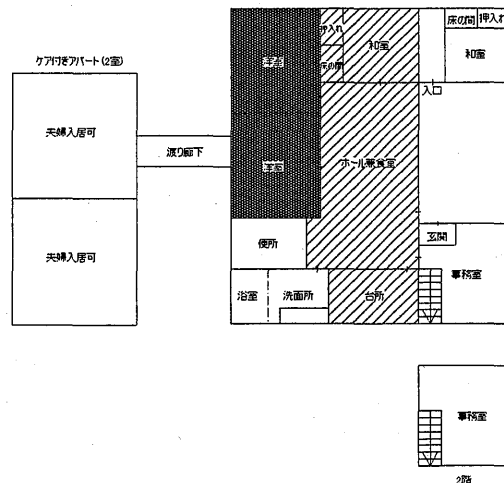
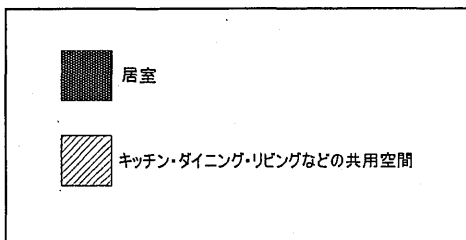


図7-26 ことぶき園

<民家改修型の特徴>

民家改修型は、増改築が繰り返し行われたものとほとんど改築が行われていないものとに分類され、それぞれに特徴が見られる。

「あまり改築されていない民家改修型」

田の字型プラン・・・

あまり改修が行われていないところでは昔ながらの田の字型プランが残されており、その一部が居間や居室として使われている(図 7-27、図 7-28)。

「増改築された民家改修型」

居室が点在している・・・

増改築の度に新たに居室がつけられるなどして、居室が点在された配置になっている(図 7-29)。そのため、共用空間に直接つながる居室もあれば、離れたところにある居室もあり、様々である。そのため、病気のため目が離せない利用者などは共用空間の近くの居室にするなど、用途に応じて選ぶことができる。

(例)

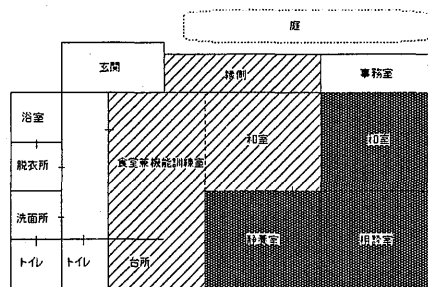


図 7-27 生活リハビリクラブ きらら

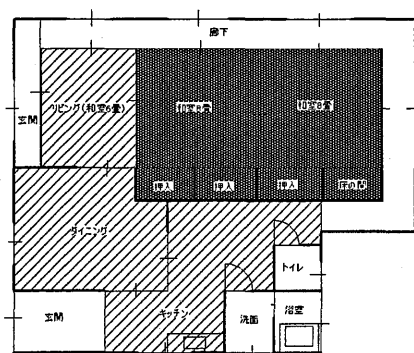


図 7-28 グループホーム手のひら

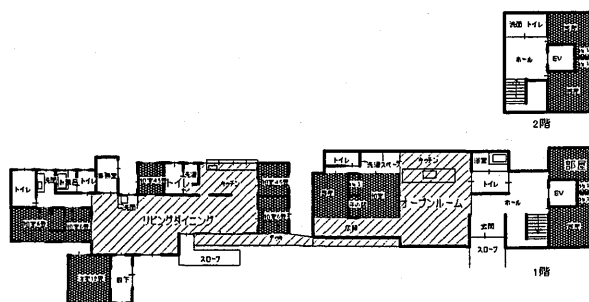


図 7-29 のぞみホーム・なんちゃってのぞみホーム

ム

7-4-3 サービス機能と空間の対応について

デイサービス、ショートステイ、グループホームなどのサービス機能が空間とどのように対応しているのかを考察した。ただし、ショートステイについては、ショートステイの空間として確定されているケースが少ないため、デイサービスとグループホームの空間について考察した。

7-4-4 空間構成について

小規模多機能サービス拠点の空間構成について考察するため、建物の内部のうち、

- ①居室
- ②キッチン、リビング、ダイニングなどの共用空間
- ③トイレ、浴室、脱衣所、洗面など

の3つの空間について取り上げ、それらの空間構成を分析した。

<①居室と②共用空間のつながりについて>

- ・居室と共用空間が直接つながっている（新築に見られる、図7-31）。

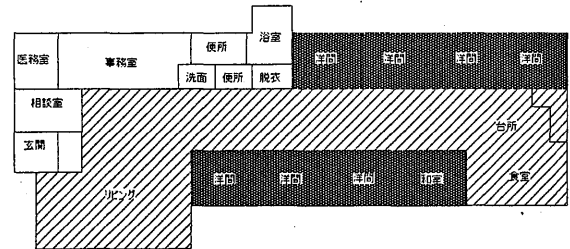


図 7-31

- ・居室が点在しているため、共用空間と直接つながる居室も共用空間から離れている居室もある（増改築された民家改修型に見られる、図7-32）。

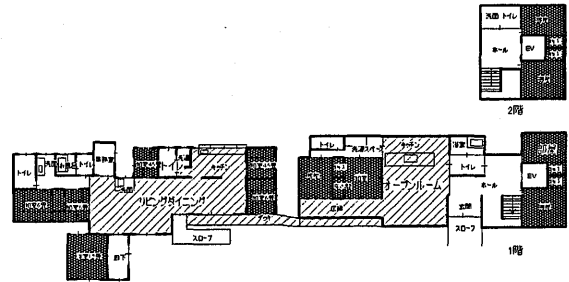


図 7-32

- ・田の字型プランの中に共用空間と居室がある（あまり改修されていない民家改修型に見られる、図7-33）。

の3つの特徴が見られた。

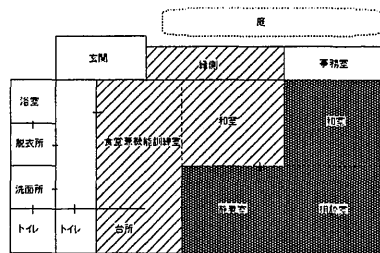
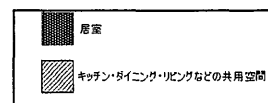


図 7-33



<②共用空間について>

- ・共用空間から、ウッドデッキ、濡縁などに続いていることが多い。
- ・という特徴が見られた。

<③トイレ、浴室、脱衣所、洗面などについて>

- ・各居室内にトイレがある(図7-34)。

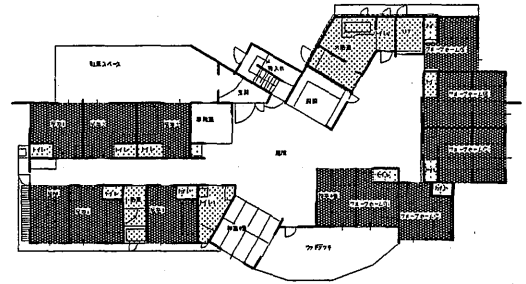


図7-34

- ・トイレが点在している(図7-35)。

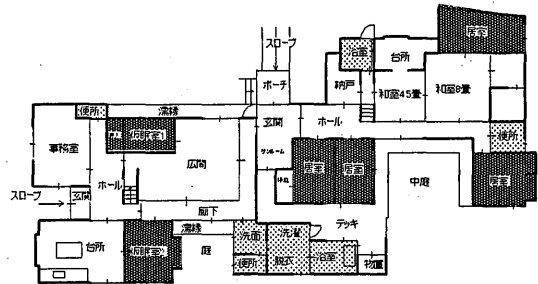


図7-35

- ・トイレ、浴室、脱衣所、洗面が一箇所に固まっている(図7-36)。

の3つの特徴が見られた。

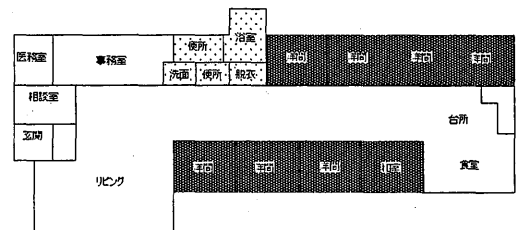
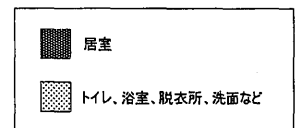


図7-36



7-5 まとめ

7-5-1 施設実態のまとめ(表 7-34)

表 7-34

	事業所名	建物の形態	増改築の経緯	居室と共用空間のつながり	通いと住まいの空間	半外部空間	トイレの配置
一軒型	小規模多機能ホーム きなっせ	新築。木造平屋建て。	利用者の希望で洋間に畳を敷いた個室がある。	居室が整然と並び、共用空間と直接つながっている。	建物も玄関も共用空間も同じ。	特になし。	トイレが一箇所に回まっている。
	宅老所 ながせ	民家改修型。一部2階建て。	増改築はほとんど行わず、トイレをつくり、ウッドデッキをつけたくらい。	居室と共用空間は隣り合っているが、直接つながっていない。	建物も玄関も共用空間も同じ。	共用空間からウッドデッキにつながる。	1階に一つ、2階に一つある。
	小規模多機能施設 まりやの家	新築。一部2階建て。	現在2階をスタッフルームにするため改築中。また、外に納屋をつくり中。	居室は整然と並んでいるが、共用空間に直接つながっている個室もつながっていない個室もある。	建物と玄関は同じだが、共用空間が別。	共用空間からウッドデッキにつながる。	各居室内にトイレがある。
	生活リハビリクラブ きらら	民家改修型。一部2階建て。木造平屋建て。	お風呂、洗面、トイレを新たに作った。	あまり改築されておらず、田の字型プランの一部が居室や共用空間になっている。	建物も玄関も共用空間も同じ。	共用空間から濡縁につながる。	トイレが一箇所に回まっている。
	ことぶき園	新築。一部2階建て。	開設7年目の頃、利用者のためにことぶき園の横にプレハブをつくった。今は職員の実験室。	居室が整然と並び、共用空間と直接つながっている。	建物も玄関も共用空間も同じ。	特になし。	トイレが一箇所に回まっている。
	さくらホーム	民家改修型。木造2階建て。	元醸造酢店を改築。梁や土壁などを可能な限り残した。	共用空間が1階、居室が2階にある。	建物は同じだが、玄関と共用空間は別。	共用空間からウッドデッキにつながる。	トイレが点在している。
複数軒型	のぞみホーム・なんちゃってのぞみホーム	3軒の民家改修型。2つの民家をつなげて一つの家にし、もう一つの民家とデッキでつなげている。	利用者に合わせて個室を増築したり、トイレやお風呂を増築を行いながら2軒をつなげた。もう一軒を借り、大改築した後デッキでつなげた。	居室が点在している。	建物は同じだが、玄関と共用空間は別。	共用空間から濡縁につながる。	トイレが点在している。
	デイホーム手のひら・グループホーム手のひら	2軒の民家改修型。家を一軒換えて建っている。	改築はほとんど行っていない。	あまり改築されておらず、田の字型プランの一部が居室や共用空間になっている。	建物が別。	廊下から濡縁につながる。	トイレは1箇所しかない。
	宅老所 よりあい	2軒の民家改修型。2軒をつなげている。	一軒の時に部屋やトイレを増築し、裏にもう一軒借りた後に2軒の大改築を行った。	居室が点在している。	建物は同じだが、玄関と共用空間は別。	共用空間から濡縁につながる。	トイレが点在している。
	デイサービスセンター憩・グループホーム憩	一部2階建ての新築が1軒、総2階建ての新築が1軒。2軒は車で20分ほど離れたところに建っている。	グループホームにおいて、脱衣所に手摺をつけたり個室に畳を敷いたりトイレのドアの窓を擦りガラスに替えたりした。	居室は整然と並んでいるが、共用空間に直接つながっている個室もつながっていない個室もある。	建物が別。	廊下から濡縁につながる。	デイサービスでは共用空間に面してトイレが並んでいる。グループホームでは1階につきトイレが3箇所点在している。
サテライト型	せんだんの社なかつやま	新築。木造一部2階建て。	建築の途中で浴室を小さくすることにし、その分廊下に居間のような空間ができた。	居室は整然と並んでいるが、共用空間には直接つながっていない。	建物は同じだが、玄関と共用空間は別。	共用空間からウッドデッキにつながる。	デイサービスで一箇所、グループホームで一箇所に回まっている。

7-5-2 結論

以上により、全国にある「小規模多機能サービス拠点」には、様々なサービス内容、運営方法、活動経緯、建物内部の空間構成などがあることが分かった。しかし、それらはそれぞれの施設において介護に対する熱い思いを持った人が一人一人の利用者に合わせて作り上げてきたものであり、一概に良し悪しの判断はできない。現在制度化されようとしている「小規模多機能サービス拠点」であるが、既存の「小規模多機能サービス拠点」の活動が制限されることのないよう、包括的で融通の利く制度が期待される。また、制度化された後につくられる場合には、建物やサービス機能といった「枠組み」のみを提供するのではなく、「高齢者が、同じ建物で、同じ職員によっ

て、その時の状況に合ったサービスが受けられる」ことの重要性を、職員全員が十分に理解した上で介護サービスを提供することが必要になるだろう。

このようにして「小規模多機能サービス拠点」が小学校区単位で全国に広がれば、高齢者が可能な限り在宅で暮らしていける環境が整うのではないかと考える。

第8章 施設外小規模リビングの試みからの考察

8-1 研究の目的と方法

8-1-1 研究の目的

本研究では施設居住者が日中の大半を過ごしているとされる共有空間（リビング）を地域に設けることで、外出行動のみならず、彼らが日常生活をする上での自然な地域との関わりについて調査することにより、今後の特養の地域への展開、施設居住者の生活のあり方について考察する。

8-1-2 研究の方法

施設外小規模リビングの利用実態のケーススタディ

施設外小規模リビングを利用する在宅高齢者（介護なし、介護あり）、施設居住者（認知症、認知症なし）9名を対象とし、地域や施設の居住環境の違いを探りつつ、その空間の利用のされ方、そこでの人間関係の形成の実態を行動観察、ヒアリング等によってケーススタディを行った。また、全体的な利用の実態を通じ、今後の地域環境への関わりについても考察する。

・施設外小規模リビング利用実態調査

開設直後の2005年11月～2006年1月（10時～17時）にかけて小規模リビングでの1日の利用実態調査を行い、その中で対象者に対し、行動観察・ヒアリング等を行った。

・施設居住者に対する調査

① 2005年10月3日～8日（10時～17時）

ユニットを構成する全員による1日の流れや、人間関係、それぞれの特徴をつかむことを目的とする。（行動観察調査、ヒアリング調査）

② 2005年12月14日～16日（14時～16時）

①での記録をもとに特定の人物を選定し、小規模リビング利用の際対象者に付き添い、行動観察を行った。

8-2 調査対象施設・環境の概要

8-2-1 立地条件と周辺環境

(1) 立地

この施設外小規模リビングは最寄り駅よりバスで20分ほどの住宅街に位置し、調査対象施設により徒歩5分ほどの場所にある、この地域に40年ほど前からある店舗である。周りには公団のH団地や、隣接して公園がある。また、商店もスーパー、薬局、飲食店（ケーキ屋・寿司屋・お好み焼・イタリアン）、洋品店と様々。昔から地域の住民に親しまれ、信頼もあつい。

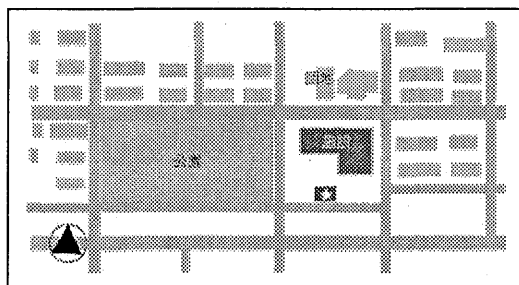


図4-1 周辺地図（星印が小規模リビング）

・周辺環境

- A: 隣接する公園 B: スーパー
C: 洋品店辺 D: 公団の団地
E, F: 商店

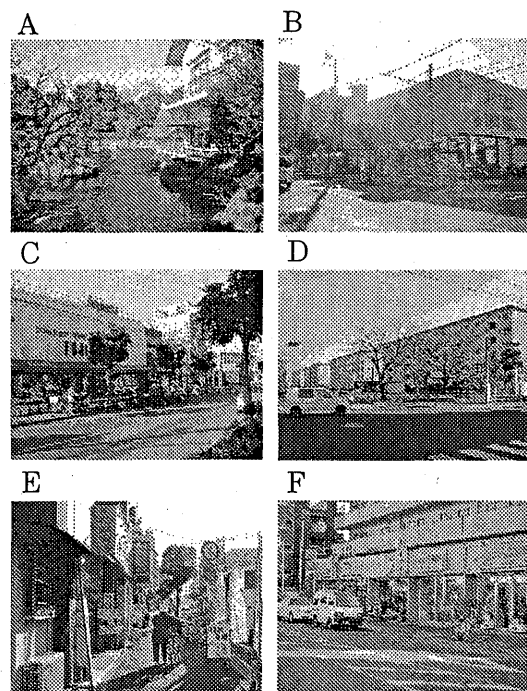
(2) 地域社会との関わり方の実情

①開設前の施設との関係

施設が開設する以前からこの地域で店を営んでおり、施設居住者の多くも昔から利用しているため主人との顔見知りが多い。奥さんも施設でパートとして勤務しており、施設居住者や介護職員とのなじみがある。開設以前は外出の帰りに立ち寄ってコーヒーを飲んだり、主人と話をしたりして過ごしていた。入居前から利用していた方は、来ると昔の話をしたり、冗談を言い合ったり、帰りに店で商品を買って行く。また、職員から食事の依頼を受け施設に届けている。今回の計画以前から職員が入居者と一緒に来て、過ごすといったことはされていた。しかし、施設の入居者が来た場合「トイレが車いす対応になっていない」「段差がある」などの理由で利用者が限られていた。また、スペースも狭かったため、一度に少人数しか利用できず、車いすの方も2人が限度であった。

②開設前の地域との関係

昔からこの地にあるため、人々に親しまれており、地域からのなじみも深い。食事提供も行っており、施設に面会へ来た家族の方や、一人暮らしの方を中心に行っていた。



周辺の写真

8-2-2 小規模リビングの概要と開設までの経緯

開設までの経緯

①この計画に至るまでの経緯

老人ホーム（調査対象の S 施設）の裏に昔からある小さなたばこ屋。日頃より施設で生活している入居者の方々が、時折買い物に来ており、2004年12月に店舗の一部の総菜コーナーをやめたのを機会に、お年寄りが訪れてゆったりとくつろいで頂ける場をと、計画がはじまる。問題は資金。少しでも安い値段で出来る方法はないかと区へ相談するが、ご主人69歳、奥さんは60歳。まだ介護保険の利用は必要はなく、NPOでもないで区からの補助も難しいとのこと。そこで奥さんが勤務するホームで以前見た、社団法人日本医療福祉建築協会 JIHA 出版「木はこころ」を見て、そして横浜国大の先生はじめ、学生とプロジェクトを組み、計画が始まった。



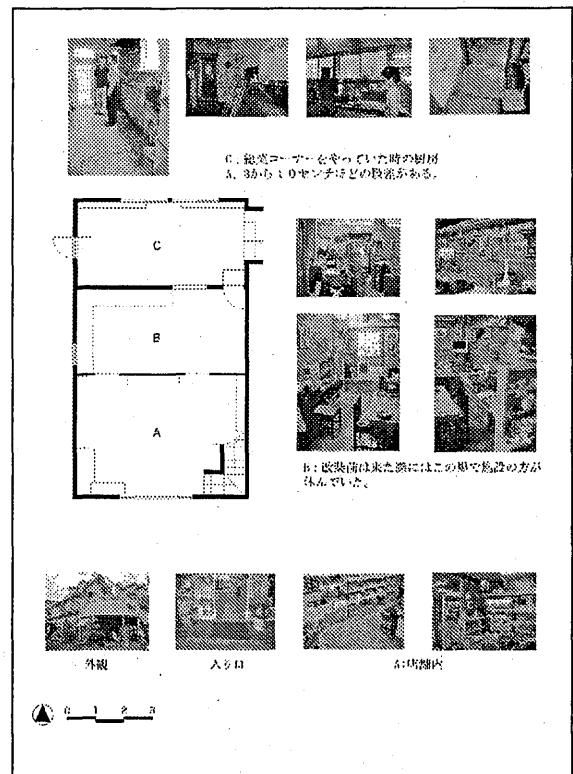
②過程

過程は右の表のとおりである。2005年の実測からはじまり、工務店や主人との数回の打ち合わせや検討し、2005年10月着工。保健所の申請を経て2005年11月に開設した。



制作過程	
2005 6月上旬	依頼を受ける
8月上旬	1階部分と2階部分の実測を行なう
8月上旬～下旬	施主、施工者を交えた打ち合わせを行なう
9月上旬～下旬	プラン検討
10月上旬	着工
11月中旬	保険所検査
11月22日	竣工

8-2-3 改修前プラン



8-2-4 改修後プラン

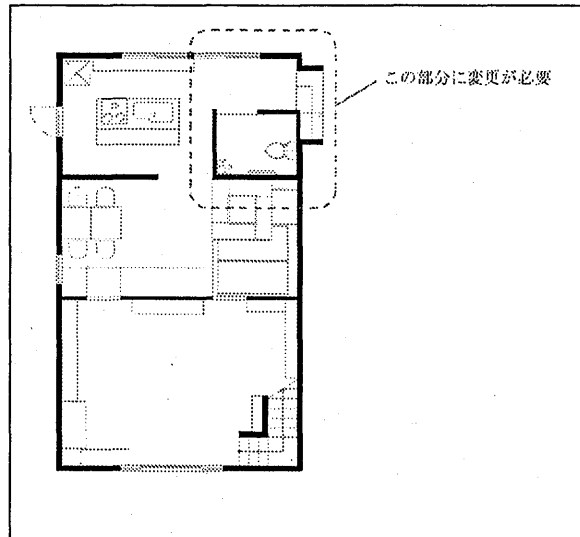
食品を取り扱うため、調理場とトイレの間に扉を設ける必要がある。*

トイレの位置を検討し、北側に移動することになったが、本来の車いす用トイレの寸法(1500×2000mm)のスペースを取る事ができなくなる。

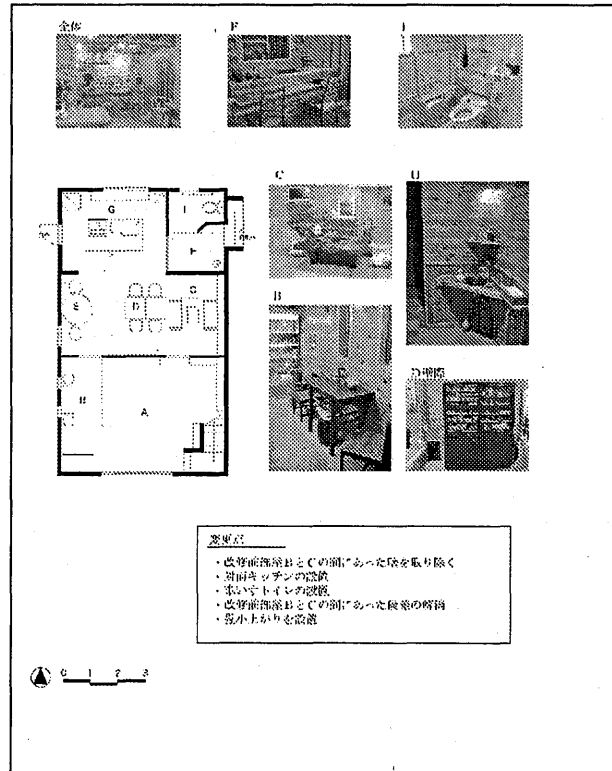
車いすを用いて使用に困難がないかを実証し、支障がなかったため、現在の位置に移動した。

結果的に畳のスペースを広く取ることができ、窓際にあるため、換気の問題も解消された

保健所申請前



保健所申請後



8-2-5 各部の概要と場の様子

特に配慮した点は以前の問題であった「段差」「トイレ」の改善である。

A の店舗の雰囲気を変えずに木の温もりのある空間にした。また、施設のような雰囲気になることを避けるため、手すりはトイレだけの必要最低限にした。また、一般家庭のリビングで使われているテーブルや食器棚を配置するなど、家具にも配慮をする。今回特に「トイレ」について一番に配慮をした。スペースの関係から規定の車いすトイレよりも少し狭いが、実際に車いすを入れ実証を行い、使い易いものになった。また、基本設計の段階では G と H の間の扉は設けておらず、トイレも H 側に配置していたが、保健所の申請の関係でこの配置になった。結果的に C のスペースを広く取ることができ、窓際にあるため、換気の問題も解消された。

A：店舗

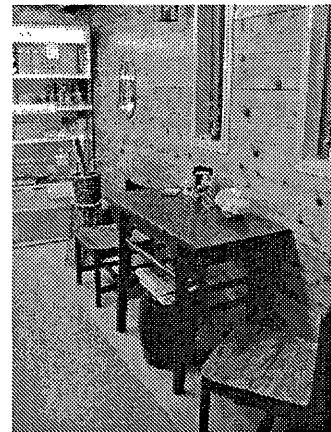
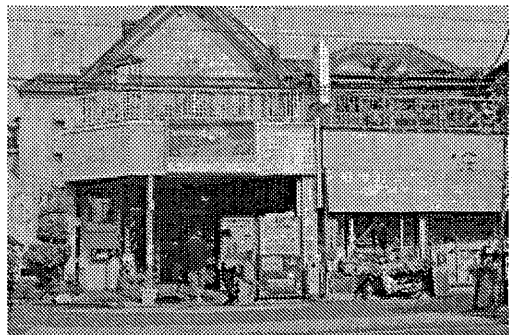
昔から地域にあるたばこ屋兼総菜屋。ホームから来る方も以前この店を利用していた方がほとんどで、主人ともなじみが深い。地域からの小規模リビング利用者もほとんどが店のなじみ客。リビングでくつろいだ後、店でたばこや総菜を買って帰る方もいる。買った商品をリビングで食べたりする場合もある。

B：リビングへの通路

店舗からリビングへの通路。小さなテーブルと椅子が設けてあり、利用者はあまりいないが、主人がここへ座り、リビングに来た方とコミュニケーションをとりながら店番をしている。ドアがないため冬場は少し寒い。

C：いろり、畳

いろりは既製品。3畳分の小上がりの畳スペースでテレビが配置されている。マイクをつなげばカラオケもできる。棚には、沢山の置物が飾ってあり、民家に来たよう。ホームの入居者はほとんどが車いすで来るため、利用者は限られているが、「畳を見ていると自分の家に帰って来たよう。」と雰囲気だけでも存在感がある人気の空間である。



D：テーブル①

ホームからの利用者はほとんどの方がここを利用。付き添いがある場合や、調査員が加わる場合は、座敷の小上がり部分を椅子の様に使用している。このテーブルの壁側には食器棚が配置されている。



E：テーブル②

上部に換気扇があるため、喫煙者が良く利用する。調査期間（2005/11～2006/1）は風が通り、寒いためあまり利用する人がいなかった。大勢の方が来た場合は、Dテーブルと付けて利用していた。

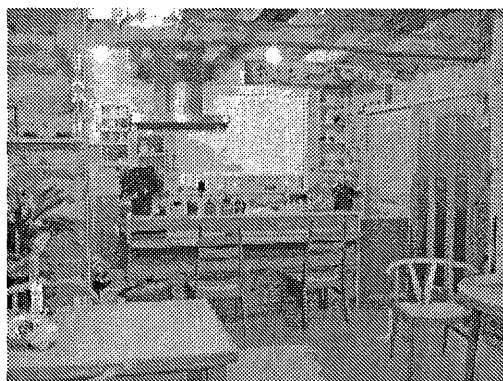


F：カウンターテーブル

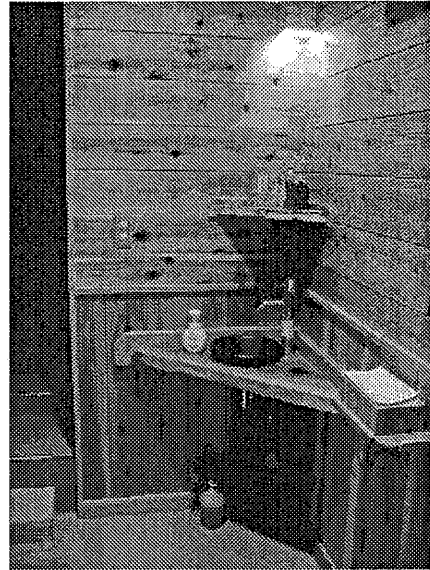
一人で来た方がよく利用する。ホームからの利用者はあまり利用していなかった。奥さんと一番近い場所でコミュニケーションがとれる。

G：対面キッチン

リビングの利用者はここには入らない。奥さんが主にいる場所。オープンカウンター式であり、常に C、D、E、F と視線的にもつながりがある。奥さんは調理などをしながら、利用者とコミュニケーションをとることができる。また、キッチンから漂う香りは視覚だけでなく嗅覚の刺激にもなる。



H: 洗面、自宅への通路
手洗い場がある。

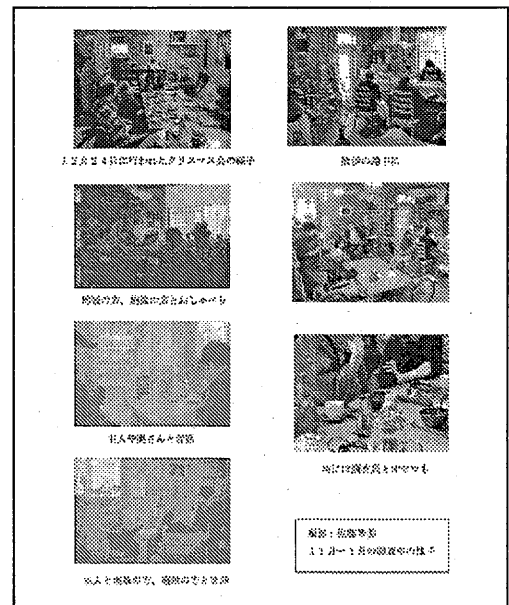


I: トイレ

車いす対応のトイレである。一般の車いすトイレより少し狭いが、施工の際、実際に車いすを入れての実証済み。介助なしでの利用の方からもとくに狭いとの話はない。介助者からも「ちょうど良い広さ」ということであった。あまり広すぎても介助なしの利用者（車いすを使用していない方）が使いづらいという話があったため、規定の寸法にはしなかった。



*この他、平面上には表れていないが、BGM(主にクラシック、希望により利用者のリクエストに答える)や観葉植物が多数配置されている。来る人が口々に言うのが「木の香りがする」ということ。



ある日の利用の様子

8-2-6 隣接する介護施設の概要

足立区S施設

40年ほど前からこの地域にある施設である。地域との積極的な交流や、入居者個人個人の個性をし、ゆっくり寄り添える介護を実現するため、2000年2月にユニットケアを導入している。定員が576名、ユニット数が19と大規模な施設である。

■外出の取り組み

決まった外出の設定はない。スタッフが誘導するか、本人の任意で、主に周辺にある商店、飲食店の外出。また、初詣や駅周辺の大型スーパーなど、車を使つての外出も行っている。

■地域との交流

非日常的な交流としては、地域の高校生、保育園児の訪問や、お祭りなどがある。日常的な交流としては、施設の一部を喫茶店として開放し、地域の住民も利用できるようになっている。また、施設の入居者が参加する陶芸や華道等の趣味のクラブにも希望者は参加することが出来、積極的に地域との交流をはかっている。

また、散髪などを地域のさまざまな美容院の方をお願いしている。

8-3 施設外小規模リビングにおける利用実態からの考察

ここでは施設外小規模リビングを利用する高齢者（介護なし、介護あり）、施設居住者（認知症、認知症なし）を対象として調査を行う。在宅高齢者においては、全体の利用者の利用経緯や、そこで人間関係の形成のされ方を把握した上で、個人に焦点を当て、ケーススタディを行った。また、施設居住者においても同様に個人に焦点をおき、地域や施設の居住環境の違いを探りつつその空間の利用のされ方、人間関係の形成の実態を行動観察、ヒアリング等によってケーススタディを行った。一人一人の個性や生活歴に着目することで、この場が生活のなかでどのように位置づけられているのか、また、今後の生活にどんな影響を

与えるのかを明らかにすることを目的とする。

8-3-1 調査概要

■在宅高齢者に関する利用実態調査

開設直後の2005年11月～2006年1月（10時～17時）にかけて調査員が小規模リビングでの1日の利用実態調査を行い、その中で対象者に対し、行動観察・ヒアリング等を行った。

・在宅高齢者調査対象者

CASE 1	Aさん	介護なし	男性	80代
CASE 2	Bさん	介護あり	男性	60代
CASE 3	Cさん	介護なし	男性	70代
CASE 4	Dさん	介護なし	女性	60代
CASE 5	Eさん	介護なし	女性	80代
CASE 6	Fさん	介護あり	男性	70代

■施設居住者に関する利用実態調査

2005年10月3日～8日（10時～17時） 2005年12月14日～16日（14時～16時）まず、調査員が施設居住者とともに一日を過ごし、居室、風呂、トイレを除く共用空間における行動、会話を随時、調査シートに記録した。言動の自発性や誘導性、対象に注目し、その内容や時間を把握した。このような調査を①の期間においては、ある特定の人物にしぼって追跡するのではなく、ユニットを構成する全員による1日の流れや、人間関係、それぞれの特徴をつかむことを目的とし、②の期間においては、①での記録をもとに特定の人物を選定し、小規模リビング利用の際対象者に付き添い、行動観察調査を行った。

・調査対象者

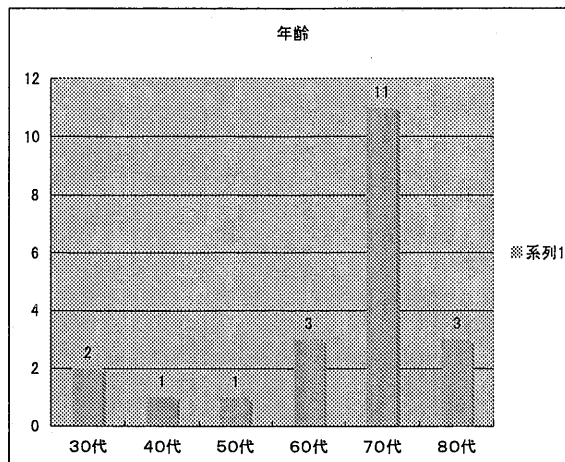
CASE 7	Aさん	認知症なし	男性	70代（介護度3）
CASE 8	Bさん	認知症あり	女性	80代（介護度4）
CASE 9	Cさん	認知症あり	女性	70代（介護度3）

8-3-2 利用実態の概要

・利用者の年齢

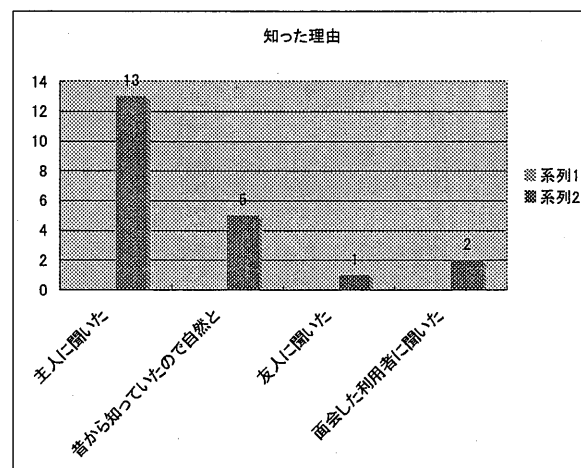
利用者のほとんどが高齢者にあたる。ヒアリングを行った利用者21名のうち、11名が65歳以上であった。

また、同じ町内に住む利用者は21名中11名、それ以外も徒歩で10分ほどの地域に住んでいる。



・小規模リビングの存在を知った理由

半数以上が店舗に買物に来た際に主人から聞いている。また、「昔から知っていた」という意見も多い。



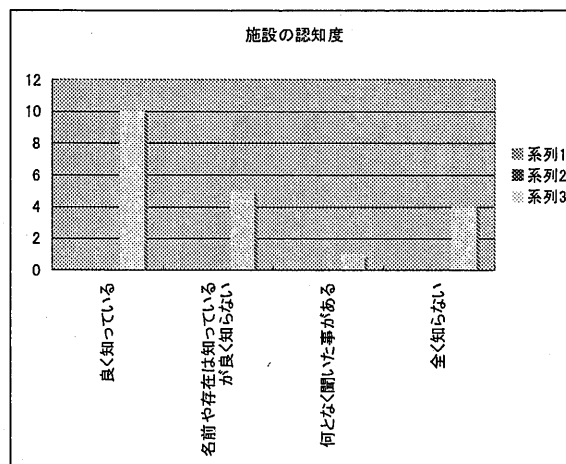
・施設の認知度

「良く知っている」という意見が多い。

古くからこの地域にある施設なので、認知度も高いようだ。

しかし、長くこの地に住んでいる住民が多い中、「名前や存在は知っているが良く知らない」や、「全く知らない」といった意見も多い。

「良く知っている」と答えた利用者のうち、7名は家族が施設居住者であったり、以前勤務していたからといった方であった。(施設関係者)



・施設と地域の関係について

『関わりは必要だと思うか』という質問に関して。

施設関係者のほぼ全員が地域との関係の必要性を希望しているのに対し、その他の地域住民はあまり関心がないように思えた。

施設関係者の意見
施設に対して地域は偏見がある。知る事が重要。相手が話してくれれば、遠慮なく話せる人を待っている。
ホームの事は全く知らない。
「閉鎖的になりがち。交流が薬になる」
「外の人との接触がないので地域との関わりは必要」
ホームと地域とのかかわりは必要。
地域と施設の間わりは必要。
施設関係者以外の意見
月一回施設で行われる勉強会に参加している。自分もこれからお世話になるから..
自分も高齢なので必要である。
地域とのかかわりは必要であると思う。
ホームのことは全く知らない。無関心。
ホームとの関わりは、自分がお世話になることを考えると助け合いなどが必要だと思うが、今は何もしていない。
施設の事は名前や存在は知っているが良く知らない。関わりは必要だとは思わない。関係ない。
施設のことはよく知っているが、関わりは必要だとは思わない。
ホームへは見学には行ったが、興味はない。

8-3-3 ケース別に見る利用の実態

① 認知症がない高齢者の生活の変化

在宅高齢者 CASE 1～CASE 6、施設居住者である CASE 7 を対象にしている。

在宅高齢者に対しては小規模リビングの利用実態やヒアリングなどから、施設居住者に対しては施設での行動観察や、ヒアリングなどからケーススタディを行った。

CASE 1 A さん (在宅高齢者：介護なし 男性 80代)

1. 生活歴

同じ町内 (徒歩10分ほどの場所) に40年以上前から住んでいる。妻と2人暮らし。この店舗も開店当時から利用しており、主人とも顔見知りである。以前は車でファミリーレストランまでコーヒーを飲みに行っていた。

2. 利用経緯

店に買物をしに来た際に主人に教えられて、それ以来毎日コーヒーを飲みに来るのが日課になった。たまに婦人との利用もある。

3. 利用実態／他者との関係

主にD、Eの席を利用する。コーヒーやたばこで一服しつつ、主人や奥さん、調査員と会話をする。(会話内容は、日常生活における内容や、その時についていたテレビのことにに関して。) 他の利用者と相席になった場合には、始めはそれぞれの顔なじみである主人を交えて相手と会話をするが、時間が経つにつれ、相席相手との会話に発展する。車で来ているため、駐車の関係上滞在時間は5分～10分であるが、外出時には外出前と帰宅時の1日2回の利用がある。

4. 小規模リビングに関するコメント

毎日の楽しみができた。

地域の方との交流も楽しみたい。

普通の喫茶店などの店だと、引け目を感じてしまう。同じような話題を持つ人がいるので、来やすい。地域にこういった場があることでまちが明るくなる。

CASE 2 B さん (在宅高齢者：介護あり 男性 60代)

1. 生活歴

右手足が不自由であるが、杖をついて自分で歩く事ができる。1週間置きに施設のショートステイを利用している。耳も良く、仲良くなった人とは沢山会話をする。ホームでは入居者との交流はあまりなく、スタッフと会話をする方が多いようだ。ラジオを持って行って音楽を聞いたりして過ごしている。たばこお酒が好き。

2. 利用経緯

この店を利用して3年になる。買物をしに来た際に主人に教えられる。それ以来施設に来ている時は毎日2回コーヒーを飲みに来るのが日課。時には1日3回も利用するときもある。

3. 利用実態

主にF、Dの席を利用する。コーヒーやたばこで一服しつつ、主人や奥さん、調査員と会話をする。利用は午前中にコーヒーを飲み、お昼は昼食を食べに来る。主に奥さんと会話する場合はほとんどである。

4. 他者との関係

毎日の楽しみができた。

このリビングを利用する前は施設で他の入居者との交流は少なかった。会

話は主にスタッフとする程度。同じユニットの職員を通じてHさんと知り合い、友達になる。ショートステイの利用時は主に午前中一人でコーヒーを飲み、午後Hさんと一緒に利用する場合もある。

CASE 3 Cさん（在宅高齢者：介護なし 男性
70代）

1. 生活歴

奥さんが施設で生活をしている。現在一人暮らし。

2. 利用経緯

小規模リビング開設以前から、ホームで生活をする奥さんの面会の際に食事をして帰る。以前食事をするスペースは主に2階であったため、他者との交流もなく、主人や奥さんと話すこともあまりなく、静かに食事をして帰って行くというパターンであった。

3. 利用実態

主にCの席を利用する。食事をしながら主人や奥さん、調査員と会話をする。よく食事をしに来るDさんと同じ時間になった時は、一緒に世間話をしていた。

4. 他者との関係

いつも利用する時間は他に利用者がいないため、他者との交流はない。主人や奥さんと会話することが多い。以前は2階で一人静かに食べていたが、開設後初めての利用の際、「木の香りがすごくいいよ！」「あなたたちのような人がいると街が明るくなる」「ありがとう！ありがとう！」と言って元気になって帰って行った。

CASE 4 Dさん（在宅高齢者：介護なし 女性
60代）

1. 生活歴

元気で話し好き。近くのH団地に住んでいる。昔は施設で働いており、現在も床屋として月に何度か施設の入居者の方々の散髪を行っている。主人、奥さんと顔見知りであり、自分の担当しているユニットの入居者のこともよく知っている。

2. 利用経緯

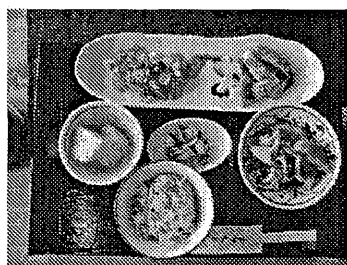
店にたばこを買いに来た際に主人に教えられる。開設以前より店舗は利用していた。

3. 利用実態

座るところは決まっておらず、空いている席を利用する。利用パターンはホームで仕事（散髪）のある時、昼に食事をし、仕事が終わった後たばこコーヒーで一服して行くのがほとんど。とてもおしゃべりなため、誰にでも話しかける。少なくとも30分、多くて2時間滞在している。

4. 他者との関係

知っている人でも知らない人でも誰にでも話しかけるため、Dさんがいる時はリビング全体に会話の輪ができる。施設の入居者にも「私のこと知ってる？ほら散髪してる！」と元気に挨拶。場が明るくなる。笑いがたえない。主人や奥さん、Dさんがいると地域の方と施設の方とがつながる。



食事の一例

CASE 5 Eさん(在宅高齢者:介護なし 女性
80代)

1. 生活歴

団地に娘と暮らしている。この地域に昔から住んでおり、店舗のことも主人のこともよく知っている。施設には年に何度かある勉強会に参加しているため、知っている。「自分もお世話になるかもしれないから施設との関係は必要」と話していたが、その反面まだ一人でもやって行けるという意識がありあまり深くは考えていないようである。

2. 利用経緯

散歩をしていた際に主人に声をかけられた。以前はよく利用していたが最近久しぶりの来店だったようである。

3. 利用実態

Eに座る。たばこ、コーヒーで一服しつつ主人との昔話をたのしんでいた。

4. 他者との関係

たまたま施設の方Hさんと同席になる。主人を交えてふるさとの話など。主人が冗談を言うと「いじわるじいさんだね!」「まったくしょうがないねこの旦那は!」と楽しそうに笑っている。Hさんも「冗談言っていないとやっていられないからね!」と言う。帰り際「呼んでくれてありがとう。うれしかたわ」とのこと。「道を歩いていると一人暮らしの人は分かる。身の上話をする。話相手がないからなんだろうね。」施設の職員がHさんをむかえにくると、また3人で話が始まった。昔話を聞かせてあげていた。

CASE 6 Fさん(在宅高齢者:介護あり 男性
70代)

1. 生活歴

右手足が不自由であるが、杖をついて自分で歩く事ができる。在宅介護を受けている。店舗のすぐそばに住んでいるので、主人と若い頃から顔なじみであった。

2. 利用経緯

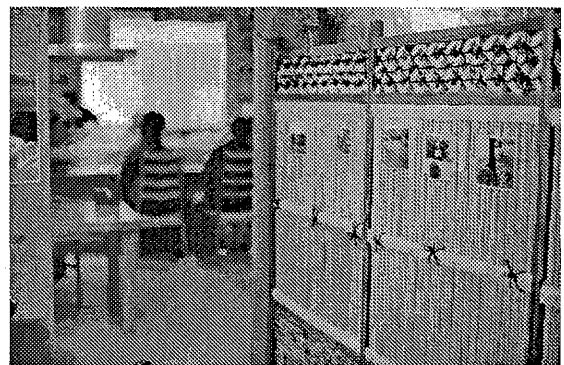
ヘルパーさんと散歩をしている時に声をかけられる。それからいつも散歩の途中の休憩場として利用するようになった。毎朝一番にやってくる。

3. 利用実態

ヘルパーさんと2人での利用が多いため、EかDに座ることが多い。たまにFに座る。せっちな性格なのか、10分もたたずにいつも帰宅する。

4. 他者との関係

利用時間が朝早いいため、他に利用しているひとはおらず、また、本人も無口のため、主人や奥さんともあまり話さない。一緒に来るヘルパーさんが主人や奥さんと世間話などをしている。



CASE 7 Gさん（施設居住者：認知症なし 男性 70代 介護度3）

1. 生活歴

右麻痺。車椅子。食事は自分でとることができる。移動は動かすことができる左足でこぐ。トイレ自分で済ますことができる。趣味は将棋、マージャン、クラシックギター、音楽、旅行。性格は穏やか。失語症もあり、コミュニケーションがスムーズにいかない時がある。ワープロで自分史を作成、クロスワード、携帯でメールをするなど、多趣味。

2. 利用経緯

小規模リビングについては、調査員が①の期間の調査の際知る。12月には入居者を何人か招待してのクリスマス会が行われた。また、家族と面会の際にリビングを利用する。

3. 利用実態

主にD、Eの席を利用する。コーヒーやお菓子、また音楽をリクエストして聞いたり、カラオケを楽しんだりしている。おもに奥さんとの会話がい。

4. 他者との関係

・施設内での様子

リビング開設前の調査①の期間では、ユニット内での交流はなく、食事とおやつの時間以外は自分の部屋で過ごしていることが多かった。小規模リビング開設の話を知るととても楽しみにしていたようで、「私は外出許可が出るよう、リハビリに励みます」と意欲的になった。

小規模リビングでの様子

クリスマス会や新年会を企画するなど、毎日を楽しんでいる様子である。以前はユニット内に話す人がいないようであったが、ユニットで小規模リビングの話題になった時、Bさんと友達になったようである。また、新年会で同席した隣のユニットの入居者とも仲良くなった様子。「この人がこんなに喋る人だとは思わなかった」とのこと。

・在宅高齢者（CASE 1～CASE 6）についての考察
 リビングを利用する在宅高齢者に利用経緯をヒアリングしたところ、「コーヒーを飲みに来た」「食事をしに来た」といった意見であったが、話を進めて行くとその利用経緯が「散歩の途中の休憩に」「店舗での買物のついでに」という意見だということが伺えた。2次的な目的での利用が多く、また、それに付随して「主人や奥さんと話をしに」「ここに来れば誰かがいる。話し相手になる」といった、コミュニケーションを目的とした意見が多かった。2次的な目的ながら、利用が毎日の日課になっており、「楽しみができた」「外に出るきっかけができた」「ここに来ると元気になる」といった日常生活における生きがいにつながる様な意見が見られた。

・施設居住者CASE 7 Gさんの考察

Gさんのように特養には認知症でない入居者も生活している。だれでも生活するなかで、生きがいや楽しみを見つけることは重要であり、施設で生活している高齢者にとっても同じことが言える。このGさんはこの小規模リビングの空間やなじみを利用することによって変化が起きたのではなく、この小規模リビングの存在自体ができたことによって毎日の生活を楽しみ、またそれが施設内での交流をつくるきっかけになっているように思えた。失言症のためあまり上手くコミュニケーションを取ることができないが、メールでの会話でその生活に楽しみが出来たのだという事が伺えた。

Hさんとの小規模リビング開設以前のメールのやりとり

④「私Hは新装開店する店舗に行くための外出許可が出るよう、毎日リハビリをがんばります」
 ⑤「こんにちは。紅葉がよい天候です。店舗の工事はいかがですか？
 新装が楽しみです」
 ⑥「もう冬です。一昨日近くのお好み焼やさんに行ってきましたよ。久しぶりのお出掛けです。はやく開店できないかと待ち遠しい。」

②認知症高齢者の生活変化

ここでは、調査期間①において把握した施設内でのそれぞれの特徴、生活歴、人間関係をもとに対象者を特定し、調査期間②において行動観察を行い、ケーススタディを行った。

CASE 8 Hさん (施設居住者：認知症あり
女性 80代 介護度4)

1. 生活歴

車椅子。たくさん会話をする。多くの時間は自分の席でテレビを見ながら過ごす。食事はその席です。たまにおしぼりを丸めたりする仕事をする。同じユニットKさんの独り言が自分に対する悪口だと思っていて怖がっている。人に気を遣い、優しい性格。昔は踊りを踊っていた。

2. 利用経緯

リビング開設以前の入居当初から、よく利用していた。主人とは長い付き合いがある。利用の際は調査員が出向いて案内したので本人の意思ではない。

3. 利用実態

主にD、Eの席を利用する。コーヒーを飲む。主人と一緒に世間話をする。奥さんとは得意の歌や踊りをおどったりしている。

4. 他者との関係

・施設内での様子

昔師匠について踊りを習っていたせいか、上下関係を気にしたり、周りの様子をうかがったりする発言や動作（ジェスチャー）が多く見られる。他の入居者との交流といったものは特になく、食事の際に向かいの席に座っている方にお茶をいれてあげる程度。犬のぬいぐるみをかわいがっている。

・小規模リビングでの様子

一緒にリビングに来たSさん(施設内では席がはなれているため、めったに交流はない)の髪型や服装を気にしていた。「あなた、の髪は(白く)そろっていてうらやましいわ。私もそうなりたいんだけどね」など奥さんによると、昔はとてもおしゃれだったそう。踊りの歌詞と振り付けは全部覚えていた。

CASE 9 Iさん (施設居住者：認知症あり
女性 80代 介護度3)

1. 生活歴

ワゴンを使って一人で歩ける。食事、トイレも介助なしで自立している。さみしがりやで話し好き。芯が強い人。自営業で煎餅問屋をしていたそうで、本人曰く、人を雇う仕事であったため、とても周りの人に気をつかう。日中～夜間に不穏、孤独だという訴え、夕方に帰宅願望がある。

2. 利用経緯

昔からのなじみというわけではない。開設前の調査①の期間も一度訪れてはいるが「早く帰りたい」と5分ほどしか滞在しなかった。

3. 利用実態

主にDの席を利用する。コーヒーやお菓子を一緒に来たボランティアの方と一緒に食べたりしている。相席になった方には挨拶をきちんとする。

4. 他者との関係

・施設内での様子

入居して2ヶ月(10月調査時)、いつもおやつ準備やお茶のセット。洗濯物干しや洗物などの家事を手伝ってくれる。時計を常に気にしている(5分おきくらい)。一人になると淋しくなると不穏になるため、付き添う人が必要。施設内で同じユニットの同じテーブルの人とは会話をするが、他の席に座っている入居者にはめったに話しかけない。

小規模リビングでの様子

以前からの利用はなかったため、主人との面識はないが、奥さんの担当ユニットであるため、奥さんは認識していた。施設にいる時よりも不穏ではないが、やはり時間を気にして、すぐ帰ろうとする。リビングで調査員がコーヒーを運んでいると、「ここはあなたのお店なの？立派なお店ね。」と言い、話をしようとする、「お仕事中でしょ、もどきなさい」と気にかけてくれた。他の利用者と相席になった時「ご挨拶がまだだったわ。こんにちは」と礼儀正しく挨拶をかわしていた。

・各施設居住者についての考察

CASE 8 Hさんの考察

Hさんの場合、若い頃に師匠について修行をしていたという生活歴が施設での他者との生活から影響を受けているのではないかと思われる。①の会話に見るように、同じユニット内での上下関係や、介護者との立場の違いがその原因ではないだろうか。小規模リビングにおける行動や言動②では、まわりを気にするといった行動は見られず、主人との昔話や、奥さんとの踊りや歌を楽しんでいた。Hさんと同じリビングの利用者として本人も認識していたようである。

Hさんの施設でのある日の会話

①Hさんが話しかけてくれる。(会話の中でのHさんの言葉)

「私はお客さんだから仕事はしてないの。」

「あの人(スタッフ)は上の方の人だよ。」

スタッフに向かって「この人(私)にもお昼ごはん用意し

てあげて。」「ここでは席は決まっているからね。」

②Hさんが向かいの席の入居者に「その服の色いいわね。黄色

と黒で。派手だけど派手じゃない。」と話しかける。

Hさんの小規模リビングでのある日の会話

③Hさん：「ビールが飲みたい」ジェスチャーでおちよこでお酒を注ぐしぐさをする。

向かいの方の髪型をうらやましがる。「私もそういう白い頭にしたいの。私はまだそろっていないのよ。」「お酒が飲みたい。一杯飲まないで、体が寒くてしょうがない」奥さんと東京音頭を踊る。歌を歌う。

CASE 9 Iさんの考察

他のCASEと違い、主人と面識がないため昔話はしていない。調査期間①の際は入居してまだ2ヶ月であったせいか、周りに人がいなくなると「さびしい」と不穏になってしまうことがしばしばあった。その時に「私も一人暮らしをしているから、さびしいです。いっしょですね。」という、とても穏やかな表情になった。自分も店をやっていたせいか、調査員を主人の子どもだと思ったりしく、しきりに「がんばりなさいね」など、声をかけてくれた。いつもと違う場所にいるとやはり不穏になるらしく、滞在時間はわずかであったが、「店」やそこで働く「店員」の存在を自分が経営していた煎餅屋と重ねあわせていたようである。

Iさんの施設でのある日の会話

⑩開設後初めての利用の際「どうして私ばかり連れてくるの？」

「帰りましょうよ。怖いわ、淋しいわ」

⑪「ここはあなたのお店なの？お手伝いえらいわね。立派になりなさいよ。」

⑫何回目かの利用の際「私ここに来たのは3回目よ。」一緒に来たスタッフに注文を聞かれて「あなたと同じものを頼むわ」この日はいつも気にする時間をあまり気にしなかった。

Iさんの施設でのある日の会話

⑦Iさんと、sさんでおしぼりを畳んでいる時のやりとり。

Iさん「名前をこうしてね、こういうふうにして畳むのよ」

⑧「さみしい」「かえりたい」

⑨子どもの話になった時「親の背中を見て子どもは育って行くものなのよ。だから何も言わない」「私は沢山の人がつかっていたの。皆が気持ちよく働けるように朝早く行って準備するのよ。」

8-4 考察とまとめ

8-4-1 考察

【認知症がない高齢者の生活の変化】

ヒアリングのなかで、「主人や奥さんは気さくで好き。」「顔なじみかいるからいい。」「奥さんの事が好き」というこの場にいる人物に安心感を抱いている方や、「今まで通り帰りに寄ってお茶でもしたい。」「仕事帰りに『今帰ったよー』と寄りたい」「あまり改まると来づらいので、そのままできて欲しい。」「気楽に入れてよい。」など、気軽さを求めている意見が多かった。

施設居住であっても在宅居住であっても、『楽しみや生きがいを持って生活すること』『他者との交流の場を持つこと』は生活をする上で最も大切なことである。彼らの場合、「なじみ」やその「リビングでの生活」というよりも、その存在自体が楽しみや交流をつくるきっかけになったのではないだろうか。

在宅者の場合は、これまで行って来た毎日の日課である“散歩”や“仕事”、“買物”という行為に2次的な目的である、この“小規模リビングへ寄る”という行為を加えることで、単調になりがちな毎日の生活に変化を与えているように思える。

【認知症高齢者の生活の変化】

施設居住者の場合、「外出の際の休憩に」という利用もあったが、開設時に入居者を招待しての食事会やGさんが主催して行われたクリスマス会など、非日常的な利用や、調査員が施設へ出向いた際の誘導的な利用になってしまった。

しかし、利用経緯は非日常的ではあるものの、昔からなじみのある主人との昔話や、その場にいた地域の利用者との自然な交流は日常的なものであった。

認知症高齢者にとって一番のケアは一緒に寄り添い、不安を取り除くことである。そのためには介護をする一されるといった固定的な関係性ではなく、時には高齢者との水平的になるように関係をゆるやかに変化させることが必要である。過去の習慣や、感情に働きかけることで不穏な状

態を緩和できる。

面識が有るHさんの場合、昔よくこの店に来店していた際の出来事を話したり、一緒に歌を歌うなど、同じ話題を共有することが出来、顔なじみ・昔ながらの知り合いといった『生活場面の共有者』の存在が水平的な関係変化させることができるのではないだろうか。

面識がないIさんは『生活場面の共有者』となる人物の存在はなく、施設内と同じ不穏な状態をつくってしまっていた様であるが、時折Iさんの過去の記憶である「店を経営していた」ということと、この小規模リビングでの場面とが重なり、過去を思い出したかのような言動があった。面識のある人物の存在はなくとも、『さまざまな場面が展開される場』で過去の習慣や、感情に働きかけることができたのではないだろうか。

暮らしの場面が変わる経験が、古い昔を思い出し、生活が豊かになるのではないだろうか。

8-4-2

今後の特養の地域への展開、施設居住者の生活において以下のことが明らかになった。

施設外小規模リビングとは、言わば『地域の中の縁側』である。その場所に行くといつも誰かがいて、話をすることができて、安心できる場所。地域の拠点的な存在である。

1. 在宅や施設居住にかかわらず、生活をするということにおいて大切なことは、毎日『楽しみ』を持って生活をするということ。様々な『交流』を持つ事。それをこれまでの日課にプラスすることで単調になりがちな高齢者の生活に変化をあたえているのではないか。
2. 縁側のような気軽に立ち寄る事が出来る場の存在が地域と施設をつなぐきっかけになる。この場合の”気軽さ”は以前から利用している店舗の延長として利用できること。新たに何かをつくった訳ではなく、昔から変化がない事が、安心して立ち寄れる理由なのではないだろうか。

3. その場には「生活場面の共有者」であるなじみが深い人、地域と施設をつなぐ『cue, anchor』*23となる者がいること。地域住民と施設居住者両者を理解、把握する者の存在が重要である。

8-4-3 今後の可能性

この事例はきわめてユニークな特養の地域展開の中の1つの解決策にすぎない。この“施設外小規模リビング”がどこの地域にも当てはまる訳ではなく、この地域にこのS施設があり、昔からこの地域に親しまれて来た場があったからこそ、そしてこの主人と奥さんがいたからこそできたものなのである。10人の人がいれば10人それぞれに個性があり、その人の生活歴によって暮らし方が違う。そして、その人が暮らす地域も施設も1つ1つに違いがあるのである。

だが、地域の状況や住む人、施設に居住する人により形を変えることでそれぞれの地域で必要とされる本質的なニーズであると思われる。地域の中に上記した条件が備わっていれば、今後の特養の地域展開への手がかりが得られるのではないかと思う。

これらの環境が整ったとして、その状態を継続的に維持する事・施設化、“小さな特養のリビング”にならないようにすることがこれからの課題である。

今回取り扱った小規模リビングの場合ハード的な面として、設計・計画をする際まず重要だったのは『以前の店舗の雰囲気はなくさないこと』である。いくらなじみの人物がそこにいても、慣れない環境を作ってしまったら気軽に立ち寄ることはできない。この地域になくしてはならない存在であった店舗の延長として小規模リビングをつくることで、これまでもこの場があったかのような存在となっているような気がする。

また、ソフト的な面としてこの場に常駐する、主人や奥さんが特に気をつけていることは、『利益を目的とせず、場を提供すること』である。だれでも気軽に来る事ができる、「また来よう」と思えるのも手頃な値段で利用できるからではな

いだろうか。また、施設化しないようにするためには本来の目的を継続して保つ必要がある。そのためにもこの場の運営者である『cue, anchor』となる人物がしっかり施設居住者のことを理解、把握していることが重要なのではないだろうか。

以上のハード、ソフト面での運営方法や施設化しないように心がけることが今後も継続的に地域や施設居住者が“気軽に”来る事が出来る場につながって行く要因なのではないだろうか。

今回対象と施設自身がこれからどう変化して行くか、施設居住者にどのような変化をもたらすかは今後も見守って行きたい。

在宅高齢者、施設居住者のみならず、施設の職員も利用が広まり、職員にとっても“気軽に”“安心できる”場になって欲しいと思っている。このような場があることで、介護を行う立場側からも施設の環境整備となって行くのではないだろうか。

おわりに

本研究の3年間には、様々な新たな試みが起こり、変わりつつある高齢者施設の動向の一端を捉えることができたものと思われる。

この間の研究に携わった研究室の学生の人々の共同作業として、本研究は成り立っている。また、調査には調査の対象となった利用者の方々はじめ多様な方々からのご協力が得られた。ここに各位に対して、深甚なる感謝の意をあらわしたい。

とくに、本報告書の主要な部分は、以下の方々の修士論文や卒業論文としてまとめられたものを再編集したものである。

佐藤真衣子氏（第2、3章）、後藤舞氏（第4～6章）、山下奈緒氏（第7章）、佐藤智美氏（第8章）。また、この他にも、報告書の都合で掲載できなかったが、関連する様々な研究を成された諸氏も含め、本研究は横浜国立大学建築計画研究室に所属する多くの方々の協力の賜物である。

研究代表者 小滝一正

資料編

痴呆性高齢者グループホームにおける
利用者の外出に関するアンケート調査のお願い

横浜国立大学 建築計画研究室

■ 調査趣旨

このアンケートは、東京都23区にある痴呆性高齢者グループホーム(以下グループホーム)を対象として行います。

「家庭的な環境」の下で生活するグループホームの入居者にとっても、外出はあたりまえのことであり、地域との関わりも入居者にとっても大切なことです。グループホームの入居者のコミュニティをホーム内で完結させるのではなく、地域に広げていくためにどうしたらよいか、また、地域全体を良くするためにどうしたらよいか、その前の段階として現状を探る為、私たち横浜国立大学建築計画研究室では調査を行っております。東京都23区にある、設立時期やユニット数、周辺の立地環境の違うグループホームを比較することが目的であり、貴グループホームにも以下のアンケートにご協力にいただきたく思います。

今回のアンケートにご協力いただきました方のプライバシーについては、厳守いたしますとともに、お答えいただいた内容は研究の目的以外には一切使用いたしません。お忙しいとは存じますが、ご理解の上、ぜひご協力下さいますよう、お願い申し上げます。

■ 質問事項の構成

1. グループホームでの外出に関するアンケート

よく利用する外出先をお聞きします。同封いたしました地図に、例にならってご記入をお願いします。

2. グループホーム周辺地域に対する認識についてのアンケート

グループホームスタッフの方々の、周辺地域に対する現在の認識や、今後のかかわりについてお尋ねします。

3. グループホームの基本属性に関するアンケート

貴グループホームの基本的な属性についてお伺いします。差し支えない範囲でのご記入をお願いいたします。

■ アンケートの回収方法

ご記入済みのアンケートは、月 日までに、お近くのポストにご投函下さい。その際、切手はご不要です。

■ 調査主体と照会先

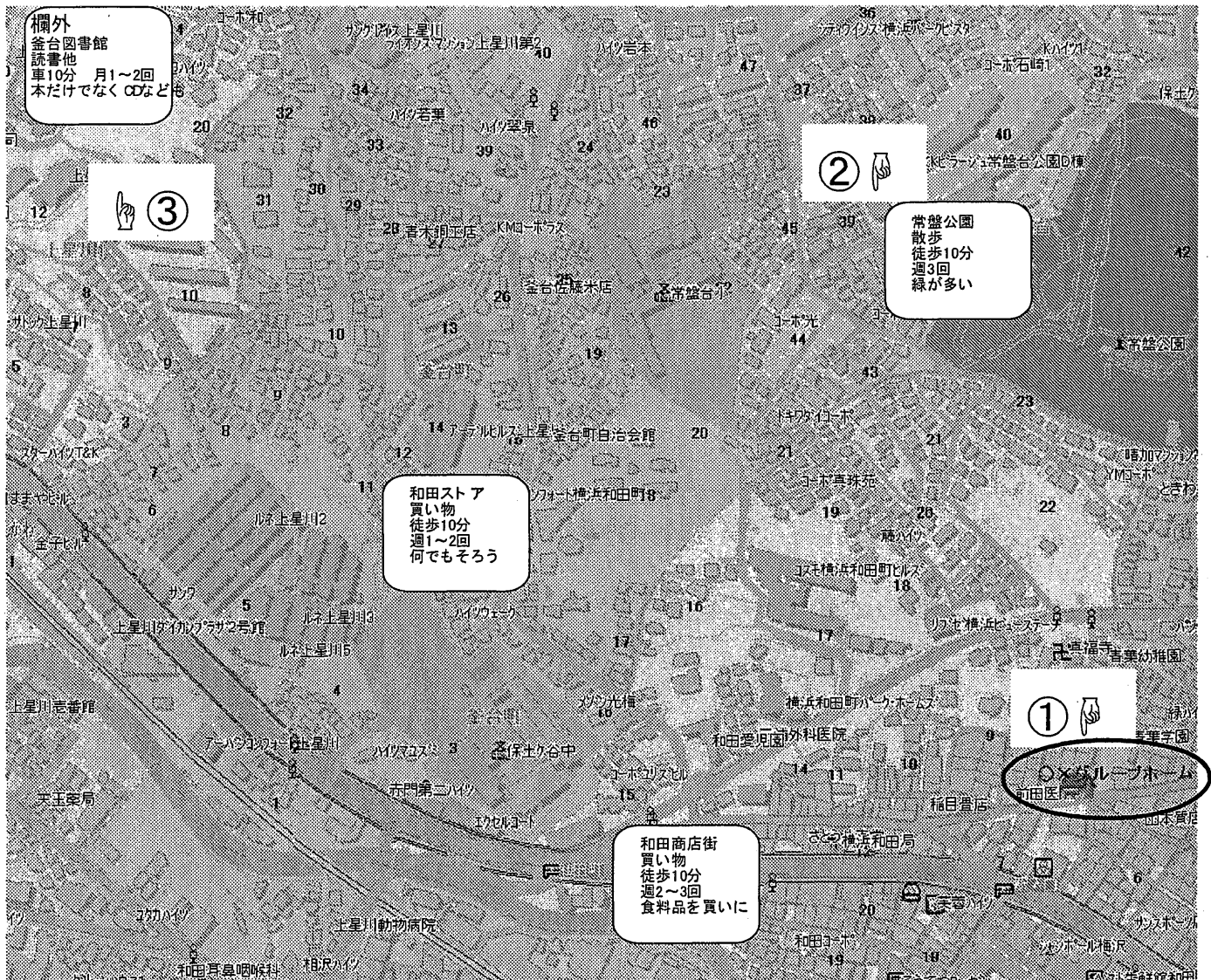
アンケートの内容、回答方法などについてのお問い合わせは、下記までお願いいたします。

横浜国立大学大学院 建築計画研究室
教授 小滝一正 助教授 大原一興
神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79番5号
TEL ; 045(339)4069 (午前10:00~午後5:00) (FAX 兼)
調査担当責任者 ; 修士課程2年 後藤 舞
連絡先 e-mail ; maimai01212355@hotmail.com

ー1. グループホームでの外出に関するアンケートー

区 グループホーム名

以下の例にならって、同封いたしましたシールを使い、地図上に、貴グループホームが
買い物、散歩等で日常的によく外出する場所の名前、目的、所要時間、利用頻度、あれば簡単なコメント (例えばお得意先の店であるなど) を 10箇所程度 ご記入下さい。それ以下でも結構ですなお、外出先が同封いたしました地図の範囲外にある場合には、余白に記入していただければ幸いです。



- ① あなたのグループホームの位置を示しています。
- ② グループホーム周辺の、日常的によく利用する施設(商店街、スーパー、デパート、駅など)10箇所程度に、印をつけて下さい。また、同封しましたシールを用いて、その施設に関する情報(名前、目的、所要時間、利用頻度、あれば簡単なコメント)ご記入下さい。
- ③ ②の施設が、地図上にない場合には、余白を利用し、同じようにご記入をお願いいたします。

以下の回答は、当てはまる番号に○をおつけ下さい。また、空欄には数字または文字をご記入下さい。回答がその他に当てはまる場合は、記入欄に具体的な内容をご記入下さい。

質問1. 貴グループホームでは、普段、どのくらい外出しますか？日常的な、ホーム入居者の外出の人数を、頻度別にそれぞれ教えてください。

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 ほとんど出かけない ()人 | 2 週に1回程度 ()人 |
| 3 週2～3日程度 ()人 | 4 週に4～5日程度 ()人 |
| 5 ほぼ毎日出かける ()人 | |

質問2. ホーム入居者の、買い物や散歩などの、日常的な外出についてお尋ねします。以下の例にならって、()に当てはまる数字や文字を記入して下さい(おおよそで結構です)。

- | | | | | | | |
|-----------|--------|---------|-----|--------|------|---|
| 例；項目() | 週に()回 | 一度に()人 | 位ずつ | 平均所要時間 | ()分 | 位 |
| ・項目(買い物) | 週に()回 | 一度に()人 | 位ずつ | 平均所要時間 | ()分 | 位 |
| ・項目(散歩) | 週に()回 | 一度に()人 | 位ずつ | 平均所要時間 | ()分 | 位 |
| ・項目() | 週に()回 | 一度に()人 | 位ずつ | 平均所要時間 | ()分 | 位 |
| 具体的な内容() | | | | | | |
| ・項目() | 週に()回 | 一度に()人 | 位ずつ | 平均所要時間 | ()分 | 位 |
| 具体的な内容() | | | | | | |
| ・項目() | 週に()回 | 一度に()人 | 位ずつ | 平均所要時間 | ()分 | 位 |
| 具体的な内容() | | | | | | |

質問3. 外出によく利用する交通手段を、○をつけて下さい。

- | | | | | | |
|---------|------|-----------|------------|------|----------|
| よく利用する | 1.徒歩 | 2.バス(公共用) | 3.バス(ホーム用) | 4.電車 | 5.その他() |
| たまに利用する | 1.徒歩 | 2.バス(公共用) | 3.バス(ホーム用) | 4.電車 | 5.その他() |

—2. グループホームでの外出に関するアンケート—

質問1. 貴グループホームは、地域に根ざしたホームだと思えますか？また、なぜそう思われますか？その理由をお聞かせ下さい。

- 1 地域に根ざしたホームだと思う 2 地域に根ざしたホームだとは思わない

理由

質問2. 貴グループホームは、どのくらい地域に認識されていると思えますか？また、そう思う理由をお聞かせ下さい。以下の最も当てはまるもの1つに○をつけて下さい。

- 1 ホーム周辺の住民をはじめ、交流のある人が多いので、良く認識されていると思う
- 2 交流などは少ないが、名前くらいは知っている人が多いと思う
- 3 知っている人は知っていると思うが、地域全体にまでは知られていないと思う

4 ほとんど知られていないと思う

質問3. 貴グループホームの立地環境としてはいいと思いますか？また、そう思う理由をお聞かせ下さい。(例；スーパーや商店街が徒歩圏内あり買い物に便利でよい、など)

1 立地環境はいい

2 立地環境は良くない

理由

質問4. グループの職員として、これまでどう地域にかかわってきましたか？普段とくに気をつけていることや、地域の方とのかかわりの中で何かエピソードがあれば、例にならってお聞かせ下さい(いくつでも)。

例；△口商店街の○×酒店をよく利用する。酒好きな入居者の×さんと買い物に行った時にお店の人と話が盛り上がり、それ以来時々おまけもしてもらっている。また、月に一度、地域にホームの様子をまとめたものを配っている。

質問5. グループホームと地域のかかわりは必要だと思えますか？また、なぜそう思われますか？理由もお聞かせ下さい。

1 必要だと思う

2 必要だとは思わない

理由

質問6.

グループホームおよび地域全体をよくするために、これから地域とどうかかわっていきたい

と思えますか？

質問7. GHおよび地域全体をよくするために、ホーム周辺の住民や商店の方に対して望むことはありますか？また、あるという方はその内容をお聞かせ下さい。

1 望むことがある

2 特に望むことはない

内容

— 3. グループホームの基本属性に関するアンケート —

区 _____ グループホーム名 _____

質問 1. このアンケートに答えていただいた方(記入者)の、基本属性についてお伺いします。

以下の項目それぞれに当てはまるもの 1 つに丸をつけて下さい。

年齢は何才代ですか？

10代 20代 30代 40代 50代 それ以上

性別はどちらですか？

1 男 ・ 2 女

あなたがこのグループホームのスタッフになってどのくらいになりますか？

1 半年以下	2 半年～1年以内
3 1年～5年くらい	4 5年から10年くらい
5 10年～20年くらい	6 それ以上 (年くらい)

質問 2. 貴グループホームのユニット数、定員、経過年数をお聞かせ下さい。

ユニット数 _____ ユニット _____ 定員 _____ 人

経過年数

1 半年以下	2 半年～1年以内
3 1年～5年くらい	4 それ以上 (年くらい)

質問 3. 貴グ

ループホームの、スタッフの自宅はどこですか？それぞれの()内に、当てはまる人数

1. グループホームのある地区内 ()人	2. グループホームのある区内 ()人
3. 東京都内 ()人	4. 東京都外 ()人

をご記入下さい。

質問 4. 貴グループホームの入居者の、ホームに入居する前のお住まいはどこでしたか？それぞれの()内に、当てはまる人数をご記入下さい。

1. グループホームのある地区内 ()人	2. グループホームのある区内 ()人
3. 東京都内 ()人	4. 東京都外 ()人

質問 5. 貴グループホームは、町内会に入会していますか？

1 はい 2 いいえ

質問 6. 貴グループホームでは、何か行事的なものを行っていますか？以下の当てはまるものに○をつけ、()内にはその頻度(週1、月1、3ヶ月に1回等)をご記入下さい。

1 小学生などをホームに呼んで、交流している	頻度 ()
2 小学校などに出かけ、子供たちと交流している	頻度 ()
3 地域の祭りに参加している	頻度 ()

- | | | |
|---|------------------|--------|
| 4 | 地域の住民を呼んで、交流している | 頻度 () |
| 5 | その他 具体的に() | 頻度 () |
| 6 | とくに行事的な活動は行っていない | 頻度 () |

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。

痴呆高齢者グループホームの認識に関するアンケート調査のお願い

横浜国立大学大学院 建築計画研究室

■調査趣旨

このアンケートは、〇×ホームのスタッフの方々を対象として行います。グループホームの質をより高めていく上でグループホームと地域との関わりは、今後ますます重要になっていくと思われ、私ども横浜国立大学建築計画研究室では調査を行っております。このホームの周辺住民の方に対するスタッフの方々の考えを探るのが目的であり、アンケートにご協力いただきたく思います。

以下の項目について解答していただき、返信用封筒にてご返送いただければ幸いです。今回のアンケートにご協力いただきました方のプライバシーについては、厳守いたしますとともに、お答えいただいた内容は研究の目的以外には一切使用いたしません。お忙しいとは存じますが、ご理解の上、是非ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

■質問事項の構成

1. 〇×ホームの周辺住民(とくに商店街)に対する認識についてのアンケート

〇×ホームスタッフの方々に対しての、グループホーム周辺地域に対する現在の認識や、今後の関わりなどについてお尋ねします。

2. 記入者の属性に関するアンケート

アンケートに記入していただく方の、基本的な属性についてお伺いします。差し支えない範囲でご記入をお願いいたします。

■ご記入いただく上での注意点

1. 回答は、当てはまる番号に○をおつけ下さい。また、空欄には数字または文字をご記入下さい。
2. 回答がその他に当てはまる場合は、記入欄に具体的な内容をご記入下さい。

■アンケートの回収方法

ご記入済みのアンケートは、 月 日 までに、〇×ホームのホーム長さんまでご提出願います。

■調査主体と照会先

アンケートの内容、回答方法などについてのお問い合わせは、下記までお願いいたします。

横浜国立大学大学院 建築計画研究室

〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79 番 5 号

TEL ; 045(339)4069 (午前 10:00～午後 5:00)

e-mail ; maimai01212355@hotmail.com

調査担当責任者 ; 修士課程 2 年 後藤 舞

質問5 ○×ホームの職員として、これまでどう地域に関わってきましたか？普段とくに気をつけていることや、地域の方とのかかわりの中で何かエピソードがあれば、例にならってお聞かせ下さい（いくつでも）。

例；△□商店街の○×酒店をよく利用する。酒好きな入居者のXさんと買い物に行った時にお店の人と話が盛り上がり、それ以来時々おまけもしてもらっている。商店街の人とは道で会ってもあいさつを交わす。

質問6 グループホームの仕事ではない、休日外に出た時や仕事が終わった後の、自分が高齢者（○×ホームに限らず）に対する態度は、普段の仕事の時と比較してどうでしょうか？特に意識はしていないと思いますが、例えば「知らない痴呆のお年寄りが困っていた時に声をかけた経験がある」など、何かエピソードがあればお聞かせください。

質問7 グループホームと地域の関わりは必要だと思いますか？また、なぜそう思われますか？理由もお聞かせ下さい。

1 必要だと思う

2 必要だとは思わない

理由

質問8 グループホームおよび地域全体をよくするために、これから地域とどう関わっていきたいと思いますか？

質問9 グループホームおよび地域全体をよくするために、ホーム周辺の住民や商店の方に対して望むことはありますか？また、あるという方はその内容をお聞かせ下さい。

1 望むことがある

2 特に望むことはない

内容

地域住民の方の痴呆性高齢者グループホームとのかかわり
に関するアンケート調査のお願い

横浜国立大学大学院 建築計画研究室

■調査趣旨

このアンケートは、グループホーム（痴呆対応型共同生活介護）である〇×ホーム周辺にお住まいの方々を対象として行います。この〇×ホームでは、元気な入居者とスタッフが積極的に外出を行い、ホーム周辺の方々との交流を深めており、これからの地域のグループホーム設立に向けても、注目されるホームであると考え、私ども横浜国立大学建築計画研究室では調査を行っております。このホームに対する周辺住民の方の認知度を探るため、アンケートにご協力いただきたく思います。

以下の項目について回答していただき、返信用封筒にてご返送いただければ幸いです。今回のアンケートにご協力いただきました方のプライバシーについては、厳守いたしますとともに、お答えいただいた内容は研究の目的以外には一切使用いたしません。お忙しいとは存じますが、ご理解の上、是非ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

■質問事項の構成

1. 痴呆性高齢者グループホームに対する認識についてのアンケート

〇×ホームに対する現在の認識や、グループホーム全体の今後の関わりなどについてお尋ねします。

2. 記入者の属性に関するアンケート

アンケートに記入していただく方の、基本的な属性についてお伺いします。差し支えない範囲でご記入をお願いいたします。

■ご記入いただく上での注意点

1. このアンケートは、ご家族のうちで地域や自宅にもっとも長くいる方(例えば、主婦の方など)がお答えください。回答は、当てはまる番号に〇をおつけ下さい。また、空欄には数字または文字をご記入下さい。

2. 回答がその他に当てはまる場合は、記入欄に具体的な内容をご記入下さい。

■アンケートの回収方法

ご記入済みのアンケートは、同封の封筒に入れて、 月 日までに、お近くのポストにご投函下さい。その際、切手はご不要です。

■調査主体と照会先

アンケートの内容、回答方法などについてのお問い合わせは、下記までお願いいたします。

横浜国立大学大学院 建築計画研究室
教授 小滝一正 助教授 大原一興
神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79 番 5 号
TEL ; 045(339)4069 (午前 10:00~午後 5:00) (FAX 兼)
調査担当責任者 ; 修士課程 2 年 後藤 舞
連絡先 e-mail ; maimai01212355@hotmail.com

— 1. 痴呆性高齢者グループホームに対する認識についてのアンケート —

質問 1 あなたは〇×ホームをご存知ですか？以下の当てはまるもの1つに〇をつけて下さい。

- | | |
|----------------|----------------------|
| 1 よく知っている | 2 名前や存在は知っているがよく知らない |
| 3 何となく聞いたことがある | 4 全く知らない |

質問 2 質問 1 で「1 よく知っている」「2 名前や存在は知っているがよく知らない」と答えた方にお伺いします。〇×ホームの方が近隣の商店や公園等の施設を利用していることをご存知ですか？また、どの程度までご存知か、当てはまるもの1つに〇をつけて下さい。

- 1 〇×ホームかどうかは分からないが、どこかの施設の高齢者が利用していると知っている
- 2 〇×ホームの人が利用していると知っている(名前は知らない)
- 3 〇×ホームの□△さんと、顔見知りで名前も知っている人がいる
- 4 その他

質問 3 〇×ホームができたことをどう思いますか？以下の当てはまるもの全てに〇をつけて下さい。

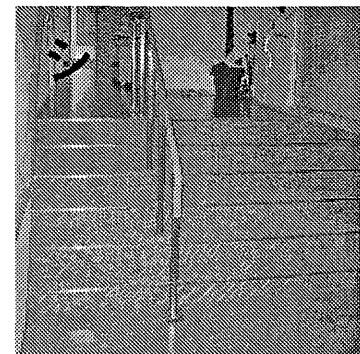
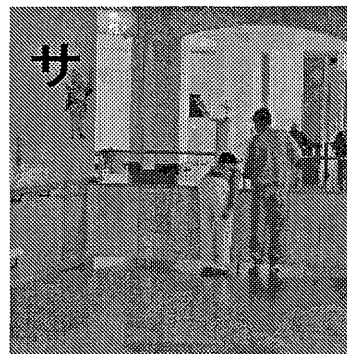
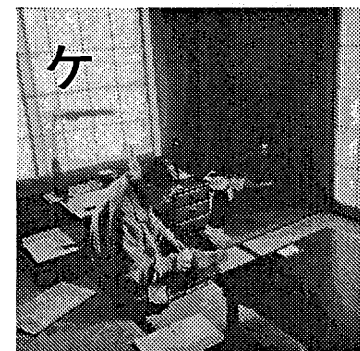
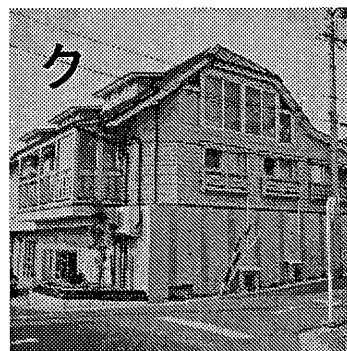
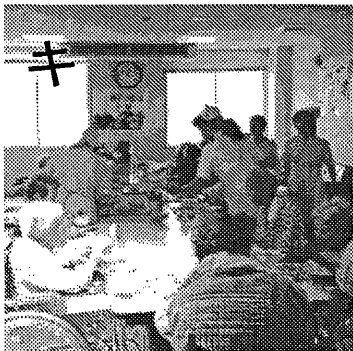
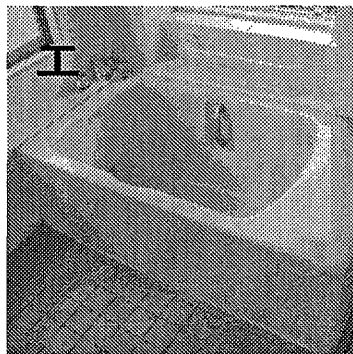
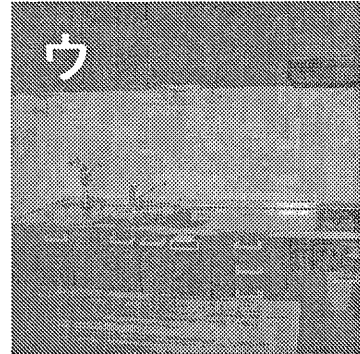
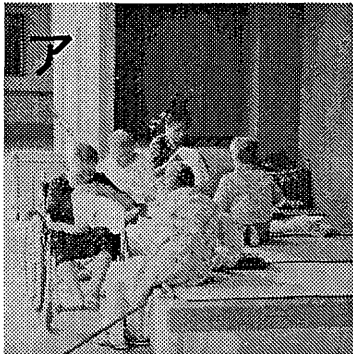
- 1 自分たちの老後のために心強い
- 2 高齢者の多いこの地域にあって当然だ
- 3 是非、〇×ホームの方と交流を持ちたい
- 4 今はどういふものか分からないが、ちょっと興味がある
- 5 自分たちには関係ないので分からない
- 6 どんな人がいるのか心配だ
- 7 その他

質問 4 痴呆性高齢者グループホームとは、痴呆性高齢者が小規模な生活の場で少人数（5人から9人）を単位とした共同住居の形態で、食事の支度や掃除、洗濯などを利用者がスタッフとともに共同で行うものです。一日中家庭的で落ち着いた雰囲気の中で生活を送ることにより、痴呆症状の進行を穏やかにし、少人数の中で「なじみの関係」をつくり上げることによって生活上のつまづきや行動障害を軽減し、心身の状態を穏やかに保つことができます。

あなたは、グループホームと特別養護老人ホームの違いをご存知ですか？

- | | |
|------|-------|
| 1 はい | 2 いいえ |
|------|-------|

質問5 以下の写真は、痴呆高齢者グループホームや特別養護老人ホーム等で撮影されたものです。これらの写真を、あなたがグループホームだと思うものと、特別養護老人ホームだと思うも、またそれ以外と思うものに分類し、それぞれの()内にその記号をご記入下さい。その他のものは、その記号と理由を()内にお書き下さい。



痴呆高齢者グループホームと思われる写真()
 特別養護老人ホームと思われる写真 ()
 その他 ()

質問6 将来、自分が高齢者になった場合に、どのようなところに住みたいですか？以下のあてはまるもの全てに○をつけて下さい。

- 1 自宅にずっと住んでいたい
- 2 設備の整った老人ホームなどの施設に入りたい
- 3 引っ越すことはあっても、練馬区の中で住み続けたい
- 4 どこでも良いから、グループホームのような暮らしをしたい
- 5 その他

質問7 もし、あなた自身やあなたの家族が介護のための入居施設を利用するとしたら、何を基準に選びますか？以下のあてはまるもの全てに丸をつけて下さい。

- 1 入居にかかる費用が安いところ
- 2 明るくて優しいスタッフがいるところ
- 3 面倒を良く見てくれるところ
- 4 建物が新しいところ
- 5 個室の部屋が利用できる場所
- 6 自宅から近いところ
- 7 その他

質問8 グループホームと地域とのかかわりは必要だと思いますか？また、なぜそう思われますか？その理由もお聞かせください。

- 1 必要だと思う 2 必要だとは思わない 3 分からない
理由

質問9 地域全体の高齢者の暮らしを良くするために、地域の中で今、何かしていることはありますか？些細なことでも構いません。以下のあてはまるもの全てに○をつけて下さい。

- 1 お年寄りにあいさつをする
- 2 時々、おすそ分けをしている
- 3 道であったら声をかけている
- 4 食事作りや掃除を手伝うボランティアをしている
- 5 何もしていない
- 6 その他(以下に記入)

質問10 以下の施設で、()内にあなたが知っているものには○を、知らないものには×をつけて下さい。

1. 西友 () 2. 武蔵関公園 () 3. 関町老人ホーム ()
4. こもれびホール () 5. 立野公園 () 6. いなげや ()
7. 島村記念病院 () 8. ○×ホーム ()
9. 京王ストア () 10. 善福寺公園 () 11. 吉祥寺教会 ()
12. 関町北小 ()

質問 1 1 グループホームおよび地域全体をよくするために、グループホームに対して望むことはありますか？また、あるという方はその内容をお聞かせ下さい。

1 望むことがある

2 特に望むことはない

内容

質問 1 2 グループホームおよび地域全体を良くするために、自分たちが出来ることは何だと思いますか？あてはまるもの全てに○をつけて下さい。

- 1 あいさつをしっかりし、顔見知りの関係を気づいていくこと
- 2 積極的にホームへのボランティアや、高齢者の手伝いをする事
- 3 祭など町内会行事を企画し、高齢者にも参加してもらって楽しんでもらうこと
- 4 現状のままで十分(今のままでもとてもよい地域)なので、何もする必要はない
- 5 その他

質問 1 3 ○×ホームおよびこれからできるグループホームと、今後どのようにかかわっていきたいと思いますか？ご自由にお書き下さい。

平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書

痴呆性高齢者の生活における既存地域環境資源の活用に関する研究

平成18年3月

研究代表者：小滝一正（横浜国立大学 名誉教授）

研究分担者：大原一興（横浜国立大学大学院 工学研究院 教授）

研究分担者：藤岡泰寛（横浜国立大学大学院 工学研究院 講師）

報告書発行 横浜国立大学工学部建築計画研究室

〒240-8501

横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5

Tel:045-339-4069

Fax:045-331-1730

Url:<http://www.arc.ynu.ac.jp/~usr002/>